いつか神を滅ぼす日のために

観察者X

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

所詮、ゲームの出来事だ。

どれだけ怒っても、どれだけ悲しくても、どれだけ憎くても。

現実やら他のゲーム世界やらに持ち出すわけにはいかない。

まして、異世界にまで引きずるなんて馬鹿だ。

いい大人なんだから、そのくらいの線引きくらいはできる。

……だけど。

こんな形で続いたのならば、話は別だ。

「六大神滅ぶべし」

それでは皆様。ちょいとばかしお暇を拝借。

これよりお見せしますは、愚かな人モドキの復讐譚。

神やら魔王やらに成り上がっても、所詮はちっぽけな人間なのだという愛憎劇。

つまらぬ公演になりますが、ご笑覧頂ければ幸いです。

目次

プロローグ 1
大森林 9
エルフ 17
即興劇 27
灰神の使徒 37
新王 45
神の御名 54
各地にて 63
二人の復讐者 71
絶死絶命 81
紫幽王 88
ワールドエネミー 97
当時の人々の証言 「奇跡の壁」について 105
行動方針 114
夢と現と幻と 123
各地にて2 133
手紙 143
接触 154
魔王たちの対面 161
辿り着いてしまった解答 173
ナザリックにて 182
各地にて3 192
ストックホルムシンドローム 201
『僕』のために 210

『地獄』に神を見る ―― 221
神算鬼謀 ―― 230
契約 ―― 239
準備 ―― 247
当時の人々の証言「真王国建国式」について ―― 255
式典後 ―― 267

プロローグ

西暦２１３８年某日、ＤＭＭＯ―ＲＰＧ『ユグドラシル〈Ｙｇｇｄｒａｓｉｌ〉』がサービス終了を迎えることになった。

ユグドラシルと言えば、日本国内においてＤＭＭＯ―ＲＰＧといえばユグドラシルを指すとまで言われる評価を受けていたものだった。

何よりも『未知を楽しむ』ことが基本骨子とされたこのタイトルは、広大なフィールドだけではなく、とんでもない自由度を誇る。プレイヤーが操るアバターは職業や魔法、外見に至るまで様々な取捨選択ができるようになっており、わざと狙わない限りは同じキャラクターはできないとまで言われるものだ。

しかし、十二年の歳月の果てに、爆発的だった人気は陰りを見せ、過疎化は進み、ついにはサービス終了を避けられない事態となった。

最後の日をどのような終わり方で迎えるかは人それぞれだろう。トーナメントやオークションなどの終了記念イベントに参加する。因縁の相手と一騎打ちを申し込む。宿敵関係にあったギルドに殴り込みをかける。思い出のダンジョンを散策する。溜め込んでいた金貨を散財する。モンスターに騎乗して世界を駆け巡る。ギルドメンバーと最後のバカ騒ぎをする。自分以外には誰もいないギルドで、最後の瞬間を待つ。

〝ネロ・ネミートス〟もそんなプレイヤーのひとりだった。

自分以外はろくにログインすらしなくなってから久しい。他のメンバーは最終日さえログインしてこない。残り時間が僅かとなり、ギルド拠点たる『劇場都市コスモスウェイ』でひとり寂しく最後の時間を過ごす。そのはずだった。

だが、コスモスウェイはゲーム終了を前にして崩壊した。ギルド武器を破壊され、泡沫の夢と消えた。これが現実の都市であれば瓦礫と死体の山でも残るところだが、ゲーム上の都市はデータであり、塵すら残っていない。

つい先程までギルド拠点の中心地だった場所で、ネロは佇む。

どれだけ発展した仮想現実であってもプレイヤーの感情に応じて

表情を変えることはない。もしもそれが可能であればネロの顔には怒りが如実に表れていたことだろう。誰がどう見ても憤怒に染まった顔がそこにあったはずだ。しかし、形だけは人間の姿をしたアバターの顔は眉一つとして動かない。皺ひとつできはしない。

空から視線を下ろし、地面を見る。ほんの一時間前まで自分たちのギルド拠点があった場所を見る。

ギルド『雪月花劇団』。

ギルド長『アルティメット太郎』を始めとし、特撮やアニメが好きな者が多かったギルドだ。特に初期メンバーは系統こそばらけていたが、ヒーローや怪獣の類が大好きだった。ネロ自身、怪獣を愛し、「ネロ・ネミートス」の能力などのコンセプトも大好きな怪獣から参考にした部分は多々ある。完全異形形態に関しては知る者が見ればモデルは一発で察するだろう。

趣味が合うメンバーもいれば、そうでないメンバーも多かった。そもそも、会話自体あまりしたことがないメンバーもそれなりにいた。一時期は百人いた大所帯だったのだ。

それが、いつからか、しばらく顔を見ないメンバーが多くなった。

かつては二桁の上位に存在するギルドであり、プレイヤー全体から見てもガチ勢に分類される者が多いとはいえ、いつまでも同じゲームに固執する者はそういない。飽きることもあれば、他のゲームに心移りすることもあるし、現実の方で大事があることだってある。しかし、いつか戻ってくるかもしれないし、減ったならば余所から招けばいい。ランキングは下がるかもしれないが、そうなった時はそうなった時だ。廃課金のガチからエンジョイ勢に戻ろう。ギルド長も含めて、そんな風に語り合った。

だが、更に時間を経ると、そう語り合ったはずのメンバーたちもいなくなった。クランだった頃からの最古参も、ギルドとして再出発した時の古株も、ギルド拠点を手に入れてからの中堅も、ランキングが安定してからの新参も、徐々に、しかし確実にユグドラシルにログインしなくなった。

一日のプレイ時間が減って、数日おきにログインするようになっ

て、そのまましばらく顔を見なくなって、二度と現れなくなる。良くて引退の宣言をするためだけに、数か月振りにやってくるだけだ。そんなことが何度もあった。

そして、気づけばネロとギルド長の二人になっていて、そのギルド長もある時を境に事実上の引退をした。必ず戻るからと言っておきながら、結局、今日この日にすら来なかった。

案の定、ネロ・ネミートスは最後の時をひとりで過ごすことになった。

その結果が、ギルド拠点の喪失である。まさか最後の最後に守れなかったとは。滑稽にも程がある。無様にも限度がある。笑ってしまう。笑うしかない。笑う以外に何もない。何ともつまらない終わりではないか。

……仲間が、託してくれたものを守れなかった。ギルド長であれば、ギルド拠点が破壊された時に特殊な職業を強制的に与えられるのだが、ギルド長ではないネロにはそれがない。ただの敗北者がそこにいるのみだ。

「楽しかったんだけどなぁ」

そう思っていたのは自分だけではなかったはずだ。しかし、今もそう思っているのは自分だけのようだ。城塞都市型のギルド拠点が塵も残さず消え去った、何もない平野がそれを物語っている。特撮の怪獣が暴れた跡ですら瓦礫の山が残っているというのに。ここには血の残り香さえしない。

この場所に残っているのは惨めな一体の怪獣もどきだ。

だが、この無念さえ制限時間がある。この世界の残り時間はあと僅かだ。この世界が、このゲームが消えてしまえば、この無念は、憤怒は、苦痛は、憎悪は、後悔は、怨嗟は、悲哀は、罪悪感は、喪失感は、消えて然るべきなのだ。自罰も自嘲も自責も等しく無意味である。所詮は仮想現実の出来事だ。現実に、あるいは他の仮想現実にまで持っていくようなことではない。

分かっている。

最後まで残った自分がおかしいのだと。もう残る意味がないのだ

から、ログアウトしてしまうべきなのだと。明日もどうせ早いのに、何故世界の終わりに立ち会う気なのか。
「辛いけど、辛いだけだしな」
捨てはしない。忘れはしない。ただ、飲み込むのだ。どうせ長生きできるような時代でも社会でも肉体でもない。徳はそれなりに積んでいるが、死後の世界で使うものだ。その時まで、この痛みも一生口に出さず、地獄に一緒に持っていく。
案外、一晩眠って明日の朝になれば楽になってしまうのかもしれないが。
自分だけがこんなに苦しんでいるなんて滑稽だ。
「せめてつけられる格好くらいはつけておくか？」
つい先程、最後の侵入者である一団との戦闘で、ネロは死亡した。ユグドラシルにおいて、死亡ペナルティは二つ。レベルと装備一つの喪失だ。前者に関しては蘇生魔法などで軽減できるが、今回のネロはそれが行えなかったため、最大ペナルティのマイナス五を受け、レベル九十五になっている。せめてつけたい恰好とは、最後の瞬間をレベル百で終えることだ。
ユグドラシルはレベル九十までは比較的簡単にレベルを上げられるようになっている。逆を言えば、九十を超えてくるとレベルアップが難しくなる。特にレアな職業を得る条件を満たすためには、仲間との連携が全体の難易度の高いクエストに行く必要がある。現在ネロに仲間はおらず、残り時間も少ない。真っ当な手段でのレベルアップは難しい。
つまり、真っ当ではない方法でレベルアップすればいいのだ。条件が条件だ。妥協はするべきである。
「まさかこいつを使う時が来るとはなあ。ま、最後の運試しにはちょうどいいか」
そう言ってネロがインベントリから取り出したのは、一つのリンゴ。レベルアップアイテム「試練の果実」である。
簡単に言えば、食べればレベルアップするアイテムだ。しかし、何とも言えないギャンブルアイテムでもある。レベルアップすると言

うが、厳密には職業レベルを得るアイテムだ。更に詳しく言うと、どのような職業を得るかは選べず、戦士、修行僧、聖騎士、野伏、暗殺者、魔術師、森司祭、神官、吟遊詩人の九種の中からランダムに選ばれる。しかもレベルアップするかも食べてみなければ分からない。最低で五、最大で十五だが、それさえ完全にランダムだ。一応、レベル十五になれる可能性は一パーセントほどらしいが。

サービス開始から存在するアイテムだが、数多の職業を組み合わせて複雑なビルドを作ることが前提のユグドラシルには不向きなアイテムだろう。何か隠し条件でレア職業を得られるのはではないかと検証班が努力したらしいが、話題になっていないところを考えるに結果は推して知るべしだろう。おまけに、このアイテムの効果を得られるのは一度だけだ。つまり試練の果実だけでレベル百になることはできない。取得した職業をレベルダウンで消せば再度チャレンジできるらしいが、そういう面倒くさい仕様も検証班を挫折させた一因かもしれない。

とにかく、ネロはこの果実を食べたことがない。およそ使う理由が見当たらないからだ。というか、ネタビルドや検証好き以外でこの果実を食べたというプレイヤーを見たことがない。正直、経験値を得るアイテムならば他にもある。しかし、レベル九十五から百になるアイテムとなると他にない。持っているアイテム全てを使えば不可能ではないのかもしれないが、面倒だ。ギルド拠点を失ったばかりで、そんなことに気力を使う余裕さえない。一つのアイテムで済むならそれでいいだろう。形だけでもレベル百になって、最後の瞬間を迎えるとしよう。

「いただきます」

この世界はゲームだ。食事はただのアイテム消費であり、咀嚼の音もなく、味もなく、喉越しもなく、腹に貯まることはない。何より一瞬で済む。現実世界の栄養ゼリーですらもうちょっと手間がかかると思いながら、ネロは自分が得た職業が何になるか僅かに期待しながらその一瞬を過ごした。

しかしどうあっても自分には噛み合わない基本職のいずれかだ。

ネロは陰陽師・五行使いをベースにした精神系魔法詠唱者の竜人。試練の果実で得られる職業で面白い組み合わせが発生することなどまず有り得ない。

だから、心底驚いたのだ。

「は――？　何です、これ？」

試練の果実で得られるのは職業レベルのはずだが、取得したのは種族レベル。しかも全く知らない名称だった。バグを疑ったが、名称があまりにも異質なものだった。異質すぎて運営の仕様であることを察知するのも容易かった。ネロが混乱している間に運営からメールが入った。

『おめでとうございます！　貴方は全プレイヤーの中で初めて種族「小さな世界喰い（ワールドイーター・ラーヴァ）」を取得されました。ユグドラシル〈Ｙｇｇｄｒａｓｉｌ〉より記念して、ワールドアイテム「九曜の宝珠」をお送りします。今後ともユグドラシル〈Ｙｇｇｄｒａｓｉｌ〉をお楽しみください』

その内容を見て、ネロの口から笑いが零れた。

「今後ともって、今日終わるんですけど！　はははは！」

可笑しさを堪えきれないネロ。ギルド拠点を失った怒りさえ薄れてしまうほどだ。自分が最初で最後となるであろう小さな世界喰い（ワールドイーター・ラーヴァ）がどのような種族であるかを調べることにした。よりにもよって最終日の今日、自分は隠し条件をクリアしてしまったらしい。試練の果実がユグドラシル初期からあることを考えるに、この種族名は十二年間も眠り続けていたわけだ。ならば、最後の瞬間を使って存分に楽しむ必要がある。自分には、ネロ・ネミートスにはその義務がある。

「ああ、神よ！　愚かなる私に復讐の剣を与えてくださったことを感謝いたします！」

残り時間ではどうせ何もできないはずだった。嫌がらせ程度はできるが、あれだけ無様を晒した敗北者が有終の美を汚すけどプライドが許さなかった。だが、勝てる見込みがあるのならば話は別だ。

世界はどうやらまだ戦いをご所望のようだ。与えられた力が「世界を喰らう者」「世界の敵」のそれであることは少々皮肉だが。

「クソ運営め、最悪のタイミングで最高のプレゼントだっての。うーん、条件の一つは試練の果実でレベルアップしてレベル百になることなんだろうな。……この時点で結構絞れるな。後はなんだ？　ギルド拠点壊されたこととかか？　ま、この画面とメールをスクショして明日にでも掲示板に投げとこ」

口を動かしながら手も同時に動かす。小さな世界喰いの性能を見て、既にある自分のビルドに合わせて調整していく。その段階で、とんでもないインチキ性能であることも判明した。

「こいつ壊れすぎだろ……。うええ……。僕との相性もいいな。いや、これだったらどんなビルドでも戦闘系でも合う……、いや、生産系でも壊れるな……あ、完全異形形態のサイズめっちゃデカくできるのか。最大にしとこ」

普段であればもう少し冷静になれるのだろうが、ギルド拠点を失った怒りと、ユグドラシルが終わる悲しみと、自分だけがこの種族の存在を知っているという喜びが混ざり合い、ネタ全振りのビルドを組んでいく。当然、自分の元々の能力に合うようにだが。

残り時間を確認する暇さえ惜しいと、時計も見ずに熱中した。そして、完成した。ユグドラシル最初で最後の、プレイヤーの世界喰いが。

「よっしゃ、勝利の美酒を味わっているであろうあいつらにお礼参りと行きますか」

現実世界で獰猛な笑みを浮かべながら、ネロは先程のメールと一緒に送られてきたアイテムを取り出す。

ユグドラシルに二百しかない一点物のアイテム、ワールドアイテム。その一つ一つが世界一つと等価であると設定されたバランスブレイカーである。この九色に淡く輝くボーリングのような球がそのワールドアイテムに他ならない。

そして、小さな世界喰いの真価を発揮するために、ネロは先程の試練の果実と同じように食する。消費型でもなく、まして食料系アイテムでもない宝珠を、世界喰いの能力を持って自分の体内に取り込む。

おそらく最終日でなければ、ここまで思い切りのいいことはできなかっただろう。だが、残る物はない以上、残す意味もない。ネロは全

てを使い尽くし、ユグドラシルが終わってしまう前に復讐を果たすつもりでいた。試練の果実を食べるまではそんな発想させなかったのだ。何せ相手は六人でギルド拠点も健在だろうから。

しかし、今の自分なら勝てる。今の自分ならあの六人を倒せる。今の自分なら、あの裏切り者に制裁を与えてやれる。

「待ってろよ、スルシャーナぁあああああああああ！　ついでに残りの五人も！　今からワールドエネミーになってぶっ殺しに行くからなあ！　ははは、急がないと世界が終わっちゃうぜ！」

しかし、最終日であること前提の行動と言うのならば、彼はやはり時計を確認するべきだったのだ。時刻はすでに日にちが変わる寸前になっていたというのに。

「いっただき――」

こうして世界は終わるが――、

■

■

２１３８年×月×日をもちまして、『ユグドラシル〈Ｙｇｇｄｒａｓｉｌ〉』はサービス提供を終了しました。長きに渡りご愛顧いただいたお客様へ心から御礼申し上げます。

■

――彼の物語は続く。

「――まーす！」

ばきん。

それは世界の悲鳴であり、怪物の産声だった。

「って、うっま！　……うん？」

どうして仮想現実で味があるんだ？　この口の中にある存在感は何だ？　どうして飴でも噛み砕いているような咀嚼音が聞こえる？

「というか、ここどこ？」

大森林

深夜の大森林で、その男――ネロ・ネミートスはボリボリと「九曜の宝珠」を咀嚼する。世界一つと同じ価値がある財宝を、本来食べ物でもないそれを、現状の問題全てを無視して嚥下する。

「うーん。ワールドアイテムっておいしいなー。もぐもぐ」

ユグドラシルプレイヤーが聞けば漏れなく卒倒するようなことを宣いながら、口の中に一欠片も残さず、すべてを腹に収めたところで、ネロは現実逃避をやめた。

「落ち着け、僕。何事もクールに対処しよう。自分が馬鹿であることを忘れず、問題を明確化し、できることから解決していくんだ」

必死に自分に言い聞かせるネロ。

「まず、おまえは誰だ？」

十代半ばがするような自問自答。かつてギルドメンバーと似たような遊びをしたことはあるが、状況が違い過ぎる。

「佐倉晴明……ではないんだろうな。そもそも、人間じゃないっぽいよな」

自意識は一般日本人男性の佐倉晴明だ。しかし、現実は「おまえはネロ・ネミートスだ」と告げてくる。

まず、容姿が違う。染めているわけでもないのに金髪で、カラーコンタクトをはめているわけでもないのに黄金の瞳だ。どちらも月や星の光を反射しているわけでもないのに、それ自体が発光しているような輝きを持っている。

体格のシルエットは変わらないはずだが、地面との距離が若干遠くなっている気がするため、身長はこちらの方が上だろう。加えて、服の下の筋肉がかなり硬い。いや、筋肉だけではなく爪や髪の毛まで金属のような強度を持っているように思える。

筋力や脚力もそうだ。軽く体を動かしてみたが、明らかに性能が高い。佐倉晴明としてではなく、人間としての性能に収まっていない気がする。無論、ネロは人間の限界としての性能を数字としてしか知らないが、機器で数値化するまでもなく国家代表選手よりも高い身体能

力であると断言できる。
何より、人間の肩に口などないだろう。しかも左右に一つずつ。よく見れば、体の所々に鱗模様の痣がある。
それから、舌が異様に長い。引っ張れば胸元までである。どうやって口の中に収容しているのかわからないが正直気持ち悪い。
「ネロ・ネミートス。竜人。陰陽師。『六色演目』。クラン『お花見一座』副長にしてギルド『雪月花劇団』の一員にして最後のひとり。劇場都市コスモスウェイを守れなかった敗北者。そして、最初で最後の世界喰い、か」
己のプロフィールを思い出すネロ。
「そうなんだよなぁ。これがユグドラシル、ゲームが現実化したってだけなら話は早いんだけどなぁ。理屈は不明でも納得はできる。でも明らかにユグドラシルじゃないっぽいんだよなぁ」
コンソールは開かない。GMコールを始めとしたあらゆる機能が使えない。魔法やマジックアイテムは使えるようだが、連絡する魔法で知り合いに語り掛けても応答はない。
「でもここがユグドラシルじゃないなら、どうして僕は『ネロ・ネミートス』の姿なんだ？　聞いたこともないけどユグドラシル2なんて可能性は……まあないかな」
現状の全てはここが仮想現実ではないことを証明している。風が頬を撫でる感触が、空を覆う星々の輝きが、草木の青々しい匂いが、未だ舌に残る宝珠の後味が、獣の遠吠えや虫の囁きが、ネロが五感で認識している全てが仮想現実では有り得ないものだ。
技術的に可能かは置いて、運営が新型の違法実験をしている可能性は些か低い。利点が何も思いうかがない。大企業を相手に裁判で勝てるような権力も財力もないが、実行すれば世間からの非難は必至である以上、最初から考慮すべきではないレベルだ。謎の契約書にサインをした覚えはない。
「僕だけがこうなっているのはまあ、ねえよな。こういうのは同じゲームのプレイヤーが同じように飛ばされているのが定番だ。……定番だよね？」

こういう状況に陥った時、どうすればいいのか。ギルドメンバーが薦めてきた異世界転移ものの小説を読んでおけば良かったか。微妙に食わず嫌いをしていた過去の自分を叱責したい気分だ。

安直だが、同じ状況下にあるプレイヤーの条件は、ユグドラシルサービス終了直前までログインしていたことだろうか。時計を見ればすでに日を跨いでいる。おそらくビルド調整に熱中している間に日付が変わってしまったのだろう。

「おーい、スルシャーナ。近くにいたら出てこいよー。今なら一回殺すだけで許すぜー」

旧友、否、仇敵の名前を口にする。無論、応答はない。

「いねえならいねえって言えや！　あの腐れ骸骨が！　二十回は殺さないと気が収まらないね！」

ツッコミがワンテンポ遅れてやってくるのではないかと身構えるが、応答する者はいない。ここには誰もいない。ネロだけだ。

ネロ・ネミートスは一人だ。これからもずっと独りだ。

「……夜が明けるのを待つか。夜目は効くみたいだけど、あえて動き回るのもマヌケだ」

真の孤独は町の中にあると言うが、ネロの現状はその言葉に反していた。森の中でも真の孤独とやらは味わえるのだ。

大地の上に寝転がり、瞼を閉じる。ふと「あ、これ寝ている間に野生動物に食べられない？　コテージでも出せばよかった」と思ったが、眠気が勝った。

死んだときは、そのときだ。

そういえば仕事に行くこともできないから逆説的に幾らでも眠れるなあ、と寝ぼけたことを考えながら泥のように眠った。

しかし、朝日が大地を照らすより前に、ネロは目を覚ました。

特に身に危険が及んだわけではない。否、危機と言えば危機だ。外敵の襲来以上の危機。生物として最も根源的な危険の一つ。

「――お腹が、すいたな」

空腹。飢餓。闘争や病気に並んで、生物の死因の多くを占めるもの一つ。

ネロの種族は竜人だが、種族レベルを構成しているものの一つに悪竜君主（ザッハーク）という種族がある。強力な種族だが、転職条件が難しく、デメリットも多い。

そのデメリットの一つが、食事量の増加だ。そして、これはアイテムなどで無効化・軽減ができない。まさに死活問題だ。

「インベントリから何か出してもいいけど、ちょっと探してみるか？」

なんとなく新鮮な肉が食べたい気分だ。現実世界で口にしたことなど一度もないが。

■

人によっては樹海とも言えるほど広大なエイヴァーシャー大森林。ここには、連甲熊（アンキロウルス）という魔獣がいる。

一見すると熊に近いが、実際は大きく違う。まず、前足二対四本と後ろ足二本、つまり足が六本ある。尻尾の先端部分がハンマーのように膨れ上がっていることや体の大部分を鱗が発達した装甲で守っていることも大きな特徴だろう。

広い樹海の中では決して最強種というわけではないが、例外はいる。

通常の連甲熊（アンキロウルス）が二メートルから三メートルであるのに対し、その個体は四メートルを超える。特殊能力や強力な魔法が行使できる魔獣さえ屠る。知れぬ者が見れば別種であると勘違いするであろう威容。この大樹海において、十五王の一柱に数えられる異形。俗に言う、王種（ロード）である。

夜が明けると同時に、それは侵入者の存在に気付いた。

自分の縄張りに何かが入ってきた。それは自らが絶対的な強者であることを自覚している。だからこそ、そこに入り込み我が物顔で歩いていることを許すわけにはいかない。それに、ちょうど腹も減っている。無視する理由など一つもなかった。

嗅いだことのない匂いだ。少なくともこの近隣にいる生物の匂いではない。どこかの縄張りから追われてきたのか、縄張りを持たない

流れの生き物なのか。どちらでも良い。殺して食べてしまえば同じことだ。
それは芳香（フレグランス）の魔法を使い、自らの体臭を消す。アンキロウルススが唯一使える魔法だ。こうして匂いを消さなければこの樹海の中では狩りが難しい。
匂いが強くなる。大きな動きがないということは此方に気づいていないということだ。注意深く匂いの近くまで近づいていく。ギリギリまで相手に気づかれないように。
限界まで近づいて、それは一気に駆け出した。
匂いの元がいた。何やらキラキラと光る奇妙な生物だった。形は、前に木の上にいた生物に近い。色は違うが似たような種族だろう。それほど食べ応えがある大きさには見えないが、腹ごなしにはちょうどいい。この距離ならば逃がしはしない。
しかし、それは違和感に気づく。餌であるはずの相手は自分から逃げようとしない。近づいた時と違って今は全力で走っているため足音も大きい。気づかないはずがなく、同族でもないのに自分に恐怖しないはずがない。まさか恐怖で動けなくなっているのか。
それの考えは間違いだった。それは捕食者ではなく餌であり、目の前の生物こそが絶対的な強者であり捕食者なのだから。
「――■■■」
それは間違いに気づくことなく死んだ。だが、それは間違いなく幸運だった。
「ごはんが向こうからやってきた……気前のいい森……美味しそう、いただきマス」
自分が殺されたことにさえ気づかず死んだのだから。生きたまま食られることなく、その生を終えることができたのだから。

■

「……あれ？」
気づけば、ネロは血まみれになっていた。

ただし、彼の身体や服を染めている鮮血は彼自身のものではない。目の前に広がる熊のような魔獣のものだ。
そう、先程仕留めた熊のような魔獣は広がっている。
非常にお行儀悪く食い散らかしたネロのせいで。毛も装甲も爪も骨も内蔵も肉も食い荒らされてバラバラになっている。明らかに可食部位ではない装甲や尻尾のハンマーに噛み砕いた痕跡がある。自分の仕業とは思いたくないが、状況証拠は言い逃れできないレベルで揃っている。
「飢えた獣か僕は。いや、そもそも熊を生で食うなよ。鮮度は抜群だけど熊って生で食える生物じゃないはずだろう。しかも食べている間の記憶がないって……。人間どころか知的生命体をやめるんじゃないよ」
文字通り、我を忘れて食事に没頭していたわけだ。
しかも熊なのか何なのかよくわからない生物を吟味することなく、殺した直後、調理の一つもせずぐちゃぐちゃに食べ散らかした。カラスや野良猫ですらもうちょっとマシな食べ方をするであろうと言いたくなるような惨状だ。
「というか、こいつって本当に食べて良かったの？　誰かが飼っているとか、保護指定生物とか、ないよね？　全く知らない生物すぎる……」
まず、ユグドラシルのモンスターではない。ネロ・ネミートスはサービス開始から終了までの間、三日ログインを空けることはなかったガチ勢だ。このようなモンスターに見覚えはない。無論、出現エリアが限定されている超レアモンスターの可能性もあるが、それにしてはレベルが微妙な気がする。
また、現実世界の生物ではない。食べ尽くしたため記憶に頼るしかないが、この生物は足が六本あった。熊に酷似していながら四肢ならぬ六肢なのだ。そして、この生物には骨がある。つまり、脊椎動物なのだ。脊椎動物が四肢ではないなど、進化論を始めとした生物学に喧嘩を売る生態である。
「いや、僕ほど生物学に喧嘩を売っている存在もそうはいないだろう

けど」
　ネロは自分が動物博士などと宣うつもりはないが、その手の分野に詳しい仲間と議論を交わしたこともある。その中には『ユグドラシルのモンスターはどの程度現実的か』という無粋な内容もあった。その中でも特に一致した意見が『頭部が複数ある生物など有り得ない』だった。
　タコなど脳みそが複数ある生物は存在するし、全身が舌のように味覚を感じる生物もいるが、耳や目、口などを含めた「頭」のような機能が複雑なものをいくつも持っているなど生物としてコスパが悪すぎるという意見が大多数を占めた。
　そして、ネロの完全異形形態は頭部が三つある。人間形態であっても両肩に口があるのだ。唇があるだけではなく、舌や歯まで揃っている。完全異形形態になった場合、両肩から首ごと生えてくる頭部には脳みそが詰まっているのだろうか。議論をしていた頭部もそこを突っ込まれたものだった。
　そこまで思い出してまさかと思い、右肩を見る。服がはだけて血まみれになっていた。反対の左側も同じだ。当然、自分の血ではなく熊型魔獣を食事中についてしまったものだろう。
「ああ、思った通り、こっちの口でも食べてるのね……いや、ザッハークの逸話を考えるとむしろ肩の口で食べているのは正しいのか？でもユグドラシルの魔獣の生態って原典に沿っていたりそうでなかったりするからな」
　思わず肩の口から舌を出し、血を舐めとる。別段、この口が自分の意志と無関係に動くということはない。通常の口と同じように、ネロの意志によって動く。食事はできるが発声はできない。あくまでも食べる専用の口ということになる。
　つまり、喋りながら食事をするという本来ならお行儀の悪い行為が問題なく行える。非常に強烈なビジュアルになる上、結局お行儀が悪いという結論に至りそうだが。
「閑話休題。ユグドラシルのモンスターでも現実世界の魔獣でもない生物がいる以上、ここはやっぱり未知の世界と考えるべきなのか？

それとも、ユグドラシルとは別のゲームの中とか」
もしもそうならば、何故、自分はここにいる？
まさか、罰とでも言うのか？
昨夜のことを思い出す。記憶や時間が飛んでいない限り、あの六人との戦いは昨夜のはずだ。まだ十二時間も経過していないのに遠く昔のことのように感じてしまう。現状が償いの巡礼だと言うのならば喜んで受け入れよう。だが、誰かの悪意だと言うのならば一言言わなければならない。
こんなろくでなしの物語を続けさせてどういうつもりだ、と。
「知的生命体だ。やはり知的生命体に出会う必要がある。進化した猿でもタコ型エイリアンでも恐竜人類でも人類を淘汰したロボットでもいい。ＳＡＮ値チェックが必要な外宇宙の神でもない限りは大歓迎だ。ここが密猟者は問答無用に殺すレベルの特別保護自然公園でないことを祈る」
そこまで考えて立ち上がったネロ。せめて熊の亡骸を地面にでも埋めてやろうかと思った。だが、中止した。すでに蟲や小さな肉食動物も集まってきている。大きめの動物の姿は見えないが、熊を殺したネロを警戒してのことだろうか。それとも、この熊がこの近辺を縄張りにしていたからだろうか。
「……まあ、自然に還った方がいいか。じゃあ小動物諸君、僕の食べ残しを綺麗にしておいてくれたまえ」
ちなみに、近くの村に住むダークエルフがこのアンキロウルススの死骸を見つけて大騒ぎになるのがそれは別の話。

エルフ

大樹海のとあるダークエルフの村にて――

「アジュの村から使いが来たそうだが、何かあったのか？」

「ああ。大事件だ。アジュの村に近くにウルススの王種（ロード）がいるという話は知っているな？　そいつが何かに食い殺されたらしい。アジュの村の狩猟頭が狩りの途中で死体を見つけたそうだ」

「なっ！　ウルススの、それも王種（ロード）に勝てる奴がいるってのか？」

「現場にはほとんど骨しか残っていなかったそうだが、大きさから見て間違いないそうだ」

「そいつは、また、なんとも……。あのあたりで縄張りが変わるってことか」

「しかし、アジュの村はここから離れた場所にある。そんな危険な猛獣がいるなら森が落ち着くまで村から出ない方が安全だと思うが、何故わざわざ使いなど」

「それがな……血痕から推測されるに、ウルススの死体が見つかった場所がウルススの死んだ場所で間違いないそうだ。しかし、そこにはほとんど戦闘があった形跡がなかったらしい」

「どういうことだ？」

「ウルススの、それも王種（ロード）ともなれば雄叫びも大きい。全力ならこの村に聞こえるほどに。だが、俺たちは最近ウルススの雄叫びを聞いた覚えなどないし、アジュの村でも同じとのことだ」

「つまり？」

「ウルススの王種（ロード）相手に雄叫びを上げさせる暇もなく、一撃……は無理でも数発の攻撃で仕留めるようなバケモノがこの森にいるということだ」

「そ、そんなバカな」

「しかも、装甲や尻尾の先端まではっきりと歯形があったため、とんでもない強靭な顎を持つ悪食である可能性が高いそうだ。ちなみに、歯形のサイズはダークエルフと大差ないそうだ」

「ウルススの装甲を傷つけたのか？　歯で？　しかもダークエルフと

同じってことは身体も同じくらいってことかよ」
「どんなバケモノだ。でも頭は良くなさそうだな。あの装甲が食べられそうにないことは馬鹿な獣でもわかる」
「頭が悪いなら罠に簡単にかかるかもしれないか？　いや想像通りの怪物なら罠ごと破壊するな。それに、ダークエルフと同じくらいのサイズなら身軽かもしれないか」
「アジュの村とて危険を承知で、そのバケモノの情報を集めているということだ。この村に伝えてくれたのはついでで、本命は村が無事かどうかの確認と情報収集だろうな……」
「仮に村が襲われていても無事でも、ウルスス殺しの移動ルートの範囲は絞れるというか」
「俺たちも森に出て調べるべきか？」
「いや、危険すぎる。どうあっても森は荒れるだろうからな。調査はアジュの村に任せて俺たちはしばらく村に篭っていた方がいいだろう。協力を仰がれたら別だがな」
　この後、アジュの村を含めたダークエルフの調査によって無残に食い殺された大型モンスターの死体が次々に発見される。だが、死体の発見は数日でぴたりと止まった。縄張りを持たぬ強大なモンスターが流れてきたが、何かが気に入らずまた別の場所に流れてきたのだろうと予測された。
　後に大樹海全体を巻き込んだ騒動もあって、この「ウルスス殺し」の存在はダークエルフたちの間では薄れていった。何かの席で時折思い出したように語り合う程度だ。
　数年後、旅の途中でこの村に立ち寄った魔法詠唱者がこの「ウルスス殺し」の話を聞いた時、正体を察して人知れず腹を抱えるのだが、現在はまだ関係のはない話だった。

■

　近隣諸国では最大の国力を持つスレイン法国は、エルフの王国と長い戦争状態にある。かつては協力関係にあったものの、百年ほど前に

エルフ側の裏切り――エルフ王の凶行により戦争が始まってしまったのだ。
エルフの国があるエイヴァーシャー大森林には難所と呼ばれるような場所はない。厳密には強力なモンスターが生息する地帯や亜人の小規模国家などもあるが、要塞級の建造物や人間には踏破不可能な過酷な地形があるかと言われれば否である。
しかし、難所が時折発生することもある。それは個で群に匹敵する強者が生み出すものだ。
大森林に投入される法国の軍隊は職業軍人であり、一般人を徴兵した民兵とは練度が違う。場所のアドバンテージはエルフにあっても軍隊としての完成度では法国の方が上だ。しかし、強力な個はそうした数の理や戦略など丸ごと吹き飛ばしてしまう。英雄の領域に達した戦士は万の兵に匹敵し、たった一人で戦局を塗る変える。この世界の常識である。
例えば、森の中を移動するエルフの少女、ルーギもそうだ。
人間でいえば八歳ほどの外見。エルフの背丈は人間より小さいため、更に幼く見える。体に不釣り合いな大きな弓と弓筒を持っている。
ルーギは現エルフ王とミューギという女エルフの娘だ。王女という立場であるが、それを幸運に思ったことは一度もない。原因は王の人格だ。
王は自分の子どものことを戦力としか見ていない。正確には戦力とすら見ていない。過酷な戦場に出して、強者と戦わせることで強制的な成長を促しているのだ。これはある程度戦えるようになった王の子ども全員がやらされていることだ。
「おーい、そこのお嬢さん」
突然の声、そこを見れば人間がいた。
人間。エルフに似た形をしている生き物だが、耳の形状が違う。そして、エルフが戦争をしている法国という国の生き物だ。
「おっと、驚かせてしまったかな。怪しいものじゃないよー。怖くないよー。食べないよー」

矢筒から矢を取り出して、弓を番える。威嚇のつもりだが相手は意に介した様子がない。恐怖どころか警戒さえしていない。ルーギが子どもだからと侮っているのだろうか。

だとしたら、どれだけ優しい環境で育ったのか。

「ん？　エルフか。久しぶりに知的生命体に出会えたぜ。いやー、こっちに来てから熊とか鹿とか狼とか大蛇とかにしか出会わなかったからなー。やっぱり人間の形をしている生物って落ち着くわー。僕って人間嫌いだと思っていたんだけど、その認識を改めないとな。結構人恋しい性格だったみたいだ」

いくらなんでも無警戒すぎやしないか？　ルーギは子どもながらに怪訝に思った。もしかして同族かと思い、耳を確認する。

「おっと、自分語りが過ぎたな。えーと、とにかくお兄さんは怪しいものじゃないよー。……もしかして言葉通じてないのかな。あー、日本語わかりますかー？　ハローー？」

髪や帽子で隠しているわけでもないため、すぐに分かった。人間の耳だ。ハーフエルフのそれですらない。まさか人間でありながらエルフと法国の関係を知らないわけでもあるまい。おそらく此方を油断させるための罠か何かだろう。

その瞬間、ルーギの鼻をつく強烈な匂いがした。

目の前の人間から、泥と藻の匂い。そして、それに隠れるような、隠しきれないほど夥しい血の臭い。

「どうかその弓を下ろして――」

人間の言葉が終わる前に矢を放つ。障害物もなくこの距離だ。外すわけがない。鎧もつけておらず、特殊な能力を込めなくても殺せるはずだ、

予想通りに着弾。確かに人間の眉間に命中した。しかし、人間は倒れない。流血は勿論、のけ反りさえしないし、痛がっている様子さえない。矢はまるで硬い岩に弾かれたような音を立てて、地面に落ちた。

「おいおい……」

ギチリと、人間は笑った。獰猛さを隠そうともしない、威嚇する魔

獣のような笑顔だった。背中に冬風のような感覚が走った。
それを見て、ルーギは再度矢を放つ。ほとんど反射だった。逃げるという選択肢はなかった。一瞬でもこの人間から目を放つのが怖かった。背中を向けるなど論外だ。
「え？」
しかし無傷。人間は健在だった。おかしい。あまりにも不自然だ。父王でもあるまいし、魔法か何かで防いだにしろ異常だ。まさか、この生き物は人間ではないのか？
「二発目なら許すけどさぁ、二発目はねえだろう。――何しやがる、このクソガキが！」
人間――人間らしき生物が、右足を上げたかと思えば、そのまま地面を踏みしめる。その瞬間、とても大きな音がした。
ルーギの意識はそこで途絶えた。

■

気絶して大地に横たわるエルフの幼女を見落ろしながら、ネロは頭を抱えた。
「僕は阿保なのか」
森を彷徨うこと一日と半日。道中で出会うものと言えば知性なき獣ばかり。人為的な痕跡は僅かにあれど住居は見つからず。補充できるか分からぬ以上、食料は大型魔獣を喰らうことで飢えを凌いだ。
ようやく出会えた知的生命体らしき生物。そんな相手を気絶させてしまった。しかも、相手は幼女だ。この世界の法が現実世界と同じなら問答無用で警察のお世話になってもおかしくない。
「僕ってこんなに頭の血が上りやすい奴だったっけ？　人間じゃくなったのが精神にも影響してんのかな」
いくら弓で射られたとはいえ、あの程度の攻撃などネロには痛くも痒くもない。文字通りの意味で毛ほどのダメージもない。厳密には塵程度のダメージはあるにはあるが、そんなもの、攻撃を受けた直後に自動回復能力で癒えた。
もしかすると、この世界のエルフ特有の挨拶かもしれない。相手が

子どもであることを考えれば遊びのつもりでじゃれてきた可能性だってあるではないか。いやいや、突然見知らぬ不審者に話しかけられて錯乱状態だったのかもしれない。
「気絶に留めたのがせめてもの救いか。咄嗟に能力使った割にはダメージが入る攻撃使わなくて良かった」
　というか、軽く脅かすつもりで、通じるとは思っていなかった。使った技はネロが持つ技の中で最下級の部類だ。一定確率で気絶状態にするものだが、レベル三十相当の耐性があれば簡単に耐えられる程度のもの。
　不躾かもしれないが、魔法でこのエルフの能力は鑑定済みだ。その結果、彼女がネロの鑑定能力を上回る偽装をしていない限り、軽く小突いただけで死んでしまうような貧弱な生命であることが判明した。これならば先日出会った大熊の方が一回り強い。
　この森を彷徨っている間、それなりに獣などには出会ったがいずれも脆弱だった。レベルだけならあの大熊が一番高いだろう。
　極端な出会い方をしてない限り、この森の最高値は三十強といったところか。
「まさかこの森のエルフがこの娘だけってことはないよな……。人間に森を焼かれて逃げてきた可哀想なエルフだったらどうしよう。ふっ、僕が十割悪者じゃん。いや、ユグドラシルじゃ魔王ロールをやったこともあるけどさ。こんな意味不明な異世界（仮）で魔王やるほど酔狂じゃねえんだよ、僕は」
　ユグドラシルの魔王と言えば、ワールドエネミーの「七大罪の魔王」や「第六天天主」だ。
　次いで、ギルド「アインズ・ウール・ゴウン」のモモンガを思い出す。ユグドラシル全盛期の十大ギルドの一角にして最悪のＤＱＮギルド、そのギルド長。一部では非公式レイドボスなんて呼ばれたものだ。……種族が同じなだけに、スルシャーナを思い出した。
「あの人たちもこっちに来てたら世界征服しようなんて言うのかね？
　いや、その前に僕の存在を知ったら討伐に来るかもな。アインズ・ウール・ゴウンに限った話じゃないけど」

小さな世界喰い。すなわちワールドエネミーになったプレイヤー。と言っても現時点でネロがワールドエネミーとしての性能を自由に使えるかと言われればそうではない。完全異形形態でなければ、一般的なレベル百プレイヤーを逸脱するようなスペックではないのだ。

自分の現状さえ正確に文章化できないような状況なのだ。下手に目立つ真似は避けたい。ワールドエネミーはレベル百プレイヤーが三十六人で戦うような怪物だが、ここで騒ぎを起こせば百人以上集まるかもしれない。ユグドラシルにおいて、レベル百プレイヤーというのはちょっと苦労すれば誰でもなれるような存在だ。

この森の生物が特出して弱いだけで、この世界の平均レベルはめちゃくちゃ高いかもしれない。

とりあえず、この幼女が目を覚ますまで待つとしよう。気絶しているだけで生命に異常はないようだ。魔法の効果で気絶させた以上、状態異常を回復させる魔法で目が覚めるかもしれないが、万が一を考えると時間経過で自然に目を覚ます方が良いだろう。

せめて少女をちゃんとした場所で寝かせるべきだ。コテージを出して中にあるベッドで寝かせるとしよう。印象が最悪である以上、どうやって回復すべきかは分からないが、地べたに置いたままでは下回るばかりである。

そう思い、少女に手を伸ばしたら背後から気安い声が聞こえた。

「やれやれ」

ネロは一瞬硬直して首だけで振り返る。背後に一人のエルフがいた。存在に全く気付かなかった。元々探知の類は苦手なのだ。隠れるのも苦手だ。鑑定能力は直に触れないと使えない。

(こうして思い返すと僕ってマジで召喚と回復以外何もできないな。コンソールだけでも出てくれればなあ)

そこにいたのは成人男性のエルフだ。ユグドラシルのエルフは寿命が千歳という設定で、最初の十年と最後の十年以外は外見年齢の変化が乏しかったはずだ。この世界のエルフが同じとは限らないが、もしも同じならば、このエルフがどの程度の年齢層なのか外見ではいまいち理解できない。妙に貫禄があるため、成人したばかりというのは

考えづらいが、中年か老年手前かは判断できない。
　そのエルフの特徴を一点挙げるとするならば、目だろうか。左右で瞳の色の違うオッドアイ。ユグドラシルでは、ある理由からエルフ系の目をオッドアイにするのが流行っていた。
　おそらく強い。少なくとも、この世界に来てから出会った生物の中ではダントツだと思われる。詳しいことは鑑定してみないと断定できないが、会話もせずそれは不躾だろうと控える。
　まさかプレイヤーかと身構えるネロ。しかし攻撃態勢にはならない。相手を刺激しないよう、正面に見据えるだけに留める。そんなネロの挙動を気にもせず、オッドアイのエルフは言う。
「知っているか、人間。命のかかった極限状況で強者と戦うことが最も早く強くなれる手段だということを？」
　エルフの口から聞こえてきた言葉が日本語であったことに安堵したが、内容は理解できなかった。
「はい？」
　此方の身元を聞いてくるか、幼女から離れるように警告してくるかと思ったが全く違った。いきなり何の話だか分からず首を傾げると、次の言葉で表情が抜け落ちた。
「もしかしたら成功例かと思って母体からとっとと引き離したんだが……無能め。私に手間をかけさせただけ他の失敗作に劣るな。やはり王の相が出ていないものはゴミだな」
　ネロがその言葉が大地に横たわる少女に向けられたものであることを理解するのに、少々時間がかかった。込められた意味と感情を理解し、反芻すると、強い頭痛に襲われた。
　――おまえは母親のようにならなくてはいけない
　――役目を果たせずに死んだあの子の代わりを務めるべきなんだ
　――それが、母親を殺して生まれてきたおまえの唯一の存在価値だ
　――一人産むだけで死ぬなんて、なんて要領の悪い
　――あの子は失敗ばかりの駄目な子だった
　――おまえもきっと、母親と同じ役立たずなのだろう

――おまえのような愚図しか埋めないなんて
――母殺しの悪魔め
封じていた記憶。忌々しい過去。消し去りたい言葉の数々。今なお残る脳髄に刻まれた呪い。

――■殺しの魔王め

「うん？　何だ、そのゴミは殺していないのか？」
エルフの言葉で現実に引き戻される。ネロは顔から冷や汗を流しているが、エルフは気に留めた様子もない。自分を前にすればその程度の動揺は自然だと言わんばかりだ。ペラペラと自分の都合だけを、一々ネロの精神をかきむしるようなことだけを言う。
「武器だけ回収するつもりだったんだがな。まさか育てて母体にでも使う気か、人間。流石にそれを許すほど私は寛容でないぞ。そんなゴミでも死ぬまで王たる私のーー」
「――もういい。黙れ」
どうやら、こいつは殺していい相手のようだ。
事情は分からない。男が言った言葉の意味は半分も理解できない。少なくとも、自分よりも彼の方が正当な権利や身分があるだろう。
しかし、そんなものどうでもいい。
「黙れ、だと？　人間、まさか私に言ったのか？」
エルフが心底不快そうに言う。それに対して、ネロは芝居かかった動きを添えて、こう返した。
「――――ええ。大変恐れ入りますが、お客様。他のお客様のご迷惑となりますので、公演中のおしゃべりはご遠慮ください」
インベントリからマジックアイテムの仮面を取り出し、被る。顔にも心にも仮面をつける。本心を隠して殺意に蓋をする。
「……何を言っているんだ、おまえは。他の、客？　ここには私とおまえしかいないぞ？」
ぽかんとするエルフ。不快感が薄れるほど困惑している様子だが、ネロは構わず続ける。

「それでは皆様、長らくお待たせいたしました。ネロ・ネミートスの『六色演目』開演でございます！　命果てるまでご笑覧あれ」

さあ、あの時振りの舞台だ。観客は一人しかいないが、盛り上げていこう。

お代に命をもらっていく。

即興劇

ネロは自分と相手の状況を確認する。

お互いに無手。他に仲間の姿はない。隠れるような場所もなく、逃げにくそうな森の中ではあるが、相手がエルフであることを考えると環境のアドバンテージは向こうにある。また、先程突然出現した手段が、別の場所からの転移なのか、気配遮断で近づかれたのかが不明。

ネロの背後には気を失った幼女エルフ。相手のエルフはこの幼女の父親と推測されるが、彼女に意識を向けている様子はない。人質として使用する気はないが、仮に使ったとしても効果はない。この推測が外れていてほしいと思うのは、甘さだろうか。

「さぁ――あの不愉快な人間を殺せ、ベヒーモス」

エルフの言葉に従うように、大地が揺れる。土が集まり、彼へと集まっていく。それを見て、ネロは瞬時に指を構えて戦闘態勢を取る。

戦いの構えとはその人間がどのような職業を取得しているかによって異なる。剣士なら抜刀し、魔術師なら杖の先端を相手に向け、修行僧なら拳を握るだろう。

ネロは魔法詠唱者だ。系統は仙人や巫女などが有名な精神系。ベースとなっている職業は陰陽師だ。だが、同じくらい人形師という職業に重点を置いている。此方も精神系魔法職に分類されるが、「操作糸」という専用の特殊技術が特徴に上げられる。

指の構えはそのためだ。見様によっては鍵盤楽器でも引こうとしている姿勢だろう。音楽を奏でるのではなく、演劇をするためだが。

「〈四聖獣顕現〉」

精神系魔法職の中で最上位とされる職業の中に、「ペンタグラム」という職業がある。ネロの収めている職業の一つだ。この特殊技術はペンタグラムに由来する召喚系能力。ユグドラシルの中で召喚系に分類される能力は数多あれど、これほどのものはそうない。

実は、ネロが召喚系の能力を行使するのはこの詳細不明の事態が発生してから初めてのことである。実験のしようがない蘇生魔法や効果範囲が大きすぎる魔法を除いて、召喚魔法以外はいくつかの魔法を

試して効果を確認している。召喚魔法を控えている理由は、召喚したモンスターが自我を持っている可能性を恐れたためだ。もしも召喚モンスターが自らの意志で行動し、ネロに反抗心を持っている場合――そもそも味方として認識していなかった場合、非常にまずい。ネロの戦いの基本は召喚モンスターに依存している面がある。やろうと思えば自分だけでも戦えるが、それでも十全に能力を発揮するためにはやはりモンスターを召喚する必要がある。

この〈四聖獣顕現〉はネロの十八番だ。これが問題なく機能するなら、ネロはいつものように戦えば問題ない。ネロの前に五行星の魔法陣が展開され、そこから大きな白い虎が出現した。四聖獣が一体、白虎である。ユグドラシルで最も召喚したモンスターの一体だ。

白虎が出現すると同時に、精神的な繋がりが発生するのを感じた。まるで支配者と被支配者のような明確な上下関係を示すような繋がりだ。不思議と戸惑いはない。心配していた召喚モンスターによる反乱はなさそうだ。

ネロが安心している間に、エルフの前に集まっていた土塊が一つの巨大な塊を形成した。その土塊の異形に、ネロは見覚えがあった。ネロの知識が正しければ、あるいはユグドラシルと共通しているのならば、目の前の土の精霊は、根源（プライマル・アースエレメンタル）の土の精霊。根源精霊シリーズの一体であり、防御役的な立ち位置にある。通常は召喚できない部類の高位モンスターのはずだ。召喚モンスターは原則として、召喚者よりも弱い。召喚方法が魔法なのか特殊能力なのかは不明だが、この男はレベル八十以上と見ていいだろう。いや、召喚されたモンスターではなく世界に結び付いた存在であり、それをテイムなどで支配している場合も考えられる。

しかしネロとしては精霊以上に、先程エルフが口にした名前が気になった。

「ベヒーモス、だって？」

ユグドラシルにも同じ名前のモンスターがいる。陸の大魔獣の二つ名を持つレイドボスだ。その名が示す通り魔獣系のモンスターであり、精霊ではない。外見も能力値も強さも、似ても似つかない。共

通点を強いて挙げるならば、属性くらいだ。
「ほほう。これが何か知っている、というのか？」
　ネロの反応に何を思ったのか、エルフは嘲笑を添えて問う。ネロは沈黙を選んだ。先程はつい口走ってしまったが、人形師は自分の言葉を持つべきではないからだ。沈黙を肯定と受け取ったのか、エルフは尊大な態度で言う。
「ならば知っているだろうが、お前が出した獣などベヒーモスには及ばん」
「……」
「今更恐怖したか？　ははは。後悔しても遅い。お前如きが王を侮辱した報いを受けよ」
　プライマル・アースエレメンタルがその異様に巨大な腕をゆっくりとした動きで持ち上げる。ネロの知る速度からすれば圧倒的に遅い。おそらく此方の絶望を煽るためにわざとらしく攻撃を仕掛けているのだろう。
「……」
　ネロは無言で指を動かす。同時に白虎が動き、ネロを庇うように前に出た。そして、精霊の拳を頭突きで受け止めた。激しい音が周囲に響く。
「ガオオオオオ！」
「ほう。ベヒーモスの一撃を受けて死なないとはな。それなりに頑丈な獣のようだ。そのような獣を召喚するお前の能力には頭が下がる。おそらく私が見てきた人間の中では最強の獣使いだろう。だが――」
　激突はっきりとした嘲笑を濃くするエルフ。
「相手が悪かったな。私はエルフ王たる最強の精霊使い。同じモンスターを使役するものでも格が違う。さあ、何度まで耐えられるかな？」
　再度、精霊はもう片方の拳を上げ、ネロに向かって振り落とす。白虎が素早く反応し、その肉体で防ぐ。すると精霊は拳による連打を繰り返し、白虎がそれを肉体で防ぐ。そんな攻防が続いた。
「はっ。防戦一方だな、人間。獣の分際でベヒーモスの動きについて

こられる点は褒めてやろう」
「……」
ネロは沈黙を貫く。ただ黙って指を動かす。十の指全てを勝利の布石をまくために使用する。
戦闘が始まって数分が経過しただろうか。精霊が攻撃を止め、白虎から距離を取る。自らの意志ではなく、使役しているエルフの指示だろう。
「……何故だ」
ずっと嘲笑を浮かべていたエルフの顔に明確な焦りが浮かんでいた。流石に不自然な点に気づいたらしい。
「何故、これだけベヒーモスに殴られ続けて死なない！　何故、まだ動ける!?　血すら流していないではないか」
「……」
ネロは相変わらず沈黙したままだ。しかし、心の中では確かに反応した。
ナイスリアクションありがとう、と。

■

エルフ王、デケム・ホウガンは苛立っていた。本人は認めないだろうが焦燥するほどに。
彼が使役するベヒーモスは最強の精霊だ。比類するものなき大地の守護精霊。老年の竜さえ相手にならず、その拳に潰れるだけだった。
一般的な魔法詠唱者の限界が第三位階魔法とされる世界において、デケムは第十位階という超高次元の魔法を行使できる規格外の魔法詠唱者だ。ベヒーモスはそんなデケム本人よりも強い。本来であれば自分より強い精霊を従わせるなどできないが、デケムは修めている職業が召喚に特化しているため、その法則から外れることができた。
どんな敵もベヒーモスの前では無力だった。この精霊を倒せるのは最強の軽戦士だったデケムの父くらいだろう。その父はすでに死

んでいる以上、ベヒーモスに勝てるものなど存在しない。つまり、ベヒーモスに倒せない敵は存在しない。
だが。
「何故、その獣は倒れない！」
絶対的強者である自分に不愉快な言葉を向けた人間が召喚した獣。それは虎に酷似しているが、毛並みが黒と白の縞模様で、なおかつデケムが知る虎よりも巨大だった。それでもベヒーモスよりは大きくないし、ただの獣だ。ベヒーモスの一撃で潰れなかったことは少し驚いたが、時間の問題のはずだった。だが、最低でも二十回はベヒーモスの拳を受けながら、獣は健在だった。倒れるどころか血さえ流していない。おかしい。いくらなんでも不自然すぎる。未だに死んでいないことだけでも有り得ないのに、負傷さえしていないなどいくらなんでも常軌を逸している。
魔法で強化された竜の鱗さえベヒーモスは破壊できるのだ。確かに強い魔獣の毛や肉は硬いが限度がある。ベヒーモスの鉱物の拳で殴られて傷一つ付かない強度など、どんな魔法を使っているのだ。一旦ベヒーモスを下がらせたのはその仕掛けが分からなければ無駄に時間を消費してしまうと判断したからだ。一度、獣とそれを支配する人間をよく観察するために。
（待てよ――魔法？）
デケムは気づいた。人間が忙しなく指を動かしていることに。奇妙な構えをしていると思っていたが、先程まで攻撃を受けていた時も同じように指を動かしていなかっただろうか。デケムはともかくこの人間にとってこの戦いは命をかけた死闘のはずだ。無駄な動きをしている余裕などない。そして、召喚系モンスターを支配し、命令するためにあのような動作が必要でないことは精霊使いであるデケムは当然知っている。実際、デケムは胸の前で腕を組んでいるだけでベヒーモスに問題なく指示を出せる。人間の指の動きに規則性は見られないが、無秩序に動かしているわけではなさそうだ。
「成程な。理屈は分からないが、その指の動きが仕掛けというわけか」
返答は沈黙。だが、デケムの問いと同時に、動きのリズムが変わる。

相変わらず規則性は見えないが、ワンテンポ速くなったようだ。仮面で表情は分からないが、どうやら図星のようだ。

「やれやれ」

具体的な仕組みは分からないが、あの人間が指を動かしている間は召喚された獣が強化されているのだろう。そして、睨み合いの状況でも指を動かしているということはあの指は絶えず動かす必要があるということ。つまり、一度指の動きを止めてしまえば獣は弱体化し、ベヒーモスで倒せるというわけだ。

いくら強化されているとはいえベヒーモスの攻撃を何度も受け止める獣だ。間違いなくデケムがこれまで戦ってきた者の中で最も強い生物だ。あの人間の切り札と見て間違いない。必然的に、あの獣を倒せば人間に為す術はなく、これまでの敵と同じように潰れるのみだ。

倒す手順さえ見えてしまえば何のことはない。

「まさか私が召喚しか使えない、などと思ってはいないだろうな？ベヒーモスだけが脅威であり、私自身は脆弱だと。もしもそうならあまりにも愚かしい勘違いだ」

確かに、デケムはベヒーモスを使役することに特化した精霊使いだ。しかし、それは彼本人が弱いこととイコールではない。ドルイドとして最高位にある彼は――使ったことが一度もない魔法も多いが――高位の攻撃も修得している。肉体も強靭だ。拳で人間の体など真っ二つにできるし、蹴りで鎧を破壊して中の肉体ごと潰せる。

「本来であれば私が人間如きに魔法を使うなど有り得ないんだが……」

デケムは自らが精霊使いであることを誇りに思っている。自らの体を人間の薄汚れた血で汚すなど論外であり、絶対に避けたい戦いだ。しかし、他に手はない。それに、あくまでベヒーモスの手助けをするだけだ。あの人間の動きを止めれば獣も倒せる。今回は久しぶりに苦戦した相手だ。勉強だと思って妥協しよう。

〈陽光爆裂（シャイニング・バースト）〉

デケムが使用したのは第七位階魔法。太陽の如き光と灼熱が炸裂

する。ベヒーモスにだけ警戒したのか、獣が今から動いても間に合わない。人間を白い光が包み込む。
「――――――五十ってところだな。まずはこれだけ仕込めば十分か」
そんな声と同時に光が消える。そこには無傷の人間がいた。
「な――」
デケムの攻撃魔法が直撃していながら全く負傷した様子がない。そのことに驚きの声を上げようとした瞬間、デケムの右腕に鋭い痛みが走った。これまで感じたこともないような強い痛み。
「いたぁ、痛いいいいいぃ！」
見れば腕から血が流れている。痛みと出血量から察するに相当深い傷を負ったようだ。
「……思ったよりダメージが入ったな。想像よりレベルは低い、か。でも精霊の方は僕の知るステータスと大差がないようだし、レベルが下ならどうやって従えているんだ？　特殊な能力かアイテム？　何にせよ、これなら仕込んだ分で終わるか。巻いていこう、巻いて」
しかし、何故？　どうやって？　あの獣か？　否、あの巨大な虎は動いていない。ならば、あの人間だろうか。しかし魔法を使った様子はなかった。少なくともデケムの目には攻撃魔法を放ったようには見えなかった。
「やっぱり知性的な戦いってのはこういうのを言うんだよね。あるいは芸術的か。獣同然の手法で相手を殺すってのは僕らしくない。いやいや、ある意味では僕らしい戦い方なんだろうけど、僕らしさを精いっぱい隠して戦うのが僕らしさだよね」
「な、何を言って……」
「――質問ならいっぱいあるんだ」
人間の口からぞっとするような声が発せられる。温度や感情といったものを感じない。指はもう動いていない。あの奇妙な構えはやめて、腕をだらりと下げている。
「どうやって根源の精霊を召喚してるんだ、とか。何でベヒーモスって名前で呼んでいるんだ、とか。エルフの王だって名乗ったけど国名

は何だ、とか。根源の精霊は確かに強いけど四聖獣ほどじゃねえだろうが、とか。僕の名前はネロ・ネミートスって言うんだけど知っているか、とか。スルシャーナとかアーラ・アラフとかねこにゃんって名前に聞き覚えはあるか、とか。お前の名前聞いてなかったな、とか。そもそもここってどこだよ、とか。まあ、聞きたいことというか、聞いておかないといけないことはたくさんあるんだ。でも、一つだけにしておこう」

人間が仮面を外す。その口は獰猛に笑っていた。凶暴な歯が露出し、心底恐ろしい笑顔を浮かべている。だが、目は笑っていなかった。その黄金の瞳は、怒りに染まっていた。

「ベヒーモス！　私を守れ――！」

デケムの意志に従ってベヒーモスが動き出そうとする。だが、その瞬間、ベヒーモスの身体が崩れて砂になった。文字通りの意味でバラバラになった。精神的な繋がりが強制的に切れ、消滅したという事実が喪失感として伝わってくる。

「は？」

何が起きたのかさえ分からない。頭が受け入れないというか、うまく言語化できない。ベヒーモスが砂塵になった。確かにベヒーモスは大地の肉体としているが、何故、デケムが召喚を解除したわけでもないのに砂になったのか。

「あの娘、途中から姿を消していたんだけど、気づいてた？」

人間の感情を殺したような質問を聞いて、デケムは初めて娘が消えたことに気づいた。戦闘が始まった瞬間はともかく攻撃魔法を放った頃には意識の外だった。わざわざ認識するほどの価値などなかったからだ。生きていれば回収したかもしれないが、巻き込まれて死んでも構わなかった。あの娘が装備していた弓矢はデケムの父の遺産であるためとても貴重なものだが、あの娘自身にはそれほど価値はない。所詮、王の相を受け継げなかった出来損ないだ。

何故、自分のような高貴な存在があんな出来損ないを意識しなければならないのか。しかし、気づかなかったのは事実だ。その不明を人間から指摘されたという事実が、痛みで切羽詰まっていたデケムには

非常に腹立たしく感じだ。
「あんな失敗作が何だと言――」
「そうか。じゃあ死ね」
デケムの言葉を最後まで待つことなく、人間は告げる。そして、一度だけ人差し指を動かす。それほど分かりやすく動いたわけではなかったが、デケムには何故か、その小さな動きがとても重要なものに見えた。当然と言えば当然だ。その小さな動きこそ、彼の命を刈り取るための最後の動作だったのだから。
「ひっ――ひあああ！」
右目に痛みが走った。右腕を襲った痛みと酷似した、鋭く斬りつけられたような痛み。
血が流れる。前が見えない。とても瞼を開けていられない。いや、そもそも眼球が無事なのかさえ定かではない。ひょっとして潰れてしまったのではないか。
王の証が穢された。デケムの思考を怒りが支配する。しかし、次の瞬間には痛みによって塗り替えられる。
「いた、いたい、いたいいいいいいいい！」
右足首。左肩。胸。両耳。右脇腹。右脛。左親指。左腿。首元。体のあらゆる部位に鋭い、切り付けられたような痛みが走る。痛みを感じた次の瞬間には、また別の個所を切り付けられる。人間からの攻撃であることは明白だが攻撃がどういったものなのか全く理解できない。回避も防御も間に合わない。どうやって痛みから逃げれば、あるいは防げばいいのか分からない。魔法を使いたいが僅かな集中力を持つ余裕さえない。
痛い。苦しい。痛みで呼吸ができない。怖い。怖い。苦しい。死ぬ。死んでしまう。どうして――
「名づけるなら死の舞踊かな。閑古鳥が鳴いてる即興劇にしちゃ上等か」
止まらない痛みの中で、人間の言葉を受けて、デケムは今更その可能性に気づいた。
この生物は、人間に見えるが、人間ではなかった。もっと恐ろしい

ものだった。話でしか聞いたことはないが、おそらく悪魔の類だ。そうでなくては何も悪いことなどしてない自分を、このような目に遭わせるはずがない。何故自分なのだ。無能という大罪を犯しているエルフがいくらでもいるではないか。

「それでは皆様、本日はこれにて閉幕でございます。またのお越しをお待ちしております。どなた様もお帰りの際には、どうぞ足元にお気を付けを……なんちゃって！」

ネロの戯言が遠くから聞こえてくるように感じながら、エルフ王にして八欲王の子デケム・ホウガンは死んだ。彼の被害者である人間やエルフではなく、通りすがりの人モドキによって殺された。見えない何かに切り裂かれながら、心臓を抉り出されて生涯を終えた。

灰神の使徒

その光景を、ネロはなんとも言えない顔で眺めていた。

目の前では、幼女エルフがエルフの死体を執拗に蹴り続けていた。死体は勿論、死にたてのオッドアイのエルフである。片目が潰れているため、オッドアイであることは判別できなくなっているが。

この二人が親子関係であることを察した上で、ネロは目覚めたばかりの幼女に物言わぬ死体となったエルフの死体を見せた。

傷ついてほしかった。罵倒して欲しかった。決して特殊性癖的な意味ではない。ネロが自分は人間であることを確認したくなったためだ。子どもに罵られれば誰だって傷つく。親が死んで泣いている子どもを見れば、人間ならば良心が痛むはずだ。その過程を踏むことで、自分の肉体だけではなく精神まで人間から変わったのか確認したかった。

何故なら、現在のネロは殺人を犯したばかりだというのに罪悪感も焦燥感も高揚感もない。一本の演劇をやり遂げたような達成感はある。間違っても人型の知的生命体を殺したばかりの人間の精神状態ではないのだ。

この世界に来てから殺した生物はどれも知性なき獣ばかりだ。人型で会話ができるほどの知性があった以上、ネロの認識では人間と判断してもおかしくない。つまり、人殺しをしたのに落ち着いているのだ。ゲームが現実になった以上、ユグドラシルでプレイヤーを倒したのとはわけが違うはずだ。

最初からこうだったのか。肉体が竜人となって、食欲だけではなく精神まで人間をやめたのか。今回だけが、相手が地雷を踏み抜いてきたエルフだから特別なのか。それを確認するためにも、幼女の前に「これ、君の父親」と告げてエルフの死体を放り投げてみた。……今更だが、この行為を思いついただけでなく実行した時点でかなり人間性は薄い。

しかし、幼女は傷つくどころか死体を足蹴にしている。文字通りの死体蹴りである。最初は本当に死んでいるか確証が持てず、おっかな

びっくりといった様子だったが、すぐにあの状態になった。ネロを人殺しと罵倒するどころか完全に意識の外に置いている。自分も殺される可能性など考えもせずに、あるいは思い当っているがあえて無視して、死体の破壊に勤しんでいる。

ネロはそれを止めない。非難するつもりもない。自分だって顔も名前も知らない父親と出会えば一発殴るだろうから。親子ならば絆があるわけではない。血の繋がりが愛情になるわけではない。

蹴り続けていた幼女エルフだったが、流石に疲れたのかへたり込んだ。

エルフの死体は元々ネロと白虎によって無残な状態になっている。人間で言えば十歳に満たないであろう幼女が全力で蹴ったところで少々崩れるだけだ。レベルが高いようだし、肉体の頑丈さは死んでも健在ということだろうか。顔部分は比較的無事で、顔見知りならなんとか個人を判別できるレベルに収まっている。

「気は済んだ？」

語り掛けると、一度だけびくりとするが、此方を見ることなく首を横に振る。一体どんな目に遭わされてきたのか。想像もしたくないが、ある程度は想像できてしまう自らの人生経験と知識を呪った。

気絶する前は弓矢で射ってきたが、今はそのような素振りを見せない。このエルフを殺したことは明白であり、危険な存在であることは言わずとも理解できるはずだ。だが、この幼女エルフにとっては、このエルフの死はそういうことなのだろう。自分を殺すかもしれない生物の近くにいることよりも重要なことなのだろう。あるいは、すでに殺される覚悟ができているなら、その瞬間まで好きなことをやろうとしているだけなのかもしれない。

「……ちょっと待っててね」

幼女から見えないように木の影に隠れる。

エルフとの戦闘で召喚した白虎は召喚時間の限界を迎えていないため、いまだに現界している。ちらりと見れば、猫のように丸まって眠っていた。そして、幼女エルフがとても興味深そうに眺めている。とても尊い光景だ。文化遺産に登録してもいい。

「エルフは耳が良かったっけ。遮音の魔法を使ってっと。さてと、ちょっと怖いけど試すか」

ゲームが現実化した世界において最も危惧していた可能性、召喚モンスターの反乱は杞憂に終わった。召喚されたモンスターは召喚者に絶対服従の様子である。白虎のように高レベルモンスターでそうならば、それより低いモンスターも同じであると認識して問題ないだろう。では、白虎よりもレベルが上のモンスターはどうなのか。

四聖獣は本来であれば切り札級のモンスターだ。しかし、ネロはそれより上のモンスターを召喚できる。しかも二体も。

一体はネロをゲーム初期から支え続けた切り札だ。ネロが召喚できる最強のモンスター、唯一召喚できるアンデッド、相棒と呼んで差し支えない存在。かなり特殊な方法で召喚するため、あまり積極的に召喚したくはない。召喚できれば頼りになるはずだが、試しにやってみようという方法ではないのである。

対して、もう一体のレベル百モンスターは一度も召喚したことがない。何故ならば、小さな世界喰いとなって召喚できるようになったからだ。厳密にはモンスターと呼ぶのが正しいかもわからない。

これから召喚するつもりなのは後者だ。世界喰いの眷属。より正確に言えば、ユグドラシル公式ラスボス「九曜の世界喰い」の眷属という設定の存在だ。世界喰いの能力の中で最も驚いたのが、この眷属の召喚に他ならない。「こいつって召喚できたんだ」という思いでいっぱいになった。ワールドイーター・ラーヴァがネロだけである以上、この能力について知っているのはネロだけのはずだ。

実験も兼ねて最大まで強化して召喚してみることにした。

ネロはその鋭い爪で鱗の如き自らの肉体に傷をつける。軽く裂け、血が爪先を赤く染める。誰に教わるまでもなく理解した。この世界では自傷行為が「ダメージを受けた」判定になる。

「それじゃあ〈万魔血成（ペイヴァルアスプ）〉」

よって、自分で自分を傷つける行為でもカウンタータイプの能力――ダメージが条件で起動する特殊能力が使用可能になるのだ。

今回使用したものは召喚魔法や召喚系特殊技術と合わせることで、

召喚したモンスターの能力と召喚時間を著しく上げるものだ。一日の使用回数が六回であるため、先程の戦いでは温存していた。これも杞憂に終わったが。

「と合わせて〈灰神礼賛〉」

重ねるように、本題の召喚能力を使用。

血が大地に落ちると同時に、ネロの前に眩い光の魔法陣が出現。そこから人型の影が現れる。光が止むと、そこには美しいエルフがいた。あえて美しいという形容詞を使ったが、男性である。

正確には森妖精（エルフ）ではない。灰妖精（アッシュエルフ）と設定されている。しかし、あまり意味のない区別だ。彼専用の種族だからだ。ネロの知る限り、ユグドラシルというゲームの中で彼以外のアッシュエルフが登場いたという話は聞かない。便利な設定であるからか二次創作ではよく見かけたが、公式では名前を与えられたアッシュエルフは他に存在しないはずだ。プレイヤーなどの種族に選択することもできない。

彼は個体を示す名はあれど人名は与えられていない。ユグドラシルの公式名称は灰神（ファイナル・グレイ）の使徒。掲示板などにおける愛称は「グレイ」。世界を滅ぼすために世界喰いに仕えてきた邪悪な司祭一族アッシュエルフの最後の生き残りという設定だったはずだ。ユグドラシル公式ストーリーにおいて、世界喰いの前哨戦で戦うことになる中ボス。つまりユグドラシル公式のＮＰＣだ。設定が設定なだけにかなり強く調整されている。レベル百プレイヤーでも中の上以上でなければ単身では勝てない程度には強い。

種族に由来する通りの、燃え尽きたような暗い灰色の髪。エルフ特有の尖った長い耳。邪悪な神官であることを隠そうともしない禍々しい法衣。病的なまでに白い肌。事前に男と知っていなければ性別を間違えそうなほど美しい顔。炎のように赤と空のように青のオッドアイがネロの姿を捉える。

そして、当然のように跪いた。

「お初にお目にかかります、大いなる我が本体（あるじ）よ。最新の世界喰いよ。御身の血肉より生まれたこの命、御身が世界を滅ぼすその時までどうぞお好きにお使いください」

「堅苦しい挨拶だな！　あと、そうだろうとは思ってたけど普通に喋るんだな」
　人生でこれほど他人に丁寧かつ仰々しい「はじめまして。これからよろしくお願いします」をされた経験がないため、少々面食らった。
　白虎と同じように精神的な繋がりを感じる。支配者と被支配者の絶対的な主従関係。裏切りなど最初から両者の間には存在しないと告げてくる感覚。
　ネロはこの感覚を信じて、話を進める。
「状況把握してる？」
「無論。委細承知しております。ここはユグドラシルではないと推測される謎の森。我が本体（あるじ）は遭難中であります」
「うん」
　こいつ、はっきりと遭難と言い切りやがった。こっちが必死に言語化しないように努めていたのに。
「ようやく出会えた幼きエルフに矢を向けられ、大したダメージもない癖に大人げなく激昂されました」
「うん……」
　何でそんなこと言うの？
「そして、その少女の父親らしきエルフを殺害した上でその死体を少女の前に放り投げ、少女が死体を足蹴に――文字通りの死体蹴りをしている様子を楽しそうに鑑賞するというおよそ悪趣味極まりないとしか言い様がない行為に興じておりました」
「楽しそうには鑑賞してないよ!?」
「またまた。ご謙遜を」
「うるせえよ！」
　思わず叫ぶネロ。流石にそこは否定しておく必要がある。魔法で遮音していなければ近くの幼女エルフに聞こえていただろう。悪趣味であることは否定しない。自覚はあった。
　思った以上に現状を把握しているらしい灰神（ファイナル・グレイ）の使徒。これは召喚モンスターの標準なのか、彼だけが特別なのか、血――肉体を用いた召喚だからそうなったのか。もしも召喚モンスター全般がそうなら、

白虎が喋れないことには感謝しかない。
　自分と全く同じ価値観の誰かが自分を客観視的に評価したようで居心地が悪い。先程の会話も鏡の中の自分と話し合っている気分だった。
「なら話が早いけど、君、ちょっとあの女の子から身の上聞いてきてよ。同族……厳密には違うけど、同じエルフ系なら多少は心を許してくれるでしょう。召喚時間は伸ばしているけどできるだけ手短にね」
「そのことですが、我が本体（あるじ）」
　どのことだと訝しむネロに、灰神の使徒（ファイナル・グレイ）は言う。
「ご存知ないようですから申し上げます。私は『召喚モンスターは時間経過によって帰還する』というルールから解放されています」
「え」
「我が本体（あるじ）の能力、〈万魔血成（ベイヴァルアスプ）〉はユグドラシルと能力が変わっているようでして。本体（あるじ）の血が私と世界の繋がりを強くし、規定時間を超過してもこの世界に留まることが可能なようです。死んでも死体は残るのではないでしょうか」
「マジか。え、じゃあ最強の軍団が作れるんじゃないか？」
　モンスターの召喚時間がなくなるということは、半永久的に存在できるということだ。つまり、魔力や発動回数の回復する時間さえあればモンスターをいくらでも並べられるということだ。例えば、目の前のエルフを量産できれば最強の森司祭軍団が誕生する。
「水を差すようで申し訳ありません、本体（あるじ）。お忘れではないでしょうか？」
「何を？」
「本体（あるじ）はモンスター召喚に関する数多の能力をお持ちです。ですが、それゆえに、ボーナスを得るためのデメリットを抱えているはずです。その中に――」
　そこまで言われて思い当ったネロは両手で顔を覆う。
「ああ、そうだった。僕、『レベル三十三以上のモンスターは同種を二体以上召喚できない』ってデメリットを持っているんだった……」
「思い出して頂けたようで」

ユグドラシル時代はそれほど大きなデメリットではなかった。人によっては違うのかもしれないが、少なくともネロにとってはあってないような欠陥だったのだ。不便に感じることは何度かあったが、代わりに得られるボーナスは大きかった。メリットとデメリットの釣り合いが取れていたのだ。

他にも、種族について制限がある。大雑把に言えば、ネロは生物以外は召喚できない。つまり、天使や悪魔、精霊などは召喚できないのだ。アンデッドは先述した切り札のみ召喚できる。

大きなデメリットとボーナスが引き換えなのはユグドラシルの基本だ。ワールドエネミーである以前にプレイヤー。その縛りからは抜けられない。ネロは強いモンスターを召喚できるが、それに見合うだけの様々な制限を受けている。

「ま、いいか。〈灰神礼賛〉は九日に一度しか使えない能力だったけど、事実上それがなくなったわけだし、やっぱり得られるメリットの方が大きいのか」

「はい。何事も前向きに考える方が建設的かと」

「戦略の幅が大きく広がるな。やっぱり蘇生魔法や大規模攻撃を検証したいけどなあ。よし、じゃああの娘と話を――あ、そうだ。その前におまえの名前を決めておこうか」

ネロの提案に、灰色のエルフは大きく目を見開いた。

「名前、でございますか？　もしや私めの？」

「他に誰がいるんだよ。灰神（ファイナル・グレイ）の使徒じゃ味気ないだろう。プレイヤーの通称のグレイも使い古された感があってやだ。あと、おまえが死んだら次の灰神（ファイナル・グレイ）の使徒を召喚することになるから区別化のためにもね」

「は、ははぁ！」

大仰な態度だが、この数分でネロもすでに慣れた。

「そうだな。僕もネロ・ネミートスで通すつもりだから合わせるなら姓が必要か。今後同じように永続召喚状態の名前のモンスターを増やすなら、基準となるように……いや、そもそも僕の今後を考えると……。あのエルフの言っていたことを信じるなら、僕は王殺しなわけで……。だったらいっそのこと……」

ぶつぶつと口にしながら考えをまとめていく。幼女エルフをあまり待たせるのも悪いため、頭に浮かぶ単語でそれらしいものを探していく。これからの自分の身の振り方なども考えて作戦を練る。そして、妙案が浮かんだ。

「――レクス。今日からレクス・セントラルがおまえの名前だ。おまえにはある意味で僕の代行者というか影武者の立場になって欲しいんだ」

頭の回転が速いのか、ネロの血から生まれたため思考が近いのか、レクスはそれだけで全てを理解した。深々と頭を下げ、忠義を捧げる。

「御身より賜りし名、この魂に確かに刻みました。私如きには勿体ない名前と役目でございますが、肉体が朽ちる瞬間までお仕えする所存でございます、偉大なる世界喰いよ」

「んー？　僕がこの世界を喰えるくらい強いかは分からないぜ。その名に恥じぬ死に様を求めるけどね。スルシャーナたちがいたら全力で殺しに行くんだけど、すぐには見つからないだろうし。それじゃあ行こうか」

まずはこの世界について知るとしよう。

新王

「えぇ……。そのナンチャラ法国ってのは今時そんな人間至上主義のエルフ狩りとかやってんのかよ。流行らないっての……」
「如何いたしますか？」
「予定変更だ。僕のせいでエルフの国が滅んだら目覚めが悪い。……お嬢さん、この銀髪のイケメンはそこで死体になっているクソエルフより強いんだが、こいつが君たちの王様になったら嬉しい？　うんうん。そっかそっか。よし、そういうことだ。いやあ、我ながら持っている。『王』という名前を与えたことが早速良い方向に巡って来た」
「はい？」
「お嬢さん、飴ちゃんやるから口裏合わせてね。何、難しい演技をしろって話じゃない。余計なことを言わないだけでいい。……というわけで、レクス。おまえ、今日からエルフの王様やれ」

■

「はじめまして、エルフ諸君。私の名前はレクス・セントラル。突然だが、今日から私が君たちの王だ」
　突然エルフ国王城に出現したその生物は、エルフたちの目には同族のように見えた。エルフにしては少し顔立ちが違うようにも思えたが、長く尖った耳は間違いなくエルフのものだ。ワイルドエルフやダークエルフとも違う。他の近似種かもしれないが、エルフの系統に入っているのは間違いない。
　とにかく、見覚えのない男だった。
「これは神たる御方の決定であるため、従順をお勧めする」
　年齢は成人したばかりの青年だろうか。燃え尽きたような灰色の髪。顔面偏差値の高いエルフからしても目が覚めるような美貌。見たこともないような神官らしき衣装。そして、王の相たる左右で色の違う瞳。炎のような赤と、空のような青。
　現在、エルフの国に王以外に王の相を持つエルフはいない。王は多

くの子どもを作っているが、彼と同じような目を持つ子どもが生まれたとは聞いたことがない。もし生まれたら他ならぬ王がその話を広く伝えるはずだ。最低でも、このレクスという男は王都の生まれではない。

レクスは黄金の竜を連れていた。太陽のように輝く竜。二足歩行で亜人のリザードマンに近い体型をしているが、このようなリザードマンがいるものか。黄金の鱗、額から生えた一角、凶暴さを隠そうともしない爪や牙。長い首にはたてがみが生えている。背丈は大人のエルフの二倍以上だ。文明的な服を着ているが、狂王が従える土の精霊と同じくらい恐ろしい生物に見えた。特に、夥しい血の臭いは隠しようがない。どれだけの種類と量の生物を殺せばこれほどの激臭になるのか。

しかし、エルフたちの関心は竜そのものにはなかった。無論、警戒はしているがそれ以上に気になるものが視界に入っていた。竜が肩に担いでいるエルフの死体らしき物体に釘付けだった。

レクスの傍らに大きな弓と矢筒を担いだ少女のエルフが、ルーギであることに最初に気付いたのは、彼女の母親であるミューギだった。ミューギの視線に気づくと、レクスはルーギの手を放す。どこか名残惜しそうにレクスから離れて、ルーギは母親の下に駆け寄った。

ルーギがミューギと抱き合う様を確認すると、固まったままのエルフたちに対し、レクスは再度口を開く。

「異論があるなら、『これ』と同じようになりますが？」

レクスの言葉に合わせて黄金の竜が担いでいた物体を放る。

それは、やはりエルフの死体だった。何か鋭いものに何度も斬りつけられた後があったが、顔は比較的損傷がなく、個人が判別可能だった。

見間違えるはずがない。

最強の精霊を従えるエルフ王デケム・ホウガンそのひとだった。

最強の王にして最悪の王。戦いが強者の素質を開花させると信じ、女や自分の子どもを積極的に死地へと送り込む。臣下の娘だろうが妻だろうが犯し、孕ませる。国民の大半は知らないが、この男こそ法

国との戦争の元凶だ。
　片目が潰れていたため、本人が王の相と称していた左右で色の違う瞳は確認できない。あの絶対的な強さを誇る王が無残な死体となってそこにいた。傷だらけであっても、その表情が恐怖に染まって死んだこともエルフたちに教えてくれた。だが、その光景をエルフたちはどこか夢でも見ているような感覚に陥れていた。
「どうしますか？　先程も言った通り、これは神の決定です。反抗を許すことはできませんが尊重しましょう。できるだけ安らかな死を約束します」
　レクスは笑む。慈愛と慈悲に穏やかな笑顔だった。エルフたちにはそれが恐ろしかった。王と近い実力があるならば、王をこれだけ無惨に殺せるのならばこの都市のエルフを皆殺しにするくらい容易い。この都市にいるエルフで王に勝てる者どころか、王の半分に届く者さえいないのだ。脅迫は言葉の上だけではなく、拒絶すれば確実に起こる未来となる。
　だが、受け入れて良いのか。デケムの圧制から解放されたと言って良いのか。別の暴君が君臨してしまうだけではないのか。
「私を王とするならば、貴方たちに平和と繁栄を約束しましょう」
　突然の事態に誰も反応できないでいると、レクスはそう続けた。誰も何も言えない現状に、何一つ腹立たしく思っている様子はない。デケムでは有り得ない穏やかさだ。
「分かりやすく言うと、法国とやらの人間、この森から追い出しましょう。『それ』と違って、私は働き者ですよ？」
　やはり穏やかな笑みを浮かべたまま、手でデケムの死体を示した。
　デケムの臣下だった男エルフが一歩前に出る。
「ほ、本当に」
「はい？」
　レクスの視線が向けられたことに男は震えた。あのデケムを殺すようなエルフだ。強さがデケムを超えるのは間違いないが、もしもデケムと同じような性格だった場合、彼の首はすぐに飛ぶことになる。それでも何も意見せずにいるわけにはいかない。いきなりやってき

た見知らぬエルフが王になりたいと言い出したのに、はいそうですかと受け入れるなどあらゆる意味で有り得ない。ぬか喜びして狂王に仕えるなど御免だ。

「本当に法国と戦っていただけるのですか？　それさえ約束していただけるなら、貴方を新しい王として迎えることは吝かではありません。いえ、国民の誰もが外敵と暴君から我らを救ってくれた英雄として讃えるでしょう」

王が死んで一番の問題は戦争中の法国だ。王が戦場に出ることなどなかったが、存在しているだけで抑止力にはなっていたかもしれない。そんな彼が死んだ以上、強い王は必要不可欠だ。まして、その王が前王を殺した張本人であり、かの国と戦ってくれるというのならば問題などないのではないか。

「――無論です」

レクスはただ力強く頷いた。

「私は神より貴方たちの王となることを命じられました。ならば王としての使命を果たすことは必定。我が神曰く『民あっての王だ。王が民や国のために尽くす王こそ最も偉大なる王なのだ。断じてその逆はない』とのことです。王になれという命令は、貴方たちを守るために戦えということと同義なのです。私は神の従順なる使徒として、それを果たす義務があるのです」

その言葉を聞いたエルフたちは思わず泣きそうになった。そこに嘘があるかもしれないと考えつつも、レクスの言う神とやらの慈悲に感謝した。

「で、では、どうか、この王都の近くにある三日月湖に建設中の、奴らの基地だけでも破壊していただけないでしょうか。あれができてしまえば我々は数年のうちに滅ぼされてしまうでしょう」

「分かりました。行ってきます」

思わず相好を崩してしまうほど即答したレクス。その場に集まった者たち全員が茫然とする。法国の力を侮ってはいけない、などと心配することさえ烏滸がましいだろう。デケム・ホウガンより強いということはそういうことだ。この未知のエルフは神話に語られるエル

フの英雄さえ超えた存在だと仮定しても間違いではないはずだ。
「ああ、そうだ」
湖に向かうために踵を返そうとしたレクスだが、一つ確認しておくべきことがあったのを思い出した。レクスにとっても、隣で無言を貫き従属モンスターの演技を続けている主人にとっても、最重要事項と言って良いことだ。
「一つ、質問したいことがあります。スルシャーナというオーバーロードに覚えはありますか？」
「するしゃーな？　おーばーろーど？　その、スルシャーナというのが個人の名なのはわかりますが、オーバーロードというのは何なのでしょうか？　種族名ですか？」
恐る恐るといった様子のエルフたちに、レクスは困ったように笑った。この反応ではすでに質問の返答が決まってしまったからだ。
「その通りです。その反応だと、オーバーロードさえ知らないと？あ、ちなみにオーバーロードはアンデッドです。スケルトン・メイジ……魔法を使える骨モンスターの最上位だと思ってください」
その場にいたエルフたちがお互いの顔を合わせる。誰もが顔を横に振った。
「申し訳ありません。個体名を持ったアンデッドなど聞いてこともありません。魔法を使う強いアンデッドというのもこのあたりではあまり見かけませんね」
「左様ですか。まあ、いいでしょう。では、すぐに戻ってきますので、王が変わったことを民たちに広めておいてください。いえ、民や王の子どもが各地の戦場に出されているのでしたか。其方の撤退を最優先にしてください。子どもが死ぬと気分が悪いので」
デケムなら有り得ない指示と感情だ。女エルフたちの多くが頭を下げる。皆、デケムの指示で幼い子どもたちを戦場に出している母親たちだ。
「か、畏まりました、れ――――」
「レクス・セントラルです。偉大なる神より賜った尊い名」
名前を憶えられていないことを見抜かれて、男は頭を下げた。明ら

かに機嫌を損ねたはずだが、レクスは気にするなと言いたげに手を振るっている。デケムなら間違いなく殺されていたところだ。改めてレクスが寛容であることを理解するエルフたち。

「ま、私の名前はどうでもいいんですけどね。此方の竜の名前がネロというのは覚えてください。そして、我が神の名はコスモス。大神コスモス。これから貴方たちが崇めるべき名前です。忘れることがないように」

■

エルフ王都近くの三日月湖上空に、黄金の竜と灰色のエルフはいた。黄金の竜は半異形形態のネロで、エルフはレクスだ。翼のない彼らがどうやって空中に浮かんでいるかと言えば、単純明快に魔法である。

異形種の中には複数の形態を持つ種族があり、竜人はその一つだ。他には悪魔や人狼などが挙げられる。完全異形形態になればワールドエネミーとしての権能を持つネロだが、人間形態や半異形形態ではあくまでプレイヤーの範囲に収まる能力しかない。

服の下を露出しなければ人間に扮することもできる人間形態と違って、半異形形態は完全に異形の姿をしている。竜人と言うより、二足歩行の竜だ。言葉さえ発しなければ多くの者は理性なきモンスターと誤認するだろう。すでに人間形態を知られているルーギ以外のエルフに対しては、今後もこの半異形形態だけで接するつもりだ。エルフたちはレクスの方が主人だと勘違いをするだろう。勿論、法国に関しても同じだ。これから人間形態を見せる相手はかなり選ぶことになる。

公式ストーリーの中ボスであるファイナル・グレイと一介のプレイヤーであるネロ・ネミートスでは知名度が違う。ネロを知るプレイヤーであっても、人間形態や完全異形形態ならともかく半異形形態は知らない可能性が高い。どこにいるかも分からないプレイヤーへの欺瞞としては持ってこいというわけだ。

「まずナンチャラ法国側の戦力を予想しようか」
「スレイン法国です。我が本体よ、その言い方がお気に召されたので？」
「まあね。エルフの国には名前がないみたいだし、後で考えようか」
　建設中の法国の前線基地とやらを見下ろす。隠形の類は使っていないが、基地に此方を発見したよな動きはない。上空への警戒の薄さはそのまま航空技術の未発達を意味し、三次元攻撃への脆さに直結する。そして、基地の構成から文明レベルなども察することができる。
　それらを踏まえて考察を開始する。ほとんどネロの独り言で、レクスは合いの手を入れるだけだ。
「エルフ側の話からおおよそ予想はできる。というよりエルフたちの戦力から逆算だね。おそらくデケム・ホウガンはレベル八十弱だったが、ほぼ戦場には出ないから計算に入れなくていい。他のエルフたちは最高でも三十に満たないレベルと見た。平均値は十もないんじゃないかな？」
「ええ。私一人でも問題なく殲滅できますね」
「寿命が長いエルフの時間間隔はあんまり当てにならないが、この戦争は何十年という単位で続いているのは間違いないみたいだ。森がエルフのホームであることを考えても、人間側はひどく手間取っている。エルフ側が圧倒的に押されているとしても、人間側にも決定打となる戦力はない。つまり、僕を殺せる奴はいない可能性が高い」
「それは早計かもしれませんよ」
「ああ、エルフ王が出てきた時に備えて同格が一人か二人いるくらいは有り得るんじゃないかと警戒すべきではあるね。さて、この見通しの甘い楽観的な意見かな」
「まさか。妥当な評価かと」
「うはは。百点満点」
　すこぶる機嫌の良いネロ。邪悪なる竜人としての本能が騒いで仕方がない。人間を殺すことに忌避感はない。いっそ清々しいほどだ。
　罪悪感はない。罪悪感がないことに罪悪感を抱くこともない。開き直って人間性など捨ててしまおう。ネロがネロである証明は、この

胸にある旧友への怒りでいい。
「安請け合いしちゃったけど、思った以上に楽な仕事になりそうだ。まあ、いざとなったら『あいつ』を呼ぶさ」
「『あれ』を召喚するおつもりで？」
　レクスが苦虫を噛み潰したような渋い顔をする。顔が美しいとそんな表情でも味わいが生まれることに感慨を覚えながら、ネロは返す。
「いざとなったらね」
「その時が来ないことを祈ります。召喚されずとも理解できます。『あれ』は私とは致命的に相性が悪い。いえ、『六色演目』には必要な存在であることは承知しておりますが」
「おまえの意見は、僕の本音の一部っぽいからなあ。それも僕の本心なんだろうね」
　ネロのユグドラシル時代の異名『六色演目』。ネロが最も得意とした戦法に由来する。ネロ自身と色を冠する五体のモンスターによる同時攻撃。世界喰いになる前のネロのビルド構築はこのコンボを完成するためだけの構成であったと言っても過言ではない。
「今度から君も加わるから『七色演目』を名乗ろうか」
「かの演劇に私如きの役を設けていただくとは、勿体ないですね。あ、ちなみにですが、我が本体の眷属の中で言葉による会話が可能なのは私と『あれ』だけです」
「へー。そんな気はしてた」
　召喚モンスターが自我を持っているという現実は、ネロの戦法に大きく影響する。モンスターを召喚する魔法や能力を持っているプレイヤーで影響を受けないものはいないだろうが。圧倒的に自由度が違う。ユグドラシルではできなかった遊び方ができるのは間違いない。
　基地の構成や人の流れを一通り把握した所で、柏手を一つ。
「それでは皆様、しばしの間お暇を拝借。これよりお見せしますは、エルフの国に攻め入らんとする人間たちを、天災が踏みにじる蹂躙劇。まさに悲劇、青天の霹靂。災害は忘れた頃にやってくる。ご観覧の後

は、どうぞ何気ない日常の価値を振り返ってもらえれば幸いです」
ルーティーンの口上が終わり、レクスは基地に向けて降下していく。
「では、行って参ります」
「良き公演を」
この基地襲撃こそ、ネロ・ネミートスとスレイン法国の決して長くはない因縁の始まり、あるいは復讐譚の序曲だった。
ネロはまだ知らない。スレイン法国こそ魂の裏側から憎む六人が建てた国であると。
ネロはまだ知らないし、決して信じない。その六人がとっくの昔にこの世界に生きていないのだと。

神の御名

スレイン法国と言えば、周辺国家では最も高い国力を誇る国である。

六大神信仰を信条とする宗教国家。六百年前に絶滅の危機にあった人類を救済した六大神を信奉しており、人類至上主義を掲げている。実際、彼らの国家としての活動は人類の未来を守るために行われているものも多い。表社会で語られることこそないが、秘密特殊工作部隊の六色聖典の活動はその代表だろう。

では、罪なきエルフの国への侵攻が人類守護に関わるかと言われたら、客観的に見れば違うとも言い切れない。すべては、百年前にエルフ王が犯した罪に起因する。かつては、法国とエルフは協力し合える関係だった。だが、エルフというか、エルフ王デケム・ホウガンが犯した凶行は許されざる裏切り行為であり、関係の決裂と戦争勃発は必然であった。デケム本人が戦争になったことを全く焦っておらず、むしろ命を削る戦闘で強者を覚醒できると考えているのは笑えない事態ではあった。

国や民に罪はなくとも、王に罪はある。エルフが人間に害ある種族でなくとも、エルフ王は人類にとって不倶戴天の敵に等しかった。

しかし、この戦争はもうじき終わる。その目途が立ってきた。今日や明日は無理でも、数年でケリがつく。これは希望的な考えではなく、現実的な推測であった。エルフ王は逸脱者すら超えた超常存在であるが、そのエルフ王さえ殺せる切り札が法国にはある。確かな証拠こそないが、そう考える者は多かった。

エルフの王都近くにある三日月湖。そこでは法国の前線基地が建設中だ。もう一年もしない内に完成するだろう。この前線基地ができてしまえば、エルフ王の始末実現もかなり現実に近づく。ゲリラ戦に特化した火滅聖典も参戦準備ができている。

そんな時期だった、前線基地にひとりのエルフが出現したのは。

「はじめまして。スレイン法国の皆様。私の名前はレクス・セントラル。桜を失いし民、世界樹の焼却を願う者の末裔、最新の魔王の眷属。

本日崩御したデケム・ホウガン殿に代わり、エルフたちの王になった者。つきましてはこれから神の裁きを受けることになる皆様にご挨拶とお悔やみを申し上げに参りました。以後お見知りおきを。――まあ、ここにいる皆様のほとんどは明日の朝日を拝むことはないでしょうが」

そんなふざけたこと堂々を宣うエルフは、左右で違う色の瞳をしていた。

唾棄すべき大犯罪者と同じ特徴。それはエルフにとっては王族の特徴とされるものだ。エルフの顔立ちは人間からすると判別しづらいが、おそらくあのエルフ王の親族か何かだと推測される。

太陽が明るい時間に、隠れることもなく、臆することもなく、同行者もなく、武器も持たず、まるで散歩に来たかのように軽い足取り。しかし、そんな彼を殺すことが容易ではないことは、基地周辺に散らばっている兵士の死体が証明している。

突然姿を現したエルフ。それも上空から降りてきたというが、おそらく魔法だ。つまり、最低でも第三位階魔法の使い手。降伏や交渉のために来たわけでもないのなら、上官の決定を待つまでもなく攻撃をしない理由がない。そして、その結果が死体の山だ。

法国の軍事最高責任者は大元帥で、その下に二人の元帥がいる。現在エルフとの戦争の現場指揮を行っているのは、その元帥のひとり、ヴァレリアン・エイン・オービニエだ。彼は死体にされた同胞たちを見て唇を噛みたくなるが、堪える。目の前にその下手人がいるからだ。

ヴァレリアンの周囲は現在この基地にいる者でも上位の兵士たちで固められている。兵士たちが固めているから重要人物だと判断したのかヴァレリアンの歴戦の指揮官としての貫禄を察知したのか、それとも両方かは不明だが、エルフは彼を認識すると同時に無駄に清廉された動きとともに、先程の言葉を口にしたのだ。

「……崩御した、だと？　あのエルフ王が？」

欺瞞である可能性を十分に考えた上で、ヴァレリアンはそこを聞き返した。さり気なく言っていたが、どうしても聞き捨てならない内容

だからだ。エルフ王デケム・ホウガンこそは、法国の最終目標。本国の上層部からも、エルフどもは取り逃がしても、エルフ王だけは確実に追い詰めろと執拗に通達されている。だが、最高執行機関はどうも軍事的な理由以上にエルフ王に固執しているような気がするとヴァレリアンは考えていた。

だからこそ、このエルフの発言を聞き流すわけにはいかなかった。この遠征が、これまで流してきた血が、犠牲になった兵士たちが全て無駄になってしまうかもしれないのだ。

「はい。死にました」

しかし、エルフはあっけらかんと言う。その言葉の、事実の意味がこの場にいる法国の兵士たちにとってどれだけ重要な意味を持つなど理解もしようとせずに。階級に関係なく、その場にいた全員が息を飲んだ。全神経をエルフに向けて、発する情報のひとつひとつの真贋を見極めようと努力する。

「偉大なる我が神によって、自慢の精霊は無力化され、王の証とやらの目玉は潰れ、体は切り刻まれ、抉り出された心臓は捕食され、無惨に死にましたとも」

淡々と、ただ淡々と、エルフは告げてくる。エルフは一般的に美しい顔をしているが、このエルフは特に美しい顔をしていた。おそらくヴァレリアンの知るどんなエルフよりも。まるで美の神が創造したかの如き美貌は喜悦に歪んでなお優美だった。

「にわかには信じられんな」

その言葉は、この場にいる全員の心境を代弁していた。最終目標を奪われたという心情もあるが、それ以上にエルフ王の強さを知るがゆえだ。

最も多い一兵卒。それらが経験を積んだ強兵。より高度な作戦を実行できる精兵。単独で戦況を変え得る文字通りの一騎当千である英雄。そして、英雄さえ超えた逸脱者。エルフ王はその逸脱者すら屈する超越者とも言える存在。

ヴァレリアンは直接会ったことはないが、法国にも超越者と言われる存在がいるらしい。守り神の弟子と聞いたことがある。最高執行

機関しかその正体を知らないとされる国家の切り札。もしもレクスと名乗ったエルフの言うことが事実なら、その切り札の出番はなくなったと考えるべきだろうか。
「それにしても、神だと？　馬鹿な。神とは六百年前に人類を救ってくださった六大神様以外に有り得ない。貴様の言う神とは、六大神様か？」
　自分でも分かり切ったことを聞いていると思う。エルフの信奉する神は六大神ではなかったはずだ。森に住む蛮族にふさわしい蛮神を信奉しているはずだ。もしもエルフが六大神を崇めるほど聡明ならこんな戦争も発生していないだろう。
「六、という数字は荘厳ですが、我が神はおひとりですので。それに、我が神のルールに人間を救うなど有り得ない。我が神こそは、愚かな六人組のおかげで生まれ落ちた――世界を滅ぼす存在なのですから」
　美しいエルフの醜悪な笑みが深くなる。
　その瞬間だった。
　エルフに向けて百を超える魔法の矢が放たれた。四方八方から逃げ場などないように。
　ヴァレリアンが会話で時間を稼いでいる間に気配を消しながら周囲に展開された火滅聖典の攻撃だ。火滅聖典は六色聖典の中でも暗殺やカウンターテロなどに特化しており、様々な職業のチームによる連携を取る。そして、今回は対エルフとして気配を消すことに特化したチームが基地に待機していた。彼らはこれから軍隊の進軍を邪魔する英雄級のエルフを殺すための備えだった。
　このエルフの言う『神』とやらが何かは分からない。概念的な話をしているのか、実在する人物を差しているのかも不明だ。エルフ王崩御の真偽を確かめる意味でも、本来であれば捕縛して拷問によって情報を聞き出すべきだ。しかし、すでに積みあがった兵士の骸がこのエルフの危険性を証明していた。
　エルフ王の死の真偽はともかく、このエルフが法国に対して敵意を持っているのは間違いない。
　ただならぬ強さと明確な敵意。このエルフは法国にとって非常に

邪魔な存在になる。今ならば確実に殺せる。殺せるときに殺しておくべき存在だ。情報はこれからエルフの都市に攻め入って確かめればいいだけの話だ。案外、強者を失ったエルフたちは大人しく降参してくるかもしれない。

数多の魔法の矢は光の翼を形成し、エルフに着弾していく。一発一発は大した威力がないとしても、これだけの攻撃を受ければ英雄であろうと致命傷だろう。

「よもや、この程度の攻撃で私を殺そうと？」

しかし、全ての矢が全弾着弾しても、エルフは健在だった。誰もが目を疑った。まさかデケム・ホウガンのように逸脱者すら超えた存在だというのか。だとすれば、この場で全滅するとしてもこの情報だけでも確実に本国に届けなくてはならない。

誰もが死を覚悟した。もうエルフを殺すのではなく、どれだけ生き残れるかという思考に切り替わった。しかし、遅すぎた。あまりにも遅すぎたのだ。きっと六百年前にはこの瞬間は決定していた。

「これは我が神の神格の侮辱だ。これは我が主の神性の愚弄だ。世界喰いの眷属たる私への挑発だ。人よ、命を以って償ってもらうがいい。私如きが烏滸がましいが――神の裁きを代行する」

エルフが右手を上げた。おそらく魔法を使うつもりだ。火滅聖典を含め全ての兵隊が攻撃あるいは防御、退避の準備に入るが、手遅れだ。

――〈大地の大波（アース・サージ）〉

その瞬間、世界が揺れた。

■

「さーて、生き残りもいい感じに逃げてくれたことだし、適当に死体漁りと洒落こもう」

「我が本体よ、如何でしたか？」

「上々かな。これであのクソエルフ王を殺したのは君ってことになるだろうね。そんなことは一言も言っていないのに。それどころか明

らかに違う存在を示唆していたのに。でもこんな状況で生き残った奴がまともな証言できるわけないし、聞いた側も勝手に整理しちゃうものだからねえ」
「合理性や現実主義とは時として真実から遠ざかるものですな。思惑通りにいかずとも、それはそれで情報処理能力の高さを測ることができますし」
「まあ、長い公演になる。舞台裏では肩の力を抜いておけ」
「畏まりました」
「さあて、まずは鑑定スキルでも使ってみるかな。直接触らないと発動できない代わりに、死体でも色々と読み取れるのは便利だ。まあ、触らずに何でも読み取れるのが一番だけど、こういう情報系魔法の修得はサボってたからなあ」
「言っておきますが、私は使えませんので」
「知っている。ユグドラシルで君――ファイナル・グレイという中ボスについてどれだけのプレイヤーが研究したと思っているんだい。下手すりゃプレイヤーに最も丸裸にされた公式ＮＰＣだぜ、君は」
「お恥ずかしい」
「真顔で気持ち悪い声音やめろ。無駄話はやめて仕事しようぜ。さてさて……ん？　あぁ？」

■

空虚な世界があった
自分がどこにいるのかさえ分からない
そんな中で自分の手を引っ張る誰かがいた
よくない予感が過ぎるが、自分はこの手を取らなくてはいけない
人類を守らなければならないのだから
救済を為した神の慈悲に報いなければならないのだから
引っ張る相手は崩壊した世界
奪われた輝きを捨てられぬ哀れな者
娘の死を忘れるわけにはいかないと、怨嗟を叫び続ける者

大いなる喪失感とともに、意識が鮮明になっていく
「ぐぁ……！」
火滅聖典の副リーダー、シュエンは長い空白から目覚めると同時に、首に強い圧迫感と息苦しさを覚えた。朧気な意識を総動員して状況を理解するのに努める。
「蘇生実験は成功。金貨が補充できない状況で消費するのは惜しいけど、得られるリターンの大きさを考えたら妥当かな。さて、楽しくもない拷問の始まりだ」
誰かに首を絞められた状態で持ち上げられているようだと理解すると同時に、その人物の声が目の前から聞こえてきた。
「てめえに質問がある」
目の前にいたのは金髪と金眼の男。知らない顔だ。それほど目立つような顔ではない。どこかで会っていても忘れそうな顔。耳を確認する。エルフではない。人間だ。何故、人間が自分の首を絞めているのか。そんな敵意の込められた目を向けるのか。考えるのは後だ。
シュエンは必死に体を動かそうとする。どうにかしてこの状況から脱しなければならない。しかし体は動かない。首を絞められているからではない。もっと根本的にだるさがある。気力を込めた程度ではどうしようもない倦怠感。
頭も上手く働かない状況下で、男は質問をしてくる。
「てめえの職業の、アデプト・オブ・スルシャーナってのは何だ？」
何故、この男はシュエンの修得している職業を知っているのか。特殊な職業だ。口ぶりからして知ったばかりのようだ。何らかの能力かマジックアイテムを使ったのだろうか。
「いや、質問は正確にしようか。おまえはスルシャーナを知っているのか？」
スルシャーナ。それは一般には知られていない神の名前。法国の上層部や六色聖典しか知らない、六百年前に人類を救ってくださった神の御名。
「あー、聞こえてんのか？　反応はあるから意識がないわけじゃないんだろうけど。じゃあ、アーラ・アラフやねこにゃんの名前に聞き覚

えは？」
　どちらも神の御名だ。スルシャーナと同じく秘匿されている名前のはずだ。どうやって知ったのだ。どうして、あの方々の尊名をそのように軽々しく呼ぶのだ。
「なぜ、かみのなを？」
「――神だと？」
　ぼんやりとした意識が目覚めた。それほどの殺意を向けられた。
　戦場で駆け抜けるのが仕事の特殊工作部隊であるシュエンにとって殺し殺されるなど日常茶飯事だ。その上で、これほどの激情を向けられたことなどなかった。
「あ、あ、あああ」
　意識が覚醒したというのに、先程より思考がまとまらない。言葉が繋げない。どうすればいいのかわからない。身体も精神も恐怖に支配された。どうすればこの状況から抜け出せるのだろう。どうすればこの苦痛が終わるのだろう。
　謝ればいいのだろうか。求めればいいのだろうか。逃げたい。逃げたい。逃げたい。楽になりたい。どうやって、どうすれば楽になるのか。
「そうか。どうやら連中、僕より早くこっちに来ていたみたいだな。その上で？　神様になって？　エルフ狩りをする人間の国なんて作ったわけかー。へー。何じゃそりゃー。くっきっきっき」
　笑った。
　シュエンの首を絞めたまま、男は笑った。今更ではあるが、目の前にいる生物が人間のように見えるが、人間ではないと確信した。
「き、きききき……！　ぎははあはははははははははははははは！」
　シュエンは勢いよく地面に投げ捨てられた。苦悶の声を漏らすシュエンなど意識から捨て去ったとばかりに、男は跪き、天を仰いで、手を合わせた。大仰に叫びながら、滂沱の涙を流す。
「神よ、感謝します！　敬虔さも足りぬ未熟な私に、復讐以上の――あの六人を殺す大義名分をくださったことを！」

シュエンは自分が何かを間違ったことを悟った。倦怠感が抜けない体を必死に動かし、その償いをしようとする。あの男は殺さなければならない。きっと、あれはエルフ王以上に危険な何かだ。

これは法国の、いや、人類の脅威となる。

そう判断し、魔法を発動しようとしたところで、体がまた言うことを聞かなくなる。それどころか意識が遠のく。先程と同じように、先程以上に。

「僕は償おう、私が裁こう！　あの日負けた責任を取ろう。おまえたちが神を名乗るのならば、僕は喜んで魔王になろう。人類の味方になるのならば、人間の歴史と世界ごとおまえたちを貪ろう。嗚呼、今の俺は世界喰いだからなあ！」

自分が再び死の底に沈むことを実感しながら、シュエンは神々に祈った。六百年前と同じように、どうか人類をお守りくださいと。

「ギャハハハハハハハハハアハアハハハハハハハハハハハハ！」

各地にて

エルフ王デケム・ホウガンの崩御および新王レクス・セントラムの即位。

その二つの情報は、法国の前線基地の完全崩壊とともにエルフたちに瞬く間に広がった。

新王は現在、法国がこの数十年で大樹海内に作り出した基地を破壊して回っている。それは驚くべき速度だ。超越者たるエルフが本気で動けばこれほどの戦果を当たり前に出せるのだという証左だった。

「ん～、ちょっと順調すぎて怖いな。というか、スルシャーナたちって一般兵には名前を伏せているみたいだけど……何で？　神になったんだからもっと自己顕示欲全開でいこうぜ」

新王は戦場に出ている全てのエルフに撤退を宣言した。理由は邪魔になるからだ。その圧倒的力を見てしまえば納得しかない。弱者の手助けなど、超越した強者からすれば煩わしいだけだ。

レクスは全エルフに改宗を求めているが、逆を言えばそれ以外で圧制とされるようなことはほぼない。強制的な改宗も立派な圧制だが、先王と比較すればマシだ。そもそも、改宗に期限はつけていないし、罰則も言い渡していない。王としての命令ですらなく、一個人としての要望だ。

大神コスモス。それがレクスが提示した新しいエルフの神の名前。

「あいつらに抵抗して～、僕も～、神様を名乗るよ～。正体は隠すけどね～」

王の覚えを良くしようと改宗を宣言するエルフは多い。一種の同調圧力が生まれ、王都内では改宗について新王派と保守派で対立が生まれていた。もっとも、以前の在り様を思えば考えられないことだった。デケムの言うことが絶対であったからだ。

子どもを戦場に出さなくていい。娘や妻を差し出さなくていい。気まぐれで殺されるようなこともないし、法国の人間を追い払ってくれる。

都市を守護する巨大な獣まで配置してくれた。先王が使役した精

霊にも劣らない威容を放つ白い虎だ。何でも新王が崇拝する神の眷属らしい。
「白虎を永続召喚状態にしといて、都市を守らせよう。留守を襲われるのも気に入らないしね。名前は『ウェス』で」
突然出現したとはいえ、そんなことがどうでもよくなるくらいに、彼らにとってレクスは救世主であり理想的な王だった。これからエルフたちとどう向かっていくかはレクス本人ではなく、その本体たるネロの動向によるが、ネロにしてもエルフたちを悪いようにするつもりはない。彼らは被害者だからだ。ネロはエルフに対して責任と義務があるからだ。
六大神の正体が、ネロの仇敵たるスルシャーナたちだったのだから。
怨敵スレイン法国。ネロはエルフたちの味方であり続ける。彼らを虐げてきた法国を裁くという大義名分は、ネロ・ネミートスのルールに則したものなのだから。
ネロは待っていた。
こうして法国の基地を潰していけば、必ず神となったあの六人組が現れるはずだ。自分が出ては逃げるかもしれない。レクス――灰神の使徒ならば、レベル百プレイヤー一人でもなんとか勝てるラインだ。一人か二人をおびき寄せるには絶好のラインだ。
もしも現れたならば、ワールドエネミーたる自分の暴力を見せるとしよう。まだ完全異形形態にはなっていない。だからこそ、彼らで初披露にするつもりだ。これ以上ふさわしい相手はいないだろう。本来ならば、ユグドラシルが終わる前に最後の花火として彼らと戦うつもりだったのだから。
神になったおまえたちに、魔王という理不尽を教えよう。
「ああ、楽しみだ。これほどドキドキする公演は初めてだ。ユグドラシルの十二年でも滅多になかった。憂さ晴らしの相手、ちゃんとしてもらうぜ？　我が親愛なる旧友たちよ。……なんちゃって」
運悪く生き残った兵士、あるいは実験も兼ねて蘇生させた兵士から慣れない拷問で聞き出した情報は有意義なものだった。

特に「六百年」という月日は大きかった。アンデッドのスルシャーナはともかく他の五人は種族を変えるなりして生きている可能性が高い。寿命で死んだなど考えない。大罪人によって追放されたなど嘘っぱちだ。そんな風に逃げるなど許されない。ネロの知らない所で死んでいるなど、どう考えても罪だ。

「あいつら、僕のこと忘れてねえよな？」

もしも忘れていたというのならば、思い出させるだけだ。あのユグドラシル最後の戦いとともに。勝利した襲撃者であるスルシャーナたちにとってはあの戦いは過去だろう。だが、ネロにとってはまだ続いているのだ。あの憎悪が、あの憤怒が、あの後悔が。

あの戦いを忘れるということは、あの六人を許すということだ。あの時のあの言葉を許すということだ。演劇都市コスモスウェイを、自分の子どもと言うべきＮＰＣを忘れるということだ。

だからネロは忘れない。だからネロは許さない。あの戦いの記憶を何一つ捨てることなどできるはずがない。現在と違ってゲームの中だったとしても、あの痛みは確かにこの胸に残っている。だから、ネロは世界喰いになった。プレイヤーであることを捨ててでも、果たすべき復讐があった。

「もう遊びじゃすまない。世界が壊れるほどに殺し合おうぜ、スルシャーナ」

■

時を同じくして、ある墳墓で、ある不死者の王が、自分の名前を変えた。

「これより私の名を呼ぶ時は、アインズ・ウール・ゴウンと呼ぶがいい」

それはユグドラシルにおいて、伝説的な集団の名称。最悪のＤＱＮギルド。魔王の軍勢。わずか四十一人で千五百人の大侵攻を返り討ちにした理不尽の具現。

そのまとめ役にして最後のひとり、モモンガは十二年の付き合いになる名前を捨て、「アインズ・ウール・ゴウン」と名乗ることにした。

ギルドの全てを背負うと決めたのだ。
――仲間たちよ。もしも栄光ある名前を一人で独占することに異論があるというのならば、ここに来て告げて欲しい。その時は潔くモモンガに戻ろう。
「アインズ・ウール・ゴウンを不変の伝説とせよ」
モモンガ改めアインズは、シモベたち――仲間たちの子どもと言うべきＮＰＣに対して宣言する。
「アインズ・ウール・ゴウンにこそが大英雄だと、生きとし生ける者全てに教えてやれ。このアインズ・ウール・ゴウンこそが最も偉大なる存在だと知らしめるのだ！」
この世界にいるかもしれない仲間たちにも届くように。
戻ってくるはずもない友人たちの帰還を信じるその姿は、旧友を仇敵と憎む世界喰いと同じくらい哀れなものだった。
世界の頂点に立ち栄光を目指す魔王。神の破滅を願う世界喰い。
両者の出会いはそう未来の話でもない。

■

一人の男性が、神殿の会議室から退室した。
影のような噂でしか存在を聞かないような非合法部隊。スレイン法国神官長直轄特殊工作部隊群、六色聖典。その中でも、漆黒聖典は死の神スルシャーナが追放されたという神話に基づき、存在しないことになっている。
彼はそんな部隊の隊長だった。第一席次『漆黒聖典』。部隊の名前を異名としてそのまま冠することを許されるほど力を持った彼は、最高執行機関から任務を授かった。人類の明日を決定するかもしれない重要な任務を。
「悪いことは続くものね」
隊長に声をかけてきたのは、十代前半に見える少女だった。奇怪なことに髪と瞳の色が左右で違う。片方は目が覚めるような白銀で、もう片方は全てを飲み込むような漆黒。

血と血の掛け合わせによって有り得ない確率で生まれた存在、漆黒聖典番外席次『絶死絶命』。
彼女の存在は漆黒聖典の中でも特に重要機密とされている。最高執行機関のお歴々を始めとする法国の中枢を除けば、漆黒聖典の同僚の何人か知らないはずだ。……漆黒聖典着任時に自分の能力を過信しすぎて傲慢になった者は、その態度を改めるため、彼女にその鼻をへし折られる。彼女を知っている漆黒聖典メンバーとはつまりそういう者たちだ。隊長自身、過去にボコボコにされた経験がある。
「エルフに前線基地が破壊されたかと思ったら、土の巫女姫が謎の爆発に巻き込まれて死ぬなんて」
「神官長たちは謎の爆発を復活した『破滅の竜王』と断定しました。これより、最秘宝を纏ったカイレ様を漆黒聖典全員で護衛し、『破滅の竜王』を支配しに行きます」
「そう。私の方は準備がもう少しかかるそうよ」
「……例の、エルフの新王ですね」
先日、エイヴァーシャー大森林の三日月湖に建設中の前線基地がエルフの襲撃によって崩壊するという事件が起きた。犠牲者の正確な数は把握できていないが、中継基地まで逃げられた生存者が十数名程度というだけで危険性を理解するには十分だった。
襲撃してきたエルフはなんと単独。生存者の話を整理すると、エルフ王の崩御というとんでもない事態が発生したらしい。基地襲撃の下手人こそはエルフの新王を名乗り、法国に宣戦布告。先王を殺害したのは新王で間違いない。そして、今現在、その新王は大樹海のあちこちにある法国の拠点を襲撃して回っているらしい。何かの間違いだと疑ってしまうほど恐ろしい速度で。
この拠点襲撃には規則性があることが判明し、最高執行機関は絶死絶命を出撃させ、これを撃退することを決定した。
「貴女以上の適任はいないでしょう」
絶死と隊長は法国内には三人しかいない「神人」だ。
六大神の血を覚醒させた存在、神人。英雄や逸脱者さえ超えた法国の最終兵器にして人類の切り札。八欲王などの血を覚醒させた存在

はまた別の呼称で呼ばれる。
絶死は六大神の末裔であると同時に、八欲王の血も引いている。百年前、デケムが当時の法国の切り札であった女性を犯し、孕ませた。女性は奪還され、産んだ子どもこそ絶死だ。そして、一連の因縁こそ現在まで続く戦争の発端だ。つまり、エルフと法国の戦争は彼女がエルフ王を殺すために起きたと言っても過言ではない。
現在の彼女は心中穏やかではないはずだ。母親から託された自分の存在意義の一つを奪われた形なのだから。
もしも『破滅の竜王』復活の予言と謎の爆発がなくとも、エルフの新王暗殺に隊長を含めた漆黒聖典が出撃した可能性は低い。
「聞いた話だけど、新しいエルフ王は左右で瞳の色が違うそうよ」
それは隊長も聞いている。曰く、王たるエルフの諸相。他ならぬ目の前の彼女が該当し、デケム・ホウガンの特徴として知られているものだ。
「もしかしたら、私の兄かもしれないわね」
「可能性は高いでしょうね」
隊長はそう言うが、最高執行機関はほぼ確信していることを知っている。新王はデケム・ホウガンの実子であり、番外席次の腹違いの兄に該当すると。
「だとしたら、私と同じようにあの男の存在は喉に刺さった骨だったのかしらね」
新王レクス・セントラルを名乗るエルフの情報は少ない。皆無と言っていい。強いエルフならどこかしらで戦果を挙げていそうなものだが、これまでのエルフに関する情報で彼らしき影はどこにもない。現在捕虜にしているエルフたちにも尋問が行われているそうだが、それらしい情報は何一つとして得られていないそうだ。王都以外で縁があった女エルフとの子どもではあり、最近父親を捜してエルフの都にやってきたのではないかという意見もある。
対して、デケム・ホウガンのこれまでの行動や彼を殺しているという事実から考えると、絶死の推測もあながち外れてはいないだろう。無論、強者との間に子どもが作れるのならば人格などどうでもいいと

考える酔狂な女エルフが母である可能性だって捨てたものではないが。
「兄と私、どっちが勝つと思う？」
絶死が隊長に色の違う瞳を向ける。そこに宿る光の正体は、好奇心であり、喜悦であり、戦闘衝動だ。
「貴女ですよ」
即答だった。
敵の力が未知数である以上、軽率で安直な回答かもしれない。しかし隊長は絶死の勝利を疑っていない。彼女の知る全ての者がそうであるはずだ。血を覚醒させた強さや六大神の遺産たる武装もそうだが、彼女には常識外の切り札が二つもある。神が相手でもなければ負けるはずがない。
「そっか」
隊長の答えを予想していたのか、素っ気ない反応だ。彼女もまた自分の勝利を疑っていないはずだ。
「あの男にぶつけるはずだったものは、兄に受け取ってもらいましょう。勝手に妹のものを盗ったんだもの。責任を取って、ちゃんと憂さ晴らしの相手をしてもらわないとね」
新王は超越者としての実力で次々と樹海内の基地を破壊している。最強存在がどういうものかの証明だ。対して、遥か昔に結ばれた竜王との契約もあり、絶死はそれほど戦闘に出られるわけではない。
だからこそ、今回絶死と漆黒聖典はそれぞれの任務をこなす。法国に逆襲せんとするエルフを討ち取ることも、世界を滅ぼす力を持つ竜王を支配下に置くことも、人類の未来のためには必要なことだ。
「貴女のことです。万が一など有り得ないとは思いますが、相手も未知の存在です。くれぐれもお気をつけて」
「ええ。貴方たちもね」
「では失礼します。ご武運を」
お互いに、相手が任務を失敗するはずがないと確信をした上で、絶死は隊長の背中を見送る。
二人の神人は知る由もなかった。これが今生の別れになることを。

そして、これから法国が滅亡に向かっていくということを。そのきっかけを、他ならぬ自分たちが作ってしまうことを。

二人の復讐者

漆黒聖典番外席次・絶死絶命は大森林内にある基地の天幕の一つにいた。天幕の中には彼女しかいない。

これまでの規則性からして、本日、この基地にエルフの新王レクス・セントラルの襲撃があると推測されている。的中するかは祈るしかないが、立案した者はそれなりの自信があるようだった。そうでなくては法国の切り札である絶死の出撃など絶対に認められなかっただろう。彼女の存在は一般兵に知られてよいものではないため、この基地は最低限の人数しかいない。そして、その者たちも戦闘が始まれば退避する予定だ。万が一何かを見ても口外してはならないし、早急に忘れることになっている。

実は、エルフ王の襲撃の日時と場所を予想した上で迎え撃とうとするのはこれで二度目だ。一度目の時は絶死は出撃していない。その時は、捕虜のエルフを大勢人質にするという作戦が実行されたそうだ。しかし、失敗した。新王はほとんどの戦闘で生存者を許していたが、この作戦のみ生存者がいないため、どのように失敗したのかは不明だ。

しかしその作戦失敗があったからこそ、最高執行機関は絶死の出撃を許したとも言える。元々、エルフとの因縁は絶死の手で着けさせたいと思ってはいたようだ。

「……」

標的はエルフの新王。先王デケムより命と王位を簒奪した者。推定、腹違いの兄。レクス・セントラル。これまでの基地襲撃の生存者の情報から、広範囲攻撃に優れた魔法詠唱者であることは判明している。このことも彼がデケムの子であると予想されていることの一因だ。あの男は精霊使いに特化した森司祭だったのだから。魔法詠唱者ならば懐に入り込めばいい。果たして自分と同じくらい強いのかは不明だが、それでも絶死は自分が負けるなど考えられなかった。

「ようやく喉に刺さった小骨が抜けるかな」

じっとしてるのが落ち着かないため、ぴょんぴょんと跳ねている。

最強の神人。神の遺産を受け継ぐ者。法国の最高戦力。守り神の弟子。人類の守り手。先祖帰りのあんちくしょう。その仕草だけ見れば、彼女に与えられている異名など忘れてしまう者もいるかもしれない。まず有り得ないが。

襲ってこないと分かっていても、じゃれつくだけで人間を殺せるような肉食獣相手に完全に気を許す者などいない。同僚であるはずの漆黒聖典の隊員ですら慎重な態度だ。特に『無限魔力』は愛想笑いを浮かべ、揉み手まどしている。立場上は上にあたる者すらも絶死の前では言葉を選ぶ。気持ちはわかるがもうちょっと砕けた態度で接してくれてもいいのに、というのが絶死の密かな本音だ。

「私個人として恨みはないけど。私の感情は母に植え付けられたものだけど。私の憎悪を父でも母でもなく、会ったこともない兄にぶつけるというのは理不尽かもしれないけど。他にぶつける先もないんですもの。それに、私は法国が好きだからね。国の敵は排除しないとね」

完全な独り言だ。元々この天幕の中には他に人がいないのだから返答があるはずもない。だから、沈黙が場を支配しているのは当然だ。

エルフ王は気配を隠すことなく正面から、あるいは空中から出現するらしい。今回も同じとは限らないが、どちらにしろ襲撃があれば騒ぎになるはずだ。絶死は本来他者を好む性格ではない。故に静寂は好ましいはずだ。だが、妙な胸騒ぎがするのは珍しく緊張しているのだろうか。

「いえ。それにしても、静かね」

精神を落ち着かせるために集中していたため気付かなかったが、外から音がしない。最低限の人間しかいないと言っても、人の気配はして然るべきだ。

不用意に外に出ることはないよう言われていたし、自分から出歩くつもりはないが、少し様子を見る程度なら許されるだろう。そう思い、兜を被って少しだけ出入口から顔を出す。

「え？」

兵士たちが倒れていた。
まさか死んでいるのかと思い、倒れている兵士の傍へと駆け寄る。
「……寝ているだけ？」
外傷はない。意識はないが息はある。それどころか寝息を立てている。倒れている兵士全員がそのようだ。
「成程。先の作戦はこうして失敗したってことかしら」
人質のエルフごと広範囲魔法で殺したという意見が多かったそうだが、半分正解だったようだ。広範囲の人間を眠らせる魔法を使って人質ごと眠らせて、寝ている間に回収し、兵士たちを皆殺しにしたのだろう。今回は人質のエルフなどいないはずだが同じ作戦を使っているのは何故だろうか。兵士たちの数が不自然に少ないことを察知して、何かしらの罠があると警戒しての行動か。
絶死が無事なのは装備している鎧と彼女自身の耐性のおかげだろう。人類の限界の更に上にいる彼女は膂力だけではなく肉体の強度や状態異常に対する耐性も例外的領域にある。現在、この基地には精兵級はいても英雄級の兵士はいないはずだ。おそらく絶死を除く全員がこの謎の睡眠状態に陥っていると考えていい。
「何にせよ、エルフ王はすでに来ているってことね」
無関係な未知のモンスターによる攻撃とは考えづらい。そもそも、大森林内にこれほど大人数を無条件で眠らせるモンスターがいるなど聞いたことはない。偶然にも法国の情報網に引っかからなかったとしても、法国の基地をピンポイントで襲うなどまずない。強いモンスターはそれなりに頭が回るものも多く、人間の基地を襲う行為が危険であることを理解できるからだ。勝てる勝てないはともかくとして、獣はいらぬ怪我や疲労を避けるものだ。群れから離れた一人を襲うならともかく、住居に大規模魔法を放つのは非常に考えづらい。
だとしたらゆっくりしている暇はない。最初からない予定だったが、他者の支援も受けられずに戦闘をすることになる。敵の人間だけを選んで眠らせるなど難しいだろうから、敵も増援がないと考えるのが自然か。否、睡眠に耐性のある装備などをしている場合はその限りではない。エルフ王は単身での襲撃しかしていないそうだが、今回も

そうとは限らない。
絶死は慎重に移動を開始する。
現在の彼女は神の遺産を装備している。装備している白い鎧は風の神のもの。武器の大鎌は死の神の愛用品。どちらも法国の最秘宝だ。そんな装備をしているからと言って慢心はできない状況だ。
そして、彼女はすぐに奇妙な生物と遭遇した。
「――ぷすぷす」
奇妙な外見の生物は奇妙な鳴き声を発している。
「な、何、あれ」
「ぷすぷす。ぷすぷすぷす」
魔獣の類には違いないだろうが、少なくとも絶死の知識にはない生物だった。強いて言うなら豚が近い体型かもしれないが、様々な点が違う。豚の鼻は潰れたように平らだが、目の前の生物の鼻は長い。あまり屈強な雰囲気は感じない。おそらくそれほど難度の高い魔獣ではない。
十代の少女にしか見えない絶死が人類最高峰の戦闘能力を持つように、見た目と強さは必ずしもイコールではない。あの魔獣も見た目より強いかもしれない。
「ぷす、ぷすぷす」
それにしても間の抜けた鳴き声だ。まるで袋から空気が抜けているようだ。そんな魔獣だが、絶死を視認するなり彼女とは逆方向に走り出した。あまり早い動きではない。
「ぷすぷすぷす」
間の抜けた声にしか聞こえないが、絶死から逃げているという現状を考えるにあれはあの魔獣なりに必死な声なのだろう。
勿論、人類の限界さえ超えた膂力を持つ絶死から逃げられる存在などいない。しかし絶死どころか一般兵士でもあっという間に追いつける速度だ。後ろの右足を掴んで持ち上げる。抗議するように鳴く魔獣。
「ぷすぷす」
「何にせよ、こいつが原因かしら？」

状況的に無関係というのは有り得ない。直接的な原因でないにしても早く殺した方がいいだろう。間違いなくエルフ王の使役獣か何かだ。
絶死が大鎌を構えた瞬間だった。
「よお、久しぶりだな、ねこにゃん。……何か背ぇ縮んでねえか？」
背後から知らない男の声がしたのは。
「っ！」
反射的に魔獣は壁に放り投げる。絶死の膂力で投げつけられて壁に激突すれば大抵の生物なら死ぬと考えての行動だった。壁の破壊音を確認すると獣から意識を完全に外す。大鎌を構えて振り向けば、そこには金髪の男がいた。
黄金の瞳を除けば、それほど目立つ特徴はない。着ているローブもそれほど特別なものには見えない。ごく普通の旅人のように見える。
だから、絶死が注目したのは男の容姿ではなく、発言だった。
この男は自分に対して「ねこにゃん」と言った。六大神が一柱、いと尊き風神「輝煌天使ねこにゃん」。一般には秘匿されているその名前を知る者は限られる。まして、この鎧がねこにゃんの使用していた物だと知るなど、本当に一部の人間しか知らないことのはずだ。神の御名を知るだけなら六色聖典から聞き出せるかもしれないが、この鎧について知る者など六大神の遺産を直に見ることができる漆黒聖典と最高執行機関の面々くらいだ。
絶死を神と誤認ということは、絶死の存在は知らないが、これがねこにゃん鎧だという情報だけを知っているということだ。どういう立場の人間だ。
「おいおい、動物虐待反対だぜ？　それにしてもカロンの導きなんて持ってどうしたんだ。スルシャーナがよく貸してくれたな。それって効果はしょっぱいけどあいつのお気に入り……ん？　よく見たら女性の体格……もしかしてねこにゃんじゃない？　うわ、恥ずかしい。せっかくねこにゃんだと思ってレクスに出番を譲ってもらったのに……」
芝居がかった動きで顔を覆う謎の男。手を外したかと思えば、目に

は恐ろしい色があった。絶対零度の冷たさと灼熱の憤怒が同居している。
「慣れない遠視なんてするもんじゃないな……。で、ねこにゃんじゃねえならおまえさん、誰だよ？　僕の名前はネロ・ネミートス。昔はねこにゃんと仲間だった仲なんだけど」
「ねこにゃん様と!?」
　らしくもなく大声を上げる絶死。
　神に対して馴れ馴れしい態度であったため、薄々そうではないかと思っていたが、絶死は男の正体に察しがついた。
　六大神や八欲王と同じ『かの者』。ユグドラシルという世界からの来訪者。世界に変革と救済と破壊をもたらすもの。百年の揺り返しにて訪れる大波。ぷれいやー。
「ねこにゃん『様』、ね。ねこにゃん様と来たか。こんな笑い話はない。あの野郎も随分と偉くなったもんだ。まあ、神様になったんだから当然か」
　途端に不機嫌そうな男。それでも、先程までの憤怒は随分和らいでいるように見えた。慎重に、しかし最も大事なことを聞くために踏み込む。武器は構えて、いつでも戦闘は可能な状態で。
「貴方は……いえ、貴方様はぷれいやーでしょうか？」
「その通り！」
　何故か顔の前で両手を叩いて、男は自己紹介をする。
「君の鎧の持ち主であるねこにゃんや鎌の持ち主であるスルシャーナとかつて同じギルドにいた人モドキにして贋作魔王！　詩人のように奏で、妖精のように騙し、盗賊のように襲い、賢者のように導き、魔物のように暴れ、虫けらのように死んでいく。人呼んで『六色演目』ネロ・ネミートスとは私のことでございます」
「ネロ・ネミートス？」
　口の中で転がしてみるが、聞いたことのない名前だ。神々の世界の記録などほとんど残ってないため、当然と言えば当然だが。
「その様子だと聞いたことないか。当然だけどね、うははは」
「当然？」

「だって――『俺』のことをスルシャーナたちは早く忘れたいはずなんだよね。忌々しい敵だから」
ネロの言葉を最後まで待つことなく、絶死は大鎌で切りかかった。
神の敵であるということは、法国にとって有害な存在であり、人類の脅威ということだ。躊躇する理由などない。
絶死の武器、カロンの導き。この大鎌は神の遺産と呼ぶにふさわしい能力を持っている。法国が発見できていない未知の金属でできており、建物内で振り回そうと壁や床ごと切り裂く切れ味を誇る。それを人類最高の膂力と速度で以って振り回すのだ。どのような相手だろうと両断できるはずだった。
「いい攻撃だ。点数はゼロに近いけど」
「それはどうも！」
だが、絶死の攻撃をネロは平気な顔で受け止めた。それも素手で。否、よく見ればその手は人間のそれではない。手首のあたりから硬質な鱗に覆われている。どうやら人間ではないらしい。
しかし、絶死の攻撃を受け止めるなど同じ神人の第一席次ですらできないことだ。この男が神と同格存在――即ちぷれいやーであると見て間違いないようだ。
絶死は鎧の下で笑みを深くする。余裕からではない。興奮からでもない。自分の感情を隠す時の癖だ。笑って、誰からも――特に敵から――感情を見えなくする。
エルフ王と戦いに来たら、神と同格の存在が出てきたなど冗談では済まない緊急事態だ。もしも分かっていたら最秘宝の使用が此方になっていたかもしれない。
（大丈夫。私には切り札がある。神が相手であろうと負けない。スルシャーナ様、私にお力をお貸しください）
絶死は素早く連続で斬りつけるが全て防がれる。カロンの導きでも簡単には引き裂けない強度と、絶死の連撃を防御できる反応速度。簡単には倒せない相手だと理解し、飛びのいて大きく距離を取る。ネロからの追撃を警戒していたが、彼は一歩も動かず絶死を観察していた。

「もしかしたらスルシャーナやねこにゃんを殺して装備を奪ったのかと思ったけど、その反応からすると違ったようだ」
良かった良かった、と神の敵を名乗る男は上機嫌で言う。どこからともなく白く不気味な仮面を取り出して被る。表情を隠されたのは若干厄介だ。視線などの攻撃の予備動作や痛みに対する反応が読み取れなくなる。
そして、鍵盤楽器でも演奏するような構えを取った。その態勢からどのような攻撃をしてくるのか絶死には推測できない。手袋をしているが、実質徒手空拳。先程の攻撃を受け止めた膂力を考えるに肉弾戦を得手とする修行僧か。否、人間ではない上であの膂力であることを考えれば魔法詠唱者であってもおかしくはない。
「私は最新の世界喰い。俺は復讐の獣。僕は黄昏の竜。世界が消える直前、君たちが神と呼ぶ六人が滅ぼした愚かな魔王。――では、我が怨敵の装備を持つ女よ。是非心から楽しんでくれ、この『俺』の――ネロ・ネミートスの『六色演目』を!」
魔法を使ったわけでもないだろうが存在感が増す。戦意が、敵意が、殺意が物理的な圧力を持って絶死の体を揺らした。
「ねえ、戦うのはいいんだけど、もう一ついいかしら?」
時間を稼ぐことがプラスになるのかマイナスになるのか分からない。グズグズしていれば新王が来るかもしれない。しかし、それならば何故いないのかという疑問に突き当たる。
「調子狂うなー。どうぞ。一つと言わず二つでも三つでも。神と同格存在であるのなら、それ相応の懐の深さを見せるつもりだぜ、僕は」
恩着せがましい言い方だが、了解を得られた以上は続けさせてもらう。
「じゃあお言葉に甘えて二つほど」
それはどちらもどうしても聞いておかなければならないことだ。どちらも法国の人間として、あるいは絶死自身のためにはっきりとさせておく必要がある。本当のことを言わないかもしれないし、絶死の望む回答は得られないかもしれない。それでも、そこが気になってこれからの戦闘に支障が起こることだけは避けておきたい。

「ねこにゃん様の仲間というのは嘘？」
この状況ではほとんど嘘だと露呈しているようなものだが、確認はしておきたかった。神の友人、ともすれば新しい人類の守護者になってくれるかもしれない存在だとすれば自分の命を以って詫びる必要だってあるのだ。
「いいや。言っただろう？『仲間だった』って。仲間だったのは昔の話だよ、昔の。一応六人全員と所属が同じだったけど、記憶に残るレベルでつるんだことがあるのはスルシャーナとアーラ・アラフとねこにゃんだけだよ。他の三人も名前だけは覚えているけど。今は会ったら殺し合いは避けらないような関係さ」
ならば、この男を殺すことは神への不義理にならないということだ。仲間であるという嘘は有り得るが、敵であるという嘘をつくメリットはない。神の戦闘を代行するなど、漆黒聖典の所属である絶死からすれば最高の誉れだ。
「そう。じゃあもう一つ。あの男……エルフ王デケム・ホウガンを殺したのは、もしかしてレクス・セントラルとかいうエルフの新王じゃなくて貴方なんじゃない？」
どちらかと言えば、絶死は否定を予想していた。エルフの新王もまたぷれいやーであり、やはり王殺しの犯人なのだと思っていた。この男がぷれいやー、すなわち絶対的な強者だからと言ってデケムを殺したことに直結はしない。しかし、法国の基地を襲撃している新王の関係者であることは間違いない。何せ神の敵を自称しているのだから。最終的に殺すつもりではいるが、この男から新王の情報を抜き出すつもりでいた。
「そうだけど」
平然と返ってきた答えに、驚きで無意識に息を飲んだ。仮面で表情が見えないため正確なところは分からないが、何でもないような態度だ。それ故に真実なのだと察する。いつものように笑みで隠すことはできないほどの衝撃。否、激情を絶死が支配する。これほどまでに感情が高ぶっているのは人生で初めてかもしれない。ひょっとしたら、母が死んだ時以上の何かが芽生えた。

「美味しかったよ、あのクソエルフの心臓。で？　だとしたら？」
絶死は兜の下で改めて笑みを作る。相手には見えないはずの感情を隠す。自分自身さえ気づかないように。そして、宣言する。
「――殺すわ」
「あっそ。頑張れ」

絶死絶命

目の前の女性は、おそらくあのエルフ王と何らかの因縁があると見た。それに合わせてという意味ではないが、あの時と同じ手順で戦うことにする。無論、完全に同じというわけにはいかないが。

バレないように『糸』で肌を軽く裂き、血を媒介にして召喚能力を行使する。

〈万魔血成（ペイヴァルアスブ）〉〈四聖獣顕現〉

本来であればあの時と同じように白虎を出すのが美しいのかもしれないが、生憎、ネロは同種のモンスターを呼び出すのに召喚制限がある。白虎は永続召喚化してエルフの王都を守らせているため、召喚できない。

相手との相性も考えて、防御特化の聖獣を呼び出す。

「何……、亀？」

訝しそうな声を上げる少女。知らないらしい。あるいは、知らない振りだろうか。そういう情報戦はユグドラシルでは日常茶飯事だった。

「玄武って種族だ。四聖獣というカテゴリーのモンスターで、北方を守護すると言われている。個体名はそうだな、『ノース』としよう」

役者の紹介は義務だ。本当は知っているのだとしても、あえて言ってみるのもまた芝居の一環だ。

「そう。……尾が蛇の頭になっているけど、どういう生態なの？ヒュドラみたいに同じ首ってわけでもないし」

本気で不思議そうだ。確かに、ヒュドラやケルベロスのように同じタイプの首がいくつかあるモンスターとはまた別種の特異性がある。

「さあね。僕がこの姿を選んだわけじゃないから」

プレイヤーではないのはほぼ確実。もっと言えば、ユグドラシルの存在ではない。

顔は見えないが、声と体格から女性だと判別できる。加えて、等身が高いようには見えないため、少女だと推定することができる。無論、成熟した女性でも体質で背が低い可能性は十分に有り得るし、

元々背が種族の出身であるかもしれない。
装備しているのはかつての仲間にして仇敵たる輝煌天使ねこにゃんのもので間違いない。材料調達の何割かを手伝った思い出がある。完成したのは、確かスルシャーナと一緒にギルドを抜ける直前だったはずだ。
魔法の武器は装備している者の体のサイズに合わせて、武器自体が大きさを変える。防具も同じだ。すでにエルフたちでそれは確認している。つまり、ねこにゃんの鎧をあの少女が装備できることは何の道理にも反していない。だが、ねこにゃんという男を知るネロからすれば結構な違和感を抱いて然るべきであろう。あの鎧は彼の装備の中でも最高位のものであるはずだ。この世界で新しい強い鎧を作れたのだとしても、あれを任せる程度には彼女のことを評価しているということになる。そして、大鎌を預けているスルシャーナにも同じことが言える。
それに灰神の使徒、即ち、レベル百プレイヤーと戦える中ボスを倒すために派遣されたと仮定した場合、彼女もレベル百ほどの実力を見るべきであろう。
そして、先程の問答。エルフ王、正しくは先王デケム・ホウガンについての質問だ。おそらくあのエルフ王と何らかの因縁があったと見るべきか。それは彼女自身、あるいは知人や肉親と何かがあったと考えた方が妥当だろうか。それとも、この周辺では逸脱したあの強さに由来するものだろうか。断定するには材料が乏しい。加えて、前者であった場合、あまりいい気分はしないため、ネロはこの話題に対する思考を止めることにした。
彼女は此方を殺すつもりだ。此方は彼女を殺すつもりはない。女性を殺すべきではない、なんてフェミニズムではない。人質にするつもりである。
誰に対してのと問われれば、スルシャーナたちだ。まさか神器級アイテムを与えておいて、あるいは貸しておいて、何の感情もない存在だと言い張るのは無理がある。大げさな言い方をすれば、きっと彼女は神の寵愛を受ける新星なのだ。

いつまで経ってもあの六人が戦場に出て来ない以上、もっと強い餌が必要になる。公式中ボスの灰滅の使徒ではどうやら餌としては機能しないらしい。彼を殺すことができるような兵士は法国にいないようなのに、だ。

ならば、より強い理由を与えてやればいいだけの話。外敵を殺すためではなく、寵愛対象を取り戻すとなれば重い腰を上げるかもしれない。もしもダメなら次の手を考えるだけである。

「はあ！」

「ノース。防御」

大鎌での攻撃を玄武の能力で防御する。単純な物理攻撃ならば玄武の防御力およびダメージカット能力の前では無力だ。

それを踏まえた上で、一つ気になることがある。

（思ったより、弱いな）

弱い。

数分の攻防しか交わしていないが、断言できる。

この世界で出会った生物の中では強い方だ。この世界において、エルフ王より少し上程度の力はあるだろう。このユグドラシルと似て非なる世界では、あのエルフの半分の強さを持つ生物にすら出会ったことがない。その前提を踏まえれば、この少女の強さは例外的とすら言えるだろう。

しかし、弱い。ユグドラシルプレイヤーにとっては、レベル百のプレイヤーにとっては、はっきりと弱いと断言できる。少なくとも、神器級のアイテムを持たせるに相応しい実力があるかと言われたら肯定は難しいだろう。遺産級か聖遺物級が妥当と言える程度の実力しか感じない。

ネロ・ネミートスの十八番『六色演目』。自分と五体の召喚モンスターを並べてタコ殴りにするという単純な戦法だ。この戦法の特徴の一つとして、相手の力量に合わせてモンスターの召喚数を調整できる点が上げられる。連戦が考えられる状況では戦力の温存という見方もできるが、戦力の測定や訓練という側面が強い。練習相手にはもってこいということで、ギルドの加入テストでは度々出番があっ

た。
　そして、この鎧少女相手には一体だけ、つまり現在召喚している玄武だけで十分だというのがネロの現在の所感だ。決め手には欠けるしこのままでは時間もかかるが、あえて急ぐ必要もない。二体目の四聖獣を召喚して早急に片をつける方が良いかもしれないが、縛りプレイも悪くない。
　気のせいかもしれないが、戦闘に慣れていないようにも感じる。玄武の動きに微妙についていけていない。玄武は防御に特化しているため、動きが遅い。これは四聖獣の中に限った話ではなく同レベル帯の召喚モンスターで見ても同じ評価となる。その動きにさえ慣れていない――否、これは動きにではなく、硬さに慣れていないのかもしれない。
　この少女は自分の攻撃が全く通じていないという事態に覚えがない。
　それ自体は然程不自然な話でもないのだ。この世界のレベルを考えれば、おそらく突然変異級の強さを持つであろう彼女が同格存在と戦ったことがないというのは全く考えられない話ではない。そして、ゲームのようにコンソールが出ない世界でちゃんとしたビルド構築ができるかと言われれば否であるし、これまで戦った法国のレベルを顧みれば彼女以上の戦士がいないというのも納得できる。
　だが、彼女がスルシャーナたちの部下であるのならば話は別だ。法国という国がプレイヤーの庇護下にあるのならば話は違ってくる。
　彼ら六人は全員がレベル百だった。六百年という年月でレベルキャップから解放された可能性は大いにある。一回や二回死んだのだとしても、下がったレベルをそのままにしておくというのは考えにくい。根本的にこの世界の生命が弱すぎてレベルが上げにくいというのならば理解はできるが、そうなるとエルフ王を放置していたのはおかしい。プレイヤーからすれば弱いが、あれほどの強さだ。貴重な経験値となっただろう。
　何故、六大神と呼ばれる彼らはそれを見逃した？　自分以外の誰かの経験値にする予定だったのだろうか。それこそ、目の前の彼女と

か。
「スパルティアト！」
少女を守るように五体のアンデッドが召喚される。
ネロは特に驚かない。あのアンデッドを知っているからだ。名前も、能力も、カロンの導きに備わっている能力で召喚されることも。
名称、スパルティアト。戦闘能力は第五位階で召喚されるものと同程度。特殊能力はないが武装はやや立派。同時発言は五体までで、二十四時間で計三十体まで召喚可能。
他にもカロンの導きには〈死（デス）〉や〈死者の炎（アンデッド・フレイム）〉などの魔法を行使する能力があったはずだ。大きな改造がなければ性能はほぼそのままのはずだ。逆を言えば、六百年の間に改造された点がないのならば、それは何を意味するのか。より強い装備をスルシャーナたちは手に入れたのか、それとも神器級の装備を改造できるほどの技術がないのか。
（何だ、僕は何を見落としている？）
分かり切ったことだ。考えるまでもないことだ。だが、直視しない。無視する。答えに辿り着きそうになっても無理やり曲解する。思考停止する。絶対に、それだけは認めるわけにはいかない。
玄武が蛇の頭部を持つ尾を振り回し、スパルティアトを一層する。玄武を始めとする四聖獣は位階魔法で召喚されるモンスターよりも強く、ネロの強化が加わっているおかげで更に強い。第五位階相応の能力しかないアンデッドなど一瞬の壁にしかならない。
「……埒が明かないわね」
少女が攻撃を止めて、一度距離を取る。
「ああ、気が合うね。僕もそう思っていたんだ」
特に反応を求めた独り言だったのだろうが、あえて言葉を送ることにした。挑発のつもりだ。追撃はしない。玄武にも遠距離攻撃の手段はある。ネロ自身、数少ない攻撃魔法の中にこの程度の距離なら確実に届いて命中させられる魔法はある。だが、そこまで本気で追撃をするのも面倒だ。戦闘開始直後ならともかく、現在はそこまでの価値を少女に感じない。最初から捕らえるつもりではいたが、ここで明確

に本気で殺すに値しないと判断した。
ネロのそんな評価を察する様子もない少女は、兜を脱いだ。その顔を見て、ネロの目が驚愕と共に大きく見開かれる。
左右で色の違う髪と瞳。左右非対称な黒と白。さながらリバーシ。あるいは鯱を彷彿とさせる風貌だ。少女らしい幼さ顔立ちだが残るが、どちらかと言えばカワイイよりも美しいの方が似合う。そんな顔でニタニタと嗤っていた。
この戦闘ですでに軽視できないダメージが入っているはずだが、気にしていないのか、笑って誤魔化しているのか。おそらく後者だ。戦闘狂の仮面を被っているだけだ。本当の戦闘狂ならば、その痛みをこそ笑ってみせるはずだから。
痛ましい。痛々しい。どういう教育を受けてきたら、これほど哀れな少女が出来上がるのか。神に育てられたはずの少女がどうしてここまで歪なのか。幼い頃の自分を見ているようで吐き気さえ覚える。
脳が現状と彼女の正体を察し、小さく舌打ちした。
「……ちっ。そういうことかよ。嫌な話だ」
先王は女エルフとの間に多くの子どもを作っていた。その相手には臣下の娘や妻さえ入っていたという。強き王の子を孕めることは名誉だと言わんばかりに、無理やり抱いたことは何度もあったらしい。そんな男ならば他の人間種――例えば人間との間に子どもを作ってもおかしくはない。
よく見れば目の前の少女はエルフとも人間とも違った顔立ちに見える。このような感想を抱くのはエルフばかり見ていたからだろうか。それとも、ネロが人間をやめたからだろうか。
この少女の正体を察してから妙に疼く心の傷は、ネロがまだ人間を捨て切っていない証拠だろうか。自分はまだ人間でいたいのだろうか。あんな弱くて愚かなで短くて優しさもない種族に、何の執着があるというのか。もしもネロが――佐倉晴明が人間でいたい理由があるとすれば、それは母親だ。人間でいたくないと思う動機も母親だが。
「ねえ、貴方昔はスルシャーナ様やねこにゃん様と同じ組織にいるっ

て言ったわよね？　だったら、今からでももう一度あの方々と一緒になる気はない？」
「は？」
心の疼きが一瞬で黙る。別の傷が疼きだす。魂の美しくない部分が死体に湧く蛆のように蠢く。鬱陶しい感覚だ。
（落ち着け。だけど、忘れるな。許すな。捨てるな。置き去りにするな。この感覚がなくなった時、僕はネロ・ネミートスじゃなくなる。『雪月花劇団』の一員でも、コスモスウェイの守護者でもなくなる。僕だけは死ぬまでそうじゃないといけないんだから）
ネロが胸を押さえて葛藤している間に少女は兜を被り直していた。どうやら隙だと判断したようだ。実際、ネロ自身、現在の自分は隙だらけだと思う。だが、誘ったとも言える。少女がネロとの力量差をどの程度だと判断したかは不明だが、上下関係は把握できたはずだ。そんな相手にどうやって戦うつもりなのか。それともここから逃げに徹するつもりなのか。どちらにせよ、ここからの一手で少女の底は見えてくる。
そして、ネロは少女の素顔以上の驚きを味わうことになる。
「――Ｔｈｅ　ｇｏａｌ　ｏｆ　ａｌｌ　ｌｉｆｅ　ｉｓ　ｄｅａｔｈ」
その時計を見て、ネロは時が止まったように感じた。

紫幽王

絶死は賭けに出た。

発動すればこの竜を確実に殺せるのは間違いない。だが、その後に控えているであろうエルフ王との闘いは切り札を一手失った状態で戦わなくてはいけない。

それでも二体同時に戦うよりは幾分マシだ。何より、この竜を自称する人モドキは切り札を温存せずに倒せるような相手ではない。

「――Ｔｈｅ　ｇｏａｌ　ｏｆ　ａｌｌ　ｌｉｆｅ　ｉｓ　ｄｅａｔｈ」

絶死の背後に時計が姿を見せる。それを見た途端、竜の体が一瞬だけ強張ったことを絶死は見逃さなかった。致命的な隙だ。

「〈死（デス）〉」

次いで、カロンの導きに込められた第八位階魔法を使用する。本来であれば即座に効果を発揮する魔法だが、先程の魔法と合わせて発動したことで十二秒の時間を要することになる。

とっておきの切り札を使った。もう後戻りはできない。しかし、この技が決まれば勝利は確実。絶死はまだ十二秒だけ生きていればいい。ここからが正念場だ。

「……あのさ」

どうやって効果が発動するまでの十二秒を稼ごうかと思っていたが、相手の方から立ち止まった。指の動きも止めて、完全に戦闘を一時中断している。何やら語りだしそうな雰囲気だったので乗ることにした。勿論、突然攻撃に転じられることを警戒しながら。

「残念ながら、僕にはあるゆる即死攻撃が無意味だぜ？」

その言葉は、この能力のことを知らないという証左。通常であれば、虚偽である可能性も考えるべきだ。スルシャーナと故知であったなら、かの神の力を知り尽くしていてもおかしくない。しかし、この能力だけは話が違ってくる。この能力を知っていて、知らない振りをする利点も、あのような態度をしている余裕もないはずなのだから。

即死耐性など、この技には関係がない。

「何事にも例外はあるものよ」
嘲笑を込めて、絶死はそう言った。無言でやり過ごしても良かったが、ここまで一方的にやられたことへの意趣返しだった。ネロは仮面を外した。流石に何かを感じ取って絶死の顔をよく見るためだろうか。そんな行動ですら無駄に時間を消費してくれるという意味で大歓迎だった。
「多分勘違いを……」
彼は最後まで言葉を紡げなかった。十二秒とは、命を奪い合う攻防には長いが、心を読み合う会話にはあまりに短すぎる時間だ。
不思議そうな顔のまま、竜は仰向けに大地に倒れた。
同時に、彼を守護していた巨大な亀が消える。召喚者の死によって送還されたのだろう。送還されたにしては妙な消え方をした気がするが、見たことのない魔法陣によって召喚された見たことのないモンスターだ。そういうものなのだと理解する。
「分かっていたことだけどスルシャーナ様の方が偉大だったってことね」
これこそが絶死の二つある切り札の一つ、絶対死。正確には道具に眠る、先人の偉業を再現できる能力である。スルシャーナの武器であるカロンの導きを通して、かの神の御業を再現したのだ。
効果は、効果発動に十二秒の遅延発生と引き換えに、即死能力にあらゆる耐性を無視させることができるというものだ。対象が即死魔法の通じないアンデッドであろうと例外ではない。どんな敵も殺してきた確殺の力。
絶死の生まれながらの異能と、〈死（デス）〉が込められている上にスルシャーナの記憶が眠るカロンの導きだからこそ可能な合わせ技だ。彼女が『絶死絶命』と呼ばれる所以。
エルフの新王が控えているかもしれない状況で切り札の一つを使用してしまったが、後悔はない。これまでの攻防を考えると、もう一つの切り札で状況が好転する確率は低い。勝てたとしてもかなり体力と時間を消費するはずだ。ならば、絶対死を使って早々に決着をつけて新王に備えた方がいい。

神殺しを成功させたという達成感は、絶死の心に少しだけ余裕をもたらした。間違いなく人類の脅威となる存在、六大神の敵を倒せたのだ。間違いなく絶死の人生で倒したどんな存在よりも大きな戦果だ。
「あの男の仇を取ったようで不愉快だけど、間接的に母の復讐も達成できたと言っていいのかしら」
こんなくそったれな力でも大切な国を守れた。自分の力に、愛されなかった人生に意味を与えてやれたような気がした。復讐相手を勝手に殺されたことは不快だったが、これだけ充実感のある勝利を味わえたのだ。神の敵を名乗ったこの男に感謝してもいい。
これで――ようやく母を許すことができそうだ。
「ありがとう、お母さん」
大して感情も込めずに口に出した感謝に、自分自身の言葉だというのに、久しぶりに本当の意味で笑えた。

「――ようやく『俺』の出番か」

だが、絶死は安堵するのが早かった。戦いはまだ終わっていない。『六色演目』の閉幕にはまだ早すぎる。一度殺した程度で、ネロ・ネミートスの舞台に幕が下りるなど有り得ないのだ。
突然の声に、笑顔が凍る。脳裏に浮かぶのは、エルフの新王。しかも正面から聞こえて来た。眼前にあるのは人の姿を模倣した竜の死体だけ。透明化の魔法を使っている者でもいるのかと身構えた。
周囲の気配を探る絶死を嘲るように、竜の死体が痙攣するように動いた。まさか死んでいないのかと絶死が身構えた瞬間、その胸部分から白い木が生えた。
（いえ、木じゃないわね。骨？　それも腕の……何で心臓のあたりから腕の骨が生えてくるの？）
木のように生えてきた腕の骨。その大きさは明らかに竜の体のサイズと合っていない。白骨死体を真剣に検分などしたことがない絶

死だが、武器の能力でスケルトンタイプのモンスターを召喚できるし、アンデッドとの交戦経験も多い。その経験と知識から言えば、間違いなく形状も違う。
「クソ本体が」
　反応できないでいる絶死を置き去りにするように、同じ箇所からもう一本腕が生えてくる。腕の骨は手のひらを置き、心臓に出来た穴を無理やり広げるようにして、そのまま地の底から這い上がるように本体を出現させていく。竜の血をまき散らしながら。寄生虫が宿主の体内から抜け出す姿をよりグロテスクにしたような光景だった。
「スルシャーナたちとの最後の戦いもそうだったが、こんな楽しそうな演劇に俺の出演予定なしってのはどういうつもりだ。燃えカスエルフは重宝しやがるくせに」
　やがて完全に姿を見せたのは、一体のスケルトンタイプのモンスター。通常のスケルトンとは異なる点がいくつかある。
　まず、頭部が人間ではなく牛のそれだった。つまり、ミノタウロスのスケルトンだろうか。何故人間型の竜の死体からミノタウロスのスケルトンが生まれてくるのか。
　次に、漆黒の衣を纏っている。これは然程特記すべき事項でもないだろう。エルダーリッチなどのアンデッドも生まれた瞬間からどこから持って来たわけでもないのに古びたローブを着ているものだ。もっとも、目の前のアンデッドが着ている黒衣はかなり上質なもののようだが。
　最後に、体全体から紫色の炎を出していることだ。黒衣にも伝っているが、布が焦げている様子はない。それが実際に発火していないオーラのような炎なのか、黒衣が特殊な性質であるかは判別できない。どちらにしろアンデッドの発しているものである以上、生者は触れるべきではないだろう。眼孔に灯る紫の光が、絶死を捉えたことを理解した。
「そもそも即死コンボなんざ意味ねえと分かっていても受けるもんじゃねえだろうが。仕様も変わってるかもしれねえのに、馬鹿かてめえは」

「一体、何なのよ」
思わず漏れた心の声に、アンデッドは「きひひひ」と笑った。アンデッドのくせに妙に人間臭い笑い方だ。
「何だよ、小娘。この俺に自己紹介でもしろってか？　いいぜ。俺も役者だからな。自分を知ってもらうのは大好きだ」
アンデッドは大仰な動作で両手を広げる。いちいち芝居がかった動きをするのはネロと同じだった。
「おまえたちは青く（うまれ）、赤く（そだち）、白く（つなげ）、黒い（おいる）。俺はそんな黄金（いのち）の裏側にある紫（死）そのもの。魔王の心臓、燃ゆる骸、愛と正義を試す影」
ネロ・ネミートスが世界を喰らう怪物ならば、このアンデッドは生命の終わりを見届ける者。
「――紫幽王リバスだ」
やはり聞いたことがない。そんな名前の知識はない。そんな存在の記録はない。紫幽王とやらが種族名なのか称号なのかさえ判別できない。六大神はまごうことなき崇拝の対象だが、これほどの敵に関する情報なら少しは残しておいて欲しかった。
しかしそんな不遜な想いは次の瞬間には塗り潰される。
「……リバスってのは実に僕らしいネーミングセンスだ。口上の元ネタはステレオムーン同好会のポカポカさんか？　あの人の名乗り口上は長いけど格好いいよな」
絶死は本日何度目か分からない驚愕を味わう。死んでいたはずのネロが起き上がったからだ。心臓部分からボタボタと血を勢いよく垂れ流しているにも関わらず、特に苦しそうな表情はしていない。
「驚いてくれたかな？」
「何で……」
「それは紫幽王の召喚について？　僕が即死を受けたのに死んでいないことに対して？　前者に関してだけど、僕は即死が発生した場合、自分の死と引き換えにこのアンデッドを召喚できるんだ。そして後者については自動蘇生だよ。即死限定なんだけど魔力消費もない自動発動型（パッシブ）なんだなこれが。だから、僕は即死を受けても生き返るし、ついでに強いアンデッドを召喚できるんだ。ちなみにこいつは僕

の切り札。四聖獣より一回り強いぜ？」
　困惑する絶死に対して丁寧に説明をするネロ。だが、彼女自身はまだ事態が呑み込めていない。自分の切り札が無駄撃ちだったどころか相手には強力なモンスターを召喚するための手助けにしかなっていないなど信じたくない。
「本来だったら、これに自殺スキルも加えて『首吊りコンボ』なんて呼ばれていてね。僕を知る者なら知っていて当たり前程度には有名だし、そもそも即死使いって限られるから、さっき言った能力は自殺でしか使ったことなかったんだけど……いや、〈死者転成〉にしろ〈反魂再臨〉にしろ他人の即死で発動させるなんていつ以来だ。……それにしても、スルシャーナの野郎、あの即死コンボはオーバーロード限定だとか言ってなかったっけ？　あの野郎、嘘でもついたのかね」
　スルシャーナの能力を知らないと言っていたのも嘘だった。つまり、この男は十二秒経過すれば何が起こるか分かった上であんなことを言っていたのだ。絶死はこの男の手のひらの上で踊らされていた。おそらくは一度勝ったと思わせて、絶望の淵に落とすために。
（いえ、違う。この男は『あらゆる即死攻撃が無意味』だと言った。通じないのではなく、無意味だ。最初からそういう意味で言っていたのね）
　これからどうすればいい。切り札が通じなかっただけではなく、相手の数が増えた。しかもエルフ王が控えているかもしれない。状況は限りなく最悪だ。
「で、話は変わるんだけどさ、降伏しない？」
「え？」
「その鎧や鎌を持っているなら、察するに君はスルシャーナたちのお気に入りか何かだろう？　ファイナル・グレイ相手なら自分たちが出てこいよって話なんだけど。でもあの即死コンボが使えるならレクスだけならなんとか……いや、倒せないな。あいつ蘇生魔法使えるし。まさか本物だとは思わなかった？　いやでもなあ……。どういうつもりだったんだ、あいつら」
　その独り言で理解する。この男は六大神が法国にいないことを知

らない。絶死がこの場にいることは、完全に神の命令だと思っている。最高執行機関は神の代理とも言えるため一概には間違いとは言えないが、本人たちの意思が関わっているわけではない。
　この男のこれまでの行動――即ちエルフ王殺害や前線基地襲撃が『敵対する神がいる』ことを前提としたものだった場合、その神がいないと判明すればどうなるのか。諦めるのならばいい。興味をなくしてくれればとりあえずは問題がない。だが、六大神の意思と使命を受け継ぐ法国に対して何の敵意も持たないとどうして言えるだろうか。これだけの力を持つ存在が、法国へ八つ当たりをした場合、どれだけの被害が出るのか。
「とにかく降参するならスルシャーナたちへの人質として丁重に扱ってあげるけど、どうする？」
「降参しても――」
　相手の方から降参を提案してきた。それも選択肢としては有りだ。その言葉にどれだけ真実が込められているかは不明だが、ここで大人しく捕まって従順な振りをして虚偽の情報を渡すというのが最も良い選択のはずだ。
　だが、絶死にはそれを認めることができなかった。自分はまだ負けていないのだから。
「――られない。私は逃げられない！」
「え？」
　頭を掻きむしりたいという衝動を抑えて、絶死は叫びながら飛び出した。同時に、もう一つの切り札を発動させる。
　絶死が取得している職業、レッサーワルキューレ／オールマイティによって生み出される分身体。名をエインヘリヤル。絶死自身には劣るが、元々絶死が強いためかなり強力な分身体となっている。本来であれば二つの大鎌でひとりを圧倒するのが理想的な使い方だ。だが、相手も二体。アンデッドの強さは未知数。心臓を素材としているモンスターが弱いと考えるのは楽観的すぎる。
　こうなれば考えるだけ無駄だ。竜とアンデッド、どちらかだけでも確実に殺す。どちらも強大ということはどちらかが死ぬだけでも痛

手ということ。相打ちなど覚悟の上だ。可能ならば竜がいい。かなり特殊だがアンデッドは召喚された。あのような方法で召喚されたとはいえ召喚された存在である以上、召喚者を殺せば消えるかもしれない。
（心臓に穴が開いているんだし……本当、何であれで生きているのかしら？　竜ってのはあのくらい不死身なの？　とにかく見るからに死にかけ。どう考えても、倒しやすいのも倒すべきなのもあっち！）
アンデッドの相手を分身体に任せ、絶死は竜を殺すと決めた。
「〈陽・五行・聖獣拳法〉」
竜が何らかの魔法を使用する。痛みや衝撃はない。体に異変はない。攻撃魔法ではない。そのまま突き進む。有りっ丈の膂力と武技を込めて、斬りかかる。
だが、弾かれる。
渾身の一撃を弾かれた。確かに感触があった。幻術ではない、はずだ。しかし、そのことを受け入れきれずに連撃を叩きこむ。全て弾かれる。これまでの攻防が手加減していたものだとしても、有り得ない身のこなしだ。こっちはこれだけ必死なのに、相手には明確な余裕があった。エインヘリヤルと戦うアンデッドをちらりと見る。骨だけの表情から感情は読み取れないが、あちらも似たようなものだった。
『六色演目』なんて名乗っているんだ。演劇には殺陣も必須事項だからね。魔法で拳士化してしまえばこの程度はできるさ」
拳士化の魔法？　そんなもの聞いたこともない。反則ではないか。仮に魔法詠唱者を戦士並みの肉体にする魔法があったとしても、本職である自分がここまで押されるのはおかしい。それとも、神と同格存在の前では人類の切り札である自分でさえ相手になるわけではないとでも言うのか。
「諦めなさい。君には僕を倒せない」
「うるさい！」
自分自身の声で、自分の顔が怒りに歪んでいることを理解した。駄目だ。笑わなくてはいけない。焦りを、恐怖を相手に見透かされてしまう。隠さないと。

それに、ちゃんと笑わないと。硬い笑顔では、また殴られる。
「君は、もしかして――」
やめろ。
そんな風に私を見るな！
お願いです。
どうか、そんな憐れむような顔で、私の過去（おかあさん）を蔑まないで。

ワールドエネミー

人類最高の膂力は通じない。武技は見切られた。切り札は使い切った上で無意味だった。

人類の守り手、法国の切り札であるはずの自分は追い詰められた。

「はあ、はあ、はあ……」

戦闘で息が切れるなどいつ以来だろうか。

「大丈夫？　水飲むならその間は手出ししないよ？」

「余計な、お世話よ」

対して、相手は此方を気遣う余裕さえあるようだ。当然と言えば当然だ。相手は神と対峙して、生きているような怪物だ。勝機は最初からなかったのだ。

（違う！　私は勝てないといけない。ここでは負けらない！　それにしても、強い攻撃で一気に決着をつけようとしないのは何故？　私に絶対に降伏させたい？　いえ、致命傷ギリギリの攻撃で意識を奪おうとするくらいならやろうとすればできるんじゃないの？　まさかできない？）

召喚に特化しすぎているせいで攻撃手段が不足しているのか。だとしたら、そこが唯一の突破口となるのだろうか。絶死は自分の使える攻撃系の武技を思い出す。反撃の決定打になるかは分からないが、相手が本気にならない内に試してみるしかない。

態勢を直すと同時に、大きな喪失感を覚えた。まさかと思い、そちらを見れば悪い予感が的中していた。

「こっち、終わったぞ」

アンデッドが分身体を倒したのだ。いや、そこにいるのはアンデッドだけではない。先程消えたはずの亀もいた。召喚者が死んで消滅したのだと思っていたが、よく考えれば実際は死んでいなかったのだから、召喚されたままのはず。

「幻術か何かで消してたのかしら？」

「大正解」

ぱちぱちと拍手を送られるが、全く嬉しくない。苛立ちが強くなる

だけだ。
「これぞ『六色演目』。洒落た名前を使っているが、身も蓋もない言い方をすれば召喚モンスターを並べてタコ殴りにするだけだ」
簡単に言うが、絶死以上の難度を持つ召喚モンスターが何体もいるなど冗談ではない。しかも召喚可能な数は口ぶりからすれば一体か二体ではない。普通ならばブラフを疑うが、絶死の負けが濃厚な状況でそのようなことを言う意味はない。絶死に降伏を促しているのだとしてもだ。
「観客もいないのに遊んでんじゃねえよ」
「そう思うなら手伝ってくれ。おまえは――おまえたちは最初からそういう存在だろうが」
「……きひひひ、そういうことね。仕方ねえな」
どうやらアンデッドも絶死との闘いに参加するようだ。分身体が倒された状態で上位存在を二体、否、亀も含めれば三体も相手にできるような手札はない。絶対死も使えない。
逃げるしかない。それが不可能ならば相手が望むように降伏するしかない。いや、逃げるわけにはいかない。降伏など論外だ。自分は戦わなくてはいけない。まだ倒れてはいけない。勝たなくてはいけない。母がそれを望んだのだから。
「じゃあ、やるかね」
確かに警戒していたはずだ。確かに集中していたはずだ。だが、正面にいたはずのアンデッドは突如として消えて、絶死を背後から地面に押し倒した。背中に圧し掛かられて、首元を後ろから掴まれ、地面に押し潰される。
「がぁ！」
苦悶の声が零れた。拘束から逃れようともがくがびくともしない。外見は魔法職のようだし魔法も使えるようだが、本職は格闘のようだ。絶死は純粋な戦士というわけではなく、難度も相手の方が上の模様。地力で勝てないのは必然だった。
「大人しくしておけ。この時点で、おまえの未来は決まった」
アンデッドに触れられた途端、奇妙な違和感を覚えた。体に痛みが

走ったわけではないため、呪いや毒の類ではない。体が思うように動かないが、それは元々のダメージや疲労、体を封じ込んでいるアンデッドの強さ故だ。
　形になる害があるわけではないが、何かをされている。このアンデッドに触れられると何かが起きる。しかし、この正体不明の違和感を探る余裕はない。すぐに押しのけて戦闘ができる状態になる必要がある。このような生殺与奪を握られた状態が好ましいわけがない。
「暴れるなって。どうせすぐ終わるから」
「ふざけ――」
　ふざけないでちょうだい、という言葉を絶死は口から出せなかった。今日何度目になるか分からない驚愕によって絶句する。
「ぷすぷす」
　最初にいた、あの奇妙な魔獣だった。絶死の知らない魔獣だが、睡眠に関わる能力を持っていることは確定している。殺したと思っていたが、生きていたようだ。
「あ、あああ……」
「残念だったな。こいつ、獏って名前のモンスターでな。結構頑丈なのよ。少なくとも、あんな放り投げたくらいじゃ死なないし、本体から与えられた能力のおかげですぐに回復する」
「ぷすぷすぷす」
　獏という魔獣は軽やかな動きで絶死に近づいてくる。それは神人の絶死には笑ってしまうくらい遅い動きだが、アンデッドに拘束されている状態ではそんな動きでさえ恐怖を覚える。いつものように笑みを張り付けることさえ出来ない。必死にもがくが、アンデッドはびくともしない。そして、獏のユニークな鼻が絶死に触れる。鎧越しであるため感触はないが、途端に眠気に襲われる。
「睡眠学習みたいなもんだと思って聞いておけ。こいつの能力は察していると思うけど、相手を眠らせることだ。二つある。一つは判定は緩いけど広範囲で眠らせる能力。もう一つは触れて単体を眠らせる能力。範囲が狭くなる分、効果は前者のそれより強い。効果のほどは、おまえが今実感しているかな？」

アンデッドの言葉を聞くことさえ苦痛だ。意識を保とうとするだけで死ぬほど集中力を必要とする。瞼を一度でも閉じればそのまま眠ってしまうことは必然だった。
「本当ならおまえの強さ……レベル八十くらいが相手だと通じないんだが、俺が触れていることも関係している。俺――紫幽王には相手に触れるほど弱体耐性を下げるパッシブがある。スリップダメージやスタータスダウンならともかく弱体耐性そのものの低下って実感しづらいよな。こうして体を押さえ込んでいるんだ。そりゃ滅茶苦茶影響受けてるよな？」
「あ、る、あ……」
眠い。だるい。もうアンデッドの拘束から逃げようともがくことさえできない。視界がぼやける。意識が薄れる。全身の筋肉から力が抜けていく。これまでの人生で味わったことのない眠気。しかも過度の疲労感から来る強制的な眠気ではなく、優しく包まれているような癒しを感じる。指先の感覚さえその温かさに飲まれたような気がした。せめて何か毒舌でも振るってやろうかと思うのに、呂律が回らない。
こんな状況だというのに一切の恐怖がない。自分が恐怖していないことに恐怖していた。まさか感情さえ支配されてしまったのかと焦りを抱くが、その焦りさえ眠気に押し潰される。きっと、これは死とは真逆なんだろうと消えかけの理性が宣う。
竜が、人ならざる異形が、人間のような手で頭を撫でてくる。まるで母親のような慈愛を讃えた顔で、絶死が母親にしてもらいたかったのにしてもらえなかったことをしてくる。
「眠れよ。おまえができることはもうない。この舞台からはご退場だ」
「ひ、が……。わ、ち……、ま、ふえ……」
言い返したいのに思ったように声が出ない。悔しいのに涙さえ出てこない。今はひたすら眠い。
なんだ、これ。
絶死はそれだけを思う。自分は命懸けで戦うのではなかったのか、

と。祖国のために、神の敵だと宣うこの邪悪な竜を殺すのではなかったのか、と。
　これが敗北だ。絶死が知らなかった『敗北』という状況。一切の希望が有り得ない。敗北を知りたいと宣ったこともある絶死だが、こんなものなら知りたくはなかったと後悔した。
「ああ、勘違いしないでくれ。無駄だったって意味じゃないぜ。むしろ逆だ。……今日までよく頑張ったね。君はちゃんと出来たよ」
　意識を保つ限界が訪れていた絶死には、それが心の支えを崩すトドメになった。
　そうだ、自分は頑張った。よく戦った、最後まで戦った。神が六人で相手取った竜相手に、一歩も引かなかった。だから、もう諦めていいんじゃないだろうか？　もう楽になっていいんじゃないだろうか？
　心の片隅で何かがそう囁くと同時に堪えてきた眠気が決壊したダムの水のように襲い掛かる。もう瞼を開けようと努める気力さえない。
　それでも夢の世界に落ちる直前、一つだけ理解した。
　この男は、少しだけ母に似ているのだ。
　それに気づいた途端、神への背信、祖国への裏切りだと理解しながら、もっと頭を撫でて欲しいと思ってしまった。

■

　眠りについた少女を抱き上げ、一度だけ強く抱擁する。完全に意識がないことを確認し、リバスに預けた。
「全く。あいつら、神になっておきながら何て体たらくだ。もう見せ場がどうこうなんて考えてやらねー。さっさと終わらせてやるよ」
「やるのか？」
　まるで鏡の中の自分に問われたような気分だ。
「ああ」
「きひひ。きっと後悔するぞ」

それも自分の中に現在進行形である感情だ。だからこそ、きっちり言葉にして否定する。
「いいさ。どうせ後悔ばかりの人生だよ。ここで一つ増えたところで、コスモスウェイを失った時には及ばないよ」
「はっ。嘘つけよ、クソ本体。それに関してほとんどどうでもいいと思ってんだろうが。おまえが本当に後悔しているのは、娘(サクラ)を殺したことだろう？」
「……次、サクラのことを口にしたら殺すぞ、発火死体」
「おいおい。ガチギレじゃん」
「分かったのか？　分からなかったのか？」
言葉での返答はなく、リバスは肩を竦めるだけだった。
その鬱憤さえ込めて、ネロは一つの能力を発動する。
「さあ、終演の時だ。真打の登場だ……！」
〈魔王竜戦冠(アジ・ダーハカ)〉
ネロが完全異形形態へ変身するための特殊技術だ。カルマ値が最低であること、ＨＰ残量が三分の一以下であることが発動条件となっており、その分だけ完全異形形態になった時のボーナスは大きい。勿論、そのボーナスは小さな世界喰いを得た現在においても適応される。
種族レベル『小さな世界喰い』の完全異形形態、即ちワールドエネミー化だ。
レベル百プレイヤーが三十六人編成で挑んでようやく勝てる、ユグドラシル単体としては最強の存在。プレイヤーがワールドエネミーになれる手段は、ある意味において最初から用意されていた。しかし、ユグドラシルでその能力が発動される日は来なかった。この異世界において、ようやくその暴力が日の目を受けることを許される。
ネロの決して大きくはない、一般的な人間の大きさの体が膨張する。風船のように。小さな旋風が巨大な台風へと変貌するように。小さな亀裂が大地を崩壊させる地割れへと拡大するように。段々と、などというゆっくりとした速度ではない。さながら土石流の如き速度で、ネロの肉体は膨張と変質を繰り返した。その変身の余波だけで

森が破壊され、地形が変わり、大気が揺れた。
やがて一つの生物――否、災害が形成される。
それはまさしく怪獣と呼ぶに相応しかった。
腕は太く、翼は広く、尾や首は長い。胴体とほぼ同じ長さはありそうな三つ首にある合計六つの目はそれぞれ色が異なる。
「嗚呼、全く――考えてみれば雑魚を暴れさせて敵をおびき寄せるなんて、僕らしくないやり方だった、七面倒、回りくどい、まどろっこしい！　せっかく世界の敵たる力を手に入れたんだ。六人の居場所が分かったんだから、派手にぶち殺しに行けば良かったんだ。いいじゃないか、魔王らしくて。――さあ、打ち切り漫画みたいな終わり方になるかもしれないが、幕引きと洒落こもう」
燦燦と輝く黄金の鱗。比喩抜きに山の如き巨躯。その二つが合わさり、竜は大地の太陽と化していた。否、もはやそれは『竜』という枠組みにすら収まりきらない。大陸最強の生命たる竜王すら、彼の前では一介の生物に成り下がるだろう。生物の体裁を取った環境。意思を持つ天変地異。具現化された滅びそのもの。
「ギャオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」
大樹海のあらゆる生物がその威容に目を潰されそうになる中、ただ一人、そのエルフは滂沱の涙とともにその光景を眺めていた。
燃え尽きたような灰色の髪と左右で色の違う瞳。レクス・セントラルの名前を与えられた大罪人。
「嗚呼、見ておられますか。偉大なる『ウンエイ』よ！　崇高なる『セイサク』よ！　御方々に託された我が使命、我が大願はここに実を結びました！」
ファイナル・グレイ。最後の灰色。
彼で終わるのではなく、彼が終わらせるという意味でつけられた名前。
ユグドラシルは自分が終わらせることができなかった。ユグドラシルは災厄によって燃え尽きるのではなく、何かよく分からない概念の上に消え去った。
顔も名前も声も知らぬ創造者たちより与えられた使命をようやく

果たせた灰妖精は、高らかに謳う。
「矮小なる生命よ。ただ仰げ、絶対なる黄金を！」
目覚めるは三十三番目の災厄。即ち、最新の世界喰いにして黄昏の魔王竜。世界が消える直前、六柱の神が滅ぼした都市の守護者。
その名を『六色演目』ネロ・ネミートス――改め、大神コスモス。
ワールドエネミー、『六眼星龍』コスモス！
いざ心して対峙せよ。これこそが人類の歴史の結末。絶滅の時を六百年も伸ばしたことへの清算。神に救われたという大罪に世界が与えた天罰。
「これが世界を滅ぼす力だ！　――――まあ、もっとも、世界を滅ぼす力程度では世界を滅ぼすことはできないのですがね？」
あーあ、私知らね、と世界でひとりのアッシュエルフは嘯いた。

当時の人々の証言「奇跡の壁」について

○法国兵士（当時）の証言

もう三十年も前の話ですからね。何から話せばいいのやら。

まあ、順を追って話しましょうか。

魔導王陛下の忠実なる信徒である貴女様のお時間を拝借するのは心苦しいですが……そう言ってもらえると幸いです。私のことはお気になさらず。もはや兵ですらない隠居人です。時間だけはたっぷりありますので。

そうですね……。まず、当時、大樹海のエルフと法国が戦争をしていたのはご存知でしょうか？　いえ、色々と上からは言われていましたが、開戦の本当の理由は未だに知りません。当時はなんとなく、そう、なんとなくエルフは人間より下だから奪っても犯しても殺してもいいのだと考えていましたから。今となっては愚かなことだと思います。しかし、当時の私は――いえ、法国民の誰もが人間こそ至上の存在だと、神に選ばれた尊い生命なのだと疑っていませんでした。なので、エルフの国を襲撃することに罪悪感などなく、六大神の加護を持つ法国が最終的に勝つと信じて疑っていませんでした。

私は前線基地には行けませんでした。そこまでの実力も実績もなかったので。やることと言えば、ほとんど大樹海の入り口にある補給基地の巡回警備ですよ。

そんな時です。エルフの王都近く、三日月湖の前線基地が崩壊したという知らせを聞いたのは。厳密には、そういう噂が流れていたというべきでしょうか。軍が正式に発表したのは大樹海から軍が完全に撤退した後でしたかね。

無論、噂を当時の上官たちは否定していましたよ。いえ、最初は私だって信じていなかった。ほとんどの兵士はくだらないと一笑に伏していました。下等なエルフにそんなことができるはずがないと疑いもしなかった。でもね、その噂が流れてから明らかに軍の動きが変わったんですよ。大きな点で言えば、エルフの捕虜が運ばれることがなくなったと、兵士が新しく前線基地に行くことがなくなったことで

しょうか。どちらも戦争中で有り得ないことだというのは、改めて言うほどではないと思います。
何というか、色々と歯車が狂っているというのは嫌でも伝わってきました。それでも、私たちは何も知らされませんでした。知ろうともしませんでした。あの時、エルフ王が代わったことさえ、想像もせず、真相を知ったのは『大粛清』の時だったでしょうか……。
とにかく、私たちは必死に現状から目を逸らしていました。違和感はあくまで違和感であり、言葉にすべきほどではない。これは日数の問題もありました。そんなタイミングでしたね、あの魔王が姿を見せたのは。
……姿を見せた、なんて表現をすべきではありませんか。襲撃してきたと言うべきなのでしょうね、本当は。しかし、あれは私たちを無視した。補給基地の一つなど、どうでもいいと素通りしました。最初から視界に入っていなかったのかもしれません。
でも、当時も今も怒りを覚えることはないのです。あれはそういう存在です。むしろ素通りしてもらって、見逃してもらったことに感謝すべきなのです。実際に感謝を神に捧げる兵士は大勢いました。……あれが、神の敵であるなど想像もせずに。

○法国軍斥候（当時）の証言
あの時、俺は巨大な太陽が現れたと思った。
黄金の太陽が地上に落ちたのだと。
そう錯覚するほどの輝きと巨大さが奴にはあった。いや、あんたには改めて言うべきことでもないのかもしれないけどさ。魔導王と一緒に奴を間近で見たってのは本当なのか？　……マジか。よく生きていたな。あれが攻撃の意思などなくても、直視するだけで目を焼かれるような存在だろうに。
比喩ではなく実際の数字で語るなら、そうだな。きっと五十メートルくらいだろうな。尻尾を含めたらもっとあるんだろうが、立った状態ならそんなもんだろう。ああ、あんたの見立てでもそのくらいか。良かった。これ他の奴に言うと盛っているって言われることが多い

んだよ。反対に、もっとデカいはずだって喚く奴もいるんだけどな。
俺が見てきた生物の中じゃ断トツでデカい生物だった。ギガントバジリスクが可愛く見えるようなサイズだ。大樹海内の大樹だって、あいつに並べるようなものは滅多にないだろうよ。まして動物で同格なんているわけがない。
そんな生物が翼を広げてとんでもない速度で飛んでいるんだ。
目を疑ったよ。次に頭だな。俺は白昼夢でも見ているのかと思った。頬を抓って痛かったから、よくできた夢だと苦笑いしたよ。いっそ気絶して本当に夢でも見れば楽だったんだろうけどね。

○法国軍曹長（当時）の証言
コスモスだ！　コスモスが来た！
神の敵！　万物の天敵！　竜の形をした大災害！
ああ、逃げろ！　逃げろ、みんな殺される！
駄目だ、勝てるはずがない！　倒せるはずがない！　神様にもできないんだから！
神は助けに来てくれないんだから！

○法国従軍神官（当時）の証言
あの日、我々は本物の災厄を見た。エルフ王だの竜王だの比べ物にならないほどの怪物を。偉大なる六大神が倒したはずの巨竜。
同時に、我々は見た。本物の、神の奇跡を。神は我々を見放してなどいなかった……。あの日まで、私は自らの信仰心を気高いものだと勘違いしていた。何と傲慢だったのだろうか。神は私が思うよりもずっと偉大な存在だった。
それが、私――私たちが未だに魔導国に膝を折らない理由だよ。時代遅れだという自覚はあるがね。それでも、あの日の奇跡を知る者として、おまえたちには屈しない。

○法国軍参謀（当時）の証言
巨大な竜が来た。黄金の災厄が来た。神に滅ぼされた魔王が、神話

に語られることもなかった害悪が復讐のためにやって来た。
警報が鳴った。だが、そんなものが不要なほど奴は巨大で強大だった。命令を出すべき上官が逃げ、命令を聞かずに一般兵が大勢逃げだした。あんなものの前では規律も信仰心もあったものではない。あまりにも、奴は分かりやすい怪物だった。
大樹海前に作られたあの基地はあの日、そんな怪物によって粉々にされるはずだった。
だが、そうはならなかった。
我々は守られたのだ。
あの見えない壁によって。六大神の奇跡によって。
……元法国の民として、今の私たちの現状は皮肉としか言い様がない。法国は『大粛清』により滅び、難民の大多数が魔王竜の庇護下で生き延びているのだから。

○法国軍兵士（当時）の証言
あの時、僕は想像もできないほど巨大な竜が飛翔しているのを見て、腰を抜かしていた。……いや、正直に言おう。失禁していた。臭いを思い出すに、周りにいた同僚だって全員同じだ。確認こそしていないけど上官だってそうだったんじゃないかな。
何も間近で見たわけじゃない。そう、最初に目にした時、距離はきっと百メートルはあった。僕だって訓練された兵士だ。それだけの距離があれば落ち着いて身を隠せる程度の精神力はあったし、そういう訓練だって受けてきた。でも、それだけ離れていてもあれの存在感は異様だった。
魔王竜コスモス。大樹海のエルフや亜人たちが大神、あるいは真王と呼ぶあれ。今でこそ六大神がかつて滅ぼした存在だと広く認識されているけど、当時の僕たちはあんなものの存在など知らなかった。話に聞いた竜王だってあそこまでではないだろうと思ったよ。
軍人でありながら規律も守れず一目散に逃げたやつがいたけど、逃げられる理性があるだけ立派だったと思うよ。あの時、ほとんどの兵士は股からアンモニア臭を漂わせて棒立ちになるだけだったんだか

ら。あえて言わせてもらうけど、僕たちは気絶しないだけ上等な兵士だったよ。
そうしている間に、コスモスはすぐにやってきた。法国を滅ぼすために。
だけど、やつは僕たちを殺せなかった。小さな生命だと無視して殺さなかったんじゃない。奴の意思に反して物理的に殺せなかったんだ。それどころか法国に立ち入ることもできなかった。
あの竜は飛行中、突然止まったんだ。そして、大地に落ちていった。まるで見えない壁にぶつかったみたいに。
ちょうど大森林とその外の境目くらいだったろうね。あの巨竜が大森林から出られないらしいと気づいたのはしばらく経過して、頭が冷静に物事を考えられるようになってからだ。
暗闇で壁を探るような動きで、見えない何かを触っていた。パントマイムという曲芸みたいにね。炎の吐息を吐いた。尾を振り回し、拳を振るった。雷撃だって出した。言葉では説明できない現象を起こした。この世の終わりのような光景が、一体の生物から現出された。そして、それら全ては僕たちに届かなかった。竜が見えない何かに阻まれているのは理解できた。巨大だからね。一挙一動がよく見えた。
やがて、竜は吠えた。とても大きな咆哮だった。我ながらよく気絶しなかったよ。意味のある言葉だったのかもしれないが、あまりにも豪快な音であり、聞き取れた者はいなかった。誰かの名前を呼んでいたという話もあるけど、眉唾だね。
そして諦めたように踵を返し、森に帰っていった。
恐ろしい竜の惨めな背中を見て、誰もが思ったよ。
――神が我々を守ったのだと。

○法国軍衛生兵（当時）の証言
あの怪物が去った後、はっきりと境界線ができた。攻撃の痕が、否が応でもそれを教えてくれた。
地形が変わるほどの攻撃だったんだ。炎の一息で小さな村ならあっという間に滅ぶだろうって感じのな。世界が生まれ、また滅ぶ様

を見た。それでも、その災害は此方には届かなかった。
そこからこっちは安全、そっちは危険。後に聖なる境界線と呼ばれるそれを、私たちは見た。本当、分からないものだな。今じゃ危険だったはずのそっち側にいるんだから。

○法国軍工兵（当時）の証言
どいつもこいつもどうかしてやがる。
あの竜と戦う？　神が助けてくれるから？
馬鹿言えよ。あれに勝てるわけがない。俺はあの日、いの一番に脱走したことを間違いだとは思っていない。軍法に従って処罰されたが全く後悔していない。
だって、そうだろう？　あれはもう、逃げるとかやり過ごすとか、そういう存在だ。あんただって知っているんじゃないのか？　実際に目の前にしたんだろう？　魔導王と比較してどうだったよ、『貌無し』さんよ。
……そうかい。じゃあ、俺はやっぱりここに逃げてきて正解だった。あの竜よりすごい存在だってなら魔導王陛下には死ぬまでお目にかかりたくないね。目どころか魂が潰れちまいそうだ。
……確かに、あの竜は大森林から出てこれないよ。物理攻撃も魔法も境界線で遮断される。理屈は分からない。人がそれを奇跡だと、神の御業だと言いたくなるのが理解できる。今は亡き法国の最高執行機関が神の力だと喧伝したのもな。
でもよ、逆を言えば神様でもそれが限界だって言っているようなものじゃないか？　大森林に封じ込めてこく以上のことはできないってことなんじゃないか？　本当に、本当に神様たちは六百年前にあの竜を倒せたのか？　何か卑怯な手段を使ったから、あの魔王はいまだに怒り狂っているんじゃないのか。神と魔王の戦いを俺たちは知らなかった。神の結界とやらの存在を、俺たちは知らなかった。結界は魔王竜コスモスとその眷属にだけ通じるからだ。相手を選ぶ上に肉眼で確認できない障壁なんて、どうやって信用すればいいんだ。いつ破られるか気が気じゃない。

神の奇跡とやらを魔王竜が食い破ったら。六大神への恨みを忘れず、人類を蹂躙したら。
その恐怖が俺を今日まで生かしてくれたんだ。

○エルフ王兼真王国宰相（現在）の証言
何も知らない者は言う。あの日のあれが奇跡だと。今なお魔王竜が大森林から出られないのは神の力だと。聖なる境界線、見えざる神の壁、絶対神聖障壁だと。
馬鹿馬鹿しいと言わざるを得ませんね。
六大神などとっくの昔に死んでいます。死者が奇跡など起こすものか。……驚かないんですね、バラハ女史は。いや、あまりにもあっさり受け入れるから……。前々から思っていたが、貴殿は大人物だな。陛下風に言うなら、『おもしれー女』と言うやつですかね？
話を戻しましょう。
大いなる力を得た場合、その力にはそれ相応の代償があるというのが鉄則です。陛下がこの大樹海から出られないのは、その代償に過ぎない。世界を滅ぼせるだけの力を持つということは、同時に世界を狭めてしまうということなのです。
ワールドエネミー、即ちエリアボスですからね。自分のテリトリーからは出られないのですよ。攻撃などで影響を与えることもできない。ほとんどの眷属もまた同じです。私やリバスはほら、かなり特殊ですので。
この王都の安全の象徴となったする白虎ウェス、大樹海の境界面を半分ずつ巡回する朱雀サウスと青龍イース、この国で最も重要な場所を守護する玄武ノース。強大な力を持つ彼ら。魔導国以外ならば単身で国家を焦土に変えられる我が同胞たち。彼らもまた大樹海から出ることはできません。その必要もありません。彼らは奪うためではなく守るための存在ですから。
本来なら私も出るのは控えたいのですがね。これでもエルフの王ですから。まあ、ジルクニフやリユロとの会食といった楽しみはあるので不満もそれほどではありません。……いえ、本当、あの二人とは

初対面でこんな関係になれるとは思っていなかったのですが。特にジルクニフに関しては最高の政敵くらいに考えていたのに、いつの間にか生涯の友に……。何が起こるか分からないからこその、人生ですね。それは貴女も同じですか。シズ殿とはいまだに親しいようで。

ん？　ええ、私は最初からそのことを知っていました。陛下がこの大森林から出られないことを、陛下が知る以前から知っていました。あえて口には出しませんでしたが。聞かれたら答えましたけど、聞かれませんでしたので。

だってその方が――あの御方は早くワールドエネミーになってくれたでしょうから。私の本懐なものでして。この程度を不敬だとは思いませんよ、陛下、もとい、我が本体はね。

○真王国元帥（現在）の証言

話の前にタバコいいか？　最近はエルフも亜人も健康意識が高まってどこでも禁煙なんだ。

えっと、ライターライター……。おっと、すまんね。引退したとはいえ教皇殿にやらせることじゃねえだろうに。礼を言うぜ、ネイアちゃん。

あ？　ちゃん付けはやめろ？　もういい歳だから？　これでも国賓ですよ？　この伊達燃焼死体？　きひひひ。最後のはちょっと傷ついたぜ。

俺みたいなアンデッドにとってはおまえたち人間種なんて老人になっても子どもみたいなもんだっての。それはネイアちゃんが敬愛して止まないゴウン陛下だって同じだろうぜ、きっと。

それで改めて何の用事だよ、あの燃えカスエルフにも逢ったみたいだけど。あのバカ本体の悪口ならいくらでも言うぜ、俺は。まさかとは思うが今更法国への追悼文か？

そうじゃないのか？　ああ、あの日のことか。――初めて本体が完全異形形態を見せた時の日のことか。

へー、ゴウン陛下のあれこれを歴史書に纏めるんだ。魔導王の最大の敵のひとりとして、我が本体もとい真王陛下について記載するから

？　人間は好きだね、そういうの。きひひ。こういう取材は二度目、いや三度目だっけ？

そう言ってもなあ、俺はあの前後の出来事の方が印象深くてな。あのバカが動けるエリア制限に気付かず『壁』にぶつかってアホ面で墜落したことなんてそれほど深く語れないんだよな。

それ以上の出来事に何があったかって？　そりゃおまえ――いや、俺が言うのも無粋かな。あ、秘密厳守なんだわ、悪いね。気になって仕方ないだろうけど忘れてくれ。法国は滅んでいるし、隠す意味はないんだろうけど、ま、誠意の問題かな。

きひひひ。そう言うなよ。お詫びと言っちゃなんだけど、ゴウン陛下と我が本体のファーストコンタクトでも語ってやるよ。こっちはもう時効だし、言っても構わないだろう。

いや、めっちゃ食いつくな！　そういうところだけはいつまでも若いなぁ。アンデッドの俺には眩しいよ、おまえたち生命は。

行動方針

黄金の三頭竜が『見えざる神の壁』に激突して、地面に倒れる一方で。

ひとりのアンデッドが親友の娘を殺した。

「許せ、シャルティア」

――俺は、俺にこのようなことをさせた奴を決して許さない。

二柱の魔王の邂逅がまた近づいた。

■

エイヴァーシャー大森林の奥地。

ネロは木々を伐採して、スペースを作り、そこにコテージを展開していた。このコテージはマジックアイテムであり、ユグドラシルではちょっとした休憩などでよく用いられていた。

まず、先日永続状態で召喚しておいた四聖獣、青龍イースの出番だ。特殊な能力が多い青龍だが、転移や幻術の他にも空間を歪曲させる能力があり、これを使用させる。更に幻術を行使できるモンスターを三体ほど生み出す。カモフラージュ用の霧を発生させる。これで探知に特化した相手以外には見つけることは至難の業となる。更に、玄武ノースに物理的な障壁を展開させる。念のため、隠形に特化したモンスターも召喚して忍ばせておく。

本日召喚した玄武を除けば、休憩中は大森林内では毎度このような布陣だった。四聖獣が二体しかいない点を除けば、現在のネロに出来る最大限の安全の確保手段である。白虎はエルフ王都を守らせているため、ここに呼ぶことはできない。ネロの召喚に関するデメリットの関係上、四聖獣全てを召喚状態にするのはためらいがあるため、最後に残った朱雀の召喚は控えておく。

現在のネロは山の如き巨大な完全異形形態から普段の人間形態に戻っている。形態を変化した時、数秒間、物体の距離感がおかしくなったがすぐに戻った。

コテージのリビングにて、ネロは勢いよくソファに座る。近接職ではないとはいえレベル百のネロが感情のままの勢いで座っても壊れない頑丈なソファだ。しかし、鋼鉄でできているわけではなく、ソファとして合格点以上の柔らかさを誇る。その高級感さえネロには苛立ちを加速させる要因にしかならなかった。

この世の全てが憎たらしい。

リビングには、ネロの他にレクスとリバスがいた。ネロの能力によって生み出されたアッシュエルフとアンデッド。どちらも強力な存在だ。そして、ネロの召喚できる眷属の中ではこの二体だけが人間並あるいは人間以上の理性を持つ。四聖獣も賢くはあるが、あくまでも動物の範囲である。言葉や文字を使って会話することはできない。

そんな二人を前にして、ネロは思いっきりリビングのテーブルを叩いた。

「何か森の外に出られないんだけど。あんな形で舞台を中断するのは初めてだ。何でだよ！」

ネロの怒りに満ちた疑問に、レクスは落ち着いて答える。

「当然かと。御身はワールドエネミーですから」

「何でだよ！」

「エリアボスってエリアから出られないものですし。むしろ出る必要あります？」

「ああ、そうだね。理解したよ。最初から仕様だってことね。言われてみたら僕が運営でもそういう設定にするかもね。でも納得はできねえかな!?」

ゲームの頃よりも圧倒的に自由度が上がったり仕様が大きく変化したりしたことは多い。一方で、変わらないことも多々あった。職業に適正がない武器は装備できないなどだ。

「まさか異世界に来てまで言うとは思わなかったけど、全力で叫ばせてもらうぜ。――あのクソ運営が！」

叫んで頭をかきむしるネロ。

つまり、ワールドイーター・ラーヴァの『エリアからは出られない』というデメリットは異世界転移による仕様変更がされていない事項

というわけだ。
　強力な能力にはそれ相応のデメリットがある。ユグドラシルの鉄則であったが、まさかそのような設定がされていたとは夢にも思わなかった。
「ええ……。つまり、僕はアホ面晒してガラスに激突したようなもん？　間抜けな動物動画かな？　犬や猫がやったら癒しなんだろうけど、数十メートルの竜がそんなことやっても滑稽なだけだろう」
「まあなあ。だから言ったんだよ、『後悔する』って」
　リバスの言葉に、ネロはゆっくりと其方を向く。
「おまえ、知ってたの？」
「知ってはいなかった。けど、予想はしていたぜ？」
「何で言わないんだよ!?」
「聞きなかったからな」
「聞かないと何も言わないのかおまえらは！」
「だって、俺が気づいているってことは本体（おまえ）も気づいているってことだぞ？　ぶっちゃけ、おまえだって薄々考えてはいたんじゃないのか？　ワールドエネミー化において、何か大きなデメリットを見逃しているんじゃないかって」
　その問いに、ネロは何も返すことができなかった。図星だからだ。これが外敵であればそれっぽい嘘で誤魔化そうとするのだが、自分の分身にそのようなことをしても虚しいだけだ。
「でも、それはねえだろう……。未知への冒険が主題のユグドラシルで一つのエリア内でしか行動できないって」
「おいおい。おまえはプレイヤーではあるが、同時にワールドエネミーなんだぜ？　世界を切り開く人ではなく、世界を滅ぼす存在なんだ。倒される側なんだ。そして、それを選んだのはおまえだ。だったら、そこに文句を言うのはお門違いってやつじゃねえか？」
「ああ、うん。何一つ反論できねえわ」
　うへー、と項垂れるネロ。
「だったらどうやってスルシャーナたちを殺しに行けばいいんだ。あいつらが来るのを待つしかないってことか？」

「いいじゃねえか、ラスボスっぽくて。幸い、人質としての価値がありそうな娘は確保したんだ。そのうち、来るんじゃねえか？」
「そのうちっていつ？　何年何月何日何時何分何秒？　地球が何回回った時？」
「この世界の暦は分からないからなぁ。エルフたちの暦も法国の暦もよく分からん。あと、ちきゅうって何だ？　回るってどういうことだ？　独楽の一種？」
「真面目に答えようとしなくていいんだよ。というか、地球が分からないってことはそういう知識は共有されてないんだな。ユグドラシル限定？」
　ふざけた質問にわざと真面目に取り合うのは、まるで自分自身を見ているようで非常に腹立たしい。自分の人間性を客観視するのはこの歳になっても恥ずかしいものだ。
「じゃあ、今後の行動方針としてはスルシャーナたち待ちだな。ワールドエネミーになったこと自体は分からないだろうけど、僕の存在も巨大化も発覚しただろうし、すぐには来ないかな」
　法国で六大神と呼ばれる六人のプレイヤーの中に、単身でネロ・ネミートスに勝てる者はいない。しかし、それはネロの視点でだ。六百年の時間があった彼らが思いがけない強化をしている可能性はある。その反面で、ネロの巨大化の理由についてあちらが理解できているかも不明なのだ。大森林から出られなかったことも含めて、疑問符だらけのはずだ。あの六人は全く情報がない相手に準備抜きで戦闘を挑むような愚か者ではないはずだ。
　加えて、エルフの新王、ファイナル・グレイに酷似したエルフとネロが繋がっていることは露呈したと考えていいだろう。あの白黒少女の身柄をネロが確保していることも容易に推測できる。
　問題なのは、彼らにとってそのあたりの優先順位が把握できないところだ。あの少女が話してくれればいいのだが、素直に会話に応じてくれるかも、話したとしても正しい情報を教えてくれるかも分からない。というか、可能性はかなり低い。
　これまで大森林にいた法国兵への尋問で判明したのだが、ネロには

拷問の才能がないらしい。そして、兵隊の多くは成人男性だった。相手が少女となるとためらいは生まれる。少女だからというよりも、あの少女だから拷問の類はしたくないという思いが強い。
　素直に自覚しよう。ネロ・ネミートスは、あの鯱のような白黒少女に対して情が沸いている。感情論は抜きにしても、効果が期待できない拷問を貴重な捕虜相手にするのはあまり効率的ではない。精々、囚われの姫として丁重にもてなすとしよう。
「とりあえず、レクスに表舞台に立ってもらってエルフたちを指導して、生活水準でも上げるか」
「畏まりました」
「異論なし」
　二人の分身体の了承も得られたところで、ネロの頭に一つの疑問が浮かんだ。
「そういえば、おまえらは森の外に出られるのか？」
「お、それは俺も気になるな。本体が出られないから俺も出られないと勝手に思い込んでいたけど。どうなんだ、燃えカスエルフ」
「その燃えカスエルフとは私のことですか、白骨遺体殿」
「他に誰がいるってんだ」
　不快そうに眉をひそめるレクス。対して、リバスの表情に変化はない。顔面に肉がないのだから当然だ。体に纏う炎にも揺れはない。
「……まあ、いいですけど。先程の質問の答えですが、私とリバス殿は大森林の外に出られます」
「え、ズルい」
「ですが、私とリバス殿は特例です。本体（あるじ）が生み出せる眷属の中で、レベル三十三以上で森から出られるのは私たちだけですので」
「レベル三十三？」
　引っかかる数字だ。中途半端に見えて、レベル百の約三分の一という見方もできる。
「はい。本体（あるじ）の持つ短所の中には『レベル三十三以上のモンスターは同種を二体以上召喚できない』とありますよね」
「え、あれと関係あるの？」

「いえ、ただの偶然です」
「偶然かい！」
つまり、ユグドラシル公式が最初からワールドイーター・ラーヴァの能力として設定している数字ということだ。
レクスとリバス――正確には灰神（ファイナル・グレイ）の使徒と紫幽王――以外は、強いモンスターを外に出せないわけだ。具体的に言えば、四聖獣などは無理ということになる。使用頻度の高い高レベルモンスターは軒並み全滅だ。
レベル三十三などユグドラシルプレイヤーによっては雑魚も雑魚だ。一部の便利なスキルを持っているモンスター以外はほとんど使用しない。いくら送り込んでも瞬殺される未来が予想できる。スルシャーナたちどころか、あの白黒少女と同レベルでも楽に始末できる。
「でもレベル三十三以下でも、種類ってならそこそこいるか。毒持ちモンスターを大量に法国に送り込んで水源地を汚染するって作戦は可能かな？　嫌がらせとしては上々だな。よし、しばらく様子見して来ないようだったらやろう」
「うわー。この本体、最低だわ」
「魔王なんでな。ま、現実的じゃねえけどな」
法国の規模が分からない以上、この作戦に使用するモンスターは時間制限のある通常の召喚モンスターは使用できない。永続召喚状態の眷属にする必要がある。そして、一体や二体では到底足りないだろう。最低でも百体は欲しいところだ。
そして、ネロが一日に生み出せる永続召喚眷属は六体までだ。しかも、この作戦の準備だけに六体全てを使うわけにはいかない。何体かは大森林開発のための労働力としてあてがうつもりだからだ。
また、ネロの食事も必要だ。種族デメリットの一つ、多大な食事量問題はネロに常に付きまとう。現在のペースだと生態系を崩しかねないため、大森林の大型魔獣ばかりを食べているわけにもいかない。インベントリの食料アイテムを喰い尽くすのもまずい。自分の血肉から生み出した眷属で飢えをしのぐのは大変複雑なところだが、家畜

の量産が可能になるまではこの手段を取るしかない。
　そして、生み出した眷属の食事も必要になってくる。それを考えれば一日六体生み出すことすら抵抗がある。生産ペースは考えなければならない。眷属用の食料にする眷属を生み出すことも視野に入れるべきだ。飲食不要のアイテムは持っているが、自分自身に使えなかったため、コレクション感覚で何個かあるだけだ。一体二体に持たせても焼け石に水だ。
　つまり、現在のネロの状態では先程思いついた作戦を実行に移すためにはかなりの期間と試行錯誤を必要とする。進捗次第では、途中で放棄する可能性も考えられる。
　ここまで条件が悪いと、スルシャーナたちが何らかのアクションを取る方が早いだろう。彼らが全く来る気がない場合を除くが。
「戦争は金喰い虫だと言われる理由を実感するぜ。兵器って維持にも生産にもめちゃくちゃ手間がかかるし、何を優先するか頭も使わないといけないな」
「しかも費用対効果が絶対じゃないと来た」
「やっぱり平和が一番か。ま、戦時中じゃおちおち演劇も楽しめない。プロパガンダ的内容の劇ばっかりになるのも面白くないしね。軍事国家とかマゾの集まりじゃねえかな」
「平和が一番ねえ？」
　冗談っぽく言うネロに、リバスは少し踏み込んだ。
「だったら、スルシャーナが和平を申し込んで来たら受け入れるか？」
「それはない」
　即答だった。早すぎて本心は逆ではないのかと疑ってしまうほどに。
「それだけはない。あいつらとの関係はもう、殺し殺される以外は有り得ない。あいつが僕にやったことは……やらせたことはそういうことだ」
　それは自分自身に言い聞かせるような口調だった。実際、言い聞かせているのだろう。こんなゲームが現実化して異世界に来たなどというわけのわからない状況で、知り合いに縋りたくなるのは必然だ。

だが、ネロはその必然的心細さを黙らせる。
「その言葉忘れるなよ。おまえがその言葉を忘れた瞬間、サクラは本当の意味で死ぬ。おまえは娘を二度殺したことになる」
サクラ。ネロが作ったＮＰＣ。娘とも言うべき存在。雪月花劇団のギルド拠点『劇場都市コスモスウェイ』にいたＮＰＣの中では最強の一角だった。あの日、スルシャーナたちがコスモスウェイを破壊したあの日、ネロが自身の手で殺した存在だ。
「当然だ」
忘れたくない。忘れられない。忘れるべきではない。あのままゲームが終わっていれば、忘れるべきだったのだろう。だが、こうして続いている。ゲームが終了して、ゲームの姿と能力が現実化して、異世界に飛ばされて、スルシャーナたちとは六世紀分のズレが起きたが、まだ続いている。
ユグドラシルが続いているのならば、彼らとの関係も続いている。この壊れた関係が続いている。ならば、この関係を終わらせる手段は二つだけ。あの六人を殺すか、自分が死ぬかだ。
「ぷすぷす」
聞き覚えのある、気の抜けたような鳴き声。いつの間にか獏が部屋に入ってきていた。
「よお、獏。……あー、弱いモンスターだから要らないかと思ったけど、やっぱり君にも名前をあげようか」
「ぷすぷす！」
レクスやリバスを除く眷属は会話ができないと言っても、言語を理解し反応を返す程度の知性はあるようだ。嬉しそうな声をする。外見も合わさって微笑ましく思う。獣の表情などいまいち理解できないと思っていたが、そうでもないようだ。あるいは、これもネロが人間をやめた変化の一つか。
「獏と言えば眠り、夢、悪夢を食べる？　うーん、ぷすぷす鳴くけどそれだと安直……。寝るならマクラか？　でもサクラと被ると呼ぶのに抵抗あるか。だったら英語……。『ピロ』とかどうよ？」
「ぷすぷす！」

鳴き声から抗議めいた音は感じない。異論はないようだ。
「さて、君がここに来たってことはあの娘が目覚めたのかな？」
「ぷすぷす」
「そうか。じゃあ可愛いお姫様に、ご挨拶に行くとしますか」
そういえば、彼女の名前を聞いていなかった。関係を考えれば素直に教えてくれるとも思えない。偽名すら教えてくれなければ、鯱娘（オルカ）とでも呼ぶとしよう。

夢と現と幻と

夢だ。夢を見ている。夢だと自覚する夢。明晰夢というやつだ。夢に違いない。

だって、母が――こんな目で私を見るなど有り得ない。こんな目で私を見てくれたことなど一度もない。あの人はいつだって、感情が全てなくなったような顔で、ガラス玉のような瞳をしていたはずだ。もっと気持ち悪かったはずだ。もっと敵意に満ちていたはずだ。

母は私を嫌っていた。母は私にあらゆる祝福を与えなかった。不愉快でたまらなかったはずだ。本当は殺したかったはずだ。でも、私は生きている。幼い頃の私なら簡単に殺せたはずなのに。だから私は嫌われていなかった。これは私の哀れな願望だろうか。

だったら、こんな表情の母も私の願望だろうか。現実だったらいいのにと思うのはワガママだろうか。

「■■■■■■■」

誰かが私の名前を呼んだ。

やはりこれは夢だ。現実の母ではない。母は私の名前を一度も呼んでくれなかったのだから。だったら、私に名前を与えてくれたのは誰なのか。そもそも、私を名前で呼んでくれる者はどれだけいたか。

そういえば、人間の記憶は最初に『声』から失われていくそうだ。母の声ではないと判断できたということはあの人の声を覚えているということ。あの人の全てを忘れていないということ。我ながら滑稽など意地らしい。……それとも、本当は母の声など忘れてしまったのだろうか。

私が忘れているだけで、名前を呼んでくれたことがあったのだろうか？

「おはようございます……」

光景が壊れる。世界が揺れる。時間が巡る。瞼を開ける。視界が変わる。光が満ちる。そして、何かが終わった。

「……知らない天井ね」
漆黒聖典番外席次『絶死絶命』アンティリーネ・ヘラン・フーシェは意識を覚醒させる。
記憶にない場所にいた。自室ではない。基地の天幕でもない。というか、知らないベッドで寝ていた。存在そのものが法国の切り札であり最高機密である絶死の趣味は金にあかせて新しいものを確かめてみることだ。その絶死でも感心するほど良いベッドだ。可能ならばこのまま二度寝したいが、流石にそれはまずいだろう。
自身の状態を確認する。即時に戦闘可能かと言われたら微妙だが、ダメージはそれほど残っていない。少なくとも動けないほどの負傷ではない。鎖などで拘束はされていない。鎧と靴は脱がされている。それ以外の衣服はそのままだ。……すぐそこの机に鎧と大鎌がまとめて置かれているのは目の錯覚か、それとも罠か。
ふとベッドの隣を見れば奇妙な生物がいた。見覚えがある。ぼんやりする頭を振るって記憶を巡らせる。意識がなくなる最後の記憶で、絶死を眠らせたあの魔獣だった。
「ぷすぷす」
やはり気の抜けた鳴き声だ。絶死にとっては屈辱的な敗北を想起するものだというのに、嫌悪感を抱けない。
「……よく見ると、可愛らしい顔をしているのね」
「ぷす、ぷすぷす」
人間の言葉を理解する知性はあるようだ。明らかに絶死の言葉に「いやぁ、それほどでも」とでも言いたげな反応をした。
「ぷすぷす」
魔獣は「ちょっと待っていて」とでも言いたげに鳴くと、器用に扉を開けて、部屋から出ていく。非常に無防備な背中だったが、攻撃する気にはなれない。攻撃しても意味がないというのが正しい。自分がどこにいるのかも把握していないのだ。そんな状態であんな魔獣一匹倒しても仕方がない。
ハーフエルフという種族のおかげか、高い能力のおかげか、絶死の知覚は鋭い。その知覚が告げている。非常に強い存在が周囲にいる

と。転移魔法や高位の隠形が使えない絶死ではこの包囲網を抜けるのは不可能。ならば好機が訪れるまで力を蓄えておくべきだ。そんな未来を想像するだけで吐き気がする。

部屋を見渡す。調度品は簡素なように見えてかなり良い物が揃っている。しかし、壁に貼り付けられた謎の黒い四角い板だけはどういうものなのか理解できない。絵画を飾る額縁にしては無骨すぎるが。窓からは霧に覆われた森が見える。高さは二階ほどだろうか。

「捕虜になったようね。母のような目に遭わないといいのだけど」

自分で言って笑えてくる。絶死が母のようにならない可能性は極めて低い。彼女が好きな祖国ですら女エルフの捕虜に対してあの吐き気を覚える男と同じことをする。自分が女である以上、慰み者にされる未来は覚悟しておいた方がいい。

ベッドから出て、机に置かれた兜を手に取る。別段異常は見られない。しかし何らかの魔法が仕組まれた可能性はあるため、安易に装備するのは危険だろう。机の上に置き直し、大鎌も同じように見る。

「いっそのこと、これで自害した方が楽なのかもしれないわね」

そう口にするが、言うだけだ。実行はできない。国家の最高戦力である自分は簡単に死ぬべきではない。全力であがいて帰還の方法を模索する義務がある。かつての母のように助けが来るかもしれない。個人的にも死にたくない。

大鎌を机に戻してベッドに腰掛ける。やはり良い寝具だ。法国に帰られることになればこれは絶対に持って帰りたいと願うほどに。

部屋に気配が近づいてくるのを感じる。気配が部屋の扉の前まで来るとノックの音がする。そして、あの竜の声がした。

「入っていいかい？」

「ダメって言ったらどうするの？」

「君の晩飯がなくなる」

本当に断れば入って来ないかは不明だ。ここで拒絶しても事態は好転しない。元々、相手の気まぐれでどうにでもなってしまう身分だ。極力従ったほうがいいだろう。それに、脱出の機会を得ても空腹で動けないのは間抜けすぎる。

「……入っていいわよ」
「ありがとう」
白々しく言って部屋に入ってきたのは、予想した通り、あの人モドキの竜だった。記憶にあるものより楽な服装をしている。絶死の武装は手が届く範囲に置いているくせに、自分は戦闘状態ではない。これは舐められているのか。それとも単に交戦の意思がないという意思表示なのか。
竜の後ろから、アンデッドとエルフが追従してくる。アンデッドは絶死が戦ったあの牛頭と紫炎と黒衣のスケルトンだ。エルフの方は初めて見るが、その左右で色の違う瞳で正体は明白だ。エルフの新王、レクス・セントラル。聞いた通り、燃え尽くたような灰色の髪をしている。その後ろから更に例の魔獣がぷすぷすと鳴きながら現れる。
竜は椅子に座り、絶死と向かい合う。アンデッドとエルフはその背後に従者のように直立する。アンデッドはともかくエルフもそのような立場であることに、絶死は少々驚いた。てっきり同格か、エルフ王が上だと思っていたからだ。しかし、実際の力関係は一目瞭然だ。この情報だけでも命を懸けて最高執行機関に伝える価値があるだろう。
絶死は顔に笑みを張り付ける。いつものように感情を隠す。
「じゃあ改めて自己紹介だ。僕の名前はネロ・ネミートス。六百年前、君たちが神と呼ぶ六人のプレイヤーに殺された弱き竜だ」
「そう。私は六大神の信徒のひとりよ。アン、とでも呼んでちょうだい」
当然、本名を教えるつもりはない。立場や所属も隠す。正直に話しても『漆黒聖典』という組織の情報を彼が持っているか不明なため、伝わるかも分からない。
「アン、ね。了解」
絶死の騙った名前を口の中で転がし、絶死に視線を合わせる。
意識がなくなる前、この竜が少しだけ母に似ていると思った。具体的にどこが似ているのかと聞かれたら絶死も回答には困る。本当に、

なんとなくなのだ。
髪と同じ黄金の瞳は、不思議な目だ。冷たいわけではない。不気味とも違う。攻撃性もない。悪意も敵意も殺意も感じない。この男が自分に抱いている感情に心当たりがない。
「では、アン。分かっていると思うけど、君はあいつらへの人質になってもらう」
「……そう」
彼が言う『あいつら』とは六大神のことだろう。そして、この発言からやはりこの男は六大神が法国に健在だと認識している。それは同時に、現在の法国が無事であることの証左だ。絶死の意識がない内に法国に攻め込んだのなら、六大神の不在に気づかないということはないはずだ。内心で安堵するが、それを悟らせないように笑みは崩さない。
「事情があって、僕はこの大樹海から出られなくてね。僕の国を滅ぼされた以上、あいつらの国を滅ぼしてやろうかと思ったんだけどさ、いやはや世の中上手くいかないものだ」
やはり、現在位置は大樹海の中らしい。大樹海から出られない事情とやらが気になるが、聞けば教えてくれるような口ぶりではない。口を滑らせるのを待つべきだろう。
「言っておくけど、私を盾にすれば六大神様が貴方を殺さないなんて考えは甘いわよ?」
「そりゃそうだ。あいつらには僕を殺しに来てもらわないといけないんだから。あいつらに来てもらう一つの布石として、ここにいてくれるだけでいいさ。それに――いや、これはいいか」
「?」
何を言いかけたのかは気になるが、蒸し返していいことかは分からない。余計な会話は慎み、必要な情報だけを聞き出す必要がある。
現状、この竜には絶死を拷問して情報を抜き取るつもりはないらしい。捕虜の扱いとしては有り得ないほど温情に満ちている。感謝するつもりはないが。
(母と同じ立場になったと思っていたけど、結構違うわね)

神と直接対峙した魔王がいることも合わせて、自分が御伽噺の登場人物にでもなった気分だ。自分を竜から助け出してくれる騎士はどこにいるのだろうか。この竜を倒せる英雄など存在するのだろうか。

神に滅ぼされながら蘇った竜を殺す手段など、人類にあるのだろうか。

少なくとも、人類を超えた力を持つ絶死が真正面から負けた以上、単身で勝てるものなど現在の人類にはいない。そして、圧倒的個の前では軍勢など無意味である。つまり、正攻法の戦闘でこの竜を倒す手段はない。

法国にある神の遺産でどうにかできると考えるのは楽観的だと言わざるを得ない。何せ、この竜は絶死の鎧と大鎌――風の神の防具と死の神の武器を知っていたのだ。つまり、他の六大神の遺産についても知っている可能性が非常に高く、神の遺産については事実上手の内を知られていると言っていい。最秘宝ならばとも考えられるが、やはりその存在自体を知られているという危険がある。不意打ちのタイミングすら難しい。そして、法国に神の遺産以上のマジックアイテムがあるかと言われたら、答えは否だ。正しくは、この竜に――絶死を殺さずに無効化するだけの力を持つ竜に通じるだけの効果を期待できるアイテムがない。

あるいは、真なる竜王ならばどうだろうか。六大神に一度は倒された事実を考えるに、現存する竜王が力を合わせれば対処できるかもしれない。しかし、この案には一つ大きな問題がある。目の前の竜の目的が法国であるということだ。潜在的な敵である評議国が、法国のためにどれだけ身を切ってくれるか。法国への敵意が判明する前にかの竜王あたりと一戦交えて、評議国にとっても明確な外敵になってもらうのが理想的だ。

法国はこの竜の存在を知らない、はずだ。絶死が知らないだけで、非常にマイナーな伝承が残っているかもしれないし、スルシャーナ第一の使徒であり守り神であるえぬぴーしーならば何か知っているかもしれない。

「うーん。それで、どうすっかなぁ」

「ふわふわしてんな、我が本体。ひょっとして何も考えずにここに来たのか？」
「まあね」
　アンデッドからの問いに、一切悪びれることなく頷く竜。
「実際、何か考える必要があるのかよ。こういうの初めてだから勝手が分からないんだよ。まさか僕にこの娘を性的な意味でいただけとか言うわけじゃねえよな？」
　竜の言葉に体が少しだけ強張る。それを悟らせないために、引き続きニタニタと嗤う。その程度のことには動じないと表情で取り繕う。上手く笑えているはずだ。もしエルフ王が母にしたことと同じことをされても、ちゃんと笑ってみせる。
「え、俺はてっきり……」
「『てっきり』なんだこの野郎」
「てっきり抱き枕にでもするつもりかと」
　竜がズッコケて椅子から落ちた。派手にひっくり返っている。
「大丈夫か？」
「ああ。おまえの頭以外はね」
「俺の思考はおまえの思考でもあるんだから、そこを責められる謂れはねえな」
　奇妙な発言だが、その意味を即座に理解する。このアンデッドは竜の体から直接生み出された。おそらくは人格や思考に竜の影響を多大に受けているのだろう。親子、というよりは鏡に映った鏡像が実体化したといったところかもしれない。
「俺が冗談でもそういうことを言う以上、おまえにも同じ思考が多少はあったはずだ。『あー、この子、抱き枕にしたらちょうどサイズ感だな』とな」
「白骨遺体殿。本人を前に言わない方がいいとは思わないのですか？
　はっきり言って気色悪いですよ」
「きひひ。その感想の期待込みで言ってんだろうがよ、燃えカスエルフが」
　どうやらエルフとアンデッドは仲が良くないらしい。絶死にそう

思い込ませる演技かもしれないが、本音ならば利用価値がある。どちらかを味方につけて脱出の糸口を掴めないだろうか。
「アン」
竜に名前を呼ばれた。知識としてしか知らないが、迷子の子どもに語り掛けるような声音だった。
「君の方から何か、要望とか提案とかあるかい？　事によっては応じてあげられるけど。例えば、六大神の情報と引き換えにこっちも何か教えるとか。これから始まる監禁生活の食事や映画のリクエストとか」
「食事は任せるけど、えいがって何？」
「いや、人質の監禁生活って寝る以外にやることないからさ。退屈させても悪いし、そこのテレビで映画でも見てもらおうかと思ったんだけど」
竜が指さす方向には、絶死には部屋の調度品で唯一使い方が想像できなかった黒い板がある。あれが『てれび』のようだが、あれを使って『えいが』を見るというのは具体的にどういうことなのだろう。
「だから、『えいが』って何？　そこの壁に張り付いている黒い板が『てれび』なの？」
「そこからかよ。スルシャーナに見せてもらったことないのかい？」
絶死の普段の仕事は神殿の最奥部の守護だ。そこには六大神の遺産も含まれるが、その中にそれらしいものがあった記憶はない。
「ないわね」
「そっか。あいつら娯楽も教えずに何やってんだ。もしかして持ってないのか、映像再生系アイテム。それか六百年の間に壊れた？　だとしたら僕も大切に扱う必要があるか。それか文明を発展させれば作れるようになるか？　せめて白黒の活動写真を百年くらいで作ってみたいけどなぁ。具体的にどういう技術と資材が必要なんだ……？」
「おい、馬鹿本体。妄想にトリップするのはいいけど、後にしろ。この娘に映像作品の面白さを教えるのが先じゃねえか？」
「それもそうか。よし、沼にはまってもらうことにしよう。やはりオタクとして素人への布教は大好物だ」

竜が虚空に手を伸ばしたかと思えば、手首から先が消えた。しばらくすると何もないところから、竜の手首と薄くて小さな円状の物体が出現する。
「じゃあ細かい説明は後回しにして、一緒にこいつを見ようぜ。我が雪月花劇団の記念すべき初作品『セラフィムマン』」
「せらふぃむまん？」
聞きなれない単語が続いて反芻するしかない絶死に対して、竜は楽しそうに笑った。『てれび』なる黒い板に近づくと、円盤を横側から押し込む。元々そういう作りになっているのか、特に何かが壊れる音もなく、円盤は板に飲み込まれた。
「ちなみに、僕もスルシャーナもいい役で出てるぜ。他のメンバーはまだ入ってなかったりモブだったりするからあんまり分からないと思うけど。いやぁ、あの頃は全員大根だったなぁ。ギルマスだけ気合入りすぎて逆に浮いちゃってんだよね」
そう言う竜の顔は輝いていた。美しい何かに浸るように。尊い何かを眺めるように。それはスルシャーナの名前を口にした時も同じだ。間違っても自分を殺した相手の名前を言うような顔はしていなかった。
この男がスルシャーナを憎んでいるのは間違いない。自分を殺されたのだ。自分の国を滅ぼされたのだ。その上で自分を殺した相手は神になっていたのだ。憎んでいないはずがない。だが、同時にそれだけではないのだろうと気づく。
（愛憎半ばってやつ？　この情報を本国が知ればやり方次第では交渉が可能？　脱出は無理でも、連絡だけでもどうにかしたいわね。せめて生存くらいは伝えたい）
やがて『てれび』の色が変わる。文字らしきものが浮かび上がってくるが、絶死には読めない。六大神の使用したとされる古い文字に似ている気がする。つまり、これはユグドラシルの文字だろうか。
「それではお嬢様、お暇を拝借。これよりお見せするのは未熟だった我らのつたない芝居。古く偉大な神話に憧れ、その形をなぞっただけの英雄譚。どうぞ寛大なお心でご笑覧ください。最後に、拍手の一つ

でも頂ければ幸いです」

あくまで結果論に基づいて言えば、アンティリーネ・ヘラン・フーシェはこの竜に捕まって正解だった。彼女がネロ・ネミートスの元にいたというだけで、救われた命は間違いなくあったのだから。

各地にて2

エイヴァーシャー大森林には様々な種族が存在するが、知的生物もそれなりにいる。エルフやダークエルフのような人間種は広大な樹海においては支配者でも何でもない。先王デケム・ホウガンがその気になれば覇者として君臨できたかもしれないが、あくまでも彼だけが強いエルフであるため、エルフを強い種族だと認識しているものは少ないだろう。小規模ながら国家を形成する亜人種も少なくはない。

大樹海に棲む知的生物の大半は、ある選択を迫られていた。内容は『森を出て行くか、太陽の如き竜の支配下に入るか』の二択である。

とあるダークエルフの村も例外ではなかった。

いつも集会をする広場に大人のダークエルフのほとんどが集合している。会議を始めても問題がないと判断し、三人いる長老のひとりが口を開く。

「本日、エルフ王の元から使者が来た。知っている者も多いと思うが、つい最近、エルフは王が代わった。その新王は王であると同時に神に仕える司祭であるそうだ。そして、その神こそ先日の『地響き』の主らしい」

それを聞いて、ダークエルフたちにざわめきが起きた。先日聞こえてきた巨大な咆哮。生物の雄叫びであるように聞こえたが、途方もなく巨大であったため、遠くの地で発生した地割れか何かの音がそのように聞こえただけと結論が出された。あれが生物の鳴き声であったとしたら魔獣の王種どころの話ではない、という希望から来る結論だった。

「エルフ王は提案してきた。『新しい神に従うか否か』というものだ」

「あれは提案なんかじゃない。従わないなら殺すぞって命令、いや、脅迫だった」

ひとりの若者が口にした嫌悪感に、同意する声が小さいながらもあちこちから上がった。長老たちも同じ思いがあるのか、それを諫めることはない。

使者がこの村に来る時、恐ろしい魔獣に乗ってきたのだ。使者のエ

ルフよりも遥かに強そうな――否、この村にいるエルフが知るどんな魔獣よりもずっと恐ろしい魔獣だった。鹿に似た外見をしていたが、あのようなおぞましい鹿など見たことがない。あの一頭でこの村の住人を皆殺しにできるだろう。

通常、あの手の魔獣が自分より弱いものに従うなど有り得ない。だが、明らかに魔獣より弱い使者を背中に乗せていた。それはあの魔獣の本来の支配者がそれを可能にするほどの実力者である証左に他ならない。そんな者からの提案など、拒絶すれば死を与えるという脅迫だ。

「その神とやらは、森の外、人間の国で信仰されている神々に一度殺された存在だと言っていた。この森でエルフと戦争をしていた国だな。この森に現れたのは、その神々を殺すためらしい。つまり、エルフ王と同じ神を信仰するということは人間の国との戦争に参加するに等しい」

その情報はひどく重いものだ。死ぬかもしれない戦争などしたくはない。一方で従わなければエルフ王が敵に回る。どちらの危険を取るかという話になる。

「使者曰く、結論はすぐに出す必要はないとのことだ。エルフ王は従属の決定を一年は待つそうだぞ」

「一年？」

思ったよりもずっと長い猶予だ。千年に及ぶエルフの人生からすればほんの一瞬だが、内容を考えればあまりにも悠長だ。エルフ王にしてもその上にいる『神』にしてもそれほど本気ではないということだろうか。

「ああ。エルフやダークエルフだけではなく、亜人や知性ある魔獣も含めたあらゆる知的生物に同じ要請をしているらしい。何でも、この森を一つの国としてまとめるつもりらしい。おそらく一年という時間は全ての知的生物との交渉が終わる目安ということだろうな」

この森は広い。当然、そこに住む生き物は多い。この森に暮らして長いダークエルフたちでも全てを把握できているなど言えるわけがない。まだまだ把握できていない所は多いだろう。小規模国家を形

成している亜人の種類さえ分からない。
「それで、我々はどうするべきかを話し合うために集会を開いた。この村で出た結論を持って他の村とも相談したいと思っている。使者が乗って来た魔獣を見た者は多いだろう。エルフの王都には同じ魔獣が数頭いるらしいぞ」
「あんな恐ろしい生物が何頭も？」
「流石にロード級の魔獣が何体もいるとは考えづらい。あれが一番立派な個体で、他は少々見劣りする通常種なんじゃないか？」
「使者が乗っていた魔獣がロードだとすると通常種は……ウルススあたりと同程度と考えるのが妥当か」
「断れば、それらをけしかけてくるということか？」
「確定ではないがな。そう考えても間違いではないだろう。道中の安全のためにしては、あの魔獣は強すぎる。遠回しな脅迫だ。エルフ王がよほど臣下に対して過保護ではない限り、あれほどの魔獣をただの運搬のためには使うまい」
　ざわめきが大きくなる。若者の多くは嫌悪感を隠そうともしないが、同時に危機感を募らせる。そんな中、ひとりのエルフが口を開く。
「だが、圧倒的強者の庇護下に入れるというのなら決して悪い話ではないのではないか？　使者は何か言っていなかったか？　こう、支配下に入る利点と代償を」
「うむ。そのことだが、あちらは安全と発展を提供するそうだ。こちらが出す代価は肉や毛皮などの献上品。より詳しい話をしたいのならば王都に来いと言っていた」
「ならば何人かが王都に出向き、エルフ王がどのような存在か知るべきではないか。結論を出すのはそれからでもいいだろう」
「良い王ならば従う、悪い王ならば住処を変えるといったところだな」
「しかし、この森全体の知的生物を支配するつもりなのだろう？　もし敵対したら逃げ場などあるのか？　逃げた先に棲んでいた亜人がすでに支配下に入っていた、など御免被るぞ」
「だから、そのあたりを考える意味でも王都を訪ねるべきだろう」
　何においても、まずはエルフ王の為人を知り、支配下に入るか否か

の結論を出す。支配下に入らないとした場合、相手が提示してきた一年という期間で別の場所への移住を実行する。そんな風にして、この時の会議は終了した。

結論として、一年を待たず、この村どころかダークエルフのほとんどが『神』と称される竜の支配下に入ることを選択する。多くの知的生物が同じ結論に至り、最後まで抵抗を選んだ種族や村がどうなったかは推して知るべしだ。

やがて、エイヴァーシャー大森林は真王コスモスの名によって統一され、その一帯の名称を『コスモス真王国』へと変えることになる。

■

法国最高執行機関の面々の表情は硬かった。この会議の席に座ってから最も暗い表情をしている者もいるだろう。共に人類の未来を守る同志と言えどある程度は取り繕って然るべきだが、それすら出来ないほどに彼らの精神には余裕がない。普段ならばもう少しユーモアを交えた会話もあるのだが、今回ばかりはそれがない。

「それで、あの子について何か分かったことは？」

最高神官長の言う「あの子」とは番外席次のことだ。　この場にいる誰よりも年上でありながら、その外見からどうしても「あの子」と呼んでしまう。

「……いえ、何も。遺体も彼女が身につけているはずの六大神の装備さえ見つかっておりません」

最高神官長の質問に答える土神の神官長レイモン・ザーク・ローランサン。その顔はとても険しいものだった。彼だけではない。この場にいる誰もがその質問と答えに対して苦々しい思いをしている。

「死が確定していないのは幸いか」

「エルフの新王……いや、竜王に負けたと考えるべきか」

「何ということだ。あの子の幸せを優先したばかりに……」

「言うな。少なくとも、あの時は彼女を行かせることが最善だった。彼女だけでどうにかなるはずだったんだ」

エルフ王デケム・ホウガン。あのくそったれの裏切り者を殺すことこそ、絶死絶命の手で母親の復讐を果たさせることこそ、法国上層部の百年にも及ぶ悲願だった。それをどこから現れたのか分からないエルフに横取りされた挙句、大樹海の基地を次々襲撃されたのだ。今から考えれば冷静ではなかった。

しかし、エルフ王を倒せるほどの実力者だ。ならば確実に殺せるのは絶死絶命しかいない。破滅の竜王復活の予言さえなければ他の漆黒聖典のメンバーも同行させただろう。しかし、どちらも法国や人類の未来に大きく関わることだ。多少の危険を承知で同時に実行する必要があった。

だが、漆黒聖典は任務の途中で遭遇した謎の吸血鬼に襲撃された。メンバーが二人死亡し、最秘宝の使用者であるカイレが重傷を負うという不測の事態が発生してしまった。吸血鬼の正体は分からず、破滅の竜王を支配することもできていない。

しかしながら、この場にいる権力者たちの後悔は大きい。

「まさか、破滅の竜王がエルフに支配されていたとは……！」

それは違う。

ネロ・ネミートスは破滅の竜王などではない。本人が知ったら「うわ、超かっけえ異名。今度からそう名乗るわ！」とほざいただろうが、無関係である。しかし、最高執行機関がそんな早合点をしてしまうのも無理はない話だった。

ネロの完全異形形態は竜王と呼ばれても仕方がない形状をしている。実際に竜王を知り、ネロを見た者すれば竜王すら比較にならない怪獣だが、この場にいるメンバーにそれを理解しろというのは無理だ。現場から届けられる声はどれも誇張されており、「山のような巨体」という記述も精々巨人と同じ程度だとしか思っていない。

彼がこの世界に来たばかりのプレイヤーであるという情報を知っていればまた違う考えも出たのだが、あまりにも情報が不足していた。

「エルフ王が代わったと知った時点で、敵対ではなく和平を視野に入れるべきだったのかもしれないな」

そんな意見が出るが、別の者によって即座に否定される。
「それはないだろう。相手は法国の基地を何度も攻撃している。あのくそったれの意思を継いでいるかは不明だが、和解の余地など皆無である証左だ。竜王を支配下に入れたのも、我々を全滅させるために違いない」
「それは早計だろう。では、何故今の今まで使ってこなかった？」
「……彼女がエルフの新王をそれだけ追い詰めたということだろう。あの竜王さえいなければこの戦争は我々の勝利で終わっているはずだ」
「だが、我々の敵はエルフではなくあくまでエルフ王だった。エルフの立場からすれば王の首一つで法国が納得するかは微妙だろう。あの子を前線に送るのは、新王の人格を知ってからでも良かったのではないか？」
「報告によれば基地襲撃はいつも正面からだったようだ。ならば此方から歩み寄っていれば、あるいはという可能性があったのか？」
「今更言っても仕方がない。それよりも、これからどうするかだ。それこそ、今からでも和平を申し込むか？」
何人かが難色を示す。相手が交渉の席につくか。この状況の和平など国民が納得するか。仮に和平を結べたとして、どれだけ此方の有利な条件か。特に、絶死絶命の身柄はどうなるのか。
「やはり新王の人格を知ってからだろう。できるなら、あの子の無事を確認したい」
「万が一、母親と同じ目に遭っているようなことになれば、歴代の神官長に申し訳が立たない」
同意するように頷く一同。表情が一層暗くなる。口には出さないが、全員がその最悪の可能性を覚悟していた。遺体が見つかった方がまだマシだったかもしれない。
「そもそもエルフは本当に竜王を支配下に置いているのか？　逆かもしれんぞ」
「竜王がエルフを従属させている、か。その方が有り得るのか」
「竜王と言えば、例の『奇跡の壁』だったか？　あれについて誰か知っ

ていることは？　どんな些細なこと、マイナーな伝承でも噂話でもいい」
　奇跡の壁。現場で「聖なる境界線」「見えざる神の力」などとも呼ばれているらしい。
　法国に攻め入らんとした黄金の竜王は、森から出ることが出来ない。息吹や魔法を含めたあらゆる攻撃は森の外に影響を与えることができない。不思議な何かがそれを阻んだのだという。
「いえ、何も。本当に何も分からないのです。それが神の力なのか、もっと別の何かなのかすら」
「現場ではすっかり六大神の奇跡ということになっているそうだが、良いことなのか。それとも修正した方がいいのか」
「下手に私たちから口を出すのはまずいでしょう。士気に関わるし、私たちにも何かわかっていないのだから」
「ええ。私たちが知らないだけで――例えば、口伝から失われただけで本当に六大神の遺産の力の可能性はあります。私個人としてはそれが正解だと思っています。ですが、確証がないこともまた事実。守り神たるあの御方も教えてくださりませんし。これが八欲王や他のぷれいやーに関わるものだった場合、そしてそれが世間に知れ渡った場合、我々が虚偽を流布したことになります」
　法国は宗教国家であり、国民全員が狂信者の素質を持っていると言える。人類至上主義を掲げ、同じ神を仰いで協力し合っているが、それゆえに危うい特性も持つ。国民が暴走する未来を想定しておくことは何らおかしなことではない。
「やはり、そこも調べる必要があるか。もしかすると、何らかのマジックアイテムの力かもしれん。もしも応用できれば、利益は計り知れない」
　そんなアイテムがあれば何かしらの伝承が残っていてもおかしくはないのだが、法国上層部は重要な情報を口伝でのみ伝えているため、どこかで伝承ミスがなかったとも言い切れない。あるいは、意図的に誰かが隠したのか。
「絶死絶命の安否が最優先だが、エルフ王や神の奇跡の調査。まずは

そんなところか」
　全員が異議なしと首を縦に振ったところで、軍事の最高責任者である大元帥が口を開く。
「大樹海にいる軍隊はどうする？　どの程度まで留めておく？　神の奇跡を見た大森林の境界線近くの基地の士気は高いが、それを知らない大森林内部の基地はそうもいかん。六色聖典の現状を考えるに、可能な限り撤退させたい」
「無事な基地は残り少ない。いっそ大樹海から全軍、とまではいかなくてもほとんどの兵士を撤退させるべきなのでは？」
「馬鹿な！　この百年を無駄なものにしろというのか！」
「無駄というならば、エルフ王が死んだ時点で無駄になっている！　元々、あの子が奴を殺すための百年だったはずだ。我々はせめてあの子の気を少しでも晴らそうと送り込んだ。そしてこの惨状だ。これ以上、犠牲者を増やすべきではない」
「何だと――」
「ここで私たちが争っても仕方がない。それよりも、あの子を取り戻す手段を考えるべきではないか？」
　最高神官長の言葉に、誰もが沈黙で肯定した。
「漆黒聖典は先の吸血鬼の襲撃により欠員が出た。火滅聖典も陽光聖典も出撃は不可能だ。竜王の詳細が分からない以上、大樹海に送り込んでも何の成果も得られず被害だけが拡大する可能性も高い。我々が打てる手は限られている」
「漆黒聖典の死亡者の蘇生を可能な限り急がせます」
「頼んだぞ」
　この場にいる誰もが絶死絶命の無事と人類の未来を想った。そして、竜王の侵攻を防いだという神の奇跡に感謝した。
　竜王が大樹海の外に攻撃を仕掛けられないのならば、土の神殿を襲った爆発は誰の仕業なのかという疑問を胸に仕舞い込んだまま。

■

ネロと同じくつい最近ユグドラシルから転移してきたプレイヤー、ナザリック地下大墳墓の支配者アインズ・ウール・ゴウンは、リ・エスティーゼ王国のエ・ランテルという城塞都市で『冒険者モモン』としての活動に勤しんでいた。

何故絶対的支配者であるアインズが人間の冒険者などに扮しているかと言えば、名誉と金と情報のためである。トラブルと幸運によって、冒険者としては最高位のアダマンタイト級になったことで名誉は得られた。金と情報はそれに伴って集まってくる。……もっとも、金に関しては集まってもすぐに消えていく。アダマンタイト級冒険者としての格を維持するために借りている最高級宿屋の宿泊費、ナザリックの支配下に入ったリザードマンの村の復興費用、実験のために集めている鉱物などの代金、王都で活動しているセバス・チャンへの仕送りなどである。

モモンは英雄として名声を集める必要がある。そのため、金に汚い奴というイメージがつくのを防ぐため、仕事は選んでいる。勿論、アダマンタイト級冒険者が得られる報酬は決して少なくはない。ギリギリなんとか回しているというのが実情だ。

金貨の塔を前にして今日も金が全然足りない、と溜め息を吐き出す毎日だ。現在のアインズは骨だけの体であるため、肺はない。つまり、溜め息もそういうつもりでやっている動作というだけだ。

そんな中、モモンと懇意にしている魔術師組合の組合長から非常に気になる情報を聞くことになった。

「エルフがドラゴンを、ですか？」

曰く、『スレイン法国と戦争中のエルフが巨大なドラゴンを支配下に置いたため、形勢が逆転しつつある』というものだった。

アインズからすれば注目すべき単語のオンパレードだ。特に、『支配下』というのが聞き捨てならない。先日発生し犯人の正体も目的も不明であるシャルティア洗脳事件の手掛かりになるかもしれない。

「法国はエルフの捕虜を奴隷として帝国に輸出しているのですが、その動きがこの数週間でぴたりと止まっています。どこまでが真実か

はわかりませんが、少なくとも法国が何か苦しい状況になっているのは間違いなさそうですよ」
　スレイン法国はプレイヤーの臭いがするため、特に警戒していた国の一つだ。この世界に転移したばかりの頃、法国の秘密部隊である陽光聖典と交戦した。アインズからすれば雑魚の集まりだが、この世界の基準からすれば上澄みの戦闘集団であったことは間違いない。法国全体でどの程度の戦力があるかは調査中だが、あのレベル以上の戦闘集団をいくつか抱えていることを前提とすると、それを蹴散らせるドラゴンとやらのレベルは五十はあるのではないか。
「エルフが支配下に置いたドラゴンは山のように巨大だの太陽のように輝いてるだの地形を変える力を持つだの、明らかに誇張された話も多いのでどこまで信じてよいやら……。ああ、非常に馬鹿らしいのですが、神の結界に阻まれて森の外には出られないなんて噂もあるそうですよ」
「成程。確かに信じがたいですが、興味深いですね」
　法国に近づくのはもう少し情報が集まってからにしたかったが、これは賭けに出る必要があるかもしれない。アインズは石橋を叩いて渡るを体現する慎重な性格をしているが、時と場合によっては危険な博打に出る必要性も理解している。
（まずは大森林とやらに行ってみるか。シャルティアを洗脳したワールドアイテムで、ドラゴンを支配しているかもしれないしな。直接関係がなくてもナザリックの強化に使えるかもしれない）
　この時、アインズは想像していなかった。エルフがドラゴンを支配しているどころか、ドラゴンが大樹海を統一しているなど。まして、洗脳事件の手掛かりどころかほぼ答えをそのドラゴンが持っているなど。

手紙

ネロ・ネミートスの現在の行動指針は、複合種族国家の建国である。正確には、大森林に棲む知的生物の完全統一だ。もっと言えば、ワールドエネミー・コスモスとして縄張りの整理をしているといったところか。

理由は様々だが、最も大きな要因は六大神への対抗意識である。彼らが多神教の人間だけの国家を作るならば、一神教でいくつもの種族が暮らす国家を作ろうとするのは当然の帰結だ。

次点で、法国に拉致され奴隷として扱われているというエルフ回収の下準備だ。

物事の大半は、財力と権力と暴力で解決できる。逆にどれか一つが不足した状態では解決できない問題も多い。だからエルフのだけ国家では駄目だ。それでは大きな集落と変わりない。もっと存在するだけで外部に圧力をかけられる巨大な組織になる必要がある。

エルフをいくら回収したところで戦力になるとは思えないが、国民の信頼を勝ち取れるという意味では期待が大きい。これから交渉予定の亜人たちも万が一の時に国民を守ってくれる元首がいれば支配下に入りやすいだろう。

つまり将来性を期待しての投資だ。

それに、国造りという大々的かつ分かりやすい行動を起こしていれば、六大神も動かざるを得ないという希望的観測もある。六大神が動かずとも、法国の人間は何かするだろう。人間至上主義国家のすぐ近くに、人間以外の種族で構成された国家ができるなど噴飯もののはずだ。民の感情を完全に無視するなど、よほどの暴君でなければ無視はできないはずだ。……エルフの先王が民のことなど全く考えていなかったという事実があるが忘れる。

国家元首は、公式の名前としては真王コスモスで通す予定である。ネロという名前を伏せるのは六大神以外へのプレイヤーへの用心だ。それと気持ちばかりの格好つけ。

エルフ王レクス・セントラルが崇拝する大神。最新の世界喰いにし

て偽りの竜王ですらない竜モドキ。六大神が滅ぼした、伝承に語られない謎多き魔王。

一度完全異形形態になったためか、彼はワールドエネミーとしての特権がいくつか解放された。大樹海内の天候や地形、植生に至るまで決められた範囲内で自由に変更できる。ワールドアイテムを事前に取り組んでいるからか、他のワールドアイテムの効果も自動的に無効化されるらしい。加えて、アイテム創造系の能力が大幅に上昇した。他にも様々な能力に目覚めた。しかし、そのほとんどは「ユグドラシル時代にこれを使いたかったな！」と思うようなものばかりであったが。

そんな彼は現在、住居のコテージで書類の山と向き合っていた。明らかに寝不足の顔で、ぶつぶつと怪しく独り言を吐き出している。右手でメモをし、左手で算盤を弾き、右目で王都にいるエルフの新生児に関する資料を読み、左目で近隣の亜人の調査結果を読んでいた。元々、ひとりで五体の召喚モンスターを操れる男だ。この程度のながら作業は得意なのだ。得意なだけだで人間として逸脱しているレベルではない。

「えーと、エルフは大部分がクリアしたからこれでいいとして、ダークエルフの村もいくつか支配下に入ったから、残りはこうなるから……でも、今の条件でも即答しない以上、もっと何かしらを提示するべきで……『試練の果実』の生産ペースを考えると……家畜の知識も教えないと、狩猟民族は安定性がない。やはり農耕民族こそ至高。魔法豚を増やしておくか、ああ、でも新しい亜人への交渉材料にした方がコスパはいいのか……そもそもダークエルフを完全に支配するメリットも薄いし、シフトを変えるか？　よく考えたら物作りが得意なドワーフならともかくエルフはそんなにいらねえな。王都近くの村だけ併合できたら優先順位は下げるべきかな。だったら明日作る眷属の内容も少し変えて……いや、やっぱり変える必要はないか。役目は変わらないしな。交渉が出来るエルフがもうちょっと増えてくれたらいんだけど……直接の指揮はレクスがしてくれるから、リバスに教育を頑張ってもらって……効果が出るのは最低でも半年くらい後だ

し、やっぱり僕も参加した方が……でもこれ以上仕事を増やしても効率は悪いし……」
怪物たる彼にはあまり相応しくない姿だった。
「何やっているの？」
ネロの背後から捕虜が話しかけてくる。間違っても彼らにあるべき距離感ではない。神を殺そうとする魔王と囚われの姫のあるべき姿ではない。
捕虜の名はアン。先王が法国の誰かしらとの間に作ったであろうハーフエルフの少女。オッドアイの瞳に、ネロの顔が映る。会話しながらでも作業は続けられるが、ネロは手と目と頭を止めた。
「見て分からないのかい？　仕事だよ、仕事。建国という名の罰ゲーム。スルシャーナたちが六百年前にやって今日までやっているはずの政治という面白くもない周回プレイ」
何で僕はそんなことをやっているんだと自嘲する。最初は六大神への対抗意識だったが、現在ではほとんど意地だ。ここで投げ出すのは道理にも主義にも合わない。自分の都合で魔王としてこの大樹海に君臨すると決めたのだ。異形種たるこの身が過労死するはずもない。文字通り、死ぬまでやるしかないのだ。
「てか君さぁ、自分の立場分かってる？」
「自覚させたいのなら鎖で繋ぐなり、牢屋に閉じ込めるなり、首輪をはめるなりしたら？」
アンは挑発するように嗤う。処世術として笑顔を張り付ける彼女だが、この時は本当に笑っていた。ネロが先程口にした行為を絶対に自分にはやらないと分かり切っているからこその言葉だ。
「やだよ。やりたくねえ。君には――いや、何でも」
ネロは『できるだけ自由でいてもらいたい』という言葉を飲み込んだ。間違っても魔王が人質に向ける言葉ではないからだ。どの口で言うのだという話だ。
そんなネロの葛藤を知ってか知らずか、アンは気楽な調子で注文する。
「そう。そんなことより新しい映画が見たいわ」

思ったよりもハマってくれたらしい。ネロにとっては願った通りの結果なのだが、素直に喜べないでいた。
「昨日貸したじゃん」
見るペースが早い。リモコンの使い方を教えるべきではなかったか。
ネロが所有している映像作品で見せていないものも少なくなってきた。ギルド拠点の自室には十倍以上の量が置いてあったのだが、ギルド拠点崩壊とともに消滅してしまった。
「もう見終わったわよ。スルシャーナ様かアーラ・アラフ様が出ているやつなら何度でも見るけど。他にないの？」
「ねえよ。あいつらが出ている作品はすでに君に渡しているやつだけ」
懐かしきギルド『雪月花劇団』はユグドラシル内で何本か映画を撮っている。これは特別なことではなく、映像作品の制作を目的としたギルドはゲーム内にそれなりにあった。だが、せっかくの自由度の高い冒険が主題のＲＰＧだ。映画撮影ばかりでもつまらない。あの六人が『雪月花劇団』を抜けた理由の一つがそれだ。当時のギルド長の意向によりイベントへの参加が疎かになって、ギルド長を中心としたグループと積極的に冒険がしたいグループと少し揉めた。定期的に劇団内で発生したイベントであり、ギルドメンバーの加入と脱退が激しかった理由の一つだ。ネロは基本的にギルド長側についた。ギルド長および彼と同じ思考回路の幹部のほぼ全員がゲームでも最上位の実力者であり廃課金勢であったため、雪月花劇団は最初から最後までそんなギルドでありながら全体から見てもレベルの高いギルドだったのだ。それでも、やはり寄り道が多いせいで本当の最上位、トップギルドに数えられることはなかったが。
以上の経緯があるため、スルシャーナたちが出ている作品は雪月花劇団が制作した作品全体から見ると少ない。彼女に見せているのはほとんど嫌がらせだ。彼らにとって、あの頃の芝居など黒歴史でしかないだろうから。それとも、六百年前のつまらない記憶など、恥ずかしがる価値もないと思うだろうか。そんな記憶すら彼らには残って

いないのだろうか。
「そっか。残念」
「暇なら外でノース相手に稽古でもしてきなよ」
玄武ノース。ネロの主戦力の一つ『四聖獣顕現』によって召喚される大亀。防御力が高く、耐久関係の能力を多く持つモンスターはサンドバックにちょうどいいだろう。そう思っての提案だったが、アンは口をとがらせる。
「あら、貴方が相手をしてくれないの？」
「うん」
「捕虜虐待じゃない？」
「ええ……」
彼女には拷問もしていないし、性的行為もしておらず、食事も十分に取らせている。そんなことを言われる謂れはない。他の捕虜に関してはその限りではないため、其方から言われる分には反論はない。というか、敵はほとんど殺しているため、捕虜自体あまりとっていない。捕虜にしてもほとんどすぐに死ぬ。
「君、何で僕にそんな構うの？」
「当然でしょ？　私はね、祖国を守る義務があるの」
言いながら、何故かアンはネロにしなだれかかるように寄り添う。顔が見えないが、きっとニタニタと嗤っているだろう。最近は回数も減ったが、あの痛ましい笑顔を張り詰めているだろう。
「私は神や竜王以外では最強の存在。でも貴方に負けてしまった。戦闘では役に立てない以上、こうやって貴方の悪事の邪魔をすることでしか存在意義を保てないの。そうでないと、六大神様が来たときに叱られてしまうしね」
「勝手に怒らせておけよ、あんな連中」
それはネロにとって想像もしたくない地獄だ。だが、他ならぬネロはその地獄にいる。この樹海を支配する魔王となったネロ・ネミートスは負けることが許されない。それはレクスをエルフの王とした瞬間に決まったことであり、六大神の敵となると宣言した時点で撤回できなくなった呪いだ。

「貴方は私に殺意や害意を抱いていない。どうにしてかは分からないけど、これを利用しない手はないでしょう？　私は私の義務を果たせない罪悪感で辛いのよ。それを少しばかり楽にしてくれてもいいじゃない。神様なんでしょう？」
「魔王だよ。僕に人間は救えない」
「私への扱いを見るに、そうは思えないけど？」
「あ……」
　言われて気づく。無意識にアンの頭を撫でていたことを。壊れ物を扱うように、丁寧に。気付いてもそれを停止する気にはなれない。取り繕っても不格好だ。
　演者たるネロは恰好のつけ方に拘りがある。誤魔化した方がいいこととそうではないことがある。そして、これは何をどうしても恰好がつかない。ならば好きなようにすべきだろう。
「我ながら情を移しすぎ……」
　自嘲する。自戒する。自認する。自覚する。しかし自重はしない。この健気な敗北者の望み通り、時間を無駄に使ってやるとしよう。
「そして君も僕を信用しすぎ。男ってのは性欲の塊だぜ？　元人間の僕も例外じゃない。人類の中では最強だとしても、僕にとって君は押し倒せる程度には弱い。そのまま　物理的か性的に貪ることが可能なんだからな」
「やるの？」
「やらないよ」あのエルフ王や父と同類にはなりたくない。「……と言いたいんだけどねえ、正直理性が限界なんだ。体、特にその薄い胸を押し付けるのいい加減やめてもらえないかな」
　別に童貞ではないが、精神的にはあまり変わらない。もう少し背丈が小さければ「子ども」と認識できたのだが、アンはネロが「女性」として認識できる程度には外見年齢が育っている。しかし、躊躇いなく性行為ができる年齢とも言えない。種族を考慮するとあと十年か二十年は必要だろう。
「触ってみる？」
「胸じゃなくて耳でも触ってやろうか」

アンの体がびくりと震えた。誤魔化すように、笑顔を見せてくる。ネロは小さく舌打ちをする。
「……ごめん。軽率だった」
自分はどの立場から謝罪をしているのかと苛立ちを重ねる。どうして魔王が捕虜の姫に発言の配慮などしなくてはいけないのか。どれだけ傷つけようと笑うべきだ。それができないから――あの演劇都市にいつまでも居座っていたのだ。
「悪いと思うなら、紙と筆をちょうだい。一度くらい法国……六大神様に手紙を出したいんだけど」
「存外、君もしたたかだねえ。いいよ。のんびり国造りをしてもいいけど、僕もあいつらからアクションが欲しかった頃だ」
この世界に来てからすでに一か月以上が経過している。アンを拉致し、ネロ・ネミートスの完全異形形態が法国に観測されてから三週間ほどが過ぎているにも関わらず、法国からの接触はない。法国の基地もほとんど潰したため、法国に対する戦闘行為としてはやることがない。準備に時間はかかると思っていたが、いくら何でもという頃合いだ。これが全く知らないプレイヤーならば話は違うのだが、ネロと六大神は知古の関係だ。戦闘を警戒して本人たちが直接来ないのは分かるが、交渉の提案くらいはしてきてもいいはずだ。仮に向こうからしてきれても断るが。
「礼は言わないわよ」
「ああ。そういう関係だからな」
魔王竜たる自分は完全にこのハーフエルフの少女に愛着を持っている。慈愛というほど美しくはないし、恋愛というほどの熱はない。博愛というほど平等ではなく、性愛というほど疼いてもいない。寵愛が一番ふさわしい。上位存在としての自覚を無自覚に持っていたということだろう。
「どのみち、手放したくはないんだよなぁ」
「何か言った？」
「さあね」
この少女が我が怨敵にどのような手紙を出すかは不明だ。乙女の

手紙を読むつもりはない。そもそもまだ此方の文字は読めない。手紙の内容次第では、彼らはすぐにやってくるかもしれない。最初から決まっていることだが、その時は全力で相手をしよう。
六百年もおまえたちを放置して悪かった。
神を名乗りながら、人を悪魔に貶め、寵愛を向けるべき哀れな少女をこんな歪に育てたおまえたちを決して許すわけにはいかない。旧友として、仇敵としてその堕落を認めるわけにはいかない。
あの時の再戦をしよう。
あの時の再現をしよう。
神ならば早く、この魔王を殺してみせろ。

■

スレイン法国の軍事機関長、大元帥たる彼は大森林前の基地に来ていた。厳密には基地内に置かれた天幕の一つである。彼以外にも参謀を始めとして関係者の姿がある。
「今やここが対エルフの『最前線』か」
それを聞いて、大元帥の言葉に苦虫を潰したような顔になる参謀たち。
ほんの一か月前まで、法国は森林内に多くの基地を築き、王都近くの三日月湖まで侵攻できていたのだ。それがたったの一か月で完全に壊滅した。法国軍は大森林より事実上の撤退。あと数年で決着がつくはずだったエルフとの戦争は振り出しに戻ってしまった。百年が無為に消えた。
「勘違いしないで欲しい。諸君らを責めているわけではない。むしろよくぞここまで耐えてくれた」
大元帥の視線は天幕の壁に向けられているが、意識は更にその外に向けられている。より具体的に言うならば、森の際だ。
彼の知識にある大樹海と現在の大樹海では何もかもが違う。特に地形だ。かの巨大な竜王の攻撃により、森の境界線はその形を大きく変えた。森は焼け、大地が割れ、地盤が覆り、水脈が崩れた。かつて

のように大規模の軍隊を森に入れることさえ難しい。そんな状況なのだ。一刻も早く基地を去って、竜王のいる大樹海から遠ざかりたいと思う兵士だって少なくはないだろう。

報告書にも地形の変化は記載されていたが、本気にはしていなかった。大元帥だけではなく法国上層部全員が同じであるはずだ。超常存在と対峙してパニックになり誇張した表現をしているだけだと判断していた。だが、誇張などどこにもなかった。足跡一つですら恐怖を覚える。一部の強者以外に目立った難所のなかった大森林はもうないのだと痛感した。

「いえ、我々は何もできませんでした。この基地が無事なことさえ神のおかげに他なりません」

代表者の参謀の言葉に誰もが頷く。大元帥も同じだ。これもまた現地で見て驚いたことなのだが、件の「神の壁」の痕跡はあまりにもわかりやすかった。まるで線でも引いたように、竜王の攻撃の痕跡がある直線状から届いていなかった。ある種の神秘性と芸術性を覚える。痕跡ですら大いなるものを感じるのだ。実際の攻撃が遮断される場面に立ち会った者たちが、それを神の奇跡だと言いたくなるのは極めて自然なことだった。

大元帥はそんな状況で参謀たちに何を言うか考える。伝えるべき内容はあらかじめ決まっている。最高責任者の自分がこうして現場に来るのは特例的なことであり、時間が押していることも理解している。だが、自分がこれからどういう言い方をするかで現場の士気は変わってくる。特に、元帥の席が一つ空いたため、自らの出世を願うものだってこの中にいるはずだ。

まずは件の竜王に対する所感を聞いておこうとした瞬間だった。警鐘が鳴る。慌ただしくなる天幕。全員の脳裏に、先日の竜王が横切る。

すぐに天幕内に伝令が届く。それによると森から強力なアンデッドが出現したらしい。弓兵や魔術師の部隊がすでに出撃し攻撃したそうだが、全く効いていないとのこと。

妙な胸騒ぎを感じ、大元帥は部下の制止を振り切って、現場へと向

かう。
　兵士たちが取り囲むための陣形を組んでおり、その中央に一体のアンデッドが立っていた。
「はっじめまして、雑魚人間諸君〜。俺の名はリバス。君たちの神が六百年前に滅ぼした魔王竜の眷属だ。今日は虐殺の予定はねえから、できるだけ偉いやつ連れて来てくれ」
　黒衣と紫炎を纏った牛頭のスケルトンは、そんな風に名乗った。
　アンデッドの足元には何人かの兵士が伏せている。気を急いて突撃した者だろう。全員大きな外傷は見当たらない。意識はあるようだが、立ち上がれないようだ。
　見たこともない種類のアンデッドであり、聞いたことのない名前だ。「リバス」というのは種族名か、個体名か。アンデッドなど一部の例外を除いて生命の敵であるが、自分に攻撃してきたであろう兵士を殺さずにいるところを見るに、残虐性が薄いタイプと推測できる。同時に、非常に強い存在であることも明白だった。
「アンデッドめ。ここを法国の基地と知ってやって来たか！」
「ああ、そうだ。さっきも言ったが、殺しのつもりはねえ。ある白黒少女からのおまえらの神への手紙を持ってきただけだ」
　そう嘯くアンデッドの手には封筒があった。遠目ではわかりづらいが、上質な紙のようだ。
「白黒少女、だと……」
　大元帥にはそれが誰か分かった。分からないはずがない。生死不明であった番外席次だ。だがそれを口にすることは出来ない。
「お。伝わったか。それなりに偉い奴がいたな、ラッキー。手紙、ここに置いておくぞ。俺はこれで帰るから、あの六人に渡してくれや。何て書いてあるのか知らないんだけどな。文字読めないし。今日は殺しをするつもりもねえから、帰るわ」
　アンデッドは言葉の通り、封筒を足元に置く。すぐに回収に行きたい気持ちを抑えて、大元帥は言葉を紡ぐ。アンデッドが踵を返そうとしたからだ。おそらくは英雄級よりも強いアンデッドだが、確認しておかねばならないことがあった。それに、彼女の存在は最高機密だ。

兵士たちの興味を逸らす意図もあった。
「貴様は――何だ？　神に滅ぼされた魔王、とは先日の竜王のことか！」
口調は力強いものだった。しかし内心は言い様のない不安に染まっていた。脳内に浮かび上がるのは、百年に一度の揺り返し。まさか今回は明確に人類の脅威となるそれではないかと。
そして、その恐怖は正しかった。
「俺や本体のこと何も教えてねえんだな。どういうつもりだ。それとも、六百年も生きていれば過去話なんて忘れたか？　こっちは何年経っても忘れそうにないってのに」
呆れ返ったようなアンデッド。その言葉には一つ一つに身震いをするような怒りが滲んでいた。表情を作るための肉もないのに、その顔が憎悪に染まっていると理解させられる。
「おまえたちが理解しやすいように言おう。六大神は人類を救う前、一人の魔王と一つの都市を滅ぼした。その魔王こそ黄金の三頭竜。先日、この基地からも見えた巨大な竜。名を大神コスモス。復讐のためにこの地に降臨した」
とどのつまり、六大神に救われて六百年が過ぎた現在、人類を最大の絶滅の危機が訪れた。引き延ばした生存が終わり、先送りにした絶滅がやってきた。それだけの話だ。
「六大神に伝えておけ。――早く来い。『僕』たちの世界にちなんで、十二年だけ待ってやるよ」

そんなやり取りを、気配を完全に消した一人のアンデッドが眺めていたことは誰も気づかなかった。

接触

「早く来い。僕たちの世界にちなんで、十二年だけ待ってやるよ」

一体のアンデッドが法国の軍隊にそう宣言する姿を、〈完全不可知化〉と〈飛行〉を使用中のアインズは上空で眺めていた。

何故アインズがこのような場所にいるかと言えば、言うまでもないが偵察のためである。この基地を探っていたのは全く偶然と言うわけでもない。大森林に最も場所であったためだ。ひとまずはこの基地で情報を収集しつつある程度の準備が出来たら森の中に入る予定だった。

だが、来て早々のタイミングであのアンデッドが出現したのだ。反応から見るに、法国の人間はあのアンデッドを知らないようだ。

「紫幽王じゃねえか」

アインズはあのアンデッドを知っている。正しくは、あのアンデッドと全く同じ姿のアンデッドを知っている。

紫幽王。黒衣、紫炎、牛頭など外見が特徴的で覚えやすい。プレイヤーの間で知名度はそこそこあるが、実際にお目にかかることはあまりないモンスターだ。

一部の精神系魔法詠唱者が取得できる特殊技術〈死者転成〉でのみ召喚できる特殊なスケルトンで、エネミーとしてダンジョンで登場することはまずない。紫幽王はプレイヤーが召喚できるアンデッドの中では破格の性能を誇る。ステータスだけならレベル百に相応するほどだ。ただし、〈死者転成〉の発動条件が『即死で死亡した時』であるため、非常に召喚しにくい。このモンスターを召喚するには、自動蘇生と自分に即死を与える能力が事実上のセットになる。そこまでリソースを使ってまで召喚する価値があるかと言われたら、アインズとしてはちょっと微妙だと思う。

物理攻撃とＨＰに重点が置かれたステータスで、純戦士型。と言っても、戦士としての特殊能力はほとんど持っていない。

通常、ユグドラシルモンスターの使える魔法はレベルや種族によって変動するものの、八つ程度だ。ただし、悪魔や天使、竜の上位種は

その基本から外れている。紫幽王はアンデッドだが、それらと同じように多くの魔法行使できたはずだ。具体的にどのような魔法を使えたかはすぐには思い出せないが、ほとんど弱体化の魔法だったはずだ。ＭＰはかなり高かったため、連発されると非常に面倒だ。特殊能力の大半も弱体化に関係するもの。魔法で弱体化させて、物理で殴るというコンセプトのモンスターであることは想像に難くない。レベルが高く、アインズの得意とする死霊系の魔法が通じないため、相手にするのはできるだけ避けたい部類の相手だ。

無論、アインズの知る紫幽王と相違ない性能ならば、戦っても負けることは有り得ない。

しかし、紫幽王に酷似した外見をしているだけで、実はそういう外装をしているだけのプレイヤーかＮＰＣかもしれない。あるいはドッペルゲンガーのように他のモンスターが化けている可能性だって考えられる。正体を見極めるまで戦闘を避けるに越したことはない。

この場にいる法国軍に攻撃したらカルネ村の時のように助けて恩を売ることも出来たが、攻撃の意思すらないのでは手出しをしても旨味は薄い。法国軍も相手が強いことは理解できているのか、その背中を見送るだけだった。

アインズは紫幽王の背中を見ながら先程の伝言を反芻する。

「十二年……ユグドラシルのサービス期間だ。ただの偶然とは思えない。これは、いきなり当たりを引いたんじゃないか？」

一連のやり取りを見るに、法国のプレイヤーはあの紫幽王と何かあったようだ。法国軍に向けた言葉を信じるならば、ユグドラシルのサービス終了直前にギルド拠点を落とされたというところか。

「普通なら当時はむかついても、後からいい思い出となったんだろうけどなぁ。ゲームが実体化しちゃったもんな。ギルド拠点とかも現実化したって知ったら、そりゃ怒るよな。俺は……どうだろうな」

連鎖的に、六百年前に降臨したという六大神がプレイヤーであることもほとんど確定した。

「たぶん、六大神側が最後の記念に攻め込んだんだろうな。六百年前

のゲームでやったことを現実化した異世界で言われるのも大変だ。仮にサービス初期からやっていても、この世界で過ごした時間の方が何十倍なんだし。同情だけはしておこう」

問題は、ここからだ。具体的には、どちらにアプローチを仕掛けるか。この決断は今後のナザリックの未来を大きく左右するだろう。

法国に対して「六百年前のことを今更言われて大変ですね～」と肩を持つのか、紫幽王の陣営に対して「いくらゲームだからってそりゃ怒って当然ですよ」と背中を押すのか。こっそり両陣営に接触して蝙蝠となるか。あるいは、このまま両者が激突する様子をしばらく観戦して漁夫の利を得るか。

「最後に美味しいところだけもらうのが理想的なんだけどなぁ。でも早めに動かないと絶好の機会を逃すかもしれない」

こういう時、ギルドメンバーが残っていればいつものように多数決で決められるのだが、現在はアインズしかいない。ＮＰＣたちに聞いてもいいが、彼らは「アインズ様のお望みのままに」と言ってくるのは目に見えてくる。あるいはナザリック以外の存在など取るに足らないと舐めてかかるか。どちらにせよ、それがいいことだとは思えない。

「とりあえず、紫幽王側に接触してみるか？　人間以外に排他的な法国よりは接しやすそうだけど」

だが、もしかしたらアインズ・ウール・ゴウンと敵対関係にあったギルド関係者かもしれない。あの大侵攻の参加者である可能性だってある。ゲーム時代の因縁をこの世界に持ち越しているような者ならば、アインズと敵対関係になることは必至である。そして、それは法国側にも言えることだ。

最悪のパターンは、ナザリックの戦力を知った法国と紫幽王陣営が連合を組むこと。美味しいとこ取りなんていう余裕はなくなってしまう。そして、国家という背景を持つ法国に敵認定されることは非常にまずい。法国をどうにかしても今後の動きに大きく関わってくるだろう。

せめてプレイヤーの有無、もっと言えば具体的な人数とレベルが知

りたい。アインズのようにギルド拠点ごと来ているのかも重要だ。ナザリック地下大墳墓と同格のギルド拠点はユグドラシル内にもそれほどあるわけではないが、正体不明の相手に油断するなど愚かの極みだ。

「紫幽王側は森のエルフたちとはどういう関係なんだ？　もし友好的な関係を築いているのだとしたら、アウラやマーレと一緒に行けば態度も軟化するか？　いや俺も同じアンデッドだし仲間意識を……って、あれが本当に紫幽王かは分からないんだって。……あ、そうだ」

ここで妙案を閃くアインズ。まずは別所で待機中のアウラとマーレと合流しよう。

■

「十二年はやっぱり長すぎたかな……」

「今更かよ」

法国軍に手紙を送り出したリバスは帰還するなり、主人にして本体であるネロの軽い後悔に物申す。現在、ネロは書類整理も止めてソファに横たわっていた。

「ところで、十二年ってのはどういう意味なんだ？　えらく中地半端な期間だが」

「ああ、そういうのも認識していないんだ」

リバスはネロの心臓を媒介に生み出された特殊なモンスターであるためか、ネロの記憶と知識をある程度共有している。ただし、それはユグドラシルで得た知識や味わった経験に限る。ユグドラシルの外、つまりは現実世界を認識しているわけではない。『りある』と呼ばれる世界がユグドラシルとはまた別にあることは理解しているらしい。ただ、ユグドラシルがゲーム世界であるという認識はしていないようだ。いわゆるネタ的視点は持っていないらしい。

「それ、私も気になったわ」

ネロに覆いかぶさるようにして横になっていたアンも追従する。ソファの下で獏のピロが「同じく」と言わんばかりにぷすぷすと鳴く。

「十二年ってのはユグドラシルプレイヤーにとって特別な数字なのさ。これだけはきっと忘れたくても忘れられないはずだ。プレイヤーであるのならね」
十二年。それはユグドラシルというゲームがサービス提供をしていた時間。これをゲームを始めた頃のネロが聞けば「よくぞこんなクソゲーが十二年も続いたもんだ」と感動すら覚えただろう。
はっきり言ってユグドラシルのゲームシステムは親切とは言いづらく、面白いのは認めるが全くの初心者に勧めるのは憚るタイプのゲームだ。自由の高さが面白さに直結していたが、それは同時に何をすればいいのか分からない状態でもあるのだ。少なくとも、ゲームを始めた頃のネロは毎日四苦八苦していた。何度やめてやろうかと思ったか数えるのも馬鹿らしい。
それでも続けた。ダンジョンで意地の悪いトラップにはまっても続けた。何度もＰＶＰに負けても続けた。竜人に転職したばかりの頃、異形種狩りに遭っても続けた。ギルド長のワンマンプレイでギルド内がギスギスしても続けた。スルシャーナたちが抜けても続けた。苦労して作り上げた武器を破壊されても続けた。ボーナスを全部費やしたガチャで爆死しても続けた。ギルドメンバーが次々に引退しても続けた。ギルド長がいなくなっても続けた。
サービス終了の通知が来た時、正直安堵した。これでようやく僕も終わっていいのだと。だが、まだ続いている。
続いていることに恨みどころか感謝している。本当に、あんな終わり方でさえなければ、物理的に人間をやめて魔王として国家を作ろうとしているなど狂気の沙汰でしかないのだが。
「へー」
アンの納得したのかしていないのか分からないような声で我に返った。興味がなくなったのか、此方が説明する気がないのを見抜いたのか、それ以上の質問はしてこなかった。
「まあ、本当に十二年使うってことはないだろう。流石にね。こっちは軍隊まるごと潰してんだ。国民感情を抑えるのも限度がある」
「それはそうね。相手が人間の国なら妥協点も見つけられたんでしょ

うけど、六大神と敵対したと自称する竜なんだもの。国民を納得させるだけの方便を用意することはかなり難しいでしょうね」
「自称じゃありませんー。本当にあいつらに殺されましたー」
別に、ネロ自身が殺されたことはどうでもいいのだが。そんなことは問題ですらない。この世界で改めて殺されてもそこで怒る可能性はほとんど皆無だろう。実際に殺されてみなければ分からないが、そこまで怒らないであろうという確信があった。
だから、自分がここまで彼らに憎悪を抱いているのは、やはり娘のことだ。仮想現実で作ったデータの塊を娘呼ばわりしているのは気色悪いという自覚はある。データの塊が消失したことで友人だと言い続けた相手をここまで憎悪しているのはきっと間違っているのだろう。それでも、やはり許すことなどできないのだ。彼らからの謝罪すら受けていないのだから。
サクラ。ギルドメンバーにすら言っていないが、その名前は自分の名字を使っている。そして、顔は死んだ母のものを参考にした。
果たして、ＮＰＣがこの世界に来ていたらどうなっていたのだろうか。レクスやリバスのように自我を持って、自分の意思で話したり動いたりできたのだろうか。どんな風に笑うのだろうか。どんな声をしているのだろうか。それをネロは知らない。知ることもできない。
ギルド拠点があればＮＰＣを作ることができる。また、ＮＰＣを作るワールドアイテムというものがある。だが、それらで全く同じ設定のＮＰＣを作ったところでそれがあのサクラと同じ存在であるかと言われたら違うのではないか。スワンプマンの話になってしまうが。
「……ん？」
霧の中に誰かが入って来た。
ネロたちがいるコテージは大樹海の中心部の一角だ。空間を操るタイプのモンスターを大量に配置し、ワールドエネミーの権能を使うことで最上位の探知職であっても見つけることは不可能な隠し空間となっている。そのため、埒外の侵入者など有り得ない。ワールドアイテムを使ったり専門の職業であったりすれば例外はあるかもしれないが。

今入って来た者は別に例外ではない。何故ならば普通に身内だ。現エルフ王にしてネロの神官たるレクス・セントラルだ。
彼がこの空間に来ることは珍しい。基本的に彼はエルフの王城にいるからだ。簡単な用事ならば書類に書いて、他の眷属に届けさせる。大樹海中からあらゆるエルフや亜人たちが魔王竜の支配下に入るために集まってきているため、レクスもかなり忙しいはずだ。そんな彼が来たということはその忙しさよりも重大な案件が発生したということ。焦った様子がないため、襲撃があったわけではないようだ。
やがてコテージの扉が開かれ、レクスが入室する。
「失礼いたします、我が本体」
「うん。くるしゅうないよ」
「せめて体を起こせよ」
リバスから窘められてもネロは起き上がらない。体をソファに倒したままだ。面倒臭いというのもあるが、アンが乗っているから起き上がれないというのが大きい。
ネロにとってアンという少女の存在は飼い猫に近い。猫とは飼うものではなく、飼われるものなのだ。主人は人間であっても、主導権は猫の側にある。これは某猫好きが集まったギルドのメンバーから聞いた話なので間違いない。
「それで何の用事だ？」
「はい。ちょっと珍客がありまして」
「珍客？」
「正体不明の、怪しいお客様ですね」
「へえ。そりゃまた」
レクスがそう言うということは、大樹海に棲むエルフや亜人とは違う何があるということなのだろう。このタイミングで来るというのが非常に気になる。
「名前は、ギルド『異形種動物園』のびっくりボックスとおっしゃるそうです」
「心当たりはねえけど絶対プレイヤーじゃねえか」

魔王たちの対面

名称こそが「大森林」だが、アインズからしてみればこの森は「大樹海」と呼ぶにふさわしい規模だ。まだこの世界に来て日が浅いため確かなことは言えないが、国家規模の面積があるのではないか。少なくとも、アインズが主な活動場所としているトブの大森林よりも広いことは間違いない。

広大な樹海であったが、アインズがエルフの王都を見つけるのは割と簡単だった。

大きな目印が二つあったからだ。一つは三日月湖。もう一つは法国方面から続く道だ。厳密には、道の痕跡というべきだろうか。人の足で踏まれることがなくなった土の上には緑に覆われつつある。

この道はエルフたちが作ったものではない。つい最近まで行われていたエルフとの戦争のために法国軍が森を伐採することで作り出したものだろう。法国の前哨基地跡が無残な状態で残されているのも見つけた。そういった基地跡は在来の亜人や獣の住処になっているようだ。

当然だが、森の奥に行くほど緑は濃くなっている。流石に木までは生えていないが、かなり背の高い草も見える。緑の濃さで法国軍が撃破された、もしくは撤退したタイミングがおおよそ予想……できるほどアインズは植物の生長速度に対して詳しくない。

兵どもが夢の跡という何かの一説を思い出すが、詳細は出てこない。リアルで教師をやっているギルドメンバーに教えてもらったはずだが、詳しいことは忘れた。そんなことさえ忘れるほどの年月が経過していたのだから。

問題のエルフの王都。エルフの王都や国には元々名前がなかったらしい。これは他にエルフの国や大規模な都市が大樹海内の存在しないためだと推測できる。だが、現在は国家としてこのような名前がつけられているそうだ。

コスモス真王国。

これを聞いたＮＰＣたちは「偉大なるアインズ様を差し置いて真の

王を名乗るなど、なんと不敬な！」と憤慨していたが、アインズとしては王国や帝国と区別できる名称だから便利で良かった程度にしか思わない。流石に近くにある国の名前は覚えているが、頭の中でごちゃごちゃにならないためにも分かりやすい略称で呼べるのは正直助かる。もしも国の名前を考えたのがプレイヤーなら意外とそういう理由で「真王」などと名乗っているのかもしれない。

ちなみに、この情報は道中で見かけた亜人（ユグドラシルにはいなかった種族）から魔法で聞き出したものだ。当然、魔法による記憶の処理もしておいた。亜人一匹がいなくなったところでそれほど大きな騒ぎになるとも思えないが、これからプレイヤーかもしれない存在と接触するのだ。慎重に慎重を重ねるのは当然のことだ。その亜人はすでに部族ごと真王の支配下にあるらしいので、下手に殺すことは憚られる。「国民」を殺した相手にいい顔をするなどまず有り得ない。感情的な問題がなくても、交渉のアドバンテージを与えてしまうことは必然だ。「あくまでも一般常識レベルの質問をしただけ」に留めておかなければ、意外なところで弱点になってしまうかもしれない。ＮＰＣたちはまだ見ぬ相手を侮っているのか、そこまでするアインズにいまいち賛成しかねるようだったが。

エルフや亜人を取り込んでいる理由は様々なものが考えられるが、法国への対策が最大のものだろう。

コスモスという存在が国主らしいが、実際の政治はエルフが行っているらしい。正確には、エルフ王か。何でも、コスモスという存在は王であると同時に神であるらしく、現在のエルフ王はその司祭であるとのこと。

現在の大樹海の知的生物は、神に従うか抗うかの二択を責められているということになる。ナザリックはトブの大森林で同じようなことをしているが、事情はかなり違うだろう。かつてリザードマンの集落相手にやったことは最初の目的が殲滅で、コキュートスの提案によって統治へと変更した。だが、此方は最初から支配のようだ。それも、選択の期限はかなり長い。本気で支配するつもりはないと見て良いのか、別の狙いがあるのかはアインズには理解できない。

もしもコスモスがアインズあるいはナザリックが勝てる程度の存在ならば、そのまま倒して、大樹海の知的生物の信頼を得るというのはありだ。しかし、本当にナザリックで勝てる存在なのかは分からない。勝ててると確信を得ても、損害が大きすぎるなら戦うのはなしだ。こんな樹海に棲む蛮族の信頼など、あったら嬉しいがどうしても欲しいものでもない。同一種族ならばともかく他の種族との連盟らしきものはないようだ。どうせならコスモスの下で一度統一国家になってから丸ごと頂きたい。

(さて、今回の謁見で今後の動きすべてが分かると言ってもいい。気合を入れないとな)

現在、アインズたちはエルフの王都王城にてエルフ王の到着を待っている。詳しい説明はもらっていないが、現在地も部屋は謁見の間に相応する場所のはずだ。広いし、玉座らしき椅子もある。ナザリックの玉座の間とは比較するまでもないが、森の蛮族と考えるとむしろ立派な方だろう。

「遅いですね、アイン――叔父さん」

「あ、アイン――叔父さんを待たせるなんて、失礼な人ですね」

同行しているアウラとマーレが小声で言ってくる。エルフは耳がいい。周囲の従者らしいエルフたちが反応するが危険な動きは見せない。

「いや、むしろアポなしで来たのにすぐ会う予定を組んでくれたんだ。感謝すべきだろう」

アインズは数刻前を思い出す。

まず、アインズは自身を幻術でダークエルフに偽装した。次いで、アウラとマーレともう一人を連れてコネも何もない状態でこのエルフの都市にやってきた。そして、コネも何もない状態で城までやってきてエルフ王との謁見を申し出たのだ、「異形種動物のびっくりボックス」という名前を添えて。

アインズの予想では、一度ここで追い返されるはずだった。王の耳に「びっくりボックス」という如何にもプレイヤーらしき名前が入ることで、再度訪れた時に王との謁見が許されるはずだったのだ。しか

し、エルフたちはアインズたちを通した。門番をしていたエルフたちもプレイヤーなのかと思ったが、彼らはアインズよりもアウラやマーレに注目していた。今もアインズより幼い姉弟に意識を向けているように思われる。それが近い種のダークエルフに対してのものなのか、もっと別のナニカは分からない。そのあたりもこれから会う王に聞いた方がいいだろうか。

そんな思考をしていた瞬間だった。

「――はじめまして」

突如として、玉座の傍に『それ』は直立していた。魔法による転移だとアインズはすぐさま理解した。突如として出現したことにエルフたちの方が動揺していると見なくても分かるほど空気が変わった。

「我が名はレクス・セントラル。世界喰いの眷属。エルフの新しき王。大神コスモスの代理人」

その姿を見て、アインズは思考が数秒完全に止まった。瞼が存在していれば大きく見開いただろう。心臓を持っていれば激しく鼓動しただろう。

「いや、びっくりボックス殿にはこう言った方が分かりやすいかな。――私が『最後の灰色』だ」

赤と青、左右で色の違う両眼。燃え尽きた灰の色をした髪。この世界は顔面偏差値の高い人間が多く、エルフも全体的に美しいが、それを踏まえて見ても輝く美貌。何より、対峙するだけで脳内に警報が鳴り響くような存在感。

この破壊者の名前をアインズはよく知っている。

「――――ファイナル・グレイ……！」

ワールドエネミーが一体、ユグドラシル公式ラスボス『九曜の世界喰い』の前座である中ボスだ。設定レベルは百。だが、その戦闘能力は公式ＮＰＣやプレイヤーが作れるＮＰＣとは一線を画す。アウラやマーレが戦っても単身では勝てないと断言できる。アインズは手の内を知っているし勝ったこともあるが、あくまで相手がＡＩ操作のデータだった時の話だ。こうして生命と意思を得ている以上、戦法が全く同じとは言えない。

（これは、予想していなかった……！）
まずい。ファイナル・グレイそのものもそうだが、彼がいるということはその主君という設定の世界喰いも存在する可能性が高い。どうしてワールドアイテムの存在を警戒していなかったことを悔いたばかりなのに、ワールドエネミーの危険性を考えていなかったのか。自分の迂闊さに腹が立つが、先ほどの驚愕とともに鎮静される。こういう時ばかりはアンデッドの精神に感謝する他ない。
「ふむ。その名称が出てくるということは、やはり同郷ですか」
アインズが思わず口にしてしまった単語に対して、思案顔になるファイナル・グレイ改めレクス・セントラル。
「はい！」
レクスの言葉に応じたのは、アインズではない。アウラでもマーレでもない。
「不肖私、ギルド『異形種動物園』ギルドマスター、『びっくりボックス』は――あなたと同じ世界樹よりこの地に訪れた異邦者です！」
今回、アインズに同行したＮＰＣは三人。元々ダークエルフのアウラとマーレは外せないが、ここで更にもう一人いる。アインズと同じようにダークエルフに擬態した、パンドラズ・アクターである。
ちなみに、「異形種動物園」はアインズ・ウール・ゴウンの、「びっくりボックス」はパンドラズ・アクターの名前の原案である。どちらもモモンガ時代のアインズの発案なのだが、ギルドメンバーによって「ださすぎる」と却下された。
「よろしくお願いします、銀色の王よ」
「え、あ、はい」
妙に芝居がかった動きも、無駄に凝った言葉遣いも、精神の鎮静化が入るほどの羞恥心を覚えるアインズ。
とりあえずは、相手がこの言動を不敬と断じて来ないことと、ペースを握れたことに心の中で安堵の溜め息を漏らすのだった。
「んん！　では、皆。少し外に出てもらえますか？」
レクスが仕切り直すように咳払いをして、部屋に控えていたエルフたちにそう告げた。代表者らしき女エルフが進言する。

「ですが王よ――」
「二度言わせないように。万が一何かあった時、私は君たちを守るほどの余裕があるか分からない」
その言葉にハッとするエルフたち。お互いに顔を見合わせるが、パンドラズ・アクター、もといびっくりボックスが割って挟む。
「おっと、これは心外ですね！　私が貴方に狼藉を働くとでも？」
びっくりボックスからの質問に対し、レクスはわざとらしく肩を竦めて答える。
「いいえ？　『万が一』を起こすのは貴方たちではなく、我らが神たるコスモスですよ。竜が癇癪を起せば蟻の命など露と消えるのです」
「ほう？」
興味深げに返すびっくりボックスだったが、それ以上追及することはなかった。エルフたちはレクスの命令に従って退出する。あの様子ではこの部屋どころか城からさえ人払いがされているだろう。
部屋の扉を閉じた瞬間と同じタイミングで、『それ』は玉座に座っていた。
仮面を被った金髪の、如何にも偉そうな服装の男だった。
先程のレクスと同じように魔法か能力によるスキルだとは推測できるため、驚きはない。
「ごふぅ!?」
だが、アインズはその姿を見て噴き出した。レクス――ファイナル・グレイを見た時とは違った衝撃があった。
「アインーー叔父さん!?」
「ど、どうなさいました、アイン――叔父さん！」
アインズの反応がよほど予想外だったのか、アウラとマーレが声を大きくする。だが、咄嗟に偽名で呼べているあたり冷静なようだ。ハムスケと初対面の時のナーベラルを思い出し、この二人が彼女より優秀なのだと思わざるを得なかった。
「だ、大丈夫だ」
言いながら、アインズはインベントリからあるアイテムを取り出す。別に突如として現れた存在を敵だと認定したわけではない。む

しろ逆だ。ある意味において、推定『彼』とアインズは同類なのだから。
　彼もそれを察しているのだろう。アイテムを取り出そうとしているアインズに攻撃するでもなく、むしろ身構えているレクスを手で制していた。
「……一応、自己紹介しておくか」
　アインズが目的のアイテムを手にしたと同時に、彼は言う。
「はじめまして、コスモスと名乗っています。お察しかもしれませんが、ユグドラシルのプレイヤーです。その反応ですと、そちらもプレイヤー……いえ、プレイヤーは貴方だけですか」
　アインズと同じように反応していないアウラたちを見て、彼はそう断じる。あまりにも強すぎる断言に誤魔化すことは不可能だと判断したアインズはこう返した。
「バレてしまっては仕方ありません。ええ、ここにいる他の三名はＮＰＣです」
「他の場所にならプレイヤーがいるかのような発言ですね」
「どうぞお好きに解釈してください。それよりも、言うべきことがあるのでは？」
「違いない」
　相手の表情は窺えない。仮面で顔を隠しているからだ。アインズも同じ仮面を所持している。先ほどインベントリから取り出したのは他ならぬその仮面だ。彼とアインズも同じように被る。
　そして、お互いの正体を知らない初対面のアンデッドと竜人は、長年の友人が再会したかのように異口同音に告げる。
「「メリー苦しみます」」
　アイテムの名前を「嫉妬する者たちのマスク」。通称、嫉妬マスク。クリスマス当日の１９時から２２時までの間に２時間以上ログインしていた場合、強制的に入手できてしまう、何の能力もない悲しいアイテムである。
「改めて、はじめまして。大神コスモスです」
「ご丁寧に。私の名前は、異形種動物園のアイン・ベル・フィオールと

言います」
お互いに本名ではないと理解しながら、二人の魔王は邂逅を果たした。
この出会いが当人たちに吉と出るか凶と出るか。どちらにしろ、世界にとってはろくでもないことになるだけは確かだった。

■

スレイン法国最高機関の面々はいつもの会議室で沈黙していた。ある者は頭を抱えていた。ある者は眉間を押さえている。ある者は祈るように天井を仰いでいた。
理由は絶死絶命から送られてきた手紙だった。
巨竜の眷属を名乗る謎の大アンデッドから大元帥が受け取った手紙。
最も特出すべきなのは『拝啓、六大神の皆様へ』という出だしだろう。内容も最高執行機関の面々に向けているというよりは、さも六大神に対して報告するような文章であった。
現在の法国に神はいない。当然、それは絶死絶命も知っているはずだ。こうして最高執行機関の元に届くまでに検閲されることを恐れての策だろう。では何故、この手紙を受け取るであろう最高執行機関ではなく、不在である六大神に向けての内容となっているのか。
結論として、相手――即ち、大樹海に巣食う新エルフ王や巨大竜の一派は六大神が法国に健在であると誤解している。そして、この誤解を解かしてはならないと絶死絶命は考えているのだ。おおよその状況しか把握できないが、最高執行機関としても同意見だ。少なくとも、不在を知られるよりは健在だと誤解させておく方がよいことは論じるまでもない。
「よりにもよって此度の揺り返しで、六大神様と敵対していたプレイヤーが襲来してきたとはな」
百年の揺り返し。ユグドラシルからのプレイヤーの襲来。
六大神は人類を救った。八欲王は世界を乱した。

今回は議論の余地なく八欲王側だったということだ。エルフの側につき、法国軍を襲撃し、絶死絶命を拉致し、六大神の敵対者を名乗っている時点で、法国にとって、かの者たちを『人類の敵』と断じることは決定事項に他ならない。
「であるならば、やはり大森林の境界線――『奇跡の壁』に関しては神の遺産であると結論を出しても良いのではないか。この中の誰もその存在を知らなかったとしても、疑いようのないはずだ」
「私としては、そこまで大がかりなものを何の記録も残さずに設置したというのが気になるが……」
「口伝の中で失われたか、間違って伝わったと考えるのが妥当でしょう」
「あの裏切り者の件が片付き次第、風花聖典に調査をさせるべきか」
大森林と法国の境界線にある『奇跡の壁』。各所で名称は統一されていないが、この場においてはそう呼ぶことになった。
唯一現物を見た大元帥が語る。
「実物を知れぬものが聞けば何を言っているのかと嘲笑するかもしれん。だが、実際に見た私は確信したよ。あれは正に神が奇跡を起こしたのだと」
「それほどか」
「ああ。疑いながら実態を知った者は己の不明を恥じて信仰に目覚めるだろう」
「では、正しい信仰を持っていた者は己の信仰が正しかったと誇るのか？」
「それはないな。何故なら、神を信じていた者は神の威光を理解していなかったと、己の信仰が足りなかったと恥じるはずだ。私自身がそうだった」
大元帥の言葉に、最高執行機関の誰もが頷く。自分も時間を作って見に行こうと誓いながら。
「『今のところ、母と同じような目には遭っておりませんのでご安心ください』か。ひとまず、この手紙の内容が真実だとすれば、彼女は無事だと思っていいのか？」

「書かされた内容でなければ、の話ですが」
「疑っていても仕方がないだろう。この手紙については『隠し事はあっても嘘はない』という前提で話し合った方が建設的だ。嘘であった場合、本当に何も話が進まないのだから」
「同時に、彼女の現状が手紙を書く前後で変化していないことも、信じよう」
　歯がゆいが、現状自分たちがすぐに出来ることはない。やるべきことは、この手紙から大森林の巨竜や番外席次の現状を推測し、それを元に今後の方針を決めることだ。
「しかし、そうなるとこれも真実ということになってしまうな。番外席次よりも強い異形が数体いるなど……」
　どうやら番外席次を倒した存在は、黄金竜とはまた違った竜のようだ。というよりも、番外席次は巨竜の存在を認識していないように思える。相手側があえて彼女に教えていないということになる。教えるまでもないということだろうか。
「巨竜は別としても、最低でも三体の神人級の戦力。エルフ王レクス・セントラルは元々認識していましたが、人間型の竜ネロ・ネミートス、そしてその竜人が能力から生み出したアンデッドですか」
「番外席次の切り札が両方とも通じなかったのは、知りたくなかったな。彼女が惨敗したということは、現在の法国に真正面から巨竜どころかその取り巻きさえ打倒する戦力がない」
　おそらく漆黒聖典を出撃させても返り討ちに遭うのが関の山だ。手紙によれば、彼女が監禁されている場所は霧に包まれた謎の空間だという。エルフの王都の可能性が高いが、確証はない。徒に聖典を出撃させる余裕がない以上、調査もままらない。
「にわかには信じられませんがね」
　人類の切り札。最強の兵力。竜王どもに露呈すれば、その時点で戦争の火種になりかねない存在。それが番外席次なのだから。それがあっさり負けたなど、相手がプレイヤーであっても信じるわけにはいかない。
「だが、認めるしかないだろう。彼女が敗れるほどの相手、それが『ぷ

れいやー』ということに他ならない。この手紙に書かれた内容の多くは、我々にとっては一言一句口外できない情報ばかりだ」
「エルフの新王はあのくそったれとは関係ない、竜の眷属だったのは意外だったな。てっきりあの子の異母兄に該当すると思っていたのだが」
「あの男の目も八欲王から受け継いだという話がありますし、かの世界の強力なエルフは皆、左右で目の色が違うのでは」
「それすらもかなり大きな情報だ」
「だが、これらは彼奴らにとって流れてもいい情報ですらない。何故なら、我々にすでに知られているはずの情報だからだ」
「神々が教えているはず、だからな」
「本当に、どうして記録に残してくださらなかったのか」
「何かご意思があってのことだろう。神の御心を疑ってはならない」
おそらく敵からすれば、この手紙に大した意味はないのだ。自分が大森林から動けないから、六大神を動かすための催促状のつもりなのだ。
書かれた内容も伝わった情報も価値がない。番外席次が敗北したことを神に報告して謝罪している、以上の意味がない。もっと言えば、「手紙が渡された」という事実だけが重要なのだ。
謝罪文に見せかけて、彼女ができるだけ多くの情報を法国に流しているなど思いもしていないのだろう。不自然でないように細心の注意を払いながら書いたであろう彼女の苦労を想えば胸の苦しみさえ覚える。
なお、この場にいる最高執行機関の面々は想像もしていないことだが、肝心のネロは番外席次の手紙など全く読んでいない。どうせ読めないからだ。
「必ず番外席次を取り戻し、かの巨竜を滅ぼし、その首を六大神に捧げよう」
最高神官長の宣言に、誰もが大きく頷くのだった。
その目標が、あまりにも荒唐無稽であることに気づくこともなく。
大森林に閉じ込められた竜如きに構っている暇などなかったとい

うのに。

辿り着いてしまった解答

「――で、ボーナスを全部つぎこんで回して、ようやく手に入れたんですよ」
「バカなのー？　アインさんバカなのー？　でも、そういうバカ、嫌いじゃないぜ。だって僕も同類だからね！」
「おっと。それは何とも。ちなみに、何のガチャ回したんですか？」
「『信長大砲ＥＸ』」
「しょっぱいですねえ。ボーナス溶かしてまで欲しがるもんじゃないでしょ」
「ちなみに手に入らなかった」
「うわあ。可哀想」
「うるせいやい」
なんだが楽しそうだなぁ。
ナザリック地下大墳墓第六階層守護者アウラは、目の前で談笑している二人を見てそのような感想を抱いた。
片や絶対なる支配者たるアインズ・ウール・ゴウン。敬愛する主人であり、慈悲深き御方。
片や六大神の敵対者たるコスモス。偉大なる御方を差し置いて、真王だの大神だのと名乗っている不届き者。ぷれいやーであることは確実であり、シャルティアを洗脳した犯人の可能性もある相手だ。
敵である可能性が高いのに、どうして主人はこれほど楽しそうに会話しているのだろうか。二人が被っている仮面に関係しているのだろうか。あれは御方々の多くが所持していた物のはずだ。特別な能力があるわけではないため、武装としての価値は皆無のはずだが。
「課金と言えば、この世界で課金アイテムを手に入れる手段ってあるんでしょうかね」
課金アイテム。御方々が所持している特別なマジックアイテムの総称だ。「課金」なる行為でのみ入手可能らしい。何でもユグドラシル金貨ではない「りあるまねー」という通貨で取引されるとの話だ。ぶくぶく茶釜から与えられたドラゴンも「課金ガチャ」で手に入れた

という話を聞いたことがある。
　この課金アイテムなるアイテムは非常に強力であり、他で代用できない能力を持った代物も多い。この世界では「課金」ができないらしく、その手のアイテムも手に入らない。
「あー、どうなんでしょうね。僕も少なからず課金アイテムの在庫はあるんですよね。でも、補充できそうかと言われたら、まあ、無理ですね。目度も検討もありません」
「そうですか。この世界ってユグドラシルの頃みたいにルールに縛られる部分もあるので、もしかしたらって思っちゃいますよね」
「確かに」
　情報の探り合いをしているというのは分かる。相手を油断させるためにあえてフレンドリーに……まるで他の御方と会話していた時のような態度を取っていることも理解できる。だから、余計な口を挟むべきではないし、余計な思考をすべきでもない。
　――それでも、なんだか、面白くないな。
「ユグドラシル独自のアイテムと言えば、ワールドアイテムなんかはどうなんでしょうね」
　ワールドアイテム。その単語を聞いた途端、アウラは気を引き締めるそして、それをコスモスたちに悟られぬように努める。
　彼らがワールドアイテムを持っているかどうか。それは今回の作戦の最大の目的と言っても過言ではない。無論、プレイヤーの人数やギルド拠点の有無なども確認したいが、シャルティアを洗脳した犯人か否かの見極めは最重要課題だ。
「ワールドアイテム、ですか」
　その単語に、コスモスは大きく反応した。その反応がどういうものかは理解できなかった。ただ、動揺のようにも見えた。隠し切れない何かがあった。そして、何を思ったか仮面を脱ぎ、顔が露わにする。
　当然だが、至高の御方々の誰とも似ていない。ナザリックの同胞たちとも違う。アウラの記憶にはない顔だった。
　黄金の髪に、黄金の瞳を持つ男。アウラからすれば他に特徴らしい特徴はない。人間に見えるが、そうではない可能性もある。ナザリッ

クにもユリやソリュシャンのように姿だけなら人間に見える異形種はいるし、現在のアインズやパンドラズ・アクターのように幻術で偽っている可能性もあるからだ。
「真王コスモスってのはこっちに来てからの名前なんですけどね。元の名前は――ネロ・ネミートスと言います」
ネロ・ネミートス。アウラの記憶にはない名前だったが、アインズは思案するように顎に手を触れた。
「ネロ・ネミートス……確か、ワールドチャンピオンのひとり、アルティメット太郎の『雪月花劇団』の、サブマスターですよね？」
「よくご存じで。随分前に零落した、上の下くらいのギルドなのに」
「有名でしたからね。特に、貴方はギルドマスターよりも名前が広まっていましたよ」
「お世辞でも嬉しいね」
「嘘じゃありませんよ。『アンチディザスター』さん」
「『六色演目』の方で呼んで欲しいけどねえ」
きひひ、とコスモス改めネロは笑う。
「閑話休題。ワールドアイテムの話でしたね……先に言っておこうかな。今の僕は持っていません。でも、スレイン法国にはほぼ確実にあります」
「――ほう？」
どうやら当たりを引いたらしい。アウラは二人の話に集中することにした。

■

異形種動物園のアイン・ベル・フィオール。果たして本名なのか偽名なのかは分からない。しかし、ユグドラシルプレイヤーでしか分からないことに対してもちゃんと回答できているので、プレイヤーであることは間違いない。
しかし、味方か敵かは判断できない。もっと言えば、スルシャーナたちと関りがあるか否か。それに、これから敵になる可能性もある。

そのため、ネロは正体を探るためにボールを放ってみる。まずは相手がどの程度の知識を持っているか。ユグドラシルについてではなく、この世界について。
「スレイン法国――六大神についてはご存じですか？」
「ええ。周辺国家、特に人間の間では有名ですからね。まあ、王国や帝国では四大神信仰らしいですけど」
「え、そうなんだ。二人ほどハブられてんの？」
「これについては知らなかったんですね」
「まあ、法国以外の人間とはあんまり関わってないので……」
失敗した。まさかの自分の無知を晒す形になってしまった。法国以外にも国家があることは認識していたのに興味を向けなかったツケが回ってきた。
「と、また逸れて来たので戻しますね。六大神は知っているプレイヤーなんですよ。あいつらは僕と違って六百年前に来たそうですが」
「なるほど。私も薄々プレイヤーじゃないかとは思っていたんですが、確定なんですね」
「昔は『雪月花劇団』にいたけど独立した連中でね。何年も不干渉だったんですけど、こっちに転移してくる前にですね。あいつらは古巣……『劇場都市コスモスウェイ』に攻め込んできまして」
それだけなら別に良かった。最後の相手に選んでもらうなど悪役冥利に尽きる。魔王として最期を飾れるのならばネロだって望むところだった。だけど。
「最後に何かしたかったんでしょうかね」
「あいつらが抜けた理由ってのが、そもそもギルマスのパワハラとワンマンがひどかったからなんで……。その意趣返しなんだと思います」
「ああ、そういう……」
「まあ、そのギルマスも『仕事が落ち着いたら戻る』なんて言ってましたけど、何年もログインしてなかったんですけど。あの野郎、最後まで一度も戻って来ないんですよ。太郎だけじゃなくて、他のギルメン全員そうなんであいつにだけ恨み言言ってもしょうがないんですけ

どね。この何年かは、ずっと一人でした」
「そう、ですか……」
急に相槌の歯切れが悪くなるアイン。嫉妬マスクを被ったままであるため表情は見えないが、言葉からは様々な感情が滲んでいた。そして、その感情がどんなものかをネロはよく知っている。
「そして、僕は負けた。あいつらは勝った。後に神となった六人は、邪悪な魔王竜を滅ぼした。コスモスウェイは崩壊して、雪月花劇団は消滅した。元から六対一だ。勝率は少ないよね」
その気になれば、手数だけなら対応できた。『六色演目』とはそういう戦法だ。だが、所詮は召喚モンスターの寄せ集め。プレイヤーの相手をするには力不足だ。加えて、あの時はそれを使えない事情があった。
「……それで、その時に六大神がワールドアイテムを持っていたということですか？」
アインからの問い。奇妙な沈黙が気になった。まるで何かを堪えるような、隠すような空白だ。
「娘をね、殺したんですよ」
「え？」
「娘と言ってもＮＰＣなんですね」
ちらりと、後ろに控えていた三人を見る。ＮＰＣであるダークエルフの三人組（本当に全員がダークエルフかは疑っている）。法国の神話において従属神なるものが確認された段階で、それがＮＰＣであるという推測はしていた。レクスと同じように、生命と知性を持っているとも予想はしていた。
自分が最後まで守り抜けていたなら、あの子も同じようにこの世界で生きていけただろうか。
ユグドラシルではなく、リアルの話であるためあえて語ることはしないが、ネロは母親を殺して生まれてきた。周囲からは物心ついてからずっと呪いのように教えられてきた。だから、娘に自分を殺させるわけにはいかなかった。データなのだとしても、残り数時間で消えるとしても、それだけは駄目だった。父殺しの汚名を着せるくらいなら

自分が穢れてよかった。
そうして、魔王竜は娘を殺し、城を守れず、無残に散った。
「殺した、というのはどういうことですか？」
「そのままの意味ですが？」
「こっちの世界ならともかく――ユグドラシルではそれはできないはずですが？」
うっかりしていた。同士討ちや自傷が解禁されたこの世界に馴染みすぎたせいで、ユグドラシルの基本ルールを忘れていたのだ。
ネロとしては改めて口にしたくないことだが、相手からすれば無視できない不安要素なのだろう。
この時点で、ネロはアインたちと六大神の繋がりがないと断じていた。あったとしてもそれはかなり薄いものだと。そうでなければ、これほど不自然に食いついてくるのも奇妙だ。演技だとしても、やはり不自然な何かを感じる。
「ワールドアイテムですよ」
親切心八割、六大神への牽制二割でネロは正直に答えた。先ほどの前振りもあったため、余程頭が悪くない限りはこの解答に辿り着いたはずだが。
「あいつらが持ってきたワールドアイテムの名前は『傾城傾国』。効果は耐性を完全無視できる絶対の洗脳能力です」
実際、ギルド拠点を攻めるとなればかなり心強い能力だ。レベル百ＮＰＣに使用すれば強敵が一体減る上に使い捨ての強い駒が手に入るのだから。一名の装備枠を潰すとしてもお釣りが来る。スルシャーナたちが用いたのも納得できる。
ましてスルシャーナはコスモスウェイの構造をほぼ把握している。彼らが所属していたのもかなり昔だが基本的な所は変わっていない。特に、ネロのＮＰＣのサクラは変える必要がないほど、拠点の守護者として完成度が高かった。狙われるのは必然だった。
「……そうですか」
長い沈黙。ワールドアイテムという情報がよほど大きかったのか、他の三名も先程以上の沈黙に加えて表情が抜け落ちていた。先ほど

までは無表情を装うように見えたが、今は本当に感情が定まらないように思える。
「一回、この話は持ち帰っていいでしょうか。ことがワールドアイテムともなれば仲間たちと話し合いたいので」
「ええ。別に、構いませんよ。というか、貴方たちがどういうつもりで僕を訪ねて来たのかまだ聞いてなかったんですけど……」
「あ、そうでしたか。これは失礼を。何、プレイヤーらしき存在が見つかったので情報共有をしておきたかったというのが第一です。場合によっては敵対も有り得るかと思ったんですけど、その心配はなさそうですね」
「それは早計でしょう。法国と手を組むことになったら、僕と戦うことは必至ですよ?」
「ありませんよ」
　それはあまりにも早く、そして強い否定だった。
「今の話を聞いて決まりました。俺たちが法国と組むことは絶対にない」
「言い切りますね。ま、最低でもあいつらの邪魔になったなら時間を割いた甲斐があるかな」
　確かに先程の話を聞いて友好的になれる者は少数だろう。どうやらアインはネロに同情してくれているらしい。腹の中が見えてこないなりに熱い男のようだ。ならば、ネロの方から歩み寄っても問題はないだろう。
「良ければまた来てくださいよ。情報やアイテムの交換会くらいはできるんじゃないですか？　またその時に無駄話でもしましょう」
「ええ、必ず」
　そうして、アイン一行はエルフ王都から去って行った。ネロは人間形態を晒せないため、レクスに見送らせた。
　誰もいない部屋で独り玉座に座りながら、ネロは思案する。先ほどの一行の正体について。
「何というか、本当にダークエルフだったのかは不明だな。せめて握手の振りして鑑定魔法するべきだったか?」

ネロの鑑定魔法は精度が高いが零距離で接触する必要性がある。握手の習慣はこの世界にもあるし、ユグドラシルプレイヤーならば当然知っているはずだ。自然と情報を抜けたのではないか。

「いや、却下だな」

自分と六大神の確執について義憤を抱いてくれた彼に対してそのような真似は不誠実だ。今回は話しそびれたが、次回やってきたら正直に伝えておこう。スルシャーナたちは知っていたかどうか、記憶が曖昧だ。ユグドラシル時代に隠していたほどの能力ではないが、あえて誰かに説明した覚えもない。話していてもスルシャーナたちが覚えているかは微妙である。まして、彼らにとってネロとの交流は六百年も前の話なのだから。

「それにしても、久々に肩の力を抜いて他人と会話した気がするな……」

この世界に来てから、気軽に話せる機会は稀だった。レクスやリバスは己の鏡像であるため、会話は自問自答とほぼ同義である。人間形態など正体を隠しているエルフや亜人は言わずもがな。法国の兵士は論外。絶賛囚われの姫であるアンは系統が違う。転移前のユグドラシル時代は随分と長い間、孤独だった。ギルメンもいないのに他のギルドと接する気にもなれなかった。現実世界にも仕事関係以外で親しい相手はいない。少なくとも、戻って逢いたいと思える相手は浮かんでこなかった。

まして、復讐以上に意味のある行為はあの世界には落ちていなかった。

「わかってはいるんだけどな」

この復讐に意味はなく、この戦争に価値はない。

悪いのは自分だ。間違っているのは自分だ。狂っているのは自分だ。落ち着くべきなのは自分だ。だけど、それが矛を収める理由にはならない。この憎悪は自己完結できないのだ。この憤怒を忘れるだけの何かが、自分には不足している。

相手はネロがいるとは知らないとはいえ「父親を殺すために育てられた娘」を差し向けてきたのだ。しかも、その少女が捕虜になっても

交渉の一つもしてこない。
「早く来いよ。この樹海統一しちゃうぞ。そうなったら色々まずいんじゃないのか？　人間至上思想国家を作ったんだろう？　何で、何で来ない？」
　おまえたちは、僕を忘れたのか？
「それとも、本当はおまえたちはもう其処にはいないのかな。それでもいいけど。とっくの昔に死んでいるのだとしても、十二年って宣言したからな。それまでは待つさ」
　それ以降は待つつもりはないが。

ナザリックにて

ナザリック地下大墳墓の玉座の大広間。
最高支配者たるアインズ・ウール・ゴウンを始めとして、階層守護者たちが勢ぞろいしていた。こうして集うのはコキュートスがリザードマンの村への遠征で一度失敗して以来であるため、それほど久しぶりという気はしない。皆、今回集まった要件を聞かされていたため殺気立っている。
「まず本題に入る前に、おまえたち急な呼び出しに応じてくれたことを嬉しく思う」
「何をおっしゃいます、アインズ様。我々はアインズ様の忠実な下僕。お呼びとあれば従うのは当然でございます」
本心から恐縮とばかりのアルベドの言葉に、その場にいた全員が無言で頷き同意を示す。この重すぎる忠誠心に慣れないアインズであったが、鷹揚に頷いて話を進める。
「では重ねて、守護者総出で出るべきという意見を抑えて、アウラ、マーレ、パンドラズ・アクターだけでコスモスに接触したことを改めて謝罪しよう。本来であれば、おまえたちの心配の方が正しいのに無理を言ったな」
アインズは頭を下げた。それを見て守護者たちは一斉に慌てだした。
「な！　アインズ様！」
「おやめください！」
「ソノヨウナ事ヲサレル必要ハゴザイマセン！」
思った以上に周囲が混乱しているようなのでアインズは頭を上げる。全員が安堵の息を出しているようだった。
「謝罪を受け入れてもらえたことを感謝する。無茶のおかげで成果はあった。それでは前置きも面倒だ。速やかに本題に入るとしよう。皆も知っての通り、私は大樹海に国を作ったプレイヤーらしき存在と接触し、スレイン法国の情報を得た」
場の空気が一段階重くなる。

「真王国国主真王コスモスの正体はプレイヤー、ネロ・ネミートス。彼は六大神とユグドラシル時代に因縁のある者だった。そして彼からの情報が正しいのならば、シャルティアを洗脳した犯人はスレイン法国、引いてはその背後にいる六大神である可能性が非常に高い」
　それを聞いて、全員が殺気立つ。ここに無力な人間がいればこの空気だけで死んでしまいそうなほどの重圧が満ちていた。否、シャルティアがひと際巨大な殺気を放っているようにアインズは感じだ。自分自身のことなのだから当然だ。
「洗脳系ワールドアイテムがあるという点もそうだが、六大神がネロ・ネミートスに対して行った戦略――洗脳したＮＰＣとプレイヤーを戦わせるという手法があまりにも酷似している」
　ネロは「娘を殺した」と言った。
　もしもの話になるが、ギルドメンバーが現在もナザリックにいた場合、アインズがそうしたように誰かが囮も兼ねて単騎で洗脳されたシャルティアと戦うことになった場合、それはシャルティアの創造主であるペロロンチーノが担ったのではないだろうか。
　アインズ――モモンガはそのような残酷なことを絶対にさせたくないが、ペロロンチーノは責任を取る意味でも絶対に己がやると言い出すだろう。仲間の手を娘の血で穢すくらいなら自分が、と。彼はそういう男だった。
　口にこそ出さないが、ＮＰＣたちも同じ結論に至ったようだ。だからこそのこの殺気だろう。
「デミウルゴス。おまえは以前言っていたな。シャルティアを洗脳した犯人がモモンに接触してこないのはモモンを見極めるため。あるいは、シャルティアの洗脳自体が全くの偶然ではないかと」
　若干言葉は違ったがこんなニュアンスだったよな、とアインズは若干不安になりながらデミウルゴスの様子を窺う。
「はっ！　確かに申しました」
「どうやら私もおまえも思いつかなかった第三の可能性があったようだ。全く別のところで無視できない問題が発生してそれどころではなくなった、という可能性がな」

おそらく六大神はナザリックが自分たちやネロ・ネミートスに辿り着けたという事実に気づいていない。だからこそ、ネロへの対策を重視し、ナザリックのことは一度保留にすると決断したのだろう。
「はっ！　思い至らず汗顔の至りでございます。我ながら何と……」
「止せ。私も考えてもいなかった可能性だ。この件について卑下するのは私も侮辱していると知れ」
「はっ！　申し訳ございません、アインズ様！」
そこまで恐縮されるとアインズの方が申し訳なくなってくる。
「無礼極まりない連中でありんす！　よりにもよってアインズ様を軽んじるとは……！」
「本当、不敬にも程があるよね」
「あ、あのヒトを優先してアインズ様を無視するなんて、おしおきが必要だよね」
仮に法国が犯人であった場合、ガゼフ暗殺を妨害した報復としてシャルティアを洗脳したのだろう。そして、同時期にネロ・ネミートスが大樹海に転移してきた。ナザリックが洗脳の犯人を特定するまで時間が掛かると予想し、ネロの対処を優先したと見るべきだ。ひょっとすると、ネロに犯行を擦り付けてナザリックと戦わせるつもりなのかもしれない。
アインズも鎮静化が起こるほどの憤慨を抱いていた。
「さて、周辺国家はどこも怪しいと言っていたところでスレイン法国が犯人である可能性が濃厚になったわけだが、今後の方針を決めたいと思う」
アインズとしては当然のことを口にしたつもりだったが、ＮＰＣたちは不思議そうにした。
「お言葉ですが、アインズ様。スレイン法国を滅ぼすための準備をするのでは？」
「まだ怪しいだけだからな。この世界の立ち位置を確立していない我々の現状で国を相手にするのはまずかろう。もしかしたら、六百年の間に誰かに奪われたのかもしれない。確定情報を得られるまでは情報収集に専念するつもりだ」

「情報は元々集めていましたが、しばらくは法国を集中的にするということですね」
「うむ。その通りだ」
　勝敗とは戦いが始まった時点で決定している。つまり、戦いの前に準備をできるかが勝利の鍵だ。情報とは準備のための最もわかりやすい指標だ。
「成程。ではアインズ様は再度、ネロ・ネミートスと接触するつもりですね？」
「そうだ。あの口ぶりからすると彼は我々と同時刻に転移してきた可能性が高い。故に六大神の情報も六百年前のものとなるだろうが、情報には違いない。無と一は違うものだ」
　彼は六大神の情報についてワールドアイテム以外の情報を口にしていない。個人の名前やギルド名もだ。おそらく彼もアインズたちがまた来ることを期待してわざと言わなかったのだろう。
「彼にはアインズ・ウール・ゴウンとしてではなく、異形種動物園として接触した。まさか本名だと思っていないだろうが、真実を全て見抜けているわけでもないだろう。故に、正体が露呈するまではそれを続けていくつもりだ」
　異形種動物園が存在しないギルドであることは察しているだろうが、その正体がアインズ・ウール・ゴウンだとは理解していないはずだ。アウラやマーレの顔は見られているが装備は変更していたし、ギルメンならともかくＮＰＣまで覚えているプレイヤーは少数派のはずだ。「アイン」という偽名からアインズ・ウール・ゴウンを連想することはあるかもしれないが、直結はないだろう。
　もし見抜かれていたなら、あの時の会話にそれらしい探りを入れてくるはずだ。無論、アインズが気づいていなかったという可能性もないではないのだが。
「それに、あまり一度に根掘り葉掘り聞くと警戒されるかもしれないから手短に帰ったが、彼にはまだまだ聞くべきことがあるからな」
　まず、ファイナル・グレイだ。あれは公式ＮＰＣで中ボスのはずで、プレイヤーが従える手段などないはずだ。アインズとしては未知の

ワールドアイテムで召喚したと睨んでいる。あるいは、アインズたちがそうであるように彼も転移してきただけなのか。前者ならば使い切りなのかの確認が必要であり、後者ならワールドエネミー顕現の危険性が発生する。

「対真王国において、六大神は随分と腰が重いようだ。あるいは情報を集めているのか。何せ六百年だ。ネロから見れば六百年の遅れがあるが、六大神も六百年に及ぶ記憶の摩耗があるはず。慎重になっていると見るべきか」

ネロのあの様子では六大神との和解はあまり考えていないようだが、六大神側はどうか分からない。果たして「昔のことだから許してくれるはずだ」と楽観視している可能性もある。人格も何も知らないため、何一つ確信を込めて言えることはない。

「そのことなのですが、アインズ様。一つ具申させていただいてよろしいでしょうか」

デミウルゴスの申し出にアインズは無言で頷く。それを受けて、デミウルゴスは恭しく礼をした。

「六大神が既に滅んでいる可能性、というのはないでしょうか？」

「……ふむ」

盲点だった。ネロがあまりにも六大神が健在であることを前提に話していたこと、アインズ自身が寿命から解放されたアンデッドであることなどが理由で、アインズはその可能性を考えていなかった。六百年という時間は人間からすれば途方もないものだ。千年生きるエルフなら生きているかもしれないが、戦闘などで死ぬ可能性はある。生きていても、法国にはおらず、世界の片隅で隠居生活を送っているという考え方もある。

「真王国に対して六大神の動きがないのは、他ならぬ本人たちがいないため。真王ネロ・ネミートスが転移してくる可能性は低いため彼の情報は残していなかった。法国上層部は知っているかもしれませんが、因縁がある程度の個人の情報をそこまで詳細に残しているかは疑問が残ります。残していても、探すのに手間取っている。陽光聖典から推測するに、法国にはプレイヤーに対抗する戦力がない。愚かにも

アインズ様より真王を優先したのは保持している戦力を把握しているプレイヤーがいないため。そう考えれば色々と辻褄は合うのですが」
「成程。私もその可能性は考えていた」
嘘ですと心の中でデミウルゴスに謝罪しながら、アインズは続ける。
「しかし、それもまた可能性に過ぎないだろう。あまりにも都合が良い可能性だ。いないという前提で行動するよりは、いるという前提で行動した方が間違いはないはずだ」
「はっ！　差し出がましい真似を」
「良い。私の考えも杞憂に過ぎないのかもしれないしな」
でもいない方が楽なんだよなあ、と考えるアインズ。
「そういえば、アインズ様。ネロ・ネミートスってやつについて知っていたみたいですけど、どんなプレイヤーなんでしょうか？」
アウラからの質問に、アインズは気持ちを切り替える。
「実際に面識はなかったんだがな。名前はそれなりに知れていたぞ？聞けば『ああ、そんなやついたな』程度の知名度だが」
名前はうっすらと憶えていたが、顔は完全に忘れていた。というか、彼は人間形態も完全異形形態もそれほど特徴的ではないのだ。ユグドラシルにおいて『金髪金眼の青年』も『黄金の三頭竜』もありふれていたのだから。正直嫉妬マスクを外して顔を見せた時も既視感はなく、顔と名前がしばらく一致しなかったほどだ。
逆説的に、アインズ・ウール・ゴウンのギルドマスターであるモモンガが名前を聞いてすぐに思い出せる相手であるということなのだがそれを指摘する者はここにはいなかった。
「左様でございますか。参考までに詳細をお聞きしてもよろしいですか？」
「ふむ」
予想されて然るべき質問であったため、プレイヤー名鑑は事前に漁っておいた。かなり独特な戦法を取るため、情報はそれなりに残されていた。

「ギルド『雪月花劇団』所属。通称『アンチディザスター』。『六色演目』という呼び名もあるが、此方はマイナーだな。掲示板……プレイヤー間の方はアンチディザスターの方が主流だった」
「アンチディザスター……察するに、ウルベルト様が修得されていた『ワールドディザスター』やマーレの『ディサイプル・オブ・ディザスター』に何かご関係が？」
「ご明察だ。いわゆる『ディザスター』系の魔法詠唱者は攻撃力が高い反面、魔法消費が大きく燃費が悪いとされる。彼の戦い方はそれとひどく相性がいいんだ。言ってしまえば魔力切れを起こしやすいらしくてな」
実際に戦ったことはなく、動画で見たこともないため、全て伝聞やまとめサイトの評価の聞きかじりだが。
四聖獣と紫幽王を召喚して、人形師のスキルで操作して、自身を合わせて六体掛かり――疑似パーティーで袋叩きにする。そのコンボを実現することのみに特化したビルド構築。本人はこれを『六色演目』と称したらしい。
紫幽王のデバフで弱体化し、玄武の防御バフとヘイト集中、青竜の幻術と高い耐性、朱雀と白虎のタフネスと遠近攻撃、ネロ自身の高水準の回復および支援全般。これらが合わさることにより、非常に厄介なシナジーを発揮する。爆発力こそないが故に堅実であり、とても耐久性の高い戦法だ。
人形師のスキルでモンスターを操るというのはよくある戦法だが、それを同時に五体ともなれば話は違ってくる。彼と同じことができるプレイヤーはユグドラシル広しといえど十人にも満たないだろう。
本来であれば一体召喚すれば十分な四聖獣を四体とも並べて、紫幽王まで添えてあるのだ。しかもネロ自身が竜人であり、五体を操作しながらそれなりに戦えると来ている。
もしもアインズと戦闘になった場合、単騎なら非常に苦しい戦いになるだろう。四聖獣は非常に高い即死耐性を持っているし、ネロの職業構成からアンデッドへの対抗手段は豊富なはずだ。どれだけ早く『六色演目』のコンボを崩せるかが鍵になる。召喚モンスターが強い

だけでなくネロ自身も強いため、決してコンボを崩せば楽に倒せる相手ではないのが厄介なところだ。
特に厄介なのが魔力切れだ。紫幽王による魔力消費倍増のデバフとネロの魔力吸収の魔法、これと四聖獣のシナジーが加われば、タイミング次第ではどのような切り札も決定打にならず、逆にピンチになる。故に燃費の悪い大技を誘発して、耐えて、結果的に無駄打ちさせることこそ『六色演目』の本懐と言える。そこから『アンチディザスター』の名前がついたというわけだ。
「噂に聞いた巨竜とは彼の完全異形形態だろう。だが、彼は姿に関してはともかくビルド構成を大きく変更した可能性がある」
「何故そう思われるのですか？」
「大森林の入り口、法国軍基地の前にあった痕跡だ。あれは大規模攻撃特化の超位魔法や『大災厄』のような強力なスキルでもないと不可能だ。だが、データにある彼の能力から考えると難しい。彼の情報も古いしな。表舞台に姿を見せなくなった後、ワールドディザスターを得たとしても不思議ではない。……そして、その攻撃をあれほど綺麗に防いだ法国に対しても似たような警戒が必要だ」
具体的にどういう攻防があったのかは定かではない。姿を消して兵士たちの話を盗み聞いても「神の奇跡を見た」と要領を得ないものばかりだ。
以上の理由から、アインズは余程の理由がない限り、ネロと単騎で戦うつもりはない。
「あの口振りからして他にプレイヤーはいそうになかったし拠点もなかったようだが、これもまた確証はない。ネロの他にも『雪月花劇団』のメンバーがいることは留意しておく必要があるな」
個人的な所感としては、彼以外のメンバーはいないと思っている。六大神のことを語る彼からは自分と同じものを感じたのだ。何年も孤独に留守を務めていた者独特の空気があった。それは嫌と言うほど知っている。
「そういえば、ナザリックの後ろ盾を得るために国に所属するという話があったな」

出来れば近隣国家がいい。しかし、王国は魅力がない。法国は陽光聖典との交戦もあり、シャルティア洗脳事件の容疑が濃くなったため危険性が高い。帝国は比較的良い要素が多いが、決定打に欠ける。新しい意見や情報は聞いていなかったため、その認識は変わっていないはずだ。

「あれの候補に、真王国を加えておこうと思っている。私としては第一候補に置きたいな。今のコスモス真王国は新興国家どころか周囲からはまだ国家として認識すらされていないだろう。後ろ盾としての効果は弱いかもしれないが、逆に言えば売り込みもしやすい。何より国主がプレイヤーなら色々と都合がつきやすいからな。プレイヤーならばこの世界の誰よりも『アインズ・ウール・ゴウン』の名前を高く買ってくれるはずだ」

ネロの中であの大侵攻が過去の栄光になっていなければの話だが。あるいは、プレイヤーが『モモンガ』ひとりでは舐められるだろうか。

そんなはずはない。あの世界で自分たちが築き上げた栄光は、プレイヤーの心に畏怖として刻み付けられているはずだ。

「アルベド、デミウルゴス。おまえたちはどう思う？」

その言葉を受けて、知者二人は意味深に笑むのだった。

「そういうことですね、アインズ様！」

「――成程。流石です、アインズ様」

「え」

それなりに考えがあっての提案ではあったが、決してそこまで大きな反応をされるようなことを言ったつもりはない。むしろアインズの素人考えの問題点を指摘してくれるのではないかという期待さえあったのだ。何故そこまで尊敬の念を向けてくるのか理解できない。

「どういうことでありんすか」

「二人だけで納得しないでよね」

「ヌウ。知恵無キコノ身ヲ恥ジルバカリダ」

「な、何がそういうことなんでしょうか」

ここで「そこまで深いことは考えてないよ」と言うのは簡単だ。しかしＮＰＣからの信頼が重い。この重さをそのまま受け止めずにい

ていいのだろうか。失望されないだろうか。落胆されないだろうか。
ＮＰＣからも見捨てられたら、俺はどうすればいいんだ。彼――ネロ・ネミートスが手に入れることができなかった幸福を、こんな形で失っていいのか。
不安に駆られたアインズはいつもの手を使うことにした。
「アルベド。デミウルゴス。おまえたちが理解したことを皆に説明することを許す」

各地にて3

エイヴァーシャー大森林に、巨大な竜が出現した。黄金の鱗を持つ、山の如く巨躯の三頭竜。名をコスモス。

これなる竜はかつて六大神が滅ぼしたものであると判明した。コスモスは愚かにも六大神への復讐を考えており、これは六大神に選ばれた種族である人類の敵対行為に他ならない。

現に巨竜の一派は法国軍に甚大なる被害を与えた。エルフの国を始めとした大森林一帯を占領、法国および人類へ宣戦布告。

今こそ人類は一丸となり、この脅威を打倒すべきである。

この戦いは人類の歴史に刻まれる聖戦となるだろう。

ついては帝国に戦線への参加を願う。

「――で、法国はどういうつもりでこんな書状を送ってきたんだ？」

バハルス帝国帝都アーウィンタールはバハルス帝国帝城にて、現皇帝ジルクニフ・ルーン・ファーロード・エル＝ニクスはスレイン法国から送られてきた公的文書の内容を見て、微妙な顔をしていた。

その場に集まった者たちは皆、同じような表情を浮かべていた。何と言えばいいのか分からなかったし、どう考えればいいのか分からなかったからだ。それでも皇帝に話を振られて何も言わないわけにはいかない。代表して秘書官ロウネ・ヴァミリネンが口を開く。

「前提として、法国から定期的にあったエルフの奴隷の輸出がほぼ途絶えています。また、人や物の動きなどから法国軍で何か大きな動きがあったことも事実。市井に流布されている噂で『大森林のエルフが竜を従えて戦争が逆転した』という内容のものがあります。また、内通者からの情報で王国にも似た内容の書状が出されたそうです」

一呼吸置いて、推察を簡潔に述べた。

「以上のことから、スレイン法国はエルフの国から予想外の反撃――それこそ本当に強大な竜を支配したのかもしれません――を受けて壊滅的な被害を受けましたが、今更戦争を止めることはできないため、戦争を続行するために周辺国家を巻き込もうとしているのではないかと」

その推察を聞いて、会議に参加していた者たち全員が何とも言えない顔をしている。追従する言葉こそないが、反対意見は出ない。全員が似たような所感を抱いているからだ。
「成程。人間の国家では最強とも言われるスレイン法国がエルフに追い詰められていると。そうなると、エルフの奴隷の売買や所持を許可している我が国にも火の粉が降りかかるかもしれないな。今日にでも、大森林から竜が飛んでくるんじゃないか？」
ジルクニフの冗談に何人かが渋い顔をする。笑える冗談でもないし、冗談と笑い飛ばすには現実と成り得る可能性が高かったからだ。六大神が倒したなどと言う割に「コスモス」という名前の竜王の伝説など聞いたこともないが、スレイン法国が周辺国家に支援を求めるほどの戦闘能力を持った何かがエルフの味方についたことには違いないのだ。
しかし、帝国最強の魔術師にして主席宮廷魔法使いフールーダ・パラダインは臆するどころか笑みを濃くのだった。
「陛下。よろしければこの件、私が預かっても良いでしょうか？」
「爺がそうしてくれるなら有り難いが……。いや、本当に爺が動くほどのことか？」
生ける伝説たるフールーダの名前を出せるなら法国への面目は立つ。しかし、彼にも他に仕事がある。帝国で最も優秀な人材に余計な仕事をしている暇などない。
「件の魔法詠唱者、アインズ・ウール・ゴウンについてはいいのか？」
先日、リ・エスティーゼ王国のエ・ランテル付近で帝国兵が村々を襲っているという事件があった。しかし、その兵士の正体は帝国の兵士などではなく、偽装した法国の秘密部隊だった。目的は王国の戦士長ガゼフの暗殺。法国の最高戦力たる六色聖典の一つ、陽光聖典らしき存在も報告にあった。
ガゼフ暗殺は失敗に終わったようだが、その原因が謎の魔法詠唱者アインズ・ウール・ゴウンの介入があったからだ。報告が事実ならば二人で陽光聖典を撃退したというのだから、どれほどの実力者かは想像もできない。帝国としては是非戦力として受け入れたい人材だ。

特に、フールーダはアインズが謎のアンデッドを支配していたという話に興味を示していた。
「何をおっしゃいます。かの『漆黒』を始めとする六色聖典を抱える国がこれほど露骨に泣きついてきたのです。どのような真実が顔を出すかは不明ですが、初動だけでも私が出る価値はあるでしょう。それに、本当に神の名を引き合いに出すほどの竜がいるのならば、ともすればその竜にかのアンデッドを支配するヒントがあるかもしれませんしな」
　フールーダの現在の目標の一つとして、とある伝説のアンデッドの支配がある。先程の推察通りエルフが何らかの手段で竜を支配していた場合、その方法を目的のアンデッドにも応用できるのではないかと考えるのは当然の帰結だ。
「無論、アインズ・ウール・ゴウンの件で進展があれば其方を優先しますが、現状では名前以外の情報はほぼない以上、手かがりがある方から片づけましょう」
「確かにな。そういえば爺も『コスモス』の名に覚えはないのか？」
　フールーダは十三英雄とも面識のある、二百年の時を生きる大魔法使いだ。その知識は計り知れない。しかし、彼の顔は芳しくなく、首を横に振るのだった。
「ございませんな。そもそも六大神が巨竜を倒したなどという神話、聞いたこともありませぬ。トブの大森林に魔樹の竜王が眠っている、という話ならございますが」
「関係がありそうな、なさそうな話だな」
「ええ。その辺りも含めて文献を探してみましょう。陛下はかの国からできるだけ情報を集めておいてくだされ」
「分かった」
　ジルクニフは今回の問題をあまり軽くは考えていない。だが、真剣に取り合う気があるかは否である。法国もそれを覚悟で今回の書状を出したはずだ。あの国が楽観的とは思えない。何か見逃しているのかもしれない。
「そういえば陛下。エルフはどうなさいますか？」

竜を支配したエルフか、エルフの国を占領したかは分からないが、どちらにしろ代表者が「国民」の奪還のために帝国を訪れた時のことを考えての発言だ。それを臆病や考え過ぎと責めるような愚か者はこの場にいない。あの法国が追い詰められているのだ。慎重すぎるくらいでちょうどいいだろう。

「ふむ……。急いで法律を手を加えることはないと思うが、念の為だ。エルフの奴隷を買い集めておけ。エルフ、あるいはその裏にいる者がどう動くか分からないが、交渉の材料に使えるかもしれないしな」

「畏まりました」

そして、この議題はここで打ち切りとなり、次の議題へと進んでいく。

「次は、先程も名前が出たアインズ・ウール・ゴウンについてですが――」

■

五百年前、八欲王によって竜王の多くは滅んだ。生き残った者は変わり者が多いが、世界のために活動している竜王もいる。

それこそがアーグランド評議国永久評議員、『白金の竜王』ツァインドルクス＝ヴァイシオン。最強の竜王の一体。通称、ツアー。

彼が世界を守るために具体的にどんな活動をしているかと言えば、ぷれいやーの意志を継ぐスレイン法国の警戒だ。そして、それと同じくらいかの世界からの来訪者やその遺産も警戒している。

そんな彼の耳にエイヴァーシャー大森林に出現した巨竜の情報が届くのは必然だった。どのように接触しようか考えている内に、スレイン法国から評議国宛てに書状が届いた。潜在的な敵国である法国からの書状と聞いてかなり警戒していたが、内容は大森林の巨竜に関してだった。

巨竜の名はコスモス。かつてかの世界において、六大神が滅ぼした存在。故に、六大神の意志を受け継ぐ法国と人類を敵視している。法国軍はすでに攻撃を受けた。しかし、巨竜は大森林から出てくること

ができない。移動だけでなく攻撃なども大森林の外に対して行うことはできないそうだ。詳細は不明だが、法国はこれを六大神の遺産と推察した。そして、コスモスを人類の不倶戴天の仇と定め、この戦いを聖戦と定めたそうだ。

明記していないが、これは間違いなく百年の揺り返し、即ちぷれいやーの出現に他ならない。

「これは人類が攻略すべき試練であるため手出し無用、その上でコスモスについて何か知っていることがあれば教えろか」

厚かましい内容だ。あの国らしいとも言える。

法国としてもここまで明確に法国と敵対するぷれいやーなど初めてだから、対応が分からないのだろう。その存在を上層部だけでなく世間にも知られてしまったのが大きい。隠すことができない以上、正面から倒すしかない。

しかし、現在の法国にぷれいやーはいないはず。過去のぷれいやーたちの遺産があるとしても、評議国に対して血を覚醒させた神人を隠しているにしても、自分たちでなんとかしようという点が気になる。おそらくぷれいやーは単騎。従属神はいるかもしれないが、ぷれいやーの数は少ないと判断しても良いだろう。法国が自分たちだけ、あるいは人類だけで対処できると言い張っているということは大きくは外れていないはずだ。無論、現段階という注釈がつくが。

「いや、すでに交戦して秘匿していた神人か最秘宝を奪われた、ということも考えられるか」

かなり有り得る線だ。もしもこの予想が的中しているなら、法国からすればそれをツアーに知られるわけにはいかないし、評議国の手に渡るなど言語道断だ。あえて触れることはないが、機会があれば確かめる必要があるだろう。

「もしかして先日の吸血鬼と何か関係があるのかな？」

ツアーは先日、強力かつ邪悪な吸血鬼と遭遇した。正確にはツアー本人ではなく、彼が魔法の力で操作している鎧だが。

ツアー本人はわけあって動くことができない。とある事情でとある場所にあるとあるマジックアイテムを守らなければならないから

だ。
この鎧だけでも十分な強さがあるのだが、件の吸血鬼はその鎧に穴を開けるほどの能力を持っていた。結局正体は分からないまま撤退したが、このタイミングである。何かしら関係があっても不自然ではないだろう。それこそ、この竜の従属神かもしれない。
「それにしても、スルシャーナたちと因縁のあるプレイヤーか。まあ、当然だけど、そういう者もいたのかと言いたくはなるかな。コスモスなんて名前は聞いたことがないけど」
スルシャーナたちから聞いたユグドラシルの知識や記憶には限界がある。おまけに時間による摩耗があるため、全てを覚えているわけではない。その中に今回役に立ちそうな記憶はない。実際にコスモスに出会えば何か思い出すかもしれないが、今のところ思い当たる節はない。
あるいは、ヒントになる情報を法国が隠匿しているのか。彼らにとって一番最悪の事態は評議国とぷれいやーが手を結ぶことなのだから。
「法国が滅ぶとも思えないけど、ぷれいやーの能力次第では有り得るかな？　参戦するにもタイミングを間違えないようにしないとね」
ツアーからすれば、ぷれいやーの存在は非常に不快だ。そして、同じくらい法国も厄介に思っている。法国から言われずとも積極的に首を突っ込むつもりはない。精々削り合ってもらいたいものだ。そううまくいかないことは理解しているが共倒れが理想だ。
「竜帝たる父は間違ったことをした。慈母たちも間違っている。だから、だからこそ私が世界を守る。――私が、世界を守るのだ」

■

竜王国王城。
それほど広くないが豪華な部屋で、玉座に座る幼い少女が喚いていた。
「なぁにが人類の危機だ法国め！　我が国は現在進行形で滅亡の危機

だと再三言っているだろうが！」
半泣き状態の少女こそが『黒鱗の竜王』ドラウディロン・オーリウクルス。『七彩の竜王』の末裔にして竜王国を統治する女王。真にして偽りの竜王と呼ばれ、八分の一だけ竜の血を引く人間という奇異な存在である。
本来は妙齢の美女であるドラウディロンだが、士気高揚のために老若男女のウケがいい幼女の姿をしているという事情がある。
彼女は法国から送られてきた書簡に憤慨していた。内容は帝国や王国に送られたそれと同じ内容である。
「結構な寄付を、ビーストマン対策で疲弊した国庫から出しているんだぞ！　その上で更に出せと？　兵力まで貸せと？　自分たちがエルフに反撃されたから？　貴様らの奴隷狩りに付き合えるほど裕福ならオプティクスをフルで雇うわ！」
彼女が言うように、現在の竜王国は危機にある。正確にはずっとビーストマンの脅威に晒されていた。ビーストマンは平均的な能力が人間の十倍あると言われ、人間のことを食料としか見ておらず、竜王国は食糧庫か狩場だと認識している。
王家が人間以外の血を引くため法国は表立って援助をすることができないが、少なくない額を寄進する代わりに『陽光』や『漆黒』を内密に派遣してもらう関係だった。しかし、それが突如破綻することになった。
大樹海に出現した巨竜。六大神が滅ぼした存在。真王国なる国家の設立。復讐と人類への敵対宣言。
流石に書簡に書かれていること全てが事実ではないだろうが、法国が長年続けてきたエルフの戦争が一気に逆転されたことだけは間違いがないようだ。
エルフと法国の戦争は長く続いているが、その目的は謎のままだ。捕虜にされたエルフが輸出される帝国なら多少は関係があるかもしれないが、竜王国にとっては対岸の火事でしかない。手間取っているもの法国の勝利で終わるであろうと思っていたため、まさかの大番狂わせに驚きを禁じ得ない。

「はぁ、はぁ、はぁ……」
息が切れるほど叫んだドラウディロンに、その様子を最初から見ていた宰相が言う。
「他国に防衛力を委ねていた罰が当たったということですな。悲しいことに」
「好きで委ねておらんわ。この書簡に書いてある巨竜とやらがビーストマンの国で暴れてくれたら良かったのに。大樹海からどうにかしてこっちに誘導できないか？」
「可能か不可能かはさておき、道中の被害を思えば現実的ではないでしょうな。近隣国家最強の法国が自分たちの敗北を隠しもせず他国に支援を求めたのです。難度百程度ではないでしょう。ちなみに陛下、此方の巨竜とやらに心当たりは？」
「あったらその情報を条件に法国に漆黒聖典を派遣させておるわ！何だ、巨竜コスモスって！　六大神がこんな天変地異を具現化した竜を滅ぼしたなんて話、聞いたこともないぞ！」
「それは残念です」
あまり期待していなかったのか、それほど残念そうには見えなかった。
「寄進する額は例年より増やせないとして、形だけでも誰か送った方がいいのか？　ええい、ただでさえ人も金も足りんというのに」
「いきなり全面戦争という話でもないようですし、しばらく様子を見てもいいのでは？」
「そうするか。もし追加で要求してくるなら陽光聖典だけでも派遣するように言ってやるとしよう。あー、もう、この竜は何なんだ！　私が始原の魔法を使い放題なら直接殺してやるのに！」
始原の魔法。それは一般的に使用される位階魔法とは異なるものだ。八欲王によって世界の法則が歪められる前から、真なる竜王たちが行使してきた独自の能力。
竜王の血を引く女王には使用可能であるが、自在に制御できるわけではない。純粋な竜王ではない彼女が始原の魔法を行使するには、多くの民を犠牲にする必要があるのだ。下手に使用すれば国を救うど

ころか滅亡の後押しとなる。
「使い放題ならむしろビーストマンに使って欲しいですな」
「分かっておる！　……法国に提案するか。コスモスとやらをビーストマンの軍勢にぶつけられるなら、誘導の際の犠牲には目を瞑ると」
「よろしいのですか？」
「構わん。魂の魔法を発動するよりはずっと被害は少ないだろうよ。その巨竜とやらが曽祖父や『白金の竜王』を超える怪物でもない限りはな」
　女王も流石にそれはないと思っている。法国がこのような対応をする以上、コスモスはさぞ強いのだろうが、竜帝の息子たる『白金の竜王』を超えるなど有り得ないのだから。
「詳しい内情が不明なので何とも言えませんが、エルフが交渉に乗ってくれるなら、法国から鞍替えしてもいいのですがね」
「あー、どうだろうな。奴ら文明も碌に築いてない蛮族だ。金銭では動かんだろうし、人間の国とひとまとめに考えて法国と我が国の区別がついているかも怪しいぞ」
「万が一法国が滅んだら次の標的は帝国でしょうかね」
「面白くもない冗談だな。はあ、書簡一つでは分からないことだらけだ。協力的な姿勢を見せないと法国も情報はくれんだろうし、やっぱりこの件にも多少は人員を割かないと駄目か」
　ドラウディロンは手で顔を覆う。終わる様子のない地獄を憂いながら。
　この時の自分が未来の自分に罵倒されるなど予想もせずに。

ストックホルムシンドローム

コスモス真王国の最深部。エルフの王都より離れた場所にそれはある。

青龍イースの特殊能力によって発生している霧に包まれた特殊な空間。広さは五百坪ほどで、マジックアイテムのコテージや井戸が配置されている。庭に相応する空間には尾が蛇の頭になっている巨大な亀型魔獣、玄武のノースが番犬のように存在していた。此処は、住人以外のあらゆる生物を拒絶する。

探知特化のワールドアイテムでもなければ発見は勿論、潜入も至難の業である。真王コスモスまたは神敵ネロ・ネミートスという竜の巣。世界を滅ぼせる力を持つ災厄の化身の家として考えると随分とみすぼらしい。エルフの王城で生活しているレクス・セントラルの方がよほど王らしい生活をしていると言えるだろう。

そんな場所で、漆黒聖典番外席次『絶死絶命』アンティリーネ・ヘラン・フーシェは拉致監禁状態にあった。そもそも、彼女は表社会には出てこない秘密工作部隊群六色聖典の、死の神になぞらえて存在しないことになっている漆黒聖典において、竜王との契約に触れるために秘匿されていた神人だ。だから、彼女が囚われの身であること自体、法国上層部以外は知らないことだった。

ネロは絶死をこの空間に閉じ込めているものの、牢獄に閉じ込めることも鎖で縛りあげることも拷問で情報を絞り出すことも実験体として弄ることも女として犯すこともしなかった。エルフ王デケム・ホウガンが、絶死の母ファーインにしたことの多くをしていない。

絶死が知覚できないだけで複数のモンスターに監視されていることは理解している。その気になれば絶死を始末することだっていつでもできる。そして、ネロには絶死を大切にしたいと思う理由があるらしい。

「――おはようございます」

深い霧に覆われているにも関わらず、日の出の時間になればこの空間は明るくなる。夜も同じように、月そのものは見えないのに月明か

りは入ってくる。
朝早く、部屋に日差しが入ると同時に絶死――アンは目覚める。自分の置かれている状況を思い出し、それが変化していないことを確認する。
神の敵との遭遇。己の敗北。霧に覆われた空間での監禁生活。
目は醒めたが、瞼を開けるのに少しだけ躊躇う。しかし意を決して開ければ、そこには男の寝顔があった。神と戦い、神に滅ぼされた竜ネロ・ネミートス。
目覚めると同時にその姿が近距離にあることに驚きはない。寝る前に彼の寝床に入った――即ちアンが自分の意志で同衾を求めたのだから当然だ。
彼も起きかけだったのだろう、アンの挨拶に反応があった。
「……うん、おはよう」
瞼が開かれ、黄金の瞳に絶死の姿が映る。そこに映る自分の顔を見たくなくて、反射的に顔を逸らす。ネロは姿勢を変えず、アンの背中に手を回して抱きしめるようにする。アンはそれに抵抗しない。竜からの抱擁と寵愛を受け入れる。顔を彼の首に埋めるようにする。
「何と言うか、我ながらギリギリのことしてんな……」
「あら、やめる？」
「君が嫌じゃなければ、続けさせて欲しいな。折角の役得だ。楽しみたい」
穏やかな声だった。見えないが、穏やかな顔をしているのだろう。
この竜が自分に向ける感情は、慈愛や博愛よりも寵愛か愛玩の方が相応しい。何を思っているのか、誰を思い出しているのかは分からない。だが、それを不快に思う権利さえ今の自分にはないだろう。此方も、この男の何かに亡き母を重ねているのだから。
それに、思っていた以上に強者からの寵愛というものは心地が良いものだった。相手が神の敵であっても、あるいは神の敵だからこそ、この愛情はアンの精神に染み込んでいく。
母にとっては自分を犯したエルフの子どもだった。母以外の人間にとっては哀れな娘か、混ざり物か、強大な力を持つ猛獣だった。こ

の男にとって自分はどれでもないという認識は、アンの心を麻薬のように犯していく。
強者としての自分は敗北した。情報を外に出す手段は限られている。女としての魅力は効果がない。ならば、故国のためにできることはこの竜の寵愛を受け入れ、少しでも時間を無駄遣いさせることだ。そんな風に、自分に言い訳をする。みっともないと自嘲するが、それも幸福感に流されるように消える。
「さて、名残惜しいけど起きますかね」
抱擁の感触と温度が離れていく。引き留めようとしたが、はしたないため止めておく。羞恥心より恋しさが勝って引き留める日もあるが。
ネロが寝室から出る。アン用の部屋も与えられいるが、其方を使うことはあまりない。「監視のため」と分かりやすい言い訳をして毎晩のように竜との同衾を願う。それを受けて、ネロは娘を育てるように、妹を守るように、猫を愛するように受け入れる。性的に抱くことはない。寝物語で六大神やユグドラシルでの話を聞く間に、意識は落ちる。
部屋から出る彼を見送りながら、まだベッドに残る彼の温度と匂いを少しだけ堪能する。いつまでもそうしているわけにもいかないため、手早く身支度をして自分も部屋を出る。
「ぷすぷす」
部屋の外には豚に似た白黒の魔獣がいた。獏という種族で、個体名はピロ。ネロを除けば、アンがこの空間に監禁されるようになってから一番接している生物だ。
「おはよう」
「ぷす、ぷすぷす」
ピロを連れ添ってリビングに向かうと、すでにいい匂いがしていた。
「まさかな、自分のズボラさに救われるとは思ってなかったよ。イベントで使うからインベントリに仕舞ったままだった全自動調理ゴーレムがこんなところで役に立つとは」

ネロの視線の先には人間の腰まである大きさの不思議な形をしたゴーレムがごわんごわんと奇怪な音を立てていた。材料さえ入れれば調理をしてくれる優れものだ。量産は難しいだろうが、是非普及させて欲しい。

ネロ曰く、かつての彼の城「コスモスウェイ」にはもっと大人数の調理も可能な大型ゴーレムもあったらしい。六大神との戦いによって、他の財宝とともに失われたらしいが。

「でもどうせズボラなら、もうちょっと役に立つアイテムも残しておいて欲しかったなあ。何で中途半端なやつばっかり残してんだ」

過去の己を褒めたり貶してたりしているネロの隣に立ち、共に料理が完成するのを待つ。監禁している犯人と人質が同じように食事をしているのは非常におかしな光景であった。

やがてゴーレムの奇怪な音が止まる。料理が完成した合図だ。頭部の蓋を開けると、そこの料理をテーブルに並べる。今朝の献立は白いパン、燻製肉と卵を焼いたもの、生野菜、コーヒーという黒く苦い飲み物だった。この組み合わせは「モーニング」と呼ばれ、ネロのお気に入りらしくよく出てくる。

「自分でも料理できればもうちょい楽しいのかもしれないけどなあ。コックじゃねえしなあ」

ネロは料理ができない。得手不得手という次元ではなく、彼は何故か料理をすると意識が飛ぶ。以前肉を焼こうとしていたが、炭化するまで焼いていた。

どういう理屈なのかは分からない。曰く、いくらかユグドラシルのルールに縛られたままなんだ、とは言っていた。もしかしてスルシャーナたちもそうだったのだろうか。

ちなみに、ネロの食事量はアンよりも圧倒的に多い。軽く五倍はある。男女や体格の差以上に、種族の差がある。彼は竜人の「ザッハーク」であり、この種族は強さと引き換えに食事量が多くなるらしい。

「そういえば、以前ぷれいやーが来ていたとか言っていたけど、あれどうなったの？」

少し前、イギョウシュドウブツエンのビックリボックスという人物

が、エルフの王都を訪れたらしい。アンからすれば聞き慣れない名前程度の認識しかなかったが、ネロはその名前だけで相手がぷれいやーだと確信していた。やはりユグドラシル出身者にしか分からない何かがあるらしい。

アンからの問いに、ネロは難しい顔をした。食事の手を止めて眉を顰める。

「ぷれいやーだったよ」

「へえ。敵だったの？　味方だったの？」

そう言いながらアンは自問自答する。今自分の口から出た言葉は、誰に対しての敵か味方を示しているのか。六大神なのか、ネロなのか。

「わからねえや」

答えが出る前に、ネロからの返答があった。

「たぶんスルシャーナたちとは無関係だよ。少なくとも接触はないだろう。引っかかる言葉をいくつか投げてみたけどほとんど無視されたし。なんか世間話だけして帰って行った」

「何、それ」

「だからわからないんだって。……所感だと、敵にも味方にも成り得るかな」

ネロも相手の正体を計りかねているようだ。それほどの相手なのか。深く考えるような事情など最初からないのか。ネロからはそれ以上何かを教えるつもりはないらしく黙って食事を再開した。この話題を深堀りできないと判断したアンもそれに倣う。

食事が終わるとネロは仕事に向かう。本人が言うところの「面白くもない周回プレイ」こと国家の運営のために。

「行ってきます」

「いってらっしゃい」

出かけの挨拶もそこそこに、彼は霧の空間から出ていく。魔法による転移のため、一瞬だ。書類や情報の整理程度ならばこの家で行うことが多いため、実地に出る必要があることだろう。具体的に何をしているのかは想像に任せるしかないが、エルフ王レクスやアンデッドの

リバスの会話から、彼がこの数か月でエルフどころか大森林の事実上の支配者になろうとしていることは推測している。表向きにはエルフの新王レクスが動いており、ネロは正体を隠しているようだが。

ひとりになったアンは家の外に出る。大亀のノースは寝ている。空間を覆う霧は晴れない。試したことは何度もあるが、この霧の外には通常の手段で出ることはできない。

「今日も助けは来そうにないわね」

「ぷすぷすぷす」

ネロがいない間、時間の過ごし方は限られる。ピロの毛繕いをしたり、ノースと戦闘訓練をしたり、部屋に置かれた映像作品を見たり、寝物語で聞いた逸話を紙に書き留めたり、たまに訪れるリバスやレクスと話し合ったり。書物もあるが、此処にあるのはどれも神の世界の言葉で書かれているため、アンには読めない。

洗濯や掃除などの家事は料理と同じようにゴーレムや魔獣が済ませてくれる。その点に関してだけは至れり尽くせりだ。

法国にいた頃、神殿の最奥でいつ来るかも知れない侵入者を待つ生活よりも自由度は低い。神殿からろくに出れないとしても、金にあかして新しい飲食やファッションを確かめられた分、あちらの方が自由ではあった。

だが、この生活の何かに満ち足りているものを感じていることも事実だ。今日だけでも何度目かになる自問自答を開始する。

あの男、神の敵たるネロ・ネミートスに対して考える。

あの男と自分の関係は何なのか。

「神のシモベと、神の敵。つまりは敵同士。勝った竜と負けた女。つまり、あの男にとって私は捕虜で人質。それ以上でもそれ以下でもないでしょう？」

我ながら見え透いた嘘だ。それ以外の感情を向けられていると自覚しているのに。愛玩と寵愛と庇護の対象であると、朝起きてから夜寝るまで自認しているというのに。そして、それだけでは足りないと、もっと特別になりたいという欲望がある。

ピロが気遣うように擦り寄ってくる。

「ぷすぷす」
「……ええ、きっと私はあなたのご主人様のことが……好きなんでしょうね」
身体が熱くなるのを感じる。悶えて唸りたくなるほど熱いのに、身を委ねてしまうほど気分がいい。
周囲に知的生命ならぬ魔獣しかいないからこそ出てくる本音だ。法国の人間どころか、レクスやリバスにさえ聞かれたら困る本心だ。ネロ本人には知られたら恥ずかしいという思いと、相反するように、知って応えて欲しいという願いが沸き上がる。
何処が好きなのかと問われたら、口では強さと答えるだろう。それも間違いではない。法国時代、確かに強者との子どもを望んでいた。絶対的強者たる自分よりも強い男との子どもを。しかし、アンがネロに望んでいるものは子種だけではない。ネロに向ける感情は、彼の強さ以外にも由来する。
いつから好きなのかと訊ねられたら、いつの間にかとしか言えない。はっきりと恋慕や好意と認識したのがいつからかは自分でも判断できない。敗北を教えられた時かもしれない。この空間で過ごしている間かもしれない。先程の独白の瞬間かもしれない。一目惚れでないことだけは明らかだ。
どのくらい好きなのかと疑問を向けられたら、答えられない。どう表現すればいいかわからない。初めての経験なのだ。寿命が長いため大半は亡くなっているが、法国にも気に入った人間は大勢いた。しかし、それらが男性として興味を持ったかと言われたらそうではない。
神の世界にいた頃の六大神を知る者であり、旧友であり仇敵だ。法国にとっては敵対者だ。六大神の末裔であり八欲王の孫である自分を倒した男だ。母親の仇同然であるエルフ王を殺した竜だ。何をどう考えても意識しないわけにはいかない。それらが好意に転じるなど通常なら有り得ないのだろう。何を考えているのだ、敗北を経験したせいで狂ったのかと、自分自身を激しく罵ることがある。
では好きではないのかと質問されたら、否定は易しい。

「……困ったわね」
恋というものがこれほど心地よいものだとは知らなかった。自分はきっと助けが来ることを、この時間が終わることを望んでいない。自由ではなくとも、歪だとしても。この願いが六大神の背信や祖国の裏切りなのだとしても。
アンティリーネ・ヘラン・フーシェはネロ・ネミートスを愛している。
「一線は守っているわ。そうよね？」
「ぷす？」
フルネームは告げていない。六大神の不在を始めとした法国の情報は教えていない。王国や帝国の基本情報さえ教えていない。本来はスルシャーナの御業である確殺コンボを使える理由が生まれながらの異能によるものとも明かしていない。
だから、自分は故国も神も裏切っていない。今だけはそういうことにして欲しい。
「でも、そろそろ、本名くらいはいいかもしれないわね？　また手紙を出したいし、交換条件として教えようかしら」
多感な年頃なのだ。初恋の相手なのだ。好きな相手に名前を呼んで欲しいくらいの我が儘は許されるべきだ。……知り合いが聞けば「今、何歳でしたっけ？」という突っ込みが入るのだが。
「私ね、敗北を知りたかったのよ」
「ぷす？」
「実際に負けてみると、知りたくなかったって思ったけどね。あのヒト、理不尽すぎない？　全然本気を出してないのに、負けちゃった。まあ、六大神様全員で挑むような男なんですもの。私じゃ勝てなくて当然かもしれないけど」
人語を理解できる程度の知性があるとはいえ、魔獣相手に自分語りを始めることに自嘲する。しかし、自問自答のようなものだから別にいいだろうと結論を出す。それは皮肉にも、レクスやリバスを相手にする時のネロに似ていた。
「私に勝てる相手の子どもが欲しかった。私より強い男の子どもなん

ですもの。どんな子どもが生まれるか楽しみじゃない？」
今更ながらに思う。これは本音だったのだろうか。建前ではなかったのだろうか。自分より強い相手ということは、自分を守れるような存在ということだ。国や人類を守る自分を、守ってくれる誰かを欲していたのではないか。
「竜王国の王家は竜王の血筋だし、あのヒトと私の間にも子どもができるかもしれないわね」
侵入者の来ない神殿の守護にも暇など有り余っていたはずだが、この場所で生活するようになってから妙に頭が冴える。
「ぷーすぷーす」
「身籠ったら助けが来たりしないかしら。母が、そうだったように」
「ぷすぷす！」
「冗談よ」
特異な生涯を送ることを生まれる前から約束された少女は、まるで普通の女のように愛しい男の帰宅を待つのであった。

『僕』のために

エイヴァーシャー大森林のエルフの王国王都はこの数か月で著しい変化が発生した。狂王の崩御と、新しい王の戴冠によって。

外敵を倒すこともなく、強者としての素質を開花させるためと宣い女や子どもを戦場に送り出し、暴君として君臨し続けた精霊使いデケム・ホウガン。彼は、どこかからやってきた王の相と灰色の髪を持つレクス・セントラルに討たれた。

長年エルフたちを苦しめてきた法国軍は基地のほとんどを破壊され、大森林より撤退した。女や子どもたちは戦場に立たなくても良くなった。エルフたちは久方ぶりの平和を甘受しているのだ。

他にも変わったことがある。王都にエルフ以外の知的生物が訪れるようになったことだ。以前もダークエルフなど近親種は稀に訪れることがあったが、最近では亜人の姿も多い。森で逢っても不干渉を通していた種族もいれば、エルフを食料としか思っていないような肉食の獣人もいた。これには新たなる王レクス・セントラルの理想が関係している。

彼はこの大森林を自らが信仰する神『コスモス』の名において統一するつもりだと語る。前王が抱いていた『自分の子どもで構成された最強の軍団を作る』という野望に近いものに思われたが、具体性と現実味が違う。また、法国への復讐や連れ去られたエルフたちの奪還なども考えているらしい。その計画について多くのエルフはよくわかっていないが、新たなる王が前王とは比較するのも失礼なほど優れた人物だというのは理解できた。

というより、前王が新王より優れていた点などあるのだろうかというのが、新旧王両者の為人を知る者共通の思いだった。

そして、王が新たに始めたことの一つに『アオゾラキョウシツ』なるものが存在する。子どもを一か所に集めて魔法や戦い方、魔獣などについて教育を行うという行為らしい。大人が子どもに知識を教えるのはよくあることだが、定期的に場所や教育係を決めて大勢の子どもを集めて行うというのはあまりなかったことだ。

参加者の多くは前王の子どもであった。
新王は前王の子どもたちも愛してくれた。それこそ、前王より余程大切にしてくれる。だが、知的生物とは欲が出るものだ。王の覚えを良くするためにも、自分の能力を上げるためにも、子どもたちは授業に対して積極的だった。
ある朝の授業前、エルフたちの間ではとある話題で盛り上がっていた。それは今日だけでなくこのしばらくエルフたちの興味を独占している話題だ。
「こないだのダークエルフたち、何だったんだろうな」
「王と同じで、両目の色が違ったらしいけど」
「でも、すぐに帰ったんだよね？」
イギョウシュドウブツエンのビックリボックスと名乗る青年のダークエルフを始めとした四人組。彼らは突然現れて王との謁見を求めた。
通常であれば突然の訪問者と王を逢わせるなど有り得ないのだが、その四人組にいた子ども二人が問題だった。彼らは王の相、左右で色の違う瞳をしていたのだ。王も心当たりがあったのか、ビックリボックスの名前を聞いた途端に逢うことを決めた。謁見の際は自分以外のエルフを部屋から追い出したため、どのような内容を話したかは不明だ。『神』もその場にいたらしい。
新王が言う『神』。即ち大神コスモス。王都のエルフはその姿を見たことがない者が多い。しかし、その声を聴いたことはある。大地が砕けたのかとばかりの巨大な咆哮だった。実際に姿を見たエルフや亜人の話では、言葉では表現できないような、思い出すだけで身震いするような恐ろしい竜だそうだ。『神』に恐怖して隷属を決めた部族も少なくない。
四人組はその日の内に帰っていった。彼らは自分と同郷であり、また来る可能性が多い、とだけ王は語った。それ以外の一切は不明だ。王都は軽いパニック状態に陥るほどその話題で持ち切りだった。大人たちがあれやこれやと言い合えば、子どもにもそれが伝染するのは必然である。

そんな場に一つの影がやってくる。
「おはよう、可愛い生徒たち。今日も元気か？」
ミノタウロスのアンデッド、リバスである。彼を確認した途端、子どもたちは話を止めた。
「先生！」
「おはようございます、先生」
「元気です！」
「そうか、そうか」
あらゆる生きる者の敵であるアンデッドが現れたのも関わらず、子どもたちに恐怖の色はない。当初は泣き出す子もいたが、数度の授業を通して慣れた。これは子どもたちでなく都市のエルフたちも同じだ。アンデッド全般を信頼しているわけではない。ただ、リバスを特例として認めただけだ。
これはアンデッドであるまじきあまりにも人間臭い仕草や知性的な物言いも要因となっている。
彼だけでなく、大虎「ウェス」や二足歩行の竜「ネロ」なども最近では随分と慣れてきた。
「さて、本日の授業は効率的な拠点襲撃のやり方だ。小さな基地から大きな都市までやっていくぞ。午後からは実技訓練も兼ねて法国の基地跡にも行くから心しておくように」
『はい』
子どもたちの異口同音の返事に、牛頭のアンデッドは大きく頷くのであった。
法国へ宣言した開戦まで十二年。先にあちらから動き出す可能性も高いが、それまでの間に戦力を整える必要がある。六大神はともかく、法国軍の規模やアンの実力などから法国のおおよその戦力は把握できている。十二年の間に大森林のあらゆる知的生物を統一し、法国と戦えるまで鍛え上げる。それがネロの計画だ。
不安要素も不確定事項も多いが、一つ一つこなしていくだけだ。
そのための、教育である。優秀な指揮官・教育者を作り出せばそれだけで軍隊としては強固になる。今は幼子の基礎教育だけだが、どう

にか外部から専門的な知識を持つ者を教員として招けないかを検討している。特に、魔法に関してはエルフには森司祭しかいないため、攻撃向きの魔力系が不足している現状をどうにかしたい。

六大神の動きに警戒しながら、今日も真王国は十二年後に向けて下積みを続けるのであった。

■

そう遠くない未来、魔導王となるアンデッドがアンデッド作成を日課とするように、ネロ・ネミートスにも似たような日課がある。

それが眷属と『試練の果実』の作成だ。

まず眷属について。便宜上眷属などというそれらしい呼び方をしているが、実際は〈万魔血成（ペイヴァルアスプ）〉によって召喚したモンスターたちだ。ダメージを受けた時に発動するカウンタータイプの召喚能力と合わせて使うタイプの特殊技術。この特殊技術を使った場合、ユグドラシルでは能力の強化と召喚時間の延長ができる程度だったが、この世界では半永久的に現界される仕様になっている。

ただし、召喚するモンスターは一日ごとに試行錯誤を重ね、微調整を繰り返し、慎重に選ぶ必要がある。まず〈万魔血成（ペイヴァルアスプ）〉は一日に六度までしか使用できない。また、召喚されたモンスターの食事を考えると大食漢の種族は避けたい。おまけに、ネロは自身の能力のデメリットで三十三より上のモンスターにおけては同種を二体以上召喚できない。

ネロの一日はその日召喚する六体の選定から始まる。単独ではなくレクスと共同で行うが、リバスは基本的に参加しない。彼には彼で別の仕事がある。

おおまかな予定は立ててあるが、その予定通りに召喚していいかのかどうか。一体か二体の変更でいい日もあれば、六体全ての予定を変更する日もある。そして、それが正解か間違いかは分からない。失敗したと一か月後に判明する可能性だって大いにあるからだ。

「悪魔か天使かアンデッドみたいに不眠不休で動ける兵団とか欲しい

な。そういうアイテムもあったはずだけど、持ってないしな。最下級のスケルトンが百体あるだけでだいぶ変わるんだけど」
「確かに食事も休養も不要なアンデッドなら便利な労働力になったでしょうね。まあ、いないんですが。我が本体は、リバス以外のアンデッドは召喚できませんものね」
「インフラ開発が全然進まねえ……。水や火を操れる魔獣ならいくらでも作れるんだが。法国でアンデッド含むモンスターを労働力にしている様子はないし、スルシャーナたちは永続召喚できないのかね」
「どうでしょうねえ。信仰の問題では？」
「六百年あれば改善できそうだけどな。それとも別の問題があるのか？　他国と使用禁止条約を結んでいる、とか」
　文字通り身を削って眷属を作成した後、今度は『試練の果実』だ。
「しかし、これが作れるようになるとはな……」
　ユグドラシルでは微妙系アイテム扱いだった『試練の果実』。食べれば強くなれる。ただし、どのように強くなるが、どれほど強くなれるかは完全にランダム。戦士、修行僧、聖騎士、野伏、暗殺者、魔術師、森司祭、神官、吟遊詩人の九種の中からいずれかをレベル五から十五修得できる。レベル九十六以上が食べてもレベル百になることはない。また、二個以上食べても効果はない。
　このアイテムでレベル百になることが超レア種族『小さな世界喰い』の獲得条件の一つだったようだが、果たして他にどのような条件が必要だったのかは定かではない。当時のネロの状態からギルド拠点の喪失やワールドエネミーとの交戦経験などが考えられるが実証の手段はない。六大神に殺された時、ネロは死のペナルティとして「ワールドウォッチャー」という職業を喪失している。これも関係しているかもしれないが、やはり実証の手段はない。
　そんな林檎型アイテムはネロをワールドエネミーへと変貌させたアイテムだが、何の因果かネロはこのアイテムを作成できるようになった。『小さな世界喰い』の能力の一つである。一日九個まで作ることができる。無条件で作れるわけではなく、ネロのＭＰ、この世界で言う魔力を素材とする。魔力の消費は微々たるものなので、眷属作

成のついでにログインボーナス感覚で作っている。
ユグドラシル基準で言えば間違いなく微妙系能力だ。実質無料で食料を作れる以上の意味はなかっただろう。
しかし、ユグドラシル以上に弱肉強食であり、強さの重要性が重いこの世界において、食べるだけでレベルアップが可能な『試練の果実』はどんな金銀財宝よりも価値があるようだ。この果実の供給を条件に傘下に入ることを承諾した亜人の部族も少なくない。おそらく食べて強くなって下克上を狙っているのだろうが、逆に心をへし折られることになる。この大森林の生物の強さの上限は、すでに死んだデケム・ホウガンのような例外を除き、精々が三十後半から四十程度。それが最大値を引いたところでレベル六十にもならない。レベル百のネロやレクスには遠く及ばない。ネロが世界喰いになったように隠れた仕様が発見される可能性もなくはないが、その実験も兼ねてエルフや亜人に食べさせている面もある。
今のところ、ネロが知る『試練の果実』を逸脱するような結果は出ていない。最大値のレベル十五を引き当てた者は複数いるが、既存のデータの確率的に有り得る範囲だ。戦力強化には使えるが、如何せん、完全にどの職業を得るかが分からない。そのため、その種族との食い合わせが悪い職業を得ることもある点は少々不満だ。
ネロやレクスが食べても変化はなかった。他の眷属たちも同じだ。ＮＰＣや傭兵モンスター、ギルド拠点のＰＯＰモンスターでも同じ結果になるかは検証のしようがないため断言できないが、同じ結果になるのではないかと予想している。
他の問題点で言えば現状では戦闘職しか育てられないところだろうか。外部からドワーフなど物作りが得意な種族を招聘したいが伝手がない。
ワールドエネミーの特典の一つ、『領地改造』を使えばアダマンタイトの鉱山でも酒が湧き出る泉でも好きに作れるのだが。……本音を言えば最上位の希少金属やバフ付き飲料の湖でも作りたいところだが、この大樹海の性質ではそれが限界らしい。エリアそのもののレベルとでも言うのか。初心者用のフィールドで上級者向けのアイテム

は作れないようだ。
　ちなみに、この果実以外にも、ネロには他者を簡単にレベルアップさせる能力が二つある。どちらもワールドイーター・ラーヴァの権能だ。しかし、『試練の果実』よりも制限や条件があるため、安易には使えない。それこそこの世界の強者を懐柔するために温存しておくべきだろう。
「本日分作成完了っと」
　ネロ・ネミートスはレクス・セントラルに『試練の果実』を渡す。
　作成した果実をどこの誰に食べさせるかはレクスに一任している。一日の終わりに誰に食べさせたかは確認する。果実だけでなくエルフや亜人と直に接することのほとんどは彼に任せている。表向きの、事実上の王は彼なのだから。
「お疲れ様でした、我が本体」
「うん。疲れるのはこれからだけどね」
　眷属と果実を作った後も多種族国家の君主たるネロには仕事が山ほどある。明日作り出す眷属の見直し、すでに召喚した眷属の配置の検討、配下に入ったエルフや亜人の詳細の確認、自らの能力――世界喰いの権能の検証、法国を始めとした外部の勢力の警戒。
「やっぱり人材を育成したいな」
　リバスにエルフ王の遺児たちを教育させているのは国力強化の一環だ。武人だけでは国は回らない。むしろ戦闘面に関しては戦闘民族寄りの亜人たちに任せるつもりだ。エルフたちにはむしろ文官になってもらいたい。
　現状では細かい所までネロやレクスが決定しなければ事態が動かない。真王国は独裁国家として運用していくつもりだが、本当に支配者の思惑でしか動かない国が真っ当に機能するはずがない。少なくとも、真王国は法国を上回る必要があるのだ。
　国家運営者としても、ネロは六大神に負けるわけにはいかない。彼らよりも、美しく、強く、正しく、魅力的な国家を作らなくてはならない。
「いや、これも傷を埋めようとしているだけなんだけどさ。コスモス

真王国？　はっ。コスモスウェイの代わりを求めているだけだ」
　我ながらひどく滑稽なことをしている自覚はある。だが、六大神への復讐と同じく、頭では分かっていてもやめることはできないのだ。そんな出来た人間なら、もっと上手くやれた。あの日、あの瞬間までユグドラシルに残っていない。
「我が本体よ」
「何だ、我が頭脳」
　リバスは「魔王の心臓」を自称している。レクスはそれに対抗するように「大神の心臓」を名乗る。故に、たまに両者を「我が心臓」と「我が頭脳」と呼ぶ。実際レクスは賢い。オリジナルがユグドラシル公式中ボスだけあって知能指数は創造主のネロより上だ。
「私は世界を滅ぼすために、ウンエイとセイサクに生み出されました。私は世界喰いを生み出すために、貴方様に作り出されました」
「うん」
「貴方様が世界喰いになられた以上、その役目は終わりました。いまの私は貴方様のためにあります。貴方様は――何を望まれますか？
　いま最も欲しいものは何ですか？」
　質問の意図は理解できた。自分の血肉から生まれ、自分の頭脳と呼ぶエルフだ。自分の分身で、自分自身のようなものだ。理解できないはずがない。
　これは自問自答のようなものだ。
「彼女の心が欲しい」
　だから、この言葉はきっと口にする前から分かっていた。
「……彼女とは、白黒なあれのことですか？」
「そうだ」
　前エルフ王の娘。法国からの刺客。混ざり物の少女。孤独で哀れな子。六大神の装備を受け継ぐ戦士。愛玩と寵愛と執着の対象。アン。
　本当は彼女のフルネームを知っている。ネロの鑑定能力は接触した相手の情報を読み取るもの。同衾までしている仲だ。すでに使っていないはずがない。相手はそれに気づいていない。だから、彼女を

本当の名前では呼ばない。彼女の側から明かしてくれるその日まで。
「スルシャーナたちから彼女を奪う。それを以って、我が復讐は終わるだろう」
　それを聞いて、レクスは目を伏せた。
「分かっていたことですが、貴方様は――『僕』はすでに気付いているのですね」
「何を？」
「いえ、何でもありません」
　レクスは跪き、頭を下げた。臣下の礼であり、信徒の誓いだった。
「ならば私は貴方様のために、今度こそ完全なる国を。――理想と永遠の演目を」
「そっか。くれるならもらっておくよ」
「あ、それとアン以外にお求めになられる女性がいたらお教えください。ご協力いたします」
「余計なお世話すぎるぞ、ハーレム野郎」
　レクスはすでに複数の女エルフと肉体関係を持っている。人間離れした嗅覚が僅かだが、行為の残り香を捉える。前王と関係があった女性も多いらしい。前王のように無理やり関係を迫るようなことはなく、前王の子どもたちも冷遇しているわけではないため、ネロから言うことはないが。
「この身は最後にして唯一の灰妖精。桜を失いし民として、この血を残すことは義務かと存じます」
「あっそ。勝手に盛ってろ」
　レクスが退出した部屋で独り、前日にレクスがまとめた書類と向き合うネロ・ネミートス。現在は大した量がないが、国の文化水準がこれから上がれば増大するだろう。それを思えばレクスが提出しているだけの現在の量で慣れておく必要がある。この程度で手間取っているわけにはいかない。
　かつては霧の空間のコテージで仕事をしていた。だが、アンが猫のように邪魔してくることが多いため、こうして仕事の際はこの部屋に移るようになった。やはり『仕事場』と『住居』を分けると精神が切

り替えやすい。出勤モードとでも言えばいいのか、現実世界で社会人をしていた時の名残だ。
ネロ・ネミートスの存在を知る者は国内には少ない。初めて邂逅したエルフ幼女のミーギは口を閉じてくれている。彼女以外の「国民」には人間形態を見せていない。二足歩行の竜「ネロ」として都市を歩き回ることはあるが、人間形態があると思っている者は皆無のはずだ。正体を知っているスレイン法国や異形種動物園から情報が漏れた痕跡もない。捕虜のアンを除けば、ネロ・ネミートスを知る者は己の眷属のみと言って過言ではない。
書類の整理が終われば、気配遮断を使って支配下に入っていない亜人の小規模国家の偵察の予定だ。
だが、二十分ほどでレクスが戻ってきた。いつもであれば、彼が戻ってくるのは夕方のはずだ。
「本体よ。異形種動物園御一行様がいらっしゃいました」
それは期待していたよりは遅く、予想していたよりは早い再会であった。敵か味方かも分からないプレイヤーの相手はスレイン法国が攻めてこない現状では最大の優先事項だった。
「通して。あ、エルフにお茶でも淹れさせて。一番いいやつ」
「畏まりました」
正直、少し楽しみなのだ。
腹の探り合いこそあれど同郷との会話は確実に息抜きとなる。
「それと、森の入り口がいつもより騒がしいようです」
「ん？」
「情報は断片的であり、個人的な見解になりますが、大物が来るのではないかと」
レクスの頭脳で出された結論なら正しい可能性が高い。もしかすると、今度こそ六大神が動いたのかもしれない。だが、お客様を放っておいて敵の顔を見に行くなど失礼極まりない。対応が早すぎると此方の意識だけ強そうに見えて癪に障るし、もしも違っていたら落胆が半端ない。だが、無視もできない。
何より、特別公演には早いだろう。まだ役者も台本も準備できてい

ない。
「リバスでも行かせておくか。本日の青空教室は中止だ」
　最悪、死んでもまた別の紫幽王を作ればいい。スルシャーナたちだとしても、今回は大根役者の三文芝居で我慢してもらうとしよう。
「それがよろしいかと。……子どもたちの教育が遅れると文句を言いそうですが」
「埋め合わせは考えないとな。それじゃあ楽しい雑談タイムからの交渉だ。仲間にはなれずとも、友達にはなりたいよね。せめて敵にはならないように気をつけないと」
　場合によっては、六大神対魔王竜という最悪の舞台の観客になってもらいたい。特別チケットを受け取ってもらうには、仲良くならねばなるまい。
「楽しい見世物のためには根回しもしっかりしないとなあ。なんちゃって」

『地獄』に神を見る

スレイン法国とエイヴァーシャー大森林の境界。

この地は本来、エルフの国に出兵する軍人くらいしか訪れないはずの場所だった。軍が基地を置くような場所に山賊や冒険者等が近づくわけもなく、少なくとも一般人は近寄ることのない。

だが、ある日を境に軍人以外の人間も多く訪れるようになった。あの日――神の敵たる巨竜が襲来し、神の加護の前に尻尾を巻いて逃げた日に出来た破壊の痕跡。まるで世界を滅ぼす天変地異の如き災厄が暴れ、しかし偉大なる神の加護によって遮断された。あの奇跡の痕跡を見ようと、人々はこの地を訪れるようになった。

情報伝達の遅い世界だ。最初は耳の早い近隣の都市に住む好事家や信仰心の熱い神官くらいだった。しかし、日を重ねるごとに人の数は多くなる。今となっては立派な観光地となり、遠方――他国からわざわざ来訪する者も数えられないほどになった。

境界線の前にいる、整った顔の優男も神の奇跡を見るために訪れた一人だ。

「――神よ」

彼の顔からは普段浮かべている柔和な笑みが消え、歓喜の涙をその両目から溢れさせた。片膝をつき、忠誠の礼を取る。誰への忠誠かなど語るまでもない。偉大なる神々に対する忠誠であり信仰だ。

「おお、神よ」

この奇跡を見て、神の存在を疑う者などいない。この光景に触れて、神の威光を理解できない者などいない。この御業を知って、神の慈悲に感謝しない者などいない。

奇跡の壁を見れば深い信仰心を持つ者でさえ己の敬虔さを恥じる、などという話がある。これを聞いた時、彼は普段から神への信仰が足りぬからそのようなことになるのだと呆れていた。最高執行機関の面々も同じことを言うのだから失望の念さえ覚えたものだ。しかし、それは間違いだった。嘲笑されて然るべきなのは自分だった。他者から度々狂信者と評価される彼でさえ例外ではなかったのだ。むし

ろ信仰心が厚いからこそ、この光景を見れば感極まってしまう。
「神よ――!!」
彼の名はクアイエッセ・ハゼイア・クインティア。『一人師団』の異名を持つ、『漆黒聖典』第五席次の地位を与えられた男である。
「皆様の愛は、慈悲は、加護は今もなお人類を守ってくださっているのですね……!」
彼の言動を大げさと笑う者はいない。少なくとも、この場にはいるはずがない。この光景――大森林に残る破壊の痕跡と、それが線を引いたように遮断されている地平を見て、神の御業だと思うのは自然なことだった。
まして、この破壊が『神の敵』によって齎されたのならば一層、神への信仰を捧げるというものだ。
大神を僭称する巨竜コスモス。六大神に滅ぼされたと言いながらも、その存在は誰もが知らなかった。でっち上げでなければ、記録に残す価値もないほど矮小な存在だったのかと推測するだろう。しかし、この光景を見た者ならば逆の可能性も考えるはずだ。――あまりにも強大すぎて、神話に残すべきではないと判断されたのだ、と。
だが、コスモスの脅威度はそのまま六大神の偉大さの証明ともなる。故にこそ、この場を訪れた人々は祈るのだ。神の絶対さの前に跪くのだ。
「……」
クアイエッセの狂喜を尻目に、漆黒聖典の隊長たる第一席次は空を仰ぐ。
隊長とクアイエッセがこの場にいるのは漆黒聖典としての任務だが、目立つわけにはいかないため一般人に扮しての行動だ。歓喜の涙を止められないクアイエッセを咎めるつもりはない。彼ほどではないにしても、周囲には彼と似たような反応をする信徒も大勢いる。それほど目立っていない。
謎の吸血鬼の襲撃により、漆黒聖典は破滅の竜王の支配という重大任務に失敗した挙句、隊員二名を死なせてしまった。エルフ王を殺しているであろう番外席次から何を言われるかと気落ちしながら帰還

した隊長に告げられたのは、番外席次の敗北・行方不明と巨竜の襲撃、そして『奇跡の壁』だった。
当初は信じられなかった。コスモスという巨竜の存在も、その侵攻を防いだという奇跡の壁の噂も。そして何より、あの自分より強い番外席次が敗れ、彼女を倒した竜人ですら前座に過ぎないなど。
だが、この光景を見てしまえば納得せざるを得ない。所詮、自分たちは神の血を引いているだけで、神そのものではないのだと自覚した。あくまでも自分たちの力など、神の力の一端でしかないのだと。神が戦っていた存在とは、まさに天災の如き魔王だったのだ。
分かっていたはずだ。自分より強い存在がいる。番外席次に初めて出会い、惨敗した時に嫌と思うほど思い知った。彼女より強い存在の可能性を全く考えたことがなかったと言えば嘘になる。
「それでも、これはあんまりではないですか……」
視界の大部分に『地獄』が広がっていた。
底が見えないほどの深く大きな地割れ。嵐でなぎ倒されたような巨木の数々。間欠泉のように溢れるマグマ。不気味な煙を上げる水流。燃えるものがない場所で燃え続けている業火。溶ける気配のない山のような氷塊。巨人すら矮小に感じるほどの巨大な足跡。それらすべてが見えない壁で遮断されたように、ある直線状から途切れている。
これがすでに一か月以上の時間が経過していた巨竜の攻撃の痕跡など信じられない。法国が百年近い時間をかけて作った『道』があったなど想像もできない。
勝敗だの戦闘だの、そんなスケールで考えていいような相手ではないだろう。自分たちと相手には虫けらと巨人ほどの差がある。神の偉大さは実感できるが、その神ですら完全に滅ぼすことができない相手が件の巨竜なのだ。その恐怖を想えば、クアイエッセのように狂信に耽ることもできない。
神人たる隊長は他の人間よりも神に近い。だからこそ、自分と神の隔絶された距離を認識することに、他の人間よりも衝撃を覚える。コスモスに囚われの身となっている番外席次も同じだろう。

隊長の個人的な感想だが、最高執行機関は浮かれている。神の奇跡を目の当たりにして、神の不始末を自分たちが片づけられるという名誉に恵まれて、舞い上がっている。本人たちに自覚があるか分からないが。やはり彼らも法国の人間だ。宗教国家の中枢にいるに相応しい信仰を持つ以上、ぷれいやーという脅威に対して、神の威光で目が眩んでいる。

自分の何倍も人生経験にある彼らに対して余計な心配かもしれないが、どこかで致命的な失敗をするのではないかと気が気ではない。

巨竜以外にも、土の神殿を襲った謎の爆発、陽光聖典を殲滅させた魔法詠唱者アインズ・ウール・ゴウン、漆黒聖典が遭遇した吸血鬼と解決していない問題は山積みだ。最高執行機関の中にはこれらが繋がっているのではないかとの考えもあるそうだが、流石にすべてが繋がっているということはないだろう。

「今は、任務をこなすだけですか」

今回の任務は法国としても人類としても非常に重要な内容だ。本日この場をバハルス帝国筆頭宮廷魔術師フールーダ・パラダインが訪れる予定になっている。隊長たちの任務の内容は彼を含めた帝国一行の影ながらの護衛だ。

本来であれば帝国最強の戦力が外国に出るなど滅多にあることではない。しかし、法国が各国にコスモスの脅威を呼び掛けた結果として、帝国はフールーダをこの一件の責任者に抜擢した。脅威を察知できたというよりは、法国が明け透けなほど助力を求めた結果だろう。

フールーダは逸脱者だ。神人を除けば漆黒聖典のメンバーよりも単純な能力値は高いだろう。彼を傷つけられる者など世界を探してもそうはいない。だが、ぷれいやーは別だ。神の力を持つ存在は何事においても例外だ。

コスモスは大森林から出られないようだが、彼の従属神はそうではないらしい。精強な黒衣と紫炎を纏った牛頭のスケルトン、リバス。そのアンデッドは大森林の外にある基地を襲撃した。姿を見せたのは一度だけだが、その一度が問題だった。

思惑があって一度だけの襲撃だったのか。何か『奇跡の壁』のよう

な制限があったからこその一度だったのか。
最高執行機関からは『奇跡の壁』の正体につながる何かが見つかれば即座に報告するようにという命令も受けている。しかし、マジックアイテムにも信仰系魔法にも疎い隊長では何も見えてこない。
「クアイエッセ。そろそろ時間だ」
「っ……。ええ、分かっていますよ、隊長」
心底不服だろうが、すぐに普段の柔和な笑みを浮かべるクアイエッセ。神への狂信は漆黒聖典の中でも特出すべきものだが、だからこそ彼は常に冷静だ。
「万が一、件のアンデッドやエルフ王が出た場合は我々の判断で戦闘になっても構わないと言われている。無論、マジックアイテムで正体は隠すことになるが」
「理解しています」
フールーダが来るまでの間、神の力、否、ぷれいやーの力について考える。六大神と巨竜コスモスの戦いを夢想する。
果たして、神はどのようにして魔王を滅ぼしたのだろうか。
自分たちも同じように魔王を倒せるのだろうか。――神はどこにもいないのに。

■

度肝を抜かれたとは、まさにこのことだった。
「これは何とも……」
バハルス帝国宮廷魔術師筆頭フールーダ・パラダインの長い人生において、これほどの衝撃を受けたことはなかっただろう。
魔王が齎した破壊と、それを防いだ神の奇跡。どんな自然災害にそんな御大層なハッタリをつけて喧伝しているのかと内心で嘲笑していた。しかし、この場に来たことでそんな余裕は消え去った。
人間の想像力の限界を教えるような『地獄』が広がっていた。
自分が全力で魔法を行使してもこの百分の一も再現できないであろう。

「ふ、フールーダ殿」
共に来ていた四騎士のひとり、『激風』ニンブル・アーク・ディル・アノックが震える声で自分のことを呼んだことに気づいて、顔だけを其方に向ける。
帝国でも指折りの騎士である彼の顔は恐怖で引きつっていた。彼だけではない。今回の法国訪問で同行していた帝国の人間のほぼ全員が同じような顔をしていた。一部、周囲の法国民のように祈りを捧げている。
今回、フールーダは法国という国家に要請されて訪問している以上、皇帝ジルクニフの名代として来ているに等しい。つまり、同行した者たちも一人の例外もなく帝国の威光に恥じない者ばかりだ。フールーダの自慢の高弟もいる。そんな者たちをしても、この光景に恐怖や驚愕以外の何を感じればいいのか分からない。
これは人間が関わるべき案件ではない。人間に何かができるはずがない。一刻も早くこの場から逃げて、この事態を軽く考えているであろう皇帝に真実を伝えるべきだ。誰もがそんな風に考えていた。決定権を持つこの男以外は。
「神が滅ぼした竜が復活した、か。あながち嘘でも出鱈目でもないのやもしれぬな」
この光景を作り出した存在の底知れなさを理解してなお、フールーダは恐怖よりも興味が勝った。自分の知らない世界、自分では手が届かない領域にいる何かの手がかり。それはフールーダが求めてやまなかったものだ。
もしかしたら、自分はようやく見つけたのかもしれない。生涯探し求めた魔法の深淵を覗くヒントを。であるにも関わらず、何も得ずに帰るなど冗談ではない。
「さて、法国からは当時現場にいた参謀や兵士から話を聞けることになっているがどのような証言が聞けるのか」
数刻前まではどんな作り話を聞かされるのかと辟易していた。だが、実際に聞かされるのは真実なのであろう。多少の誇張も入るのかもしれないが、真実と嘘も見抜けぬほどに出鱈目な話を聞かされるこ

とは間違いがない。
「かの竜の力、是非とも我が眼で見定めたいものよ」
フールーダの目は特別な能力を有している。見た相手の魔力を使用可能な最大位階を含めて見抜く事が出来るというものだ。簡単に言えば、相手が魔法詠唱者としてどの次元にいるのかを一目で理解できるのだ。
当然、自分より上の位階魔法を使用できるものを見たことはない。もしかしたら、巨竜コスモスが使用する魔法は位階魔法よりも古き竜王たちが使う『始原の魔法』に近く、自分の目で見ても判定は不可能かもしれない。それでも、と期待はせずにいられない。
今回、皇帝の同行がなくて本当に良かったと思う。あらゆる決定権が自分に与えられていることに感謝しかない。虚偽や隠匿などできるわけがないため、次に訪れる時があれば間違いなくジルクニフも来るだろう。多忙を極める皇帝だが、これは本当に人類の未来を決める案件だ。無理を通すしかないと判断するはずだ。
つまり、フールーダがコスモスに自分の望む形で接触する機会は今回で最初で最後かもしれない。これを逃してなるものか。
「こうなると、王国の選択が本当に愚かだったと言わざるを得ぬな」
バハルス帝国と戦争状態にある隣国、リ・エスティーゼ王国。
内通者の話では、かの国にも帝国と同じように法国から書簡が届いたそうだ。しかし、王国はこれを対岸の火事として協力しない姿勢を取っているという。それだけならば非難するつもりはない。帝国も法国に貸しを作るために動いているようなもので、今日この瞬間まで本気ではなかった。
だが、エルフに逆転された法国だけではなく参戦を検討している帝国を見下しているらしい。内心では、毎年恒例の戦争がないかもしれないと胸を撫で下ろしているだろうが。
そんな状態の王国が使者など派遣するはずもない。そもそも、王国の者がこの光景を見たところで、その脅威を国に正しく伝えられるとは思えないが。どれだけ真剣に説いたとしても御伽噺を聞いたように笑うのだろう。あの国の貴族はそういう者たちだ。

決して間違いではないのだ。それが普通だ。常識的な反応だ。しかし、普通ではこの大災害を相手に生き残るなど不可能だ。
法国は軍隊の壊滅で思い知った。帝国はこの段階で気づけた。王国が知るのはまだ先になる。そして、これは致命的な差になると、政治に疎いフールーダでも理解できる。
「そういえば、アンデッドも出たそうだな。竜もいいが、私としては其方にも興味が――」
「――――ほう？　そいつは嬉しいな、爺さん。本体だけじゃなくて俺のことも気にしてくれるとは」
突然の声。
見れば誰もいなかったはずの正面に、形を持つ絶望が立っていた。
「騒がしいからもしかしたら六大神かも、と来てみれば違ったか。どこまでも腰の重い連中だ。まあ、それなりに偉そうなやつだから良しとするか。まずまずの演目には仕上がりそうだ」
頭部は牛の骸骨。首から下の形状は人型。多くの者はミノタウロスのスケルトンだと判断するだろう。だが、身体も衣服も紫の炎で包まれているのならば、ただのスケルトンとは思わないはずだ。
紫幽王リバス。
「はじめまして。我こそは魔王の心臓！」
骨だけの顔だというのに、その怪物が笑っているのは嫌でも伝わった。その場にいた誰もが理解した。これこそは生命の敵であり、神の敵であり、人類の脅威であると。
そして、その邪悪な存在を見て、フールーダは涙を流しながら五体投地をした。
「わ、私を――」
涙は恐怖だと認識した。地に伏せたのは心が折れたからだと判断した。
あまりにも早い降参の体勢に、リバスは一瞬で失望した。力量の差を理解できる賢さはいい。だが、あまりにも心が折れるのが早すぎではないかと。
「命乞いかよ。聡明なのは美徳だけど、こんな展開は観客が白けちま

うだろうが」
落胆するリバスに、フールーダは予想の斜め上の台詞を口走った。
「私を貴方の弟子にしてください！」
「おい、爺さん。正気か？　俺はアンデッドだぞ？」

神算鬼謀

二度目の来訪となる異形種動物園御一行。アインは勿論いたが、今回は同伴者は双子のダークエルフだけで、前回いたびっくりボックスと名乗った青年はいなかった。

城に招き入れ、前回と同じように人払いは済ませる。当然、ネロの姿はエルフたちに見せない。何かがいることはエルフたちも理解しているだろうが、あえて好奇心に従う愚か者はいない。このあたりは、前王の教育の賜物だろうか。

まずは世間話から始めることにした。と言っても、ネロが知らない王国や帝国の話だったが。それも、スレイン法国以外で信仰されているという四大神信仰について。

「えー。じゃあ四大神からハブられてんのって、スルシャーナとアーラ・アラフなの？　スルシャーナは分かるんだけど何でアーラのやつまで？　あいつ命の神とか言われているくせに、死の神と一緒にハブられているって……。何やってんだ。絶賛戦争中の僕から言うことじゃないけど、あいつは別に大衆から嫌われるようなことをするタイプじゃなかったと思うけど」

「死の神がスルシャーナで、命の神がアーラ・アラフって言うんですね。ちなみに、何で死の神の方が四大神信仰から弾かれるのは分かるんですか？　死の神なんて言葉から大体は察しますけど」

「うん、お察しかもしれないけど、あいつアンデッドなんだよ。しかも死の支配者（オーバーロード）だよ。ダンジョンにいたらうぜえ最上位アンデッド。まあ、あいつはロールプレイ重視だったから鎌を振り回すために戦士職も取っていたけどさ」

「オーバーロード、ですか」

スルシャーナの種族が最上位のアンデッドであることに何か引っかかることがある様子のアイン。

「そうか。よりにもよって、オーバーロードか」

「あの恩知らずがオーバーロードであることが何か？」

「そう、ですね。今日来た本来の目的も関係しているって言うか、タイ

ミング的にもちょうどいいし本題に入らせてもらっていいですか？」
首肯するネロ。こほんと咳払いをするアイン。
「あ、本題に入る前に、一つ聞いておきたいことが」
「何です？」
わざわざこのタイミングで聞いてくるということは、本題とやらの前振りと考えた方が適切だろう。つまり、かなり関係していることだと思われる。
「アインズ・ウール・ゴウンを覚えていますか？」
予想外の名前に一瞬だけ思考が止まる。しかし、異形の精神がすぐに冷静さを取り戻す。同時に、人間だった頃の残滓が落ち着いたはずの精神をかき乱す。それは知的生物の欠陥というより、防衛本能に近い。
「ユグドラシルプレイヤーなら忘れるわけがないでしょう。異形種なら知らないはずがないでしょう。まして僕は初期勢ですよ」
ユグドラシルの黎明期、異形種のプレイヤーは特定のワールドから出ないのが常識だった。特定のワールドとは、異形種に対してボーナスのあるワールドのことだ。異形種狩りが流行していたこともあり、異形種プレイヤーが他のワールドに出ることは自殺行為だった。
その自殺行為を積極的にしている集団がいた。九人の自殺点――ナインズ・オウンゴール。後にギルド：アインズ・ウール・ゴウンの前身となるクランである。
アインズ・ウール・ゴウン。四十一人で十大ギルドの一角に上り詰めた魔王の軍勢。全ギルドで唯一、ワールドアイテムを二桁所持していた異常者の集まり。
「憧憬でした。同時に恐怖でした。良くも悪くも、何だこいつらって、何度思ったことか。最盛期の十大ギルドはどこも強さ上で個性的な連中ばかりでしたが、あいつらはその中でも異質だった」
彼らの偉業・悪行は枚挙に暇がないが、特に有名なのは『大侵攻』だろう。
サービス開始史上最大の連合による大作戦。アインズ・ウール・ゴウンのギルド拠点への総攻撃。参加人数は千五百人とも言われてい

る。この人数ならばいくら何でもアインズ・ウール・ゴウン側が負けると思われていたが、その全員が返り討ちになった。公式のメールサーバーが抗議のメールでパンクしたことは語り草だ。動画サイトに実際の映像が出回った時はやばすぎて爆笑した。ここまでやるか普通と笑うしかなかった。

前人未踏の第八階層。魔王たちの居城、その切り札。あれはまさに空前絶後の暴力だった。

「正直、大侵攻前は祭りに参加し損ねたと悔しかったんですけど、後から参加しなくて良かったと思いましたよ」

あれはユグドラシルという世界のトラウマだ。参加した千五百人は当然だが、観戦していたプレイヤーや運営さえトラウマになっているだろう。

おかげで、十大ギルドのギルド拠点攻略は予定を組む段階で頓挫することが多くなった。どれだけ人数がいても、ナザリック地下大墳墓の第八階層のような何かに叩き潰されるのではないかという悪寒が走るからだ。

「それで？　アインズ・ウール・ゴウンがどうかしたんですか？」

まさか彼らも此方に来ているのだろうか。流石に勘弁して欲しいが。せめて六大神との関係が落ち着くまでは。

「実は我ら『異形種動物園』は――アインズ・ウール・ゴウンのファンギルドなんです」

「おお、よくあるやつですね。……すいませんでした。まさかファンの前でとんだ失言を……」

「というわけで、俺の正体をお見せしますね」

アインの姿が歪む。ダークエルフの姿が、皮も肉もない骸骨へと変貌していく。如何にも魔法使いといった服装。この世界の人間であれば、死者の大魔法使い（エルダーリッチ）と思うかもしれない。だが、先程の会話で察しないほどネロも鈍くない。

「オーバーロードか」

おそらく先程までのダークエルフの姿は幻術。アンデッドが人間種に偽装する意味はあっても、人間種がアンデッドに変身する意味は

ない。この骸骨の姿が彼の正体かはまだ確定ではないが。偽装に偽装を重ねている可能性もなくはない。あらゆる種族に変身可能な二重の影（ドッペルゲンガー）かもしれない。

「先にアインさんの為人を知っておいて良かったよ。いきなりその姿を見たらスルシャーナだと思って殺しにかかっていた」

「怖いこと言いますね。俺の外装はモモンガ――さんを参考にしたんですよ。そっくりでしょう？」

だが、この物言いだとやはりこの姿がアインの正体かもしれない。名前は偽名かもしれないが。やたら凝った名前であるため、ユグドラシルでも使っていた名前なのかは判別できない。もっとも、ユグドラシルで使っていた名前があまりにもネタ感が強いため、かっこいい名前に改名した可能性もあるのだが。

アインという名前自体、「アインズ」から取ったものだというのは想像に難くない。

「いや、スケルトンの見分けなんてつかんし。さっきも言ったけど、スルシャーナも似たようなもんだし」

紫幽王くらいわかりやすい特徴があれば判断できるが、人間ベースのスケルトン系などどれも同じように見える。せめて角をつけるとか、額に第三の目用の穴があるとか、そういう差別化をして欲しい。

「ふーん。じゃあ俺を見てスルシャーナさんだと勘違いする可能性って結構あるんですか？」

「そこそこ高いんじゃない？　声も口調も物腰も違うから面識あったら気付くだろうけど」

思い出したがスルシャーナに対して「弱いんだからせめて外装で個性を出せよ雑魚」とかつてのギルドマスター、アルティメット太郎が言っていた。そういうところだぞ、と窘めたが効果はなかった。

「あ、そういえば、モモンガは肩の装備が特徴的すぎたな。あれがないと誰か分からないかも」

あの肩の装備を外装の一部だと誤認しているプレイヤーは結構多かった。アルティメット太郎もその一人だった。アーラ・アラフが指摘すると「役立たずのくせに一丁前に俺に意見するな」と反論してい

た記憶がある。
　ギルドの零落の理由など、ギルドごとに違うだろうが、『雪月花劇団』は間違いなくギルドマスターのパワハラとワンマンプレイのせいだ。彼にはそれが許されるだけの力があったため、ギルドとしての体裁はゲームそのものが廃れるまで保てたのだが。アルティメット太郎がギルドマスターだからこそ問題があったが、彼がいなければギルドが大きくなることもなかったため、あまり悪し様に言うのも難しい。
　それこそ、アインズ・ウール・ゴウンのモモンガはギルドマスターとの手腕がかなり良かったと聞いたことがある。クラン時代の代表者はワールドチャンピオンのたっち・みーだったが、ギルドになる頃に何か揉め事を起こして、モモンガがギルマスになったと随分昔に聞いたことがある。そんな込み入った事情を話してくれたのは誰だったか。アインズ・ウール・ゴウンのメンバーと姉妹だと言っていたような気がするが。
「いや、顎の尖り具合とかはモモンガにそっくりなのか……？」
「声も似ているってよく言われるんですけど、分かりませんか？」
「流石にわかんねえよ。記憶って声から薄れるって言うし。そもそも記憶に残るほどモモンガの声なんて聞いたことねえよ」
　不意に、わざとらしいほど不敵なポーズを取るアイン。外見も相まって如何にも魔王然とした存在がそこにいた。
「くっくっく。よく来たな、勇者よ。我こそは魔王モモンガ」
「うーん、それっぽさは一流っすね」
　本人の情報を思い出せないため、物真似のクオリティに点数をつけられない。だが、薄っすらと存在する記憶ではこういうことを言うロールプレイをするプレイヤーだったはずだ。随分と昔、自分が参考にした魔王のひとり。
「いま、世界で一番魔王らしいのは僕なんですけど」
「真王だの大神だの名乗っている癖に」
「それはエルフや亜人向けの名称ですので。神の敵対者以上に、魔王が相応しい存在なんていないでしょうよ」

仮にアインがモモンガのそっくりさんなファンボーイではなく、ファンの振りをするモモンガ本人だったとしても、ネロには判別ができない。もっとも、かの魔王がネロ程度にそこまでするとは思えないが。

「本題というのは、アインズ・ウール・ゴウンのファンギルドということでよろしいですか？　正直思ったほど重大じゃなくて安心しましたけど」

アインズ・ウール・ゴウンは敵が多かった。というのも、ユグドラシルはどちらかと言えば人間種が強い世界であり、人間種のプレイヤーが主流のゲームだった。強い異形種というのはそれだけで目の仇にされるものだ。ネロ自身もそうだった。

その上でアインズ・ウール・ゴウンは好き勝手やった。滅茶苦茶に暴れた。最悪のＤＱＮギルドとして君臨し続けた。敵が多くなるのは当然だ。逆に言えば、その姿に魅せられたファンが多いのも当然だ。そして、嫌われ者のファンというのはどこでも肩身が狭いものだ。それを明かすというのは勇気がいるだろう。

まして異世界転移なんて現実離れした状況に放り出されているのだ。初対面のネロに対して正直に伝えるには覚悟が必要な秘密だ。二度目ということで警戒心が解けたと思っていいのだろうか。

「いえ、これまでは前振りです」

「え？」

随分と長い前振りだったものだ。だが、アインの言う「本題」とは長い前振りに相応しいものだった。

「スレイン法国の特殊工作部隊『陽光聖典』が、アインズ・ウール・ゴウンと名乗る魔法詠唱者によって全滅したそうなんですが、何かご存じですか？」

「……なんですって？」

何を言っているのか理解できなかった。

陽光聖典という名称は初めて聞いたが、三日月湖の前哨基地を破壊した時に壊滅させた『火滅聖典』やアンが所属しているという『漆黒聖典』と同じような地位にいる組織であると推測はできる。要はスレ

イン法国の特殊部隊だ。
　法国は人類のために裏で活動しているようだし、ネロと全く関りのない場所で強者と戦闘を行っても不思議ではない。
「混乱しています。ちょっと待ってください。すぐ冷静になりますので」
　だから、ここで問題になってくるのは「アインズ・ウール・ゴウン」だった。
「確認ですけど、アインズ・ウール・ゴウンの誰かの名前ではなく、アインズ・ウール・ゴウンって名前の魔術師がいるってことですか？　ギルドの名前を個人の名前として使っていると？」
　ネロも今は無きギルド拠点の名前を拝借して大神を名乗っているため、ギルドの名前を使う発想自体をどういう言うつもりはない。だが、その名前がよりにもよってアインズ・ウール・ゴウンであるなら話は別だ。
　ユグドラシルのプレイヤー相手なら余程のにわかでない限り知っているであろう十大ギルドの名前であるなら、その名前を個人のものとして使う意味合いは違ってくる。
　彼らの悪名は洒落や酔狂で騙るには重すぎる。
「詳しい話の前に、第一印象を教えてください。ネロさんはこれを騙りだと思いますか？　本物のギルドメンバーの誰かが使っているんだと思いますか？」
「ま、まあ、ほぼ確定で本物だと思うよ。騙りで使うにはリスクのある名前だ、色んな意味でね。プレイヤーに通じる偽名ならもっと使い勝手のいい名前はあるだろうし」
　もしもアインズ・ウール・ゴウンではない誰かがその名前を使っているのだとしたら、その度胸に敬意を示そう。本人たちが知ったらキレるだろうが。過激かつプライドの高い連中なのだ。狡猾で陰湿でもあった。
「魔法詠唱者ってことは、モモンガかウルベルトかな。いや、タブラとかもある……？　ああ、勝手に魔力系だと思ってたいけど、やまいこや死獣天朱雀も魔法詠唱者ではあるか。ベルリバーは魔法剣士だっ

け？」
　記憶を辿れるだけ辿って口から出してみる。相手のファンギルドが真実かどうかの探りでもあったが、アインから感嘆の声が漏れていた。
「よく何も見ずにそれだけ出てきますね」
「そりゃ最盛期の十大ギルドの連中で気になる奴は大体頭に入ってるよ。名前と外装と大体の能力しか思い出せないけど」
　アインズ・ウール・ゴウンは敵が多いため、掲示板に攻略方法が晒されているメンバーが多い。ギルドマスターのモモンガなど最たるものだろう。それを参考に自分が一騎打ちするならどのように戦うかというシミュレーションはしたことがある。しかし、如何せん最盛期の情報だ。ゲーム終了のタイミングの情報でない限り、絶対的な信用はすべきではない。他ならぬネロがそうなのだから。当然、こちらの世界に来て新しい能力を得た可能性だってあるのだから。
「あ、そうだ。アインさん」
「はい、何でしょう」
「そっちが正体見せたんだし、僕も自分の正体を明かそうと思う」
　これは保険であり試験だ。アインズ・ウール・ゴウンのファンギルドであると語る彼が、自分の情報をどう扱うかの罠。
　この世界でやるべきことが増えた。娘への贖罪、即ち六大神への復讐が最優先事項だ。それに付き合わせる形になる真王国の民の幸福も約束すべきだろう。そして、ここに来てアインズ・ウール・ゴウンへの対応の必要が出てきた。
　その上で、異形種動物園とどう付き合っていくかは分水嶺となる。この一手で、今後の全てが決まるだろう。
「正体？」
　首を傾げるアイン。骨だけの顔でも意外と仕草だけで感情は見えてくるものだ。
「ああ、元『雪月花劇団』のネロ・ネミートスってのは本当だよ。この外装も間違いなく僕本人の人間形態。どっちかと言えば、完全異形形態についてだね。そっちのレクスにも関わることでさ」

灰色の髪を持つ美男子エルフを指さす。ネロとアインの会話に一切口を挟むこともなく眉一つ動かさなかった彼は、軽く会釈した。

「僕はね。ワールドエネミーなんだ」

「……はあ!?」

やっぱりリアクションが大きいと嬉しいなあ、と微笑むネロであった。

契約

フールーダ・パラダイン。

帝国宮廷魔術師筆頭。人類最高の魔法詠唱者。生きる伝説。

そんな風に呼ばれる彼には夢がある。魔法の深淵を見るという夢が。しかし、その夢を叶えることはあまりにも困難だった。魔法の深淵に辿り着くには人間の一生はあまりにも短すぎた。禁術師の能力で老化を止めているが完全ではない。寿命は確実に迫っている。弟子を取っているのは、自分が教えるためというよりは、自分よりも先に行ける誰かを発掘するためという方が正しい。しかし、フールーダより優れた魔法詠唱者が彼の元から生まれることはなかった。常に最前線にいるのは彼自身だった。

そんな人生でようやく出会えたのだ、自分よりも遥か先の魔導に立つ者に。人間かアンデッドかなどどうでもいい。神の敵だろうが人類の障害だろうが関係ない。魔法を司るという神を信仰していたが、その信仰は今日捨てた。このアンデッドの足を舐めてでも、自分は此処よりも魔の頂に近づくのだ。

「大いなる御方よ。何卒、何卒、私を弟子にしてくだされ……！」

了承してもらえるまで頭を上げないという気合いをひしひしと感じながら、リバスは煙草――エルフから勧められて嗜むようになった――を取り出して、一服する。火はネロから貰ったライターで着けた。体に纏う紫炎はオーラのようなもので何かを物理的に燃やすことはできない。

「ふー。どうっすかな」

リバスがフールーダからの弟子入り志願に対する答えを迷っているのには理由がある。

授業料の相場が分からないのだ。

それはフールーダの価値についてであり、自分の――本体たるネロ・ネミートスを含めた自分たちの相対的な価値についてだ。

願いには対価が付き物だ。願いを叶えるために神に捧げる物は状況や時代、宗教によって千差万別だ。祈りだけで済むこともあるし、

数万単位の生贄を差し出す場合もある。無論、捧げものをする側によっても価値が変わる。国王と貧乏な農民にとって金貨一枚の価値が変わるように。
　不当に高くても安くても、今後に響く。無茶振りをして遠回しに弟子入りを断ってもいいが、どの程度が無茶振りになるのかが分からない。無茶振りにも限度というものがある。荒唐無稽すぎることを言って笑い者にされるのは御免だ。
　それに、リバスにとって魔法の行使は魚の泳ぎ方のようなもの。自意識が出来た瞬間から使える機能だ。鳥の飛び方のように教えることはできない。
「困ったことに、俺は懸命な人間が大好きなんだよな」
　一刀両断に断るのは簡単だ。しかし、ヒトに請われたのだ。魔王の心臓にして神の眷属たる己にはそれに応える義務がある。
　これが衆目でなければネロかレクスの元に一度転移して聞いてくるのだが、大勢にそれを見られるのは格好が悪い。役者なのだから――ワールドエネミーの眷属の第二位なのだから格好はつけねばなるまい。
「おまえさんをこっちに引き込めばあのバカどもへの嫌がらせになることは間違いないっぽいんだけどな」
　周囲の人間の反応を見る。信じられないものを見るような目で平伏する老人を見ていた。敵意を向けている者がいないのは、誰もが状況を受け入れることができないためだ。騎士と思わしき男が震える声で老人に話しかける。
「ぱ、パラダイン殿……？　な、何かの冗談ですよね？　そ、その、相手を油断させるための、罠ですよね？　まさか、そのようなアンデッドがパラダイン殿より上の――」
「何を言う、無礼であるぞ！　この御方は私よりも遥か上におられる魔法詠唱者！　平伏以外の何をしろというのだ！」
　しかし、疑問が一つある。召喚モンスターである自分を見てこれほど恐れ戦いているのだ。おそらくスルシャーナたち六大神を直接見たことがないようだ。そして、逢える可能性は非常に低い立場にあ

る。具体的にどのような手段で自分の能力を計ったのかは断定できないが、少なくとも一目見て弟子入りを即決する程度には信頼を置いている何かを使ったことは間違いない。

この老人は何故、スルシャーナたちと出会ったことがないのか。地位が足りないと考えるのが妥当だろうが、周囲の反応から察するに違う気がする。

（やっぱり、そういうことなのかねえ？　レクスはもう確信しているっぽいし、本体も無意識じゃ気づいてんだろうけど）

しかし、そこには一つ、勘違いがあった。

リバスはフールーダのことを法国の人間――法国の魔法に関する研究機関の偉い研究者だと勘違いしている。そして、フールーダはそのことに気づいていない。自分が帝国の人間であると、リバスは既知であると誤認している。

これにはいくつかの要因がある。

まず、リバスが法国の人間とそれ以外の人間で名前の法則が違うことを知っていない。法国の人間は個人名と苗字の他に、例外なく洗礼名を持っている。しかし、帝国や王国では法国とは宗教的な考え方が違うため、貴族や神官以外が洗礼名を持つことはない。ちなみに、聖王国では王族や最高司祭すら洗礼名を持たない。リバス含めたコスモス一派は洗礼名をただのミドルネーム程度にしか認識していない。そのため、洗礼名を持たないフールーダのことを法国人ではないと認識できない。

次に、ここに帝国の人間がいるという発想がない。今日という今日までそれらしい人間を見かけなかったことが大きい。実際は帝国や王国の人間もそれなりにこの場を訪れていたのだが、リバスには見分けがつかなかった。なまじ異形種動物園から「近隣国家で六大神信仰をしているのは法国だけ」という知識を仕入れていたため、「宗教上の対立がある国が同盟を組むのは難しい」という憶測が生まれてしまったのだ。

これがレクス・セントラル――世界喰いの神官として創造されたエルフならば話は違っただろう。しかし、所詮、リバスはＮＰＣならざ

る召喚モンスターでしかない。そして、ユグドラシルの制作が定めた紫幽王のフレーバーテキストに賢さに関する項目はない。更に、召喚者にして本体たるネロ・ネミートスはずば抜けて賢いわけでもない。
「あいつらが叶えない願いを、『僕』が叶えてやるのも一興だな」
「師よ。お望みならば私の全てを捧げます……！」
だから、リバスが先程の授業料についてある結論を出すことは必然だった。
「じゃあ、あれだ。おまえの国にエルフの奴隷がいるよな。あいつらは一応、我が国の国民ってことになるからよ」
法国が捕虜にしたエルフを奴隷として出荷する先は帝国が多い。だから、リバスとフールーダの勘違いは修正されずに話が進む。
「は、ははぁ！　直ちに国に戻り法を改正してエルフの奴隷を禁止に――」
「あー、違う違う。話は最後まで聞け」
「申し訳ありません！」
声の大きさに辟易しながらも、相手が法律を変えられる程度には権力があると確認できた。
「禁止じゃなくてよ、所持に対して課税してくれねえか？」
「は、はあ。何故でしょうか？」
不思議そうな顔をする老人に、アンデッドは言う。
「うーん。理由はいろいろあるんだけど、一番はあれだな。本体――我らが真王陛下は大樹海から出られないからな。俺も燃えカスエルフも虐殺向きじゃねえし、外部への攻撃はどうしても他にやらせねえといけねえ。そうなると問題なるのは主戦力のエルフたちのモチベーションだ。同胞を取り戻すためにな、あいつらも頑張って鍛えてんのさ。分かりやすく言ってやろうか？　エルフの奴隷がいなくなったらよ――」
心底悍ましい声音で、愛と勇気を試す影は告げる。
「『僕』がおまえらの国を滅ぼしていい理由がなくなっちまうだろう？」
そんな風に図らずも、真王国は法国だけではなく帝国にも事実上の

宣戦布告をしてしまうことになった。

■

ワールドエネミー。

レベル百のプレイヤーが三十六人で挑むことが前提のレイドボス。ユグドラシルにおける最強の個。公式ラスボス「九曜の世界喰い」から始まり、「八竜」「七大罪の魔王」「セフィラーの十天使」、大型アップデートで追加された「第六天天主」「五色如来」の計三十二体が存在していた。

故に、最新の世界喰いたるネロ・ネミートスは三十三番目の災厄。滅ぼすべき世界の敵。プレイヤーでありながら、最強のレイドボス。

しかし、世界を滅ぼす存在が世界を滅ぼせないように制限を受けるというのは皮肉以外の何物でもないだろう。

「――というわけで、僕は大樹海から出られないんですよね」

「へー。不便ですね」

ネロがアインたち異形種動物園に自らの正体を明かした理由は複数あるが、一番の理由は、いつまでも隠しておくことが不可能であるためだ。さっさと自分から暴露した方がタイミングを逃さずに済む。それに、この世界にはプレイヤーがそれほど多いわけでもないようだ。ならば隠す意味は薄い。

「まさか大樹海前の破壊痕が『通常攻撃』によってできたもので、線で引いたような遮断は『世界のルール』によるものだったなんて、いくら何でも予想外ですよ」

「だろうね。僕も大樹海で世捨て人として永住を決めてたら一生気づかなかったと思う」

自分から口にしておいて何だがあまりない可能性だ。自分は思っていた以上に――孤独に弱い。何年も、演者が戻らず閑古鳥が鳴く劇場を守り続けていたというのに。

「それにしても、世界喰いの権能というのは非常に興味深いですね」

「でしょ？　僕も自分で思いつく限りの実験はしたんだけど、他のプ

レイヤーさんの意見も聞いてみたいな。何かある？」
「そうですねえ。うーん」
しばらく悩ましげに唸っていたアインだが、やがて口を開く。
「まず第一に、ネロさん自身はどう思っているんですか？　ワールドエネミーといえばカンストプレイヤー三十六人で挑むようなレイドボス。完全異形形態になった自分が、三十六人のプレイヤーを相手にできるという実感はありますか？」
「正直に言えば、ある」
絶対の自信を持って、断言できた。
この世界に自分より強い生物などいない、と。俺こそが最強であり頂点であり絶対なのだ、と。
「完全異形形態になった時、全能感ってものを知ったよ。ああ、これなら世界の全てを破壊できるなと、本気で思った。あの瞬間、たぶん僕の頭からスルシャーナたちのことは消えていた。ワールドチャンピオンだろうがワールドディザスターだろうが敵じゃない。怖いものなんて何もなかった。生まれて初めて、自由になれた気がした。ただ衝動のままに――世界をぶっ壊したかったんだ」
「それほどですか」
「だからこそ、境界線にぶつかった時は冷や水かけられた気分だよね」
「やっぱりそこですか」
「うん。そこだよね」
ワールドエネミーになったことの代償は細かく考えると色々あるが、やはりエリアから出られないのは最大のデメリットだろう。
レクス曰く、ネロが大樹海から出られないことはワールドアイテム『九曜の宝珠』を取り込んだ瞬間に決まったらしい。あの瞬間、ワールドエネミー『六眼星龍コスモス』は完成し、自らの縄張りに閉じ込められた。……詰まる所、ユグドラシルサービス終了に間に合ったとしても、六大神への復讐は実行できなかったことになる。彼らのギルド拠点と劇場都市コスモスウェイは違うワールドにあった。当然、自分の縄張りから出られないネロが彼らの元に行くことはできなかったのだ。

そう考えると、やはり自分は恵まれているのだろう。このような形で復讐の機会に恵まれたのだから。
「ただ攻撃力は物理も魔法もプレイヤーの範疇を超えていないんだよね。大樹海の入り口で暴れた痕跡を見たなら理解できるだろうけど、あれを再現することはレベル百プレイヤーなら可能だ。だからこそアインさんも僕が言うまでワールドエネミーなんて可能性は考えてなかったんでしょ？」
「まあ、そうですね。ファイナル・グレイがいたし、ワールドエネミーがいるかも、とは考えていたんですけど。まさかネロさん自身がワールドエネミーだとは」
プレイヤーがワールドエネミーになるという発想自体はそれほど奇異なものではない。だが、目の前にいるプレイヤーが偶々ワールドエネミーになれる手段を得れたということを察しろというのはかなり無理だろう。もし可能ならばそれはどんな脳みその持ち主だ。
「まあ、大樹海から出られないわけだからさ、アインさんたちから情報を買いたいんだよね」
「情報ですか」
「そう、情報。何も国家機密なんかが欲しいわけじゃない。例えば人間の国での真王国の評判だね。僕のこととかどう伝わってるのか気になるじゃん。六大神がどういう風に流布しているのかとかさ」
「あ、それでしたら『大樹海の巨竜』のことは法国以外だと、法国に一番近い位置にある都市ですらなんとなくの噂程度ですね」
「え」
「ネロさんは自分がエルフを率いているつもりなんでしょうけど、どっちかと言えば竜を支配したエルフが法国に逆転しているってのが噂の内容で、巨竜についてはエルフのついで程度の認識です」
「え」
「それから――コスモスやネロ・ネミートスの名前は伝わっていませんね。当然、古い文献や神話なんかにも残されていないみたいです」
「普通にショック！　……なんちゃって」
口ではとぼけるような台詞を言いながら、明らかにショックが隠し

きれていない様子のネロ。劇団の一員であった以上、これは芝居と見るべきだろうか。それとも、役に入り切れていない素だと見るべきだろうか。
「そういえば、情報を買いたいって話ですよね。……ここだけの話、俺もこっちの世界で活動するのにお金に困っていまして」
「あ、そうなの？　早く言ってくれたら良かったのに。鉱山でも作ってあげようか？　アダマンタイトまでが限度だけど」
「スケールでかいな！　この世界だとアダマンタイトなんて小さなプレート一枚でも一財産扱いされる価値があるんですけどね」
「僕はそれすら知らないからねー。もっと色々教えてよ」
　その後、ネロとアインはお互いがお互いの需要を満たせることを知った。
「使い勝手のいい労働力ですか？　死体から作った中位アンデッドは消えないのでそれをお貸ししましょう」
「チーム戦の練習ができない？　いいぜ、この『六色演目』がサンドバックになってやろうじゃないの。高位の眷属も使い捨てでいいなら揃えておくよ」
「ドワーフ、ですか。ちょうど知り合いにドワーフと面識のあるリザードマンがいまして」
「ちょっと特殊だけど、ワールドエネミーの力ならアンデッドでも飲食ができる空間を用意してあげられるぜ？」
「エルフたちに教育を……。成程、成程。教員にちょうどいい者がいるので紹介しましょうか？」
「死体？　定期的に人間が侵入してくるからねえ。集めておくから好きに持って行ってくれていいよ」
「ネロさん、貴方とは長い付き合いになりそうだ」
「アインさん、貴方とは仲良くさせてもらいたい」
　そんな風に、二人の魔王は硬い握手を交わして同盟を締結したのだった。

準備

「ということはアインズ様、真王国とは本格的に協力関係になったと判断してよろしいのでしょうか？」
「協力関係ではあるな。友好とまではいかないが。お互いに隠し事や欺瞞があると理解してのビジネスライクな関係だ」
「現状はそれでよろしいのではないでしょうか。もし珍しいマジックアイテムなどを譲ってもらえれば宝物殿に送って欲しいですが」
「ああ。彼の創造系魔法で作られた武器には通常のプレイヤーでは有り得ない、ワールドエネミーとしての特殊ボーナスが付くらしくてな。聞いた話では条件付きでパワードスーツまで作れるらしい。今後の契約次第では購入も検討している。支払いは金貨ではなく情報やアンデッドなどの労働力になるが」
「おお！　それは素晴らしい！」
「流石にワールドエネミーは敵に回したくない。ナザリックの総戦力を以ってすれば一度なら勝利できるだろう。だが、その代償として失うであろうものは多すぎる。対して、得られるものはあるかと言われたらあまり期待できない」
「はい。他にも協力関係の方がメリットは多岐に渡りますし、あえて敵対される利はないかと」
「だからこそ彼とは末永く現在の関係を続けたいものだ。……この意見を日和ったと思うか？」
「まさか！　勇敢と無茶は異なります。このパンドラズ・アクター、アインズ様のご判断に深く同意いたします。他の至高の御方々がいらっしゃったとしても、反対意見は出なかったと愚考いたします」
「そうか。なら、いいか」

■

「――というわけです、皇帝陛下。速やかに、師が望んだように、エルフの奴隷を所持している者に課税を義務付けてくだされ」

「よし分かった、他ならぬ爺の頼みだからな――などと言うわけがないだろう。おかげで法国から書状が来たぞ。抗議、いや、警告だな。帝国は人類の敵になるつもりか、だと」
「人類の敵、ですか。私からすれば法国こそ無用な大戦を始めて人類を滅ぼすつもりかと聞きたくはなりますがな。師やその背後にいる真王陛下と戦うなど正気ではありませぬ」
「それほどか？」
「ええ。少なくとも、師が私より上位の魔法詠唱者なのは間違いなく。そして、その師が従っている時点で、真王陛下は最低でも同程度。いえ、『奇跡の壁』の痕跡を見るに真王陛下が師どころの話ではないのは確実ですな。果たして私が百人いても勝てるかどうか」
「……神に滅ぼされた竜か。爺がそこまで言うのだ、真実かは判断できないが誇張した話でもなかったか。大樹海から出られないのは本当のようだが、それは此方から戦う必要がないという意味でもあるな。竜本人ではなく、そのアンデッドやエルフが攻め入ってこない限りは」
「ええ。もっとも、真王陛下がいつまでも大樹海に閉じ込められているかは不明ですぞ。何せ『神の奇跡』ですからな。だからこそ、帝国を標的から外すためにも今は大人しく従い、友好のために私を送り出すことを勧めますぞ」
「私欲でそこまで開き直るか。だが確かにおまえの言うことも一理ある。馬力のある亜人ならともかくエルフの奴隷なぞ嗜好品、森での猟犬代わりが精々だからな。禁止にしたとしても個人はともかく国家としてダメージはほぼない。相手もそれを考えての提案だったんだろうな。アンデッドの癖に中々人間のことを理解している」
「おお！　では――」
「だが、本格的に真王国との開戦を避けるならば慎重にならねばならない。爺が師と呼ぶアンデッドは人間の理屈が分からぬ相手ではないのだし、エルフたちから戦意を奪うことを優先すべきだろう。そのためにはじっくり交渉を重ねる必要があるだろうな」
「――私には時間がないのだ。まさかとは思うが、試したいのか？

帝国全軍に匹敵すると言われる私の戦闘能力を。私の可愛いジルよ」
「そういう顔の方が好きだぞ、爺。今のは冗談だ。爺の願いのためにも帝国の未来のためにも、今はそのアンデッドの思惑に乗ってやろうじゃないか。法国含め対外には獅子身中の虫を送り込んだとでも言っておこう。あの国にも我々に話していないことが多いようだしな。文句を言ってくるのならば、そのあたりを要求させてもらおうか。これを機に、法国から近隣国家最強の座を奪うとしよう」

■

真王国国主、竜人ネロ・ネミートス。またの名を大神コスモス。
真王国宰相兼エルフ王、灰妖精レクス・セントラル。
真王国元帥、紫幽王リバス。
王城の一室にて、存在そのものが人類と敵対している新興国家『コスモス真王国』の最高位権力者三名――実質一名――が勢揃いしていた。
「とりあえず、異形種動物園に関しては問題が発生するまでお互いに利用し合って、助け合って、補い合っていくことになった。異論は？」
「ございません」
「ねえよ」
レクスは恭しく頭を下げる。対照的に、リバスは不遜な態度でぷかぷかと紫煙を吐き出す。
「俺に弟子入りを志願してきた爺さんは、正直あんまり期待できねえからな」
「よりにもよっておまえに弟子入りねえ？」
よく分からない話だ。詳しいことはその老人がもう一度大樹海に立ち入ってからにするとしよう。人類の裏切り者として処刑され、もう二度と来ない可能性だってあるのだから。
リバスが要求したように法律を改正できていなかったとしても、その心意気だけで評価には値する。実験を兼ねてレベリングをするつもりだ。それにこの世界の魔法に詳しいならば、ネロたちが欲しい知

識や教育のノウハウを知っている可能性もある。無事に仲間になれば大きなプラスになる。当然、裏切りなどには十分に気をつける必要があるが。
「それにしても、アインズ・ウール・ゴウンがこっちに来ている可能性がある、か。しかも法国と因縁ができていると来てやがる。どうしたもんかねえ」
ギルド：アインズ・ウール・ゴウン。あの大侵攻は全プレイヤーのトラウマだ。動画サイトに投稿された実際の映像を見た衝撃は今でも忘れられない。あの狂気は瞼を閉じるだけで思い出せる。他の十大ギルドも似たレベルのことはしたはずだが、やはり『千五百人を撃退した』という文句は大きい。
「何人来ているのか、ギルド拠点はあるのか、僕の魔王ムーブについてどう考えているのか。そのあたりが分かるまで国外への干渉は最小限にしないとどこで竜の尾を踏むやらだ」
「本体。分かり切ったことを聞くが、アインズ・ウール・ゴウンと戦って勝てるか？」
「本当に分かり切ったこと聞くんじゃねえよ」
リバスからの質問に、ネロは笑って答える。

「――――絶対に勝てる。負けるはずがない」

どこぞの大墳墓に所属する者が聞けば我を忘れるほど激怒するであろう戯言を、魔王竜は一切の見栄なく事実として言い切った。
「だけど、真っ当に戦ったら勝てるってだけだ。未知のワールドエネミー相手に、あの連中が真っ当に戦うものかよ。真っ当じゃない戦い方をされるだけだ」
「確かにな」
これもやはり自問自答なのだ。レクスもリバスも反対意見など口に出さないし、内心でも抱かない。ネロ・ネミートスという個人にぶれない解答が用意されている問題において、この三者の意見に差が出るはずがないのだ。

「勝てる自信はあるけど、やっぱり苦手意識はでかいなあ。負けるつもりはないけど、真っ向勝負したくないのはこっちも一緒だ」
「それは言えてる」
「元々、十二年の間に法国に対して大きなことをするつもりはなかった。だが、より慎重になる必要があるかもしれないな。あるいは、大胆に外交をしていくか。とにかく十二年後の開戦に向けて、富国強兵に努めよう」
「御意に」
「委細承知」
「まさか六大神の側からヘルプは入らないと思うけど、相手があの魔王どもじゃこっちと戦争している暇はないだろうな」
　陽光聖典なる部隊とアインズ・ウール・ゴウンと名乗る魔法詠唱者の交戦。これは誰かが意図的に起こしたものなのか。それとも偶発的なものなのか。確率で考えるならば前者だろう。しかし、強大な存在が狙うものとは得てして重なってしまうものだ。本当に偶々標的が重なってブッキングしてしまった、とネロは読んでいる。現状では異形種動物園からの情報しかないため、これも間違いの可能性が高いのだが。第一、アインたちが情報を出し惜しんでいる可能性も十分に考えられる。致命的な何かを教えてくれないのかもしれない。
「ファンギルドである以上、アインズ・ウール・ゴウンが彼らに接触したらちょっとまずいか？　少なくとも教えた情報は全部流れても不思議じゃないか」
「知られることを期待してワールドエネミーであることを教えたのでしょう？」
「まあね。ぶっちゃけ賭けではあるんだが、分は悪くないはずだ」
　具体的にどういう流れで戦闘になったのか、双方の被害状況はどの程度か、一連の出来事を知る第三者は誰がいるのか。当事者たちはこの戦闘をどう考えているのか。知りたいことだらけだ。
「まずは自分たちの足場を固めるか。異形種動物園の腹積もりはまだ読めないけど、あえて今の関係を壊す必要はないからな。お互い、貰える物を貰って渡せる物を渡す関係をできるだけ続けていこう」

「そう言うなら今回みたいに授業のある日に突然予定を入れないで欲しいんだけどよ」
　煙草を灰皿に押し付けながら愚痴るリバス。
「悪かったよ。でも、そのあたりもほとんど趣味みたいなもんだからな。エルフの寿命を考えると成果も期待できないんだし、そこはこっちの事情を優先させてくれよ」
「そうでもねえぜ？　実際、見所があるやつは何人かいる。あんまり言いたくねえけど、父親の血がいいんだろうな」
「その父親に強制的に戦場に出されたせいで結構な数が死んだか捕まったっぽいんだけど。悲しいし、むかつくし、もったいないねえなあ」
「おまえが殺したからいいだろう。死体も肉片まで獣に食わせたから蘇生もできねえよ」
「確かに。生かしていれば戦力にはなったんだが、必然的に起こる不和を考えると割に合わないか」
「そもそも本体が怒り狂って殺しそうですが」
「確かに」
　前王デケム・ホウガン。この世界においては英雄や逸脱者すらも超えた例外。デケムの父親は八欲王と呼ばれた者のひとりで、ネロはそれがプレイヤーだと睨んでいる。今のところ、彼の血を引くハーフエルフのアンを除けば、この世界土着の存在でデケムに近い強者は確認されていない。彼の血を引く遺児たちも、ユグドラシルのレベルに換算すれば二十あれば高い方だった。大樹海で見つかった生物も三十半ばが最高値であり、個体数も二十といないようだ。
「まあ、俺の生徒の中では『試練の果実』の最大値を出せたやつはまだ一人だけだが」
「もしかして僕がファーストコンタクトしたロリエルフか？」
　名前を思い出す前に、リバスは首を横に振る。
「だったら物語的にはそれっぽいんだろうが、違うね。生き残っている遺児の中では最年長の娘だ。聖騎士レベル十五を引き当てたし、元々の適正が戦士系だったぽいから相性いいんだよな」

「成程。それはいいことを聞いた」
「ああ。旗印にはちょうどいいし、俺はこいつを最前線の隊長にしたいと思っている。顧客と距離が近くてわかりやすい英雄が主役として必要だよな、やっぱり。だからよ、本体さえ良ければ例の『魔人化』を試してくれねえか？」
魔人化。それはワールドイーター・ラーヴァの特典能力の一つ。ファンタジー的に言ってしまえば、眷属化が適した言い方だろうか。ただし吸血鬼等のそれとは違って、種族レベルではなく職業レベル扱いになる。無制限に使用できるわけではないが、誰にでも『界滅の使徒』という職業レベルを最大十五まで与えることができる能力だ。職業の能力を考えればユグドラシル基準で考えても破格の能力だ。もっとも、合計でレベル百五十になるようにしか分配できないため、与える相手は考えなくてはいけない。
「よし、いいぜ」
リバスがそのエルフのことを認めている以上、高確率でネロの目にも高評価になるだろう。一応の試験はするが、ネロの中ではヴィーネを最初の使徒にすると決断した。
「僕はワールドエネミー、というかレイドボスとしては厄介な取り巻きを量産するタイプっぽいからね。大樹海から出られないのもあるし、アインズ・ウール・ゴウンや異形種動物園との関係がどうなるか分からないし、配下はどんどん増やしていこう」
「でしたら本体。私からもご提案が」
レクスが手を挙げる。ネロは無言で頷いて続きを促す。
「正式に建国宣言をしませんか？」
「うん？」
レクスはネロの頭脳だ。だが、リバスとは違って内面はＮＰＣの『灰神の使徒』の設定がベースになっている。そのため、何を言いたいのか理解できないことが多い。リバスと比較すれば、の話だが。時間をかけて考えれば理解できるとは思うが、わざわざ手間をかける意味もないので詳細を聞く。
「建国宣言か。その意味は？」

「現在は『エルフの王都を中心にしたコスモス真王国と名乗る国家がある』と状況です。いえ、客観的に見ればこれまで名前がなく漠然と存在していたエルフの国が識別のための名前を持った以上の意味はございません。そのため、支配下にいる亜人やエルフの間で意思統一ができていないように見られるのです。彼らには――自分たちが何に仕えているのかという自覚がないように見えます。中には、愚かにも叛意を抱く者もいるようです」

人間形態はほとんど誰も知らない。半異形形態で都市を歩くことはあるが、あれは言の葉を発しない魔獣として振る舞っているだけだ。完全異形形態の大神コスモスとして顕現したのは一度だけで、王都のエルフは見ていないはずだ。実際に見たことがあるエルフや亜人から話は聞いているはずだが、正しく想像できているとは思えない。

「そのため、本体には恐れ多いのですが再びワールドエネミーとしての御姿となって欲しいのです。部の代表者や実力者を集めておきます。彼らが御身の御威光に触れたならば、正しい信仰に目覚め、より効率的に大樹海全域を支配できるはずです」

「うーむ」

「現在は全域とまでは言いませんが、大部分は支配下に入りましたし、今後のことを考えるとこの時期が最善かと思われます」

確かに、神やら王やらを名乗っておきながら、その姿を見せていないのは不誠実だった。傘下に収めた種族の中には、敵対関係にあった者同士の組み合わせもあるだろう。そういった者たちを集めて、コスモスという王の力を示し、お互いが同胞であるという意識を持たせることは重要だ。

「……やるか、建国式」

観客は国民一同。出来れば全世界同時生中継と行きたいところだが、技術的な問題などもあり断念するしかないだろう。

それでは『六色演目』に新しい一幕を追加しよう。

当時の人々の証言「真王国建国式」について

○真王国元帥の証言

あ？　建国式のことを教えてくれ？

見てわからねえのか、ネイアちゃん。俺は今、忙しいんだ！

今月中に御前試合の会場作らないといけねえからな。魔導国の参加が来なければもうちょっと規模を小さくできたんだが。煙草を吸う暇もねえ。そういうのやりたいならてめえの国でやりやがれよ、あの骸骨魔王と色ボケ悪魔とポンコツ吸血鬼どもがよぉ。

まあ、そっちも仕事なんだろうし本体……は無理か。レクス……も駄目か。フールーダ……はあの時はいなかったか。アン……は論外だな。王妃……はやめておこうか、おまえさんとは気まずいだろうしな。……そんなことない？　揃って心臓に毛でも生えてんのか。

そうだな、ヴィーネにでも聞いてくれ。最近は騎士団も暇しているはずだからな。俺の名前を出せば大丈夫だろう。

と言っても、あの日のことなんてあの時支配下に入った各部族代表が集まって本体の完全異形形態を見せた以上のことなんてねえんだけどな。イベントは準備している時間が一番楽しいんだよな、今もそうだけど。

○とあるエルフ（親衛隊隊長・当時訓練生）の証言

よりにもよって私に問うのですか、人間。

この私に、真王国軍元帥直下親衛隊隊長たる私に、リバス先生の最高傑作同然ある私に。大神たる真王陛下が建国を宣言された日のことを。

……なーんて、気取った言い方をするべきではありませんか、ネイアさん。

ええ、先生の名前を出さずとも受けますとも。貴女とも長い付き合いですからね。ヤルダバオト戦役からもう十年ですか。……エルフと人間にとって十年という時間の価値は違います。でも貴女が望めば――いえ、これ以上は野暮ですね。

本来なら今頃『大粛清』さえなければ、コスモス真王国とスレイン法国の全面戦争が開幕していたはずなんですよね。私は先生や陛下に、多くの首級を捧げるはずだったのに。

ああ、えっと、それで、建国についてでしたね。一応、建国宣言をする前から「真王国」とは名乗っていたらしいんですよね。大樹海全体の名前というよりは、エルフの国が名前を持ったくらいの意味合いだったようですが。陛下や先生たちは「奇跡の壁」が判明してから一年を目処に大樹海を統一するつもりだったようですが、二か月ほどで大半が支配下に入りました。

私たちの王はすごいんだ、って思ったものです。当時の私たちに、陛下に仕えているという自覚はあまりありませんでした。どちらかと言えば、セントラル閣下や先生が支配者という印象でしたね。神とは支配者ではなく信仰対象でした。

そんなタイミングでしたね、陛下が建国宣言をなさると決めたのは。どちらかと言えば、各部族の代表に陛下の玉体を見せるという意味合いの方が大きかったのですが。陛下の姿――ああ、人型の方ではなく巨竜の方です――を見たことがある者は当時限られていたので。顕現されたのも一度だけでしたし。

だから、あの建国式は陛下の威光を教える意味もあったのです。エルフの多くも知りませんでしたからね。法国軍の基地を破壊しまくったセントラル閣下だけでも身内への示威行為としては十分だったんでしょうけど、陛下たちからすれば足りなかったのでしょうね。改宗せずにいた民もそれなりに多かったので。

実際、式典の次の日には、市民のほとんどが改宗していましたね。エルフだけでなくすべての亜人が。やっぱり大事ですよね、わかりやすさ。

○とあるダークエルフの証言

元々、俺の村では真王の支配下に入ることには否定的だったんだ。当然だろう？　突然恐ろしい魔獣に乗ってきたエルフが「支配下に入れ」なんて言ってきたんだ。一年の猶予こそあったが、ほとんど脅

迫だ。当時は俺も血気盛んな若者でな。もしもの時は周囲の村と協力して戦おうなんて思っていた。
だが、あの王都を見て心が折れた。
使者が乗っていた魔獣は、王都ではありふれた家畜の一つだった。あれ以上の獣がうようよいた。特にあの白い虎。白虎のウェス。あいつは別格だった。まさしく魔獣の王だった。俺が百人集まっても勝てないと一目見て理解できた。
エルフたちが言う人間の国への復讐だって、決して夢物語ではないと思った。むしろこんな恐ろしい連中を敵に回した人間たちに同情さえした。
だけど、あの時の俺は想像力が足りなかったんだ。
白虎のウェスですら、あの御方――真王陛下の前座に過ぎなかったんだから。

○とあるエルフ（森司祭）の証言
当時の我々には王が理解できなかった。
ダークエルフやワイルドエルフのようなエルフの近親種ならばともかく、亜人たちを取り込む理由が。不干渉だった亜人ならばともかく、エルフを食料としか見ていないような異形種まで傘下に加えていったのだから。
レクス様から知恵を授かり、例の果実で強くなったエルフは多い。捕まったエルフたちを取り戻し、法国に復讐をするにも戦力は必要だが、余分ではないのかと。いざという時に頼りになるのか。
理解ができなかったのではなく、思考が足りなかったのだ。あるいは想像力か。
王やリバス様は――、真王陛下はもっと未来を見ていたのだ。今となってはそれを痛感する。もっとも、流石の陛下も『大粛清』の発生までは読めなかったようだが。いや、僅かには想定されていたのかもしれない。だからこその大樹海統一だったのか……。何にせよ、我々は忘れてはならない。幸運に生かされていることを。

○とあるオーガの証言
いっぱい、いっぱい昔、おれのとうちゃん、コスモスを見た。
とうちゃん、言ってた。コスモス、おれたちの太陽。

○とあるエルフ（剣士・当時訓練生）の証言
あー、確かに陛下は太陽だな、うん。その例えで言うとリバス先生は月だな。そしてセントラル閣下は雲と言ったところか。
それで、建国式で、陛下を初めて見た時の話だったな。あの時の衝撃は凄かった。生まれて初めて太陽を見たような気分だった。
大樹海の外には陛下より大きい竜なんかはそれなりにいるらしいが、それでも、陛下より強いということはないんだろうなとは思う。

○とあるトードマンの証言
他の部族は知りませんが、私の部族は早い段階で真王国の配下に入ることを決めました。
強力な魔物を従えていたのもありますが、決定打はもっとプラスの方面です。食料や知識の提供ですね。特に『試練の果実』の存在が大きかったのです。自分たちが、というより自分たち以外の部族が真王陛下の支配下に入った場合のリスクはあまりにも大きいものでした。
それに、セントラル閣下の存在もありましたね。伝説でしか聞いたことがない蘇生魔法を始めとして、我々の部族では到底届かない領域にいる森司祭。当然、攻撃魔法も強力であることはすぐに察しました。そんな存在に逆らうなど有り得ないことです。
余程の暴君でない限りは大人しく従ってその恩恵に預かろうと、部族の代表者たちの意見がまとまるのは時間がかかりませんでした。
反発する者――血気盛んな若い雄に多かったです――もいましたが、式典を境にぴたりといなくなりましたね。
真王陛下に歯向かうなど、愚者という言葉では片づけられないのです。昔も今も。……評議国の竜王たちや貴女が敬愛される魔導王陛下であれば話は違うのでしょうがね。
ちょうどあの頃、トブの大森林でも魔導王陛下相手に同じようなこ

とが起きていたと言いますし、そういう時代だったのでしょうね。

○とあるライカンスロープの証言

俺たちはあの日まで、エルフどもを皆殺しにして、あいつらの持っている物を全部奪ってやるつもりだった。

新しい神様が来た？　知らねえよ。調子に乗ってんじゃねえ。強い魔獣だってマジックアイテムか何かで支配しているんだろうからそれを奪ってやる。武器も住処もだ。食べるだけで強くなれる木の実も全部俺が喰ってやるんだ。そう思っていた。

だけど違ったんだ。あいつらも従っているだけの存在だった。

俺と似たような考えを持っている亜人は多かったはずだぜ。そして、俺と同じようにセントラル様やリバスの旦那に一度叩きのめされて鼻を折られて、それでも諦めない奴は陛下の姿を見て野心を潰された。

我ながら若かったと思うよ。一歩間違えばこんな風に懐かしむことさえできなかったんだろうがな。

○とあるエルフ（若者）の証言

あの日、王都――元エルフの王都――には大樹海からあらゆる種族、あらゆる部族が集まっていたました。

真王陛下。我らが大神。黄昏の巨竜。暴君の圧制と法国の侵略からエルフを救った魔王。

セントラル閣下を王となってからは色んなことが良くなった。色々言うやつは未だにいるけど、俺は昔に戻りたいとはこれっぽちも思わない。少なくとも、もうビールとギョーザのない生活には戻れない。

今でもふと妄想するんだ。セントラル閣下がデケム・ホウガンから王座を簒奪しなければ、どうなっていたのか。陛下の炎に焼かれたのは、人間の国じゃなくて、我々の方じゃないのかって。

○とあるラットマンの証言

実は、僕は式典の前に陛下の姿を見た者のひとりなんだ。大樹海の――なんとかって人間の国――今は滅んだんだっけ――の基地近くに住んでいてね。

そりゃ人間に見つかったら殺されるけど、逆に言えば見つからないように暮らせば安全な場所だったんだ。

そして、だからこそ陛下の姿を見れたんだ。見てしまったんだ。あの黄金の三頭竜を。天変地異の具現化を。余波で死んでいないのは奇跡でしかないんだ。実際、僕の何倍も強いはずの魔獣の死体が大量に転がっていたよ。

逃げようとも思ったけど、どこに逃げるのかって話だった。どこに逃げてもあの災害は追ってくるんじゃないかって気が気じゃなかった。あの竜があらゆる種族を傘下に収めようとしているってエルフが話しているのを聞いて、考えるまでもなく従うことにしたよ。

式典の日、あの広場に集まった者の中にも似たような連中は結構いたと思うよ。そしてその判断は正しかった。判断を間違った奴は全員死んだはずだ。

○とあるリザードマンの証言

王都の広場を見て儂が最初に思ったのは、「壮観だな」じゃったな。大樹海内には十六の強者がいる、という話があった。いや、正確な数は分からんよ。大体そのくらいだろう、という認識じゃった。本当は十だったのかもしれんし、二十いたのかもしれない。まあ、大樹海統一の際にレクス様の手で減ったと思われるがな。

とにかく強者に数えられるような、「こいつが例のやつだな」と思うような大魔獣や亜人の英雄がそこに並んでおった。そして、それ以上の魔獣――否、神獣が何体もいた。

特に目を引くのは白い大虎じゃな。お察しの通り、ウェスじゃよ。噂には聞いておったが、想像を超えたな。恐怖や驚愕もあったが、同時に安堵と感謝があった。これほどの魔獣を従える者が、儂らを排除ではなく従属させてくれる道を提示してくれたことに。……あんなのがまだ三体もいるとかわかるわけないじゃろ。リバス閣下やレク

ス王がそれ以上であることも考えておったが、当たって欲しくはなかったなぁ。コスモス陛下と比較すれば彼らすらおまけなんじゃろうけどぁ。

○とあるナーガの証言

人間という種族は弱いが、集団になると強い。そして、大樹海の外にある人間の国には強い人間も多い。大樹海の森を切り開いているが、標的はエルフだから関わらない方がいい。それはある程度の知恵と知識がある者の共通認識だった。

だから、正直気が進まなかった。エルフの支配下に入り、人間の国と戦おうなどと。どれだけエルフ王が強くても一人だけではどうしようもないのではないのかと。だが、逆らえば死が待っているのは確実だった。どうにか抜け道を探すつもりでいた。

しかし、違った。何もかも見当違いだった。

陛下は最強の『個』であった。同時に、最強の軍隊を作り出せる権能を有していた。真王国と法国の戦争は始まる前から、我々の勝ちが決まっていたのだ。

……知っての通り、法国との戦争は始めることすらできなかったのだが。『大粛清』は陛下にとってすら予想外だったのだ。

神は完全ではない。だからこそ仕えることを決めたのだが。

○とあるドライアードの証言

正直、最初はお試し感覚だったのよね、エルフの仲間になったのは。駄目そうなら逃げればいいや、って思ってた。軽く考えてたのよね、あの日までは。

あの広場には色んな種族のすごそうなやつらがいっぱいいたわ。ちっぽけなドライアードなんて場違いもいいところだった。同じ場所にいていいのかな、って心配したわね。

けど、陛下を見た後だと違う感想が出てくるわ。

陛下からすれば——世界を滅ぼす魔王からすれば、私も成体の竜もゴブリンの赤子も区別できないくらいちっぽけなんだなって。

○とあるエルフ（幼女）の証言

あのね、あのとき、すごかったんだよ！　ほんとうに、ほんとうにすごかったの！

おそらがぱりーんってわれてね！　そこだけね、まっくらになったんだ！　おそらにできたおとしあなみたいだった。そこからね、なにかでてきたの。きれいだったからおひさまかおつきさまかとおもったんだけど、へーかだったの！　じめんがごわわわわわ！　ってなってね！　ぜんぶ、ぎゅわわわわわわわわわわん！　ってなってね！　みんな、びっくりしちゃったの！

○とあるエルフ（年輩）の証言

よく晴れた日だった。

王都の広場に集まったエルフや亜人を見渡して、大神官レクス様が言った。

「天を見よ。我らが大神が現れる。生命の悉くよ、仰ぎ奉るがいい。此れなるは絶対の黄金なり！」

その瞬間、空が割れたんだ。地面に落とした陶器みたいに。

そこには黒い穴ができていた。大きな穴が空に開いた。それは黒い穴だった。そこだけが夜になっていた。そこだけが混沌としていた。そして、夜の穴から黄金の太陽が出てきた。這い出るように、黄金の三頭竜が姿を見せた。

輝かしい光を宿した、途轍もない巨体の竜。大神コスモス。我らが真王陛下。

陛下は巨大な咆哮を上げた。間違いなく以前聞いた『地響き』と同じだった。あの時、理解したよ。そう、全てを理解した。陛下を実際に見たことがあるという亜人たちが異常なほどに従属を示してきた理由が。いや、理由なんて大層なものはない。強者に弱者が従う。あまりにも当然の摂理だったんだ。

咆哮の後、陛下は穴から完全に身体を出して降り立った。あの威容を表現できる言葉はエルフには存在しない。おそらく亜人や人間に

もないだろう。
実際、陛下は本当に竜なのだろうか？　竜の形をしているだけで、もっと強大な存在に他ならない気がしてならない。魔導王陛下が通常のアンデッドとは異なるように。真王陛下も魔導王陛下も、アンデッドやドラゴンではなく、それこそ『神』と分類すべき存在なのかもしれない。
神の六つの目が私を見た。目が合った。後から聞けば、誰もが自分と目が合ったと言ったものだ。火のような赤が、空のような青が、聖なる白が、邪悪な黒が、澱むような紫が、輝かしい黄金が、我々の姿を捉えたのだ。
世界の真理に触れたような気がしたよ。我々はあの日、神がどういう存在か知った。
神は私たちを選んだ。

○とあるドラゴンの証言
セントラル殿より前のエルフ王に、我が兄は倒された。我の生涯は復讐のためにあると思っていた。
だが、それは違うのだと陛下を前にして気づいたのだ。
我が生涯の意味は、我が生命の価値は、あの御方に仕え、微力ながらその大願の一助となること！

○とあるグリエイクの証言
讃えヨ、讃えヨ！　神たるコスモスを讃えヨ！

○とあるオークの証言
当時、俺は都市の中にはいなかった。その外にいた。まあ、今と違って当時のエルフの都市は開発なんて進んでいなかったからなんとなくエルフツリーが並んでいるくらいのもんだったけど。
理由？　言わなくてもわかるだろう。怖かったんだ。都市を見回っている怪物どもがいつ襲い掛かってくるか分からないだろう。みんな怖いのにおまえだけ逃げるつもりだろうって族長たちに言わ

れたけど、万が一の時に備えてとかそんな風に言いくるめてどうにかなったよ。
だけど、都市の外からでも奴が空から出てくるところはよく見れた。そのくらい大きかった。そのくらい輝いていた。これまで見た魔獣なんて、本当に召使い程度の存在だったんだ。
意味が分からなかった。でも、すぐに納得したよ。
あれが神様なんだって。逆らっちゃいけない何かなんだって。逆らったら人間みたいに皆殺しにされるんだって。

○とあるエルフ（青年）の証言
式典において、陛下は姿を見せただけだった。本当に、姿を見せただけだった。
だが、それで十分だった。知識を増やした今ならば理解できる。陛下はその姿を見せるだけで、真王国という国家の基盤を確立させたのだ。あるいはセントラル様のお考えかもしれないが――いや、よそう。我々にあの御方のお考えなどわかるはずがない。セントラル様も、リバス様も、我々とは比較にならないほどの強者だ。
当時の我々に複雑な式典の礼儀作法など分かるわけがない。というか、あの日を境にそういうものが作られ、種族も部族も超えて共有されたのだったか。正直、一部の者を除けば、今も当時よりはマシ程度だと思うがね。
陛下の威光に畏怖して、ある者は茫然し、ある者は気絶し、ある者は平服し、ある者は狂喜した。時間にして一分もなかっただろうか。一時間あったような気もする。とにかく、陛下は現れた時と同じように空の穴へと戻っていった。陛下の姿が穴の中に消えると同時に、穴も消えて、空が元に戻った。
誰ともなく、安堵の溜め息を吐き出したものだった。敵対的な関係にあった種族同士が、十年来の友人のように肩を組み合う場面も見た。あれも陛下の狙いだったのかもしれない。真王との謁見を生き抜くという試練は、あの場に集まった全員に一体感を与えた。
その後で豪華な食事による宴もあったが、まあ、あまり味の記憶は

残っていないけど。いや、恐怖とかではなくて、ただのやけ酒だよ。

○とあるハーピィの証言

あんときゃ楽しかった。俺なんか小枝みたいに折れるだろうリザードマンやらトロールやらと一緒に食べたこともない飯を囲んで酒盛りした。

まあ、何つうか色々と吹っ切れたってのもあるんだが。それ以上に、わくわくしたってのがあるな。あの恐ろしいドラゴンはおいらたちにどんなものを見せてくれるんだろうってな。

人間どもの神様を殺しに行くってんだから、さぞや面白いものが見れるんだろうなって。

思っていたのとは違うが、実際面白い経験はできたさ。まあ、ヤルダバオト戦役はともかく『大粛清』は嫌な思い出だけどな。今でも夢に見るよ……。陛下の咆哮以上の悪夢があるとは建国式の時は想像もできなかったけど。

○とあるホブゴブリンの証言

もう十年前だからちゃんとしたことは憶えていない。だけど、「建国式」から帰ってきた族長が随分と疲れた様子なのは分かった。

そして、やけっぱちな口調で「あの竜に従うことになった。逆らうな。絶対に勝てない。逃げることもできないだろう」って言っていたことは忘れられない。

数日後、従属の証として送られてきた強大な魔獣を見て、一応は理解したつもりだった。俺たちどころか大樹海中のゴブリンだって皆殺しにできちゃうんじゃないかってくらい強そうな化け物だった。そいつが俺たちだけじゃなくて、同じ規模の集落全てに配られたって知った時はちょっと頭がおかしくなりそうだった。

そして、「大神」がこの魔獣が比較じゃないくらいってのは、族長が魔獣に一切びびってなかったことで理解できたよ。あのドラゴンを見てしまえばこの程度の魔獣に恐怖するもんかってね。

○とある人間の証言

あの時、あの場に人間は誰一人としていなかった。しかし真王陛下はエルフや亜人を選んだのではありません。あの時はまだ、人間を選ばなかっただけです。

しかし――『大粛清』の時、あるいはヤルダバオト戦役の時点で、神は我々を選んでくれたのです。人類を救ってくれたのです。神の慈悲によって人類は救われました。法国は滅んだとしても、人の未来は此処にあります。

だからこそ、私は人類を正しい方向に導くのです。それこそが生き残った私の使命であり、私が為すべき献身であり、私の人類への愛なのです。

人類は今度こそ正しい信仰の下で生きるべきなのです。

式典後

それは、アンがそろそろ二通目の手紙を法国に出そうかと考えていたある日のことだった。

「式典やるぜー。本格的に国家として動いていくぜー」

六大神の怨敵たる竜はアンにそのようなことを宣った。

見学するかと聞かれたため、特に悩むこともなく肯定した。久しぶりに霧の外に出てみたかった。それに、法国の神殿で箱入り娘として生きて来た身だ。祭典に参加したことも実際に見たこともない。少しばかり期待があった。

当日、アンはエルフの王城にいた。と言っても、部屋ではない。城の屋根の上だ。当然単身ではなく、リバスと一緒だ。ここにも彼の転移で移動してもらった。他人からは見えないように魔獣の能力を使われているらしいが、アンにはその魔獣とやらは見えない。

会場になっている広場がよく見えた。元々は王都に広場と言えるほどの空間はなかったらしいが、レクスが今回のために切り開いたらしい。

そこにはエルフを始めとして、大樹海内のあらゆる知的生物の姿があった。アンが知らない亜人や魔獣の姿もいくつもあった。神人でなければ倒せないであろう強力な存在すらいた(これはネロの眷属らしい)。

この軍勢相手でも、近隣国家最強のスレイン法国ならば勝利はできるはずだ。自分がいなくとも、漆黒聖典がいる。だが、余程の幸運に恵まれない限り、楽勝ではない。おそらくは武力で集めた連合であるため、つけ込める隙があるとすればそこか。だが、ぷれいやーがいる。六大神に並ぶほどの怪物がいる。自分が勝てなかった以上、人類には彼に勝つ手段がないと思って間違いない。最秘宝も通じないだろう。どうにかして評議国の竜王と戦わせる必要がある。

そんな風に考えていた瞬間だった。

――――空の一部が夜に塗り潰され、天地を揺るがす怪物が出現し

た。

色の異なる計六つの目を持つ三頭の巨竜。竜の形をした黄金の太陽。災害の如き究極生命。神々と殺し合った魔王。

あれこそが、ネロ・ネミートスあるいは大神コスモスの正体だと一目で理解した。

想定が甘かった。理解が浅かった。思考が薄かった。危機感が足りなかった。

神の敵対者という立場。神が滅ぼしたという脅威。支配せず、記録にも残さず、ただ滅ぼした敵。その意味を、自分はちゃんと考えていなかった。

最強の竜王と名高い『白金の竜王』ですら遠く及ばないだろう。かの竜王があの巨竜と同じならば、神人程度を脅威などと認識はしないだろうから。

ネロはきっと自分が神の末裔でなければ興味を示さなかっただろう、とアンは妙な確信を抱いた。

「……あれ？」

気付いたら、自分の部屋に戻ってきていた。無論、法国の神殿ではなく霧の中のコテージだ。しゃがみこんで獏のピロを抱き締めていた。

「ぷすぷす」

聞き慣れた鳴き声で我に返る。同時に、自分の体が濡れていることに気付いた。恐怖から来る汗と涙であることは考えるまでもなかった。部屋に備えてつけてある鏡を見れば、ひどい顔をしていた。いつものように笑顔を貼り付けようとするが、上手くいかない。どうしても強張ってしまう。誤魔化しようがないほどに恐怖がにじみ出てしまう。

「ぷすぷす」

「だ――大丈夫。大丈夫だから――」

自分はまだ折れていない。祖国のために、人類のために、何かできるはずだ。そんな風に立ち上がろうとするアンの決意に水を差すよ

うに声がした。
「ただいまー」
気楽な挨拶だった。気軽な態度だった。
ピロを抱き締めたまま、ゆっくりと振り返る。そこには人型の竜がいた。黄金の髪と瞳を除けば、どこにでもいるような顔をしている男。ネロ・ネミートス。
笑え、と自分に命じる。笑わないと殺される。だが、嫌だと、出来ないと、怖くて溜まらないと、母に虐待されていた時の自分が泣き喚く。
「……そういう反応されると、ちょっと傷つくなあ。正しい反応なんだろうけど」
嘘だと反射的に思った。傷ついているのは本当のようだが、ちょっとどころではない。割と本気で落ち込んでいるようだった。正しいと分かっていてもそこに納得はできていないようだった。その反応があまりにも「らしい」もので、アンは笑ってしまった。
今更ながらに理解する。かつて自分と接する時に猛獣に対するかのように慎重だった者たちはこういう気分だったのだろうと。だからこそ、今の自分の精神状態は彼らとは違うのだとも理解できる。過程や順番の問題もあるのだろうが。
「ねえ、ネロ」
彼の名前を呼ぶ。神や魔王としてではなく、個人としての彼の名前を。それだけで、精神異常を回復させる魔法でも発動させたかのように落ち着いた。
「お。僕の名前を口にするのは珍しいね、アン。何かな？　僕の完全異形形態への賛辞ならいくらでもいいぜ」
覚悟を決める。そして、自分の中の様々なものを捨てた。
「――アンティリーネ・ヘラン・フーシェ」
「うん？」
「私の本当の名前よ」
おそらくアンが本名でないことは最初から分かっていたはずだ。にも関わらず、名前を明かした。どのような反応が返ってくるかは

様々なパターンを想定していたが、予想外のものだった。
ネロは未だに立てずにしゃがみこんだ体勢のままのアン改めアンティリーネを優しく抱擁してきた。その力加減や手つきからにはいやらしさはなく、むしろ慈しみに満ちていた。
「そうか。では改めて、アンティリーネ。急に、どうした？」
声音からは警戒や揶揄よりも心配が窺えた。若干の後悔もあるように思える。あの巨竜としての姿を見せたことについてだろうか。先程のように動揺した姿を見せられてはそう思われても仕方がない。
「えっと、ちょっと待って。頭を整理しているわ」
「うん」
「あ、手を離れては嫌よ」
「うん」
おかしなものだ。つい数分前まで彼に対して汗だくになるほど恐怖していたはずなのに。その恐怖の対象に、信仰する神の敵に抱き締められて、恐怖や嫌悪ではなく幸福感を抱いてしまっている。すでに両手の指では数え切れないほど同衾したからか、彼の体に触れていると安心する体になってしまったようだ。このまま眠ってしまいたくなるほどに。
だが、やるべきことがある。それが終われば泥のように眠るとしよう。きっと、これが自分の人生の意味だから。
「質問させてもらうわ。貴方にとって私にはどの程度の価値があるの？」
「六大神を例外とすれば、現在のこの世界にあるものでは最も価値がある」
六大神を例外としている理由は聞かない。話が逸れるという意味でも、自分が知ってはならないないという意味でも聞くべきではない。
「だったら――私が結婚してあげるって言ったら、貴方は何を差し出してくれるかしら？」
あえて挑発的な言い方をする。漆黒聖典番外席次としての、最後のちっぽけな見栄だ。交渉なのだから自分を大きく見せようとしてい

ると、口に出した後から思いついた。
「それはまた素敵な提案だが――大きく出たなぁ、人間」
声音と表情が一致していない。声音はアンティリーネの上から目線な提案に怒りを覚えつつも、そこに込められたものに感心しているようだった。表情はひたすらに上位存在としての愛があった。慈愛というよりは寵愛が正しい。神にとって人は愛でる対象なのだ。
対等に交渉しているようだが、それは神の側が妥協と譲歩をしてくれているに過ぎない。
「一度言ったかもしれないけど、僕は大樹海から出ることができない」
確かに言っていた。あれはアンティリーネがこの空間に監禁された最初の日だったはずだ。何か事情があると言っていた。
「あれは状況的にとか、精神的な意味じゃなくて物理的な意味だ。僕はあの力を手に入れたことと引き換えに自分の縄張りから出られないようになった。つまるところ、僕は自分の手じゃ法国を滅ぼせないんだ、絶対にね」
「え？」
茫然とするアンティリーネにネロは続ける。
「このルールはレベル三十三以上の眷属にも適用される。君にも分かりやすく言うと、難度百程度、英雄級以上だね。例えば四聖獣――庭にいる玄武のノース、この霧の空間を構築している青龍のイース、王都を守護させている白虎のウェスなんかは完全にアウトだ。例外がレクスとリバス。この二名だけは大樹海の外でも活動可能だ」
「……何でこのタイミングで言うのかしら」
「君が言おうとしていることに関して関係あると思ってね。言わない方が良かった？」
「いいえ。助かったわ。やっぱりもうちょっと待ってくれるかしら。考え直すわ」
「いいよ。時間なら十二年あるからね」
十二年。それはネロが六大神と法国に対して宣告した猶予の時間。ユグドラシルのぷれいやーのみに通じるらしい謎の期間。人が神に挑むにはあまりに短い。だが、アンティリーネにそれに賭けるしかな

い。祖国が大神を倒せる戦力を持てるという夢を見ているのではない。十二年の間に、人類が法国抜きでも国家を維持できるようにする可能性を見出そうとしているのだ。

ネロは六大神を許さない。許してはならない戦いがあった。法国にその歴史は残されておらず、ネロ本人が語らないため、その詳細は推測と想像に依る。だが、アンティリーネに口出しできない何かがあったと察することは容易い。そして、法国側も真王国の衝突は避けることはできない。ならば自分ができることは法国の逃げ道を用意することだ。

そして、ネロはそれを理解した上でこの話に乗ってくれている。先程のルールを教えてくれたことは彼なりの誠意だろう。あるいは、神としての心意気か。

本当は彼だって気付いているのだろう。法国にアンティリーネ以上の強者はいないと。六大神はこの世界にもう生きていないと。だから、彼が滅ぼしたい神とはまさに概念的なものだ。個人ではなく信仰対象の六大神だ。

だから。

神のために信仰を裏切り、祖国のために魔王に寝返り、自分のために自分を売り払う。

抱き締め合う体勢のまま言葉をいくらか交わし、契約の内容は決まった。

そもそもアンティリーネはネロに完膚なきまでに敗れており、その身柄は戦利品だ。この弱肉強食の世界において、アンティリーネをどうしようとネロの勝手だ。身体や生命、貞操すらもネロに所有権がある。

しかし、一つだけ例外がある。それはアンティリーネが自分の意思で、ネロの妻となることだ。身体や生命だけではなく心を捧げる。ある意味においては代償にすらなっていないが、ネロにとっては十分だった。

「大樹海から出られるようになっても、僕や四聖獣、上位眷属は法国に立ち入らない。レクスとリバスを法国で戦わせることはしない。法

国以外の国は滅ぼさないし、場合によっては交易や支援を行う。法国を滅ぼした時点で、僕は人類の敵を止める」
それは如何に神人とはいえ人間の女ひとりと釣り合いが取れるとは言えない、破格の条件だった。
「契約成立でいいかな？　僕の可愛いお嫁さん」
「ええ。今日からよろしくね、私の愛しい旦那様」
こうして、人類の切り札だった少女は人知れず、魔王の伴侶となった。この婚姻関係を知る者は現在は勿論、これから遥か先の未来まで見てもごく限られた者だけだ。その中に法国の最高執行機関や漆黒聖典の人間が含まれていないことをどう見るかは人によるだろう。
この時の彼女は間違いなく故郷に二度と戻れないことを覚悟した。だが、その覚悟は思いもよらない形で否定されることになる。そのことを神ならざる人であるアンや魔王にして大神たるネロは知る由もなかった。
だが、その惨劇は、彼らの寿命からすればそれほど未来というわけでもなかった。

■

大樹海には法国軍が放棄した基地跡がいくつかある。その一つに、複数の人影があった。もっとも、そこにいる者たちは「人」ではないのだが。
アインズ・ウール・ゴウンを始めとしたナザリック地下大墳墓のモノたちであった。第三者に身元を尋ねられたら、ナザリックではなく、「異形種動物園」所属と答えることになる。
基地を建造した法国から見れば不法占拠かもしれないが、この大樹海の王とも言うべき真王コスモスの許可をもらっているため、誰かに文句を言われる筋合いはない。周囲に生息する亜人たちにもネロの方から通達してあるらしく、遠巻きに眺める者はいても近づく者はいなかった。当然であるが、目視は勿論、魔法やマジックアイテムでも基地の内部が見えないように対策はしてある。

彼らの前には一つのマジックアイテムがある。その能力は遠視であり、つい先ほどまで真王国建国式を見ていたのだ。
「国の式典というにはあっさり過ぎた気もするが、こんな文明も何もない大樹海に住む知的生物にはあれで十分なのかもしれないな。自分たちの王が暴力の具現であると教えるには、その姿を見せるだけでいいのか。やはり大きさは分かりやすくていいな」
そう言うが、欠片も羨ましいとは思わないアインズ。人間サイズの形態があるとはいえ、あのサイズ感は持て余すだろう。その他のデメリットを含めて考えると、ワールドエネミーのオーバースペックと釣り合うかは微妙なところだ。
「左様でございますね、アインズ様。それよりも此方をご賞味ください、あーん♪」
「う、うむ」
アルベドが食べやすいように一口大に切り分けたケーキを、アインズに差し出す。
本来であれば骨だけのアンデッドであるアインズには飲食が不可能だ。しかし、この基地内――ワールドエネミー・コスモスが時空ごと改造した空間においては話が違ってくる。
アルベドが差し出してくるケーキを口に含むアインズ。歯はあっても舌も唇もないため、挟んだと表現する方が適切か。すると、ケーキが消えた。文字通りの意味で消えたのだ。
「ふむ……」
顎を上下させて咀嚼するような動きを見せるアインズ。その様子を守護者たちはおそるおそるといった様子で見守る。偉大なる主人の言葉をじっと待つ。
アインズとしてはじっくり味わいたいところだが、守護者たちの視線が落ち着かないため感想を言うことに決めた。
「美味いぞ。料理長には賞賛の言葉しかないな」
それを聞いて顔色を明るくする守護者一同。
（噛んだ感触はあるんだけど、舌触りも喉越しもないんだよなぁ。味も匂いも分かるんだけどなぁ。美味しいんだけど、ちょっと物足りな

い。あと、出来れば一人でゆっくり食べたい）

この基地の敷地内においてネロが与えたルールは『種族由来のメリット・デメリットがなくなる』というものである。アンデッドに対しては、例えば疲労するようになるし普通の精神支配も通じるようになるし空腹状態も発生する。逆を言えば、食事や睡眠が可能になるし、回復魔法でダメージを受けず回復するようになるということでもある。

本気を出せば効果の範囲は広げられるらしいが、誰にどのような影響を与えるか分からないため、この基地内に絞っているらしい。

アインズのような骨だけの体でも食事ができるのは素晴らしいが、その原理は非常に不可思議だ。肉体が出来上がるわけではなく、先程のように「食事をしたような何か」が起きるのだ。おそらく世界が「食べた」に判定された時点で、その食べ物は消滅し、その味のみがアインズの精神に送られるのだろう。満腹感のようなものは覚えるため、無限に食べられるわけではないようだ。

「では、アインズ様。次は妾の分でありんす～」

「あ、ああ」

今度はシャルティアが差し出してきたプリンを食べる。先程のケーキと同じように口に含んだ途端に消滅し、同時にアインズの味覚に甘い刺激が走る。

「美味いな」

鈴木悟として生きていた頃、現実世界でこれほど美味なケーキやプリンなど食べたことはない。そもそも、そういう類のスイーツを食べる趣味も金銭的余裕もなかったが。場所が限定されているとはいえ、こうして食事ができることに喜びを覚える他ない。骸骨の体には感謝する場面もあったが、やはり人間だった頃の残滓が食欲や睡眠欲を満たせることに喜んでいる。

……ユグドラシルが十八禁行為禁止だったためか、性欲に関してはどうしようもないようだが。これに関してはアインズよりアルベドやシャルティアは勿論、他の守護者たちが残念がっていた。デミウルゴスなどは「お世継ぎのためにもこの空間を研究しましょう」と言い

出す始末だ。
　ネロが「もうちょっとエリアのレベルが高ければ可能だったっぽいんですよね、アンデッド等の完全な受肉とか人間化とか」と言っていたことは黙っておこう。
「ん、んん！　さて、ティータイムもいいが先程の建国式についてだ。おまえたちの意見を聞きたい。まずはアルベド。何か感じたことはなかったか？」
「そうですね。先程アインズ様がおっしゃられたように、下等な蛮族相手には妥当な催しでした。やはり、アインズ様が国を興される時はもっと盛大に、至高の御方に相応しい式典にすべきでしょうね」
　今の俺に国を興す予定なんていないし、これからも作るつもりはないよ、などと言えないアインズはデミウルゴスに視線を移す。
「現在私が遂行中の作戦の一つに、アベリオン平原という丘陵地帯の支配がありますが、非常に参考になりました。アインズ様の最終目的を考えれば、支配方針は類似させるよりも対極がよろしいですか」
　最終目的って何だとは問えない。この空間ではアンデッドの精神の強制的な鎮静化が発動しないため、墓穴を掘るような真似はすべきではないからだ。同時に、このタイミングで建国式の所感を聞いておかなければ後々失敗をしそうな気がする。
　現状はデミウルゴスたちがアインズには大それた目標があると思っている、という勘違いを知れただけでも良しとしよう。
「集められた亜人や魔獣もこの世界にしては強いんでしょうけど、私たちの敵じゃないと思います。ワールドエネミーのネロ・ネミートスや、その眷属のレクス・セントラルなんかは強いんでしょうけど」
「お、お姉ちゃんの言うようにあんまり大したことないひとたちがほとんどでした」
「デミウルゴスト似タヨウナ意見ニナリマスガ、リザードマンタチノ支配ニ大イニ傲ウベキコトガアリマシタ」
　アウラ、マーレ、コキュートスの意見だ。全体的にネロ以外の者を侮っているように思える。それは決して強者ゆえの傲慢ではなく歴然とした事実なのだろうが、そういう慢心に足元が掬われないか心配

だ。
「……私は、これから奴らがどのようになるか警戒すべきだと思いんした」
だからこそ、シャルティアがそのような意見を口に出したことを意外に思った。他の守護者たちも驚いている。アインズは続きを促すと、シャルティアは言いにくそうに続ける。言葉を選んでいるようだった。
「奴らが蛮族なのは発展する余裕も手段もなかったからでありんす。ネロによって大樹海が統一されてしまえば大樹海の中に名目上の敵はいなくなりんす。そして、スレイン法国という共通の外敵が明確にできていんすから、意思の統一もかなり容易いと思われんしょう？洗脳の犯人が判明する前に、法国を滅ぼしてしまうかもしれんせん。そうなったら、私は誰にこの怒りを……！」
シャルティアらしからぬ頭の回転の速さは、どうやら自分の不甲斐なさへの怒りと後悔から来るものだったようだ。
「安心しろ、シャルティア。コスモス真王国はスレイン法国に対して十二年の猶予を与えている。紫幽王を通してとはいえ、王としての言葉であり神としての宣言だ。これを違えることはないだろう。私たちは十年を目処に確証を得ればいいのだ。焦らず、しかし着実に、尻尾を掴んでやるとしよう」
アインズの言葉に、シャルティアは深く頭を下げ、力いっぱいに頷くのだった。
「そういえば、アインズ様。式典に参加しなくてよろしかったんですか？　向こうから声はかかっていたんですよね？」
「ああ。おそらく法国が魔法か何かで見ているだろうからな。ひょっとしたら異形種動物園の存在は伝わっているかもしれないが、だからこそ表舞台への露出は避けるべきだ。今はまだ、な」
魔法詠唱者アインズ・ウール・ゴウン。冒険者モモン。異形種動物園のアイン。これらを同一人物と見抜ける者などそうはいないだろうが、必要なパーツは揃っている。ユグドラシルの知識抜きでもアルベドたちと同レベルの知者なら思いつくかもしれないが、証拠を掴む

ことは難しいだろう。それを誤魔化すための「異形種動物園はアインズ・ウール・ゴウンのファンギルド」という設定なのだ。
「……それに、蛮族相手とはいえ正しい振る舞いができるか分からないしな。いや蛮族だからこそ、不格好を晒して、それが普通だと勘違いされ、真王国のマナーの参考にされたら困る」
最後の部分が本音だったのだが、守護者たちは冗談だと思ったのか苦笑した。